Vol.78通巻901号　平成9年4月1日発行　毎月1回1日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182



特集

日本建築協会創立80周年記念特集・
建築と私と社会―80人の眼―

建築と社会 4

1997

日本建築協会

UNION

We Knockin' On Next Door



永遠に続くヒストリーは、

ただそこにあるだけではつくれない。

自ら語り、動き、創造する。

Knock! Knock! knock!

私たちは、叩き続ける。

その結論、

ユニオン・アートウェア

取扱品目

建物用ドアハンドル
レバーハンドル
ドアストップ-エッセ
空間用備品-フロアシステム
消火器ケース-アルジャン
サインシステム-ピクト
収納扉-クロセットドア
補助手すり-ハンドバー
ホーム手すり-つかまっ手
車止め・防護柵-エキスポール
キャスタル+メタルアート
その他ハードウェア-アーキパーツ

建設環境金属製品の
株式会社ユニオン
UNION CORPORATION

■本社
大阪市西区南堀江2-13-22 〒550
■大阪支店・ショールーム
大阪市西区南堀江2-13-22 〒550
公06(532)3731
公06(532)0568
■東京支店
東京都江東区白河2-9-5 〒135
公03(3630)2811
公03(3630)2816
■東京ショールーム
東京都港区虎ノ門2-3-22 〒105
公03(3506)1717
公03(3506)1718
■名古屋営業所・ショールーム
名古屋市中川区舟戸町3-20 〒454
公052(363)5221
公052(363)5255

建築協会創立80周年を迎えて

社団法人 日本建築協会会長 市川　宏

本年３月、日本建築協会は創立80周年を迎え、今年度中の完成を目標に進められている80年史を除いて、すべての記念行事を終えることができた。本誌の901号という数字も、いかにも新しい第一歩を踏み出したという気持ちにさせてくれる。

今、景気もようやく回復の兆しを見せはじめたなかでの再出発を考える上で、協会のこれまでの歴史をふり返り、改めて将来を考えることは極めて意義のあることである。ここにその中の節目と考えられる二つの例をご紹介する。

その一つは昭和７年、まだあの大恐慌が尾を引くなかでの創立15周年である。会誌によると「建築関係の幾十の産業は殆ど凡て倒産に頻し…今や古今未曾有の難局に臨み進退谷まるの情況」にあったにもかかわらず、その年11月には中之島公会堂において大祝賀会が催され、また創立以来「未だ一度も弛緩状態を呈したことなく常に緊張せる努力を続けて今日に迨んだ」ことは「稀にみる実例であるといっても過言ではない」と記されている。当時会員はすでに1,300名。以降第二次大戦までの短い期間とはいえ、建築界は昭和初期の黄金時代を迎えている。

もう一つの節目は昭和22年、三十周年とはいえ大戦による約３年間の休刊の後に会誌が復刊された再スタートの年である。「凡そ建築の事業に関心を持つ各方面の人士が悉く一団となって」当たらねばならぬ時期であるから、従来のように設計界、建設業界だけ、あるいはまた材料、設備業界だけなど、各分野ごとに個々別々では国家再建の用に立たない。よって従来の個人会員だけでなく「建築事業界の各方面の有力なる人士を会員として網羅せしめるものとし、建築界の総意を集結して」わが国建築界の将来に寄与するために定款を改正し、この時から日本建築協会は各団体をつなぐ建築界の総合団体としての役割が確立し、以後の日本の復興、発展を支えてきたのである。

今や日本の経済界はたしかに回復の兆しも見えはじめてはいるが、バブル崩壊が顕在化しはじめてからすでに５年に近い。そして当協会は、ここに80周年を三番目の節目として一歩を踏み出そうとしている。まさに先の二つの節目と同じ情況である。「建築を通じ、広く社会に貢献する」ためにも、わが建築協会だけがもつ総合団体としての役割は貴重であり、ますます重要になるものと思ってよい。「会員各自が我協会の過去の業蹟を追想し、現在の我社会に於ける建築界の地位を展望し、更に将来の進路を検討せんとする」ことは、協会発展のために「大いに慶賀すべきことである」というのは、やはり創立15周年の時の片岡安会長の言葉である。

第4回日本建築協会賞入選発表

日本建築協会は、建築界における総合団体としての性格にもとづき、建築に関わるあらゆる分野において社会に貢献した団体または個人に対して、その業績を讃えるとともに、わが国文化の向上と公共の福祉に寄与することを目的として日本建築協会賞を選考し顕彰することとしている。

今回、その第４回選考にあたり各界に応募を呼びかけたところ、締切日の平成８年11月29日までに12件の応募があった。

これが選考にあたっては、日本建築協会賞選考委員会（委員長：薬袋公明氏、他同委員10名）を設けて、数回にわたる選考を重ねた結果、下記のとおり日本建築協会賞４件、同特別賞１件を選定した。

日本建築協会賞には、賞状並びに賞牌、副賞として50万円を贈呈、また、特別賞には、賞状と賞牌を贈呈する。

表彰式は、本年３月28日、大阪市内の太閤園で開催した日本建築協会創立80周年記念式典において行った。

■第4回日本建築協会賞

「織物文化への貢献」

長年にわたり培われてきた織物のノウハウのもとに、川島テキスタイルスクールを開設しインテリアファブリックやファイバーアート分野へ多くの人材を輩出。またカワシママイスタースクールを開設してインテリアの確かな技術を習得した優秀な人材を社会に送りだしている。質テクノロジーを追求し、磨き上げられた技術は日本文化の範疇を越え、生活文化創造企業として世界的にも大きな業績を残している。

株式会社　川島織物　取締役社長　南　荘郎

「免震建物と免震効果の実証」

㈱松村組技術研究所研究棟は、関西地方に初めて、日常業務を行う建物において、免震装置の効果、免震建物としての効果、免震構造の既存建物の耐震改修への適用などを検証する目的で、平成６年３月に神戸市北区に免震建物を建設し研究に着手した。

本免震建物による先の阪神・淡路大震災で観測・測定され採取された免震効果を実証する各種データは、広く斯界に公開され、世界的にも注目を浴びている貴重なものであり、その業績は多大である。

株式会社　松村組　代表取締役会長　松村雄吾

「工高教育におけるC ADの有効利用と普及に関する研究」

本研究は、63年末に秋田県内で初めて工高建築科に建築専用CADシステムを導入し、まず、２学年において各種構造の建築物の基礎的知識やCAD作図法を習得させ、３学年の課題研究コースでは、その応用技術を習得させるなど工高教育においてパソコンCADの普及に関して実践的研究を行い社会に貢献できるエンジニアを育成してきた。

秋田県立大曲工業高校　教諭　黒沢一元

「膜構造建築物の技術開発とその実用化ならびに普及」

大型テントへの技術開発に着手し、膜材料に適した曲面形態の研究など近代建築工学に裏付けられた大型膜構造建築物実現への基礎を築くとともに各種の研究開発等を行い、独自のノウハウを蓄積した。

㈳日本膜構造協会の設立に貢献し、各種基準の法整備を実現した。

これにより大規模な恒久膜構造物の建設を可能にし、昭和63年、「東京ドーム」の完成により世界最高水準の設計・製作・施工・技術が実証され、日本に新しい大空間時代が誕生、これが我が国建築界に寄与した功績は大きい。

太陽工業株式会社　代表取締役副会長　能村博正

■第4回日本建築協会賞　特別賞

「実験集合住宅NEXT21」

今日、地球環境・エネルギー問題、都市環境問題、高齢化問題など、我々は様々な問題に囲まれている。

NEXT21は、建設された実験集合住宅において、平成６年４月から社員16家族により居住実験を開始して、設備機器システムの評価から各住戸の住まい方、緑や立体街路の評価まで多岐にわたり、精力的な研究評価が行われ、ソフト・ハード両面から様々な技術開発や提案を実施し、21世紀の住まいに関する貴重な基礎データを社会に提供している。

大阪ガス株式会社　取締役社長　領木新一郎

監事並びに本部所属評議員の当選

平成９年２月26日開催の通常総会において、監事並びに本部所属評議員の選挙を行いました結果、下記の方々が当選されました。

●監事（１名）
伊藤　俊夫（松村組）

●本部所属評議員
甫出　裕紀（大阪府住宅供給公社）
山形　政昭（大阪芸術大学）
藤井　英夫（大日本土木）
任田　　勉（西松建設）
明石　至正（鉄建建設）
＊植田　久夫（間組）
中道　正伸（中道組）
岩橋　貞雄（八千代電設工業）
松本　浚嗣（須賀工業）
福谷　守弘（朝日工業社）
月城　則男（新東洋合成）
鶴田　昭一（建築工房和泉屋）
坂本　　佶（松村組）
白石　静二（鴻池組）
遠藤　裕造（三井建設）
＊松田　利男（戸田建設）
原　　眞一（コーナン建設）
成尾　克彦（きんでん）
高岸　宗吾（近畿工業）
川瀬甲子雄（扶桑管工業）
志田　　稔（ゼネラル化成）

＊印は補選

名誉正会員6名が推挙される

平成９年２月26日開催の通常総会において、次の方々が名誉正会員に推挙されました。
本会に対する永年のご尽力とご協力に深く感謝申し上げますとともに、ますますのご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

●新名誉正会員
井原　　巌氏　　小笠原祥介氏
近藤　義雄氏　　竹村　　清氏
中原　　茂氏　　山本　康雄氏

日本建築協会新入会者ご斡旋のお願い

本会は大正６年３月創立以来、建築法規の法制化に努めたほか、わが国初の住宅博覧会の開催、四会連合工事請負契約約款の制定など、今日に至るまで、建築界をリードするとともに、一般社会との結びつきを深めてまいりました。また、建築界の総合団体として常に建築関係各部門の連繋と調整に当たり、会誌「建築と社会」の発行や、各種見学会、講習会など実務に直結した諸種の事業活動を行っております。
これらの事業をますます発展させるため、会勢の伸展をはかりたく、入会者のご斡旋をお願い申し上げます。事務局は電話06-348-0635です。

神戸ファッションプラザ見学会（再掲）

「神戸ファッションプラザ（KFP）は、六甲アイランドの中心エリアの一角に位置して、「こだわりの生活主義ーファッションの創造」をテーマとした複合施設で、公共施設（美術館・公共駐車場）と民間施設（ホテル・映画館・大規模商業施設及び駐車場）に大別される。
中央に直径50ｍ高さ40ｍのアトリウムを配置して、官・民施設が結びつく接点とし、美術館のオルビスホールとともにKFPの賑わいの創出の核となるオープンなイベント空間として機能するように計画されている。
またリバーモールに面したオルビスホールは、飛来したUFOを想起させて、スペイン階段をイメージした大階段とラセンに建物周囲をとりまく外部階段、花崗岩・タイル・金属で構成された外観とともに、過去から未来へ無限に回帰上昇する、ファッションの進化を表現している。
公共施設は、日本初のファッションのための美術館であり、2,000㎡の常設展示室、1,000㎡の企画展示室、ファッションを対象としたライブラリー、情報発信・教育のためのリソースセンター、可動床を有する400席の多目的イベントホール「オルビスホール」及び収蔵庫群等で構成されている。
民間施設は、「生活ファッションショーの感性のステージ」をテーマにしたRINK（専門店群、レストラン街）、７館・1,500席を有するマルチプレックス映画館「MOVIX六甲」、300㎡の大宴会場・145室の客室をもつ「神戸ローザンヌホテル」で構成されており、生活を豊かにする“街遊び”を楽しんでいただける施設としています。
（高津章雄・万波誠三／設計JV）

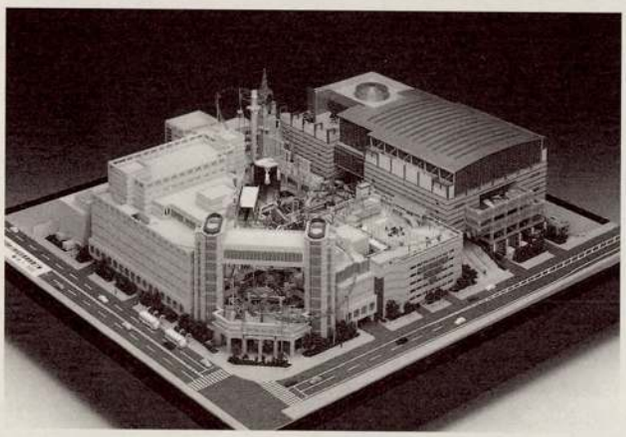


●建築概要
所在地　神戸市東灘区向洋町中2-9-1
主要用途　美術館、物販・飲食店舗、映画館、ホテル、駐車場
建築主　㈱神戸ファッションプラザ（一部竣工後神戸市買取）
設計監理　昭和設計・大成建設一級建築士事務所JV
施工　大成建設
敷地面積　18,333.09㎡
建築面積　13,725.18㎡
延床面積　91,664.27㎡
構造規模　S・一部SRC、B2・19F・P1
工期　1993年８月～1997年３月
オープン　商業施設３月20日（予定）
ホテル４月５日（予定）
美術館４月25日（予定）

日時　1997年4月15日㈫
14:00—17:00
講師　高津章雄／昭和設計企画・設計部開発企画室副室長
万波誠三／大成建設設計部次長
武田修示／大成建設作業所長
定員　50人＊申込多数の場合は抽選
集合　現地
参加費　会員1,000円、一般2,000円
申込　４月８日㈫までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名:神戸ファッションプラザ見学会
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を４月９日㈬に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第３ビル21階 〒530
FAX.348-0634 TEL.348-0633

フェスティバルゲート見学会

大阪市交通局の市電車庫跡地を活用し新世界一帯の活性化の核となることをめざした土地信託事業である。
施設は、管理運用型信託となるAゾーンと処分型信託となるBゾーンで構成される。
Aゾーンは、都市型立体遊園地を核とした複合商業施設で、最高時速100kmで建物の中を縦横に走行するジェットコースターをはじめとする20機種におよぶ本格的な遊具を各階に設置する。
JR新今宮駅と通天閣を結ぶ2階のプラザ空間は「海底に沈んだ古代都市」をテーマとした環境装飾を施し、シネマにショッピングにゲームコーナーにと「遊びのミキシング効果」を十二分に発揮する。
Bゾーンは、世界の様々な温泉を体験できるアクアアミューズメントで、4階と6階に大浴室を、8階にリゾートプールを収容する他、宴会場や宿泊施設も併設しており、「遊び」や「くつろぎ」のスタイルに多様なメニューを提供する。　（大江　誠）



●建築概要
所在地　大阪市浪速区恵美須東3-2-31、32
設計監理　安井建築設計事務所、アール・アイ・エー・IAO竹田設計JV
施　工　大林、村本、錢高JV
工　期　1995年4月～1997年6月
オープン　1997年7月（予定）
＜Aゾーン＞
敷地面積　14,873.45㎡
延床面積　55,275.74㎡
構造規模　SRC、B1F・8F
施設構成　遊園施設、劇場、飲食店、物販店、バス車庫
＜Bゾーン＞
敷地面積　8,622.86㎡
延床面積　41,693.83㎡
構造規模　SRC・一部S、B1F・9F
施設構成　クア施設、飲食店、遊泳場、ホテル

日　時　1997年4月24日㈭
13:30－16:30
講　師　大江　誠／安井建築設計事務所副部長
川口幸三／アール・アイ・エー設計主任
酒井慶祐／大林・村本・錢高JV所長
定　員　50人
＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
参加費　会員1,000円、一般2,000円
申　込　4月17日㈭までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：フェスティバルゲート見学会
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を4月18日㈮に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第3ビル21階　〒530
FAX.348-0634　TEL.348-0633

京都駅ビル見学会

日　時　1997年5月10日㈯
14:00－17:00
講　師　村田俊彦／京都駅ビルJV工事長
定　員　60人
＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
参加費　会員1,000円、一般2,000円
申　込　4月30日㈬までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：京都駅ビル見学会
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を5月1日㈭に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第3ビル21階　〒530
FAX.348-0634　TEL.348-0633

●建築概要
所在地　京都市下京区烏丸通塩小路下ル東塩小路町
建築主　西日本旅客鉄道㈱
京都駅ビル開発㈱
設　計　原廣司、アトリエ・ファイ建築研究所
施　工　大林組、鉄建建設、大鉄工業、フルーアダニエル・ジャパン、公成建設JV



JR京都駅ビルが、いよいよ今年夏に完成・オープンします。
建物は、①駅施設、②広場・通路施設、③コンベンション・ホテル施設（ホテルグランヴィア京都／客室539室、大宴会場1,400名収容など）、④複合商業施設（ジェイアール京都伊勢丹など）、⑤文化施設（メインホール925席など）、⑥駐車場・駐輪場施設等からなり、延床面積約24万㎡の日本最大のターミナルビルとなります。
駅ビル中央部分にある大空間コンコースは、ガラス屋根の高さ32-50m、幅29m、長さ147mの、ガラス・シェルター・アトリウムとなっており、さらにそのアトリウムの上部をシースルー空中経路が通っています。そして中央コンコースから幅26m、高さ30mの大階段・エスカレーターとプラザを通じて各施設がつながる設計となっています。
今回は大林組のご配慮により、見学会をさせていただくことになりました。この機会にぜひご見学ください。

敷地面積　約38,000㎡
建築面積　約32,400㎡
延床面積　約238,800㎡
構造規模　SRC・S、B3F・16F
最高高さ　59.8m
オープン　駅1997年7月
（予定）　劇場8月、ホテル・デパート9月

30's EYE- 21世紀へのエスキス
第23回

吉本　剛

建築家・吉本剛建築研究所

barn−原点から

「30's EYE-21世紀へのエスキス」をテーマに、30代を中心に様々な分野でご活躍の方々をゲスト講師に迎え、従来の講演会形式とは違う「語り合い、情報交換を行う場」をつくりたいと考えています。気軽にご参加下さい。

日　時　1997年 4 月25日(金)
18:30—20:30
会　場　日本建築協会サロン
＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　吉本　剛
定　員　30人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
＊学生は500円引
＊含、飲物・消費税
＊団体会員扱いは１社１名
申　込　４月18日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：30's EYE
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を４月21日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第３ビル21階 〒530
FAX.348-0634 TEL.348-0633
主　催　㈳日本建築協会
若い会員の集い小委員会
主担　廻はるよ／東畑建築事務所

私はこれまでに「ｂａｒｎ」と名付けた４つの建築を計画してきました。
「ｂａｒｎ」とは、小屋や納屋と呼ばれる建築のことだと考えて下さい。
なぜ「ｂａｒｎ」なのか。「何処へ向かおうとしているのか」など、当日は、自分にとって有意義な時となることを期待して、30's EYEの会場へ向かいます。

（吉本　剛）





吉本　剛（よしもと　ごう）
1961　徳島県生まれ
1984　日本工業大学工学部建築学科卒業
1985　建築環境研究所入所
1989　吉本剛建築研究室開設
現在に至る

ハービスOSAKA見学会

当プロジェクトの敷地は大阪駅前の西梅田に位置し、区画整理事業によって生まれたオーサカガーデンシティ内にある。
長さ240mの細長い敷地に「世界第一級の絵になる街」づくりを目指して建設が進められ、1997年５月にグランドオープンの運びとなった。
かつて水の都といわれ浮世絵師達が競って描いた風景「なにわ百景」を復活し、子供達が写生に来たくなるような風景的建築をつくりたいとの想いで、遠景・中景・近景がほど良く調和する西梅田四十八景の創出に腐心した。
主要な施設は、我が国に初めて進出するラグジュアリーホテル「リッツカールトンOSAKA」、マルチメディア時代のニューオフィス、商業施設「ハービスプラザ」、大小の多目的ホール「ハービスホール」等で構成された超複合建築となっている。

（苫名　正）

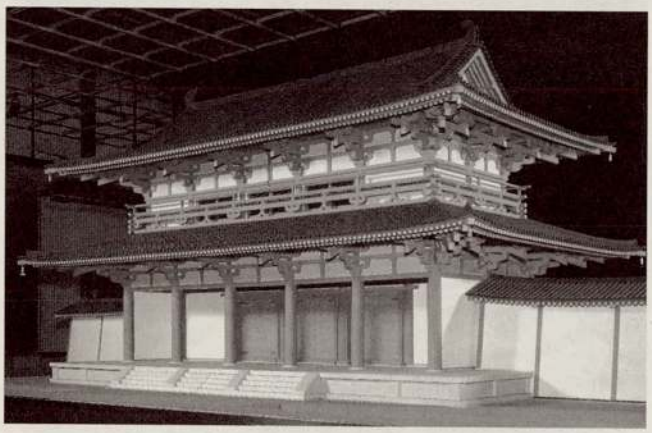


●建築概要
所在地　大阪市北区梅田2-9-6外
設　計　竹中工務店
施　工　竹中・大林・鹿島・ハンシンJV
主要用途　事務所、ホテル、店舗、展示場、駐車場
敷地面積　13,803.73㎡
建築面積　9,281.44㎡
延床面積　136,823.05㎡
構造規模　S・SRC・RC、B5・40F・P1
最高高さ　190m
工　期　1993年12月～1997年２月
グランドオープン　５月23日（予定）

日　時　1997年 4 月25日(金)
13:00—16:30
講　師　苫名　正／竹中工務店設計部副部長
原口勝利／JV作業所総括所長
定　員　60人
＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
参加費　会員 1,500円、一般 2,500円
＊含、消費税
申　込　４月18日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名
：ハービスOSAKA見学会
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を４月21日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第３ビル21階 〒530
FAX.348-0634 TEL.348-0633

平城宮跡「朱雀門」復原工事見学会

平城宮跡では、発掘調査とともに、建物の復原が始まっています。
朱雀門は平城宮の正門で、屋根は二重のつくり、間口５間約25m、奥行２間約10m、高さ20mを超える大きなものです。宮の正門として権威と雄姿を内外に誇り、左右には６mの高さの築地がめぐり、130haの広さの宮城を取り囲んでいました。
朱雀門の前では、外国使節の送迎を行ったり、正月には天皇がこの門まで出向き新年のお祝いをしたり、時には大勢の人たちが集まって歌垣なども行われたようです。
復原は、奈良時代建築の再現のため、主要な木材は内地産の檜を用い、仕上げはヤリカンナで削るなど、使用する材料や加工・組立の技術も当時のままを目指して施工されています。
平成３年に基壇が完成、平成５年に本体工事着工、本年11月に竣工予定です。
今回は奈良国立文化財研究所のご配慮により工事中の施工状況を見学させていただくことになりました。又とないこの機会にぜひご見学ください。



●建築概要
所在地　奈良市佐紀町平城宮跡地内
建築主　奈良国立文化財研究所
設計監理　㈶文化財建造物保存技術協会
施　工　㈱竹中工務店
構造規模　入母屋造、二重門、本瓦葺
間口５間 25.075m、柱間 5.015m
奥行２間 10.030m、柱間 5.015m
棟高 21.983m、面積 251.5㎡
基壇規模　間口 32.745m、奥行 17.700m
高さ　1.858m、面積 579.6㎡
工　期　1993年12月～1997年11月（予定）
一般公開　1998年４月～（予定）

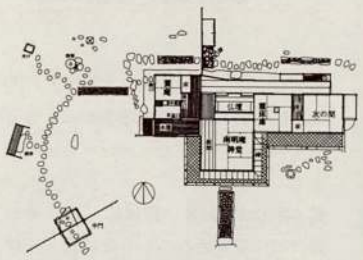
日　時　1997年 4 月22日㈫
14:00―16:30
講　師　細見啓三／文化財建造物保存技術協会所長
春日井道彦／文化財建造物保存技術協会所長補佐
西川公三／竹中工務店工事課長
山本清一／日本伝統瓦技術保存会副会長・山本瓦工業社長
定　員　50人＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
参加費　会員 1,500円、一般 2,500円
＊含、飲物代
申　込　４月15日㈫までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：朱雀門見学会
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を４月16日㈬に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第３ビル21階 〒530
FAX.348-0634 TEL.348-0633

茶室見学会（第8回）大徳寺玉林院の蓑庵と霞床席

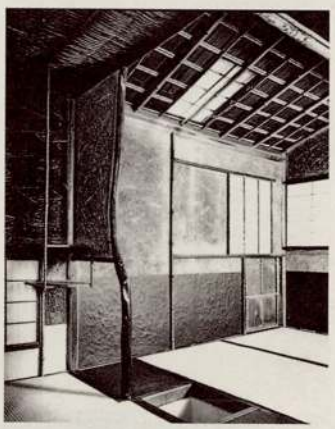
日　時　1997年 5 月17日㈯
14:00―16:00
講　師　中村昌生／京都工繊大名誉教授
定　員　30人
＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
京都市北区大徳寺町
参加費　会員 3,000円、一般 5,000円
申　込　５月９日㈮までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：茶室見学会
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を５月12日㈪に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第３ビル21階 〒530
FAX.348-0634 TEL.348-0633

大徳寺玉林院南明庵と茶室

大徳寺塔頭玉林院は、名医家として知られた曲直瀬正淋が月岑和尚を開山として、慶長３年に創建された寺である。８世大龍和尚のとき、大阪の富豪鴻池



了瑛が当院に祖先の牌堂を造営した。それが南明庵であり、茶室蓑庵と霞床席は、その付属施設である。
この茶室を組み入れた牌堂は、旦那衆の数寄者であった了瑛の構想に基づいたものであったと推察される。しかし、ここに造られた茶室には、数寄者の余技の域を越えた専門家の創意工夫が溢れている。了瑛の背後には表千家７代の如心斎がいたのである。
そしてこの一連の施設の建築に当たっては、南明庵を堂宮大工が、茶室は数寄屋大工がそれぞれ手がけているが、その仕上がりには違和感が全くなく、仏堂と数寄屋の意匠が、巧みに融合されていることを高く評価しなければならない。
蓑庵は西面して建つ。柿葺切妻造りの前面に庇を付け下ろし、袖壁を隔てて右方に水屋の棟が接している。外観で



は壁が大きくて、差石に直接壁がつく足元の手法なので、大へん侘びた姿を形づくっている。内部は三畳中板の間取りである。点前座には中柱を立て、炉を中板の所へ台目切に切っている。天井は、床前の平天井に対して、点前座を菰の落天井とし、にじり口側を化粧屋根裏にしている。
霞床席は四畳半の広さである。ここは蓑庵に対する書院としてつくられている。間口一間の床を構え、違棚を備え、天井は格天井、壁は張付壁であり、明らかに書院風な構成をそなえている。
（中村昌生著『茶室大観』より）

講演と見学の会
琵琶湖博物館とロータス館

滋賀県・琵琶湖の南湖東岸のほぼ中央部に湖面に突き出た烏丸半島があります。今、この半島が大きな注目を集めています。草津市立水生植物公園みずの森（ロータス館）の完成に続いて、昨年秋に新たに滋賀県立琵琶湖博物館がオープンしているためです。

琵琶湖は昔から、自然と人間がうまく共生して現在に至っています。人間は限りなく多くの恵みを湖から得、また逆に人間は様々な形で琵琶湖に影響を与え続けてきました。この結果が今日の琵琶湖及びその周辺の環境を形づくっているわけですが、人間側の認識が十分でなければこの状態がいつまでも持続するわけでもありません。このような想いから環境あるいは琵琶湖の風土を主題としたロータス館や琵琶湖博物館が企画建設されたのでしょう。

とりわけ琵琶湖博物館は「湖と人間」をメインテーマとし、未知の世界を追求しようとするもので、従来の「モノ」を中心とした博物館とはひと味違った独特の雰囲気を持っています。これからの博物館のあり方に一つの示唆を与えたものと思えます。

今回の「講演と見学の会」は、琵琶湖博物館とロータス館を自分の眼で実際に確かめようとする企画です。そして博物館の管理・運営のサイドから、企画、建設、展示段階の様々な興味あるお話をしていただける予定です。


琵琶湖博物館


ロータス館

5月は琵琶湖のもっとも美しい季節です。多数の方のご参加をお待ちしています。

日　時　1997年5月27日(火)
10:30—17:00
講　師　布谷知夫／琵琶湖博物館総括学芸員・事業部長
楠　和夫／創造社・中部事業所長
定　員　50人
＊申込者多数の場合は抽選
集　合　草津市立水生植物公園（ロータス館）入口付近
＊JR草津駅よりバス「烏丸半島」行＜約25分＞
＊大津港より「草津烏丸半島港」行＜約50分＞
参加費　無料
＊ただし、入館料・資料代等として1,500円が必要です。

申　込　5月13日(火)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：琵琶湖博物館とロータス館
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を5月14日(水)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第3ビル21階 〒530
FAX.348-0634 TEL.348-0633

アジア建築文化誌研究会
第11回
写し霊場にみる模倣と創造
北播磨、番条、江戸、和歌山、そしてインド

研究会では、1年以上に及ぶフィールド調査をおこなっている研究者を中心に、アジア、住宅、建築に関心を寄せる方がたにご参加いただき、その研究成果を発表、情報交換し、またその情報をひろく発信しアピールすることを目指しています。アジアの多様な住まい、生活慣習、伝統を学び考えることによって、住まいを多角的にとらえる契機になれば、と研究会を公開しています。
お気軽にご参加ください。


矢田地蔵八十八ヶ所（和歌山県川辺町）緩斜面に石仏が並ぶ。


番条八十八ヶ所（奈良県大和郡山市）年に一日だけ各家に札所が飾られる。


成松寺八十八ヶ所（大阪府河内長野市）らせん型に石仏が配置されている。



日　時　1997年4月19日(土)
17:00—20:00
会　場　学芸ホール ＊学芸出版社3F
発表者　近藤隆二郎
定　員　30人（申込み先着順）
参加費　500円 ＊資料・飲物代
申　込　4月17日(木)までに、FAX、E-mailでお申込み下さい。
①催し名：第11回アジア建築文化誌研究会
②氏名
③職場・学校名
④連絡先：住所、電話・FAX番号
をお知らせ願います。
申込先　学芸出版社編集部
（担当：藤谷）
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入　〒600
FAX.075-342-2605
TEL.075-342-2600
E-mail:gakugei @ mbox.kyoto-inet.or.jp
主　催　アジア建築文化誌研究会
事務局：学芸出版社
協　賛　ALAP（Archi-Link Asia-Pacific, アジア太平洋建築情報ネットワーク）
後　援　㈳日本建築協会

四国八十八ヶ所や西国三十三ヶ所といった、容易に巡礼できない遠方の大霊場（本巡礼）を身近な場に模倣して作り、より多くの人々に対して巡礼の機会を与えるために開設された巡礼霊場を「写し霊場」と呼びます。写し霊場はその規模により、数カ村から数国におよぶ「地域的巡礼地」から、寺院の境内や裏山などに石仏を配置した「ミニチュア巡礼地」、さらには建築内に装置化された「お砂踏み」や「栄螺堂」といったさまざまな形態へと多様化しています。そこには、いかに本巡礼を連想させるかという技法の集積を見ることができます。また、ミニチュア巡礼地の中には、地域コミュニティの中で一種の「祭り」として変容定着し、空間構造だけでなく、本巡礼の「巡礼者」と「接待者」という役割も模倣創造し、住民間で共演する交流空間へと変貌を遂げている例もあります。

今回は、今まで調査してきた北播磨のミニチュア巡礼地、江戸の地域的巡礼地、番条八十八ヶ所のイエ結合、和歌山県下写し霊場総覧などについて紹介するとともに、環境デザインとして写し霊場をとらえる視点について考えてみたいと思います。また、ヒンドゥー教の巡礼でもあるインドのアンタルグリヒー（Antargrha Yatra）巡礼についても紹介します。　（近藤隆二郎）

近藤隆二郎（こんどう　りゅうじろう）
和歌山大学システム工学部環境システム学科講師
［主な論文等］
「古代都市モヘンジョダロにおける『水浴び』の持つ環境社会システム的側面に関する研究」環境システム研究vol.23，1995年8月
「番条八十八ヶ所のイエ結合にみるコミュニティの結合効果」造園雑誌59(5)，1996年5月
「環境社会システムの移築プロセスに関する研究ー写し霊場および地域交流型装置を例としてー」環境システム研究vol.24，1996年10月

「建築と社会」誌

特集一覧● 1977~1997

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。昭和42年からは体裁をA4変形判に変え、特集と作品作風頁を二本柱に、シリーズものの頁を織り込み、その時々の社会を反映したテーマを選んで掲載してきた。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-348-0635、FAX 06-348-0634）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。なお、「建築と社会」創刊号～昭和30年12月号まで全87巻の復刻版が、1991年10月から順次発行（不二出版）・配本されているので、詳細は日本建築協会事務局へお問い合わせ願いたい。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1977 Vol. 58	●デザインの動向ー部分と全体＊	●兵庫県ーその風土と建築・建築界	●日本建築協会60周年記念号 ●ニュータウンの管理	●コンクリートの品質管理と行政指導の方向	●日影規制と法＊	●身障者施設＊	●照明設備＊	●埋立地における構造問題ー大阪南港と芦屋浜を例として	●日本住宅公団と建築作品	●ミニ乱開発から計画的ミニ開発へ＊	●建築における省エネルギー化	●第24回青年技術者＊
1978 Vol. 59	●デザインの動向ー新旧のコントラスト	●水＊	●医療施設ー病院建築と情報システム	●外壁塗装材料＊	●電波障害と建築＊	●組合方式による集合住宅計画	●住宅設備	●新しい耐震設計	●CAD—設計とコンピュータ	●一般号＊	●第25回青年技術者＊	●ビル環境
1979 Vol. 60	●転換期の再開発＊	●大阪南港ポートタウン	●商業空間	●コンクリートのひびわれ	●日影規制＊	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌＊	●建築の終局強度の検討＊	●庄内のまちづくり＊	●80年代のインテリア＊	●第26回青年技術者＊	●建設業の労務事情＊
1980 Vol. 61	●80年代の都市と建築ーまちづくりの歴史と展望＊	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建設金物＊	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集＊	●住宅の耐久性＊	●建築行政と法規＊	●最近の防水工法＊	●都市景観とアメニティ＊	●屋内体育施設の設備＊	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材＊	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション集合住宅＊	●これからの建築設計と新耐震設計法＊
1981 Vol. 62	●職能論＊	●中国の論文ー北京の都市計画＊	●ポートピア'81＊	●台所まわりの計画と設備＊	●シーリング材の知識＊	●災害と法ー安全な環境をめざして＊	●都市住宅ー住まい手からの発想＊	●建築物と風ーデザイナーのために ●日建設計作品集＊	●住宅・都市整備公団ー関西における都市整備を中心とした新公団の役割＊	●間仕切壁の性能評価＊	●第28回青年技術者＊	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 Vol. 63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設ー地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観ーまちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第一期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 Vol. 64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 Vol. 65	●21世紀への関西ー魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル	●ビルのリフレッシュー内外装補修技術の現状と発展ー	●建設産業とロボット開発	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 Vol. 66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道ー建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホールーそれが生みだす文化ー	●建物の表情ー最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合一人体と建築にみるー ●日建設計作品	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 Vol. 67	●これからの住空間ー都市型集合住宅にみる	●屋根ーそのデザインと素材	●現代デザインーポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発ーその創造的仕掛けの鍵をもとめてー ●ツイン21	●CAD—その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 Vol. 68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 Vol. 69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統ー東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明	●制振	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営緒	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 Vol. 70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備Ⅰ	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 Vol. 71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●住賀市文化会館	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識ー中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化ー設計の多様化をめざしてー＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感ー建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 Vol. 72	●新しい都市空間づくりーⅠー	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりーⅡー ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識ー複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営緒部	●一般号	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木ー構造技術の世界ー ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 Vol. 73	●夢物語ー人がかわる、まちがかわるー	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザインー東海支部ー	●建築家のための設備知識ー集合高層住宅の設備システムー	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り一住宅・都市整備公団関西支社10周年ー	●木構造を使ってみませんかー集成材による構造ー	●接着ー建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」	●屋台ー仮設の魅力に学ぶー ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 Vol. 74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営緒	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境ー限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生ー構造技術の役割ー ●大阪市営緒	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境ー人にやさしい空間創造をめざして
1994 Vol. 75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと観	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かってー会員作品	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美ー建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 Vol. 76	●光がつくる風合の世界＊	●音ー騒音から操音／創音へ	●飛騨・美濃ーまちの活性化と地方文化	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法ー会員作品	●新しい「都市・建築」の視点	●建築構造と社会の接点 ●日建設計	●ライフラインと建築設備	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 Vol. 77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念	●遠江ーその地域振興と文化	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営緒部
1997 Vol. 78	●建築のロングライフ化をめざして＊	●鉄ものがたり＊	●東海ー風土・文化とまちなみ、建築	●創立80周年記念ー建築と私と社会ー	●木造建築物の伝統技術とその将来（予定）	●住む空間の復興（予定）						

＊は欠号

日本建築協会創立80周年記念特集

建築と私と社会

―80人の眼

最近ふと次のような感慨にとらわれることがありました。戦後も50年を越えてようやく「国家」「国益」あるいは、公益性の「公」という表現が、妙に感情的議論にならずに冷静に受けとめられ、真剣に意見交換できる時代になったのではないかと。これは「グローバリゼーション（ひと昔前はインターナショナリズムと言われていましたが）」を進めるうちに、海外における国と国との交流は、企業益を越えて多かれ少なかれ「国益」を軸に考えざるを得ない場面に遭遇することが多くなったのが引き金になっていることによります。相手国がこれを強烈に出してくるからです。今一つは国内に目を向けて、昨今の社会・政治・経済面の文化と精神の荒廃状況を見るにつけ、「公」の価値で確実に律することが、社会として出来なくなった（このままではこの国は危うい）ことに危機を感じて、矢も盾もたまらず各界各層から問題提起されてきたことが引き金になっていることによります。

公益性の「公」というと、抽象的で固い言葉（しかし大変重要な意味を含みますが）と聞こえ勝ちですので、視点を関西の歴史に据えてみて、「大阪人の商人の気概」ということばを引用しながら、このテーマの趣旨をご説明しましょう。

大阪人の商人の気概は「天気と人気とやる気や！」と古くから言われ続けてきました。このことばには、ビジネスにおける自律的な公益性の意義が端的に表現されています。

まず「天気」です。かつて、なにわの町が天下の台所になっていた時代、この町は日本国中の米、海の幸、山の幸が集積してきた町でした。ここで大切なのは、この町が実質的にはこれらのコストを決める経済センターであったことです。これらのコストは、異常気象で例えば東北地方で冷害がある、台風が来る、地震が起こる、飢饉がある、このような異常気象があるとコストが乱高下する、それらをコントロールするのは俺たち商人であって、そのコストを決める責任の重さ（公益性の意義）を認識していた表現として「天気」が使われてきました。

「人気」というのは、興行人気の人気ではなく、大阪の町が卸商の町であることからくる教えが込められています。卸商の町は薄利多売な訳で、自分の取り分は、一つ一つの仕事では決して大きくない。薄利多売の商売で大切にせねばならないのは、人付き合い。「儲け」という漢字の成り立ちが「信用できる者」という意味から出来ていることはその象徴とも言えます。「人気」というのは、自分の生きざま、人格と商売とが直接かかわるという商売の「公」的な厳しさと表裏一体になっている表現である訳です。

最後の「やる気」というのは、旺盛な企業家精神に支えられた民間活力の端的表現を指しています。この気概はビジネスだけでなく、文化への「パトロネージ性（支援精神）」という気質として昭和初期から戦前・戦後にかけて特に関西地方に発揮されてきた気概で、そこには、常に「公」とのかかわりが視野に入っていました。

このような「公」の意義について、先にご紹介したような見るに耐えない社会現象に多くの人が遭遇することもあってか、最近社会のあちこちで真剣に語られ出してきています。

そこで「建築と社会」においても、日本建築協会創立80周年を期して、建築が社会に果たしていくべき「公」の役割を、その対極にある「私」の眼と体験で明らかにしていければ、次世紀における建築と社会との望ましいあり方を考えるに役立つ道標になるのではないかと考えて、特集を企画した次第です。副題に「80人の眼」としたのは、80周年を期して延べ80人の本企画関係者が、一人ひとりの確かな眼でこれまでの歴史とこれからの未来像をシッカリと見据えた（80人の「私」の眼で）ことを徹底することへのこだわりです。

末筆ながら、精力的に企画・編集・座談会等にご参画いただいた皆々様に心より御礼申し上げます。

編集委員長　與謝野　久

〈関西建築界〉の成立

石田潤一郎

建築界という集団

この小文は、関西において「建築界」と呼ぶに足る集団が、いつ、どのようにして形成されていったかを見ようとするものである。

理論社会学の教えるところによれば、〈集団〉の特徴として、①成員間に頻繁な相互作用がある、②自分は成員であると自覚している、③互いに他の成員たちから同一集団の一員として認められている、④共通の関心事について規範を共有している、⑤相互に役割体系を作り上げてそれに参加している、⑥共通の理想ないし模範的対象を作り上げることによって成員相互間に心理的同一視ができている、⑦集団の一員であることになんらかの利益を認めている、⑧成員相互に協同的な関係が存在する、⑨自分たちの統一性について集合的知覚をもっている、⑩外部に対して統一的行動をとる——などが挙げられる。これらのすべてが認められなくてもよいが、より多くの状態が併存すればそれだけ「集団らしさ」の高い集団であると考えられる（本間・田野崎・光吉・塩原『社会学概論』）。

上記の見解を踏まえるなら、単に複数の建築家が存在しているだけでは「建築界」とはいわない。では、〈集団〉としての建築界はいつ出現したのだろうか。

この問いに答えるまえに、まず、建築家そのものが、どのようにして関西に現れたかを見ておく必要がある。

建築家の敗退

関西における日本人アーキテクトの登場は、明治19年4月、小原益知（1854～1929）が滋賀県の営繕技師として赴任したことに始まる。小原は工部大学校第3期生（明治14年卒）で、滋賀県では県庁舎の建設（明治21年竣工）を担当し、そのかたわら、琵琶湖疏水のトンネルの意匠設計も手がけた。しかし彼は22年には海軍技師として呉へ去る。また、明治20年にわが国最大の建設会社としてはなばなしく設立された日本土木会社は多くの学卒技術者を容したが、そのうちの二人が大阪支店に在籍した。鳥居菊助（不詳～1901）と田中豊輔（1860～1944）である。鳥居は工部大学校第4期生で、日本土木では和歌山県庁舎（明治22年竣工）の設計を担当した。こののち鳥居は早くに社を辞し、建築から離れてしまう。一方、田中は明治19年に改組成立した帝国大学工科大学の最初の卒業生である。日本土木・大倉土木にあっては幹部社員として重用される。ただ、彼の場合は意匠面ではなく技術的分野での活躍であった。

彼らにつづいて、明治21年10月、滝大吉（1861～1902）が神戸に明治工業会社を設立する。滝大吉は明治16年に工部大学校第5期生として卒業した人物で、建築学会発足に尽力したことでも知られる。彼は中央官庁集中計画を管掌する臨時建築局に在籍したが、ドイツ留学の出世コースに乗れなかったことから官途を辞し、フリー・アーキテクトとして生きることを選んだものである。彼は22年には大阪で単独の設計事務所を開く。これは辰野金吾とジョサイア・コンドルの事務所開設（それぞれ明治19年と21年）に次ぐ早さであり、職能史に特筆される。しかし、「1年の間にどれほど仕事をしたかというとさっぱり仕事がない、蔵の庇をつけ替えて呉れと言って其の報酬がたった2円50銭という」状態であった。結局、明治24年3月をもって、滝はフリー・アーキテクトに見切りをつけて陸軍省技師となり、大阪を去る。

上記4人の建築家を指して、明治23年の『建築雑誌』は「大阪アーキテクト四傑」と評したが、いま見たように、その活動は竜頭蛇尾の結末を迎えた。いや、東京においても、前記の辰野金吾や明治23年に事務所を開いた横河民輔がいずれも早々にフリーランスの立場を放棄しているから、この時期、日本全体がフリー・アーキテクトを必要としていなかったのである。

建築家の定着

滝大吉の衣鉢を継いだのは山口半六（1858～1900）である。山口は開成学校（東京大学の母体）からパリ中央工芸学校に留学した秀才で、帰朝後は文部省技師として多くの学校建築を設計、明治24年には博士号を授与されている。しかし、結核にかかって休職を余儀なくされ、療養のため、須磨・舞子に住まうこととなる。明治27年から大阪に設立された桑原工業事務所という技術コンサルタント会社で建築部門を引き受け、32年には独立して建築事務所を開く。しかし病軀に鞭打っての活動がたたり、明治33年8月急逝する。

大阪で、継続的に活動することに成功した建築家は茂 庄五郎（しげしょうごろう）である。茂は文久3年（1863）長崎に生まれ、工科大学造家学科の選科生として明治24年7月に卒業する。翌25年、尼崎紡績の技師となって西下し、28年大阪市北区東梅田に建築事務所を開設した。先輩たちと茂が異なるのは、工場建築だけを手がけたということである。近代工場というビルディング・タイプを社会は必要とし、それは「建築家」でなければ設計できない——というメカニズムを茂は的確に見通したのである。こうして彼は「百を以て数う」ほどの作品を残すことができた。それでも、32年には垂井紡績なる会社から設計報酬が高すぎると支払いを拒否され、裁判を起こす事態となった。

明治31年ごろには、大阪に河合幾次が事務所を開く。彼は明治25年帝国大学造家学科を卒業、桑原工業事務所にも一時在籍した。

明治38年には二つの事務所が開設される。一つは神戸の河合浩蔵のもの、もう一つは大阪に置かれた辰野片岡事務所である。前者の

河合浩蔵は工部大学校第4期生（明治15年卒）で、司法省嘱託として大阪控訴院（明治33年）、神戸地裁（明治37年）の建設のために関西に来て、そのまま自営に転じたものである。ちなみに、河合浩蔵と山口半六は、茂庄五郎が設計料の支払いを求めて訴訟を起こしたとき、設計報酬の鑑定を行っている。

後者の辰野片岡建築事務所は、辰野金吾が片岡安（かたおかやすし）と共同で設立したものである。辰野金吾（1854～1919）は、いうまでもなく明治の建築界の法王である。明治36年に東京に辰野葛西事務所を設立し、大阪にも出張所を設けた。一方、片岡安（旧姓細野、1876～1946）は明治30年に東大を出て辰野率いる日本銀行臨時建築部に入り、大阪支店新築工事に従事した。32年、大阪の実業家、片岡直温の養子となる。その後、34年には三十四銀行本社屋建設のため日銀を辞す。三十四銀行を無事竣工させた片岡は、辰野葛西事務所の大阪出張所に入り、明治38年、共同経営者の立場に上る。事務所名も辰野片岡建築事務所と改まる。

つづいて、組織に属して設計活動を行った人々を紹介しておこう。住友の営繕には野口孫市（明治32年入社）・日高胖（明33）、さらに弓削鹿次郎（工手学校明治23年卒）が在籍していた。住友家と並び称された政商・藤田伝三郎は、本社屋建設のために明治39年に宗兵蔵（1864～1944、東大明治23年卒）と前田昶之助（東大明治38年卒）を雇用したが、社屋完成（大正2年）後は二人とも独立している。

神戸の山陽鉄道には、山口半六の弟子ともいえる設楽貞雄（1864～1944）が明治33年に建築係長として入社し、停車場・ホテル・駅前凱旋門など多くの建築に関与した。ただ彼が本領を発揮するのは明治40年に独立してからである。

官庁に目を転じると、大阪府に千賀正人、大阪市に花岡才五郎がともに工手学校を終えて明治中期から在籍している。京都府には明治31年に松室重光（東大明治30年卒）が入り、古社寺保存のかたわら洋風建築の設計も多数行う。奈良県には、明治27年に長野宇平治（東大明治26年卒）が入り、同県庁舎を設計する。明治30年からは関野貞が同県技師となる。関野は建築史家として著名だが、奈良県技師時代には設計にも手を染め、県物産陳列所・日本生命本社などを残した。兵庫県には工部省鉱山寮の末端技術者から叩き上げた秋吉金徳が明治30年に入り、同県庁舎の建築では山口半六の遺志をよく継いで完成まで導いた。

関西の建築教育機関としては、明治36年開学の京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）がもっとも古い。その教官として武田五一（1872～1938）が赴任し、41年には、より若い世代の本野精吾（1882～1944）も加わる。ともにヨーロッパの新動向をいち早く紹介して、大きな影響を与えた。

集団の萌芽

ここまで紹介してきた人々、彼らが明治30年代後半の段階で関西にいた建築家である。彼らは、それぞれの事情でたまたま関西にやってきて、それぞれの職域と眼前のクライアントとに相対するばかりであった。個人的に友誼を深めることはあっただろうが、建築にかかわる者という理由のもとにつながりを持ち、集うような局面は存在しなかった。その意味で、この時期の関西の建築家は砂粒のようにバラバラに存在していたといってよい。

これに対して、東京では、帝国大学、中央官庁営繕、財閥（に結びついた設計事務所）、そして建設業者の四者がつくる四辺形の構造が早くから堅固に出来上がっていた。四者間で人材と情報、そして建築需要とがやりとりされ、その過程でそれぞれの利益が達成されていくという見事な互酬関係が形成されていたのである。この四辺形をつくり上げたのが辰野金吾であり、この関係性を牛耳ることで彼の絶大な権威は生み出されていた。また、この四辺形のなかを動かされる建築家たちも、東大同期・同窓を軸にした小グループを結成して意思表示を行っていた。

離散的にしか存在しない関西の建築家の在りようを、はじめて不自然で不利な状態であると気付いた人物は、片岡安であった。彼は、「建築界の不在」を発見し、克服しようとする。片岡安は、早い段階から建築家の親睦団体的な組織を求めていた。彼は、辰野金吾のもとにありながらも、辰野を頂点とする家父長制的タテ社会を改めようと願っていたからである。彼が中心となって明治30年代半ばに、関西在住の建築家の懇親団体であるオキナ会が組織される（この名は、大阪・京都・奈良の3都市の頭の音をとって付けられた）。集まっては飲んでさわいで、という気楽な会にすぎなかったが、これによって、冒頭に挙げた〈集団〉の特徴のうちの①成員間に頻繁な相互作用がある、②自分は成員であると自覚している、③互いに他の成員たちから同一集団の一員として認められている、⑨自分たちの統一性について集合的知覚をもっている――といったあたりが、形をなすことになる。

建築家の急増

明治40年代に入ると、若手の建築家が急速に増えてくる。39年の松井貴太郎（横河工務所）を筆頭に、辰野片岡建築事務所に永瀬狂三（明治40入所）・平尾善治（明41）・波江悌夫（明43）、大林組に松本禹象（明39）・木子七郎（明44）・鈴木甫（明45）、住友に小川安一郎（明40）・長谷部鋭吉（明42）、茂野村事務所に橋本勉（明39）、設楽貞雄の神戸工務所に篠田進（明42）・萩一郎（明42）・伊達陶二郎

(明45)、大阪府に池田実 (明37)・葛野荘一郎 (大正2)、京都府に亀岡末吉 (明40)、陸軍省に置塩章 (明43) ——といった人々が数年のうちに来住するのである。彼らは旧人たちとは異なる新しい感覚を有し、意匠的にも、また建築家相互の関係でも、関西の建築はそれまでになかった雰囲気に包まれることとなる。

若手は従来のオキナ会にあきたらず、「年寄りばかりで、なるほど翁会だ」などと公言した。そして〈建坊会〉〈大正会〉といった小グループをそれぞれ結成していった。〈建坊会〉のメンバーの池田実・波江悌夫・木子七郎らは、大正6年に自分たちのグループを協会的な組織に変えていこうというアイデアを出した。それは、建築学会において、辰野金吾会長の君臨ぶりに佐野利器以下の若年層が反旗を翻し、追い落としを画策しているような状況を反映していた。関西の若手もこの動きを援護しようとして、建築学会の関西支部を組織しようとしたわけである。

集団から組織へ

ちょうど同じ時期、片岡安は全く違う目的で建築家の集団を組織化しようとしていた。大正5年暮れから翌6年初頭にかけて、片岡は「同窓建築技術家に告ぐ」という小冊子を建築関係者に頒布する。

> 建築の流れに棹さす各般の人物は皆一斉に相扶け……互いに其の意思を交換せば、内に於いては建築に関する大観小察殆ど其の粋を集むることを得、外に向かっては社会を指導して、都市建築の大改造を促すに最も有力なる機運となるのである。抑も現代の建築は其の関連する方面実に広汎にして、これを大にしては都市計画、労働階級家屋政策、建築法規の制定、公衆保健法等の問題と直接に交渉すべく、又其の内容の研究事項としては材料の批判、新式構造の利用、都市建築の様式、其の経済処理等、殆ど枚挙に暇なきものというべく……、余輩は東京、大阪、京都、名古屋、横浜、神戸の六大都市の在住建築家は相連盟して建築協会を組織し、上述の事項を研磋せんことを提案し、此に対する同窓諸賢に明快なる尊意を問うのである。

このなかで片岡安は「建築協会」の設立を提案している。彼はそれに二つの機能を期待していたと見られる。「内に於いては建築に関する大観小察殆ど其の粋を集むること」、「外に向かっては社会を指導して、都市建築の大改造を促す」ことの二つである。

前者は、アカデミーのない関西において情報を発信し、交換する場をつくろうということであった。それはまた、建築学会が、建築家が日常業務を進める上で知りたいことを教えてくれないという不満を内にはらんでいたといえる。一方、後者は市区改正条例を東京以外の都市へも準用し、同時に建築単体に対する統制法規を制定すべきだという片岡の年来の主張である。このための運動を展開するための〈職業団体〉を組織しようとしたのである。片岡は、東京市建築条例制定運動の際に露呈した建築学会の社会性のなさにあきれていた。それゆえ、彼は、社会的発言をする拠点をもう一つ別個につくらなければならないと思い定めた。そのとき彼の念頭にあったのは単純な職能別の団体ではなくて、商工会議所のような企業家団体ではなかったかと思われる。

関西建築協会の結成

片岡安が思い描いていた建築家組織の構想にとって、大正6年2月に生じた若手の分派行動はすこぶる好都合であった。そのメンバーを呼び集めて「関西の建築家全体を糾合して大きな団体にまとめるべきだ」と叱咤する。直ちに片岡と、彼の所員で若手の代表格だった波江悌夫との連名で、関西在住の建築家52名にあて、「関西の建築家の団結を謀り相互の意思を疎通して建築界の向上発展を期する」という檄を発する。そして。2月27日に39名を一堂に集め、5人の委員を選出して団体の創立案の作成を委嘱することの合意をとりつける。この創立委員 (池田実・片岡安・武田五一・波江悌夫・設楽貞雄) は、3月17日に会則案を得たが、それは親睦団体の性格を主にしていて、名前も「関西建築倶楽部」とするものであった。これに対し、若手から「建築クラブでは物足らぬ」という意見がでて、3月30日の創立総会の場で「関西建築協会」という名前になった。それとともに、会の目的も「我が国建築界の堅実なる発展を期し……将に鳴らんとする暁鐘第一の金剛杵たらんと欲す」という対外的活動を強調したものに決まった。発足するとたちまち、そこには都市計画と建築法規のための活動が待っており、否応なく、社会的運動体という性格に染め上げられる。そのような会の姿は、片岡が「同窓建築技術家……」で主張した「建築協会」の構想そのものであり、おのずから「集団の一員であることになんらかの利益を認めている」「成員相互に協同的な関係が存在する」といった特徴を備えていく。

建築協会の結成は、関西の建築家たちが、〈砂粒〉から、「共通の関心事について規範を共有し、相互に役割体系を作り上げてそれに参加し、外部に対して統一的行動をとる」堅固な集団へ鋳造された瞬間であった。

(いしだ　じゅんいちろう　滋賀県立大学助教授)

『建築と社会』誌にみる関西建築の波頭

山形政昭

はじめに

日本建築協会創設の大正6年以来発行されてきた会誌『建築と社会』は、本年78集を数える。本誌は周知のように斯界の専門誌として、明治20年に創刊された学会誌『建築雑誌』に次ぐロングランを続けているもので、関西建築界の交流と確立を標榜し、広く社会に働きかけるジャーナルを意図して発行されてきたものである。その趣旨は「発刊の辞」に宣せられているもので、片岡安の下に結集した会員74名の高邁な志が謳われているその一部をまずここに掲げておきたい。

「我が関西在住の建築技術家は茲に結束して起ちぬ、偏に其の任務の軽からざるを感じながら、専ら斯の偉いなる目的遂行に熱中し、従来我が国一般に措いて問はざりし都市建築の拘束改良、家屋政策、其の他文明的施設の刻下急要の問題にして苟くも建築に関連せるものは、凡て之が研究調査をなし、之を社会に発表して啓蒙の位置に立たんと期す。……」(大正6年9月)

ところで近年、関西の近代建築を広く扱った著作には坂本勝比古の『商都のデザイン』(日本の建築—明治大正昭和)、昨秋出版された石田潤一郎の『関西の近代建築』など数種の高著を得ており、明治中期以来の日本人建築家の活動も広く解明されつつある。ここではそうした内容に改めて触れる余裕はないことであり、協会の活動と会誌上で編まれた特集記事、記念事業報告を通して日本建築協会活動を概観し、関西建築界の歩みを再考してみようと思う。

創立〜15周年(昭和7年、1932)

協会創立の大正6年、世は第一次世界大戦の渦中にあり、物価の高騰の続く不安な時節であった。大阪では、中之島で大阪府立図書館に並んで、赤レンガの公会堂と、北浜で市内初の高層建築三越百貨店の工事が進行していたが、他にめぼしい近代建築は数棟を数えるばかりで、帝都東京の歩みに比して建築活動は極めて緩慢な動きであった。それが、大戦終結後の大正中期、にわかに訪れた好景気に煽られるように一気に加速するのである。

そういう時期に、辰野片岡建築事務所にあった片岡安は、京都の武田五一、神戸の設楽貞雄、大阪府の池田実らと共に関西建築協会を組織し、建築界を指導し発展させる原動力となっていった。

さて、「創立満十五周年記念号」(昭和7年10月)では「創立拾五周年を顧みて」(片岡安)と「我協会十五周年の記念の日に際して」(武田五一)と題する追想と展望の巻頭言が掲げられている。そこで総括された協会活動の成果は、「我国都市の根本的改造を急要とする」ための「建築都市計画法の制定と住居改善事業」であった。つまり「我協會は大正七年一月以来建築学會及び日本建築士會と相提携し或は単独に熱心なる運動を継続して」きたことが結実したのが、大正8年に六大都市に施行された「市街地建築物法」と「都市計画法」であり、住宅改良は大正9年の改良設計協議会とその展示会(大阪中央公会堂)や、生活改善博覧会(大阪商品陳列所)などの事業と、当時最大のスケールで企画された箕面桜ケ丘で開催された住宅改造博覧会などであった。

また大正12年の関東大震災、昭和2年の北丹後大地震の衝撃に即応して、「関東大震災の被害に就いて」(片岡安、大正12年10月)「震災後に於ける東京市復興に関する意見の一端」(武田五一、大正12年10月)などを記しているのに加えて、「震災号」(昭和2年4月)、「震災予防号」(昭和4年2月)を発行している。一方この時期には米国の高層ビルディングを範としたオフィスビル建築が注目され、「ビルディング号」(大正15年1月)が組まれ、「近代亜米利加に於けるオフィス・ビルディング構造様式の傾向」「三都に於ける主要オフィス・ビルディング」の写真構成、「阪神地方に於ける所謂ビルディングの概評」(古塚正治)などが記されている。そして出現した新しい都市景観と都市問題をテーマに「都市問題号」(昭和3年1月)を組み、「現在の大阪」のパノラマ写真構成、「都市計画事業の一大危機」(片岡安)、「交通機関と建築」(八木幸次郎)など、変貌する大阪をとらえている。

この昭和初期には日本インターナショナル建築会の設立など、当地での新しい建築が注目されるが、そのレポートは創立から10年後に「日本のインターナショナル建築運動」(中尾保、昭和12年6月)にまとめられている。この国際建築様式を含めた新しいモダニズム建築は当時「新興建築」と称され、特集「新興建築」(昭和6年7月)を組み、その翌年には「高層建築」特集(昭和7年1月)、「最新建築研究Ⅰ—朝日ビルディング、阪急ビルディング—」(昭和7年2月)を発行している。

こうした時代の到来のなかで、先の15周年記念号が編まれていた。17名の会員が集まっての座談記「最近十五年間に於ける関西建築界の変遷を語る會」では回顧談のみならず、「建築施工法の改革」「初期の鉄筋混凝土造」「商業建築の勃興」「新様式の台頭」など、興味深い話題が語られたものとなっている。

また15周年記念事業として、「伊丹緑ケ丘住宅」、「大美野田園都市計画」「上野芝住宅」「瑞光住宅」の4地域で住宅博覧会が企画され、それらの優秀作品図面を集めて展示された「住み良い家の展覧会」が開催されている。これらは関西における昭和初期の郊外住宅地の形成として注目されているもので、安田孝らの住宅地形成史研究によりしばしばとりあげられているところである。

25周年（昭和17年、1942）

日華事変の昭和12年以降、次第に建築統制が加えられ、戦時色の深まるなかで協会は25周年を迎えた。この時局を反映して「防火改修展」（朝日ビル）、「建築と防空展」（大阪大丸百貨店）が開催されている。戦時色を映じた特集では、先に「都市武装特集」（昭和９年７月）があり、昭和13年１月号では片岡安の「非常時に直面する新春の建築界」なる巻頭言を掲げており、建築界にも時局協力の声が高まっていったのである。

昭和初期はそういう戦時への兆しを深めつつも、昭和８年から11年にかけて、大阪では御堂筋の建設と並んで初期モダニズム建築の名作が相次いで建つ。例えば大阪瓦斯ビルディング、大丸百貨店（昭和８年７月号、新建築集）、そごう（昭和10年11月号）であり、京都朝日会館（昭和10年６月号、新建築研究）などがある。

また本会の伝統的事業となっていた住宅コンペでは、近鉄線あやめ池で厚生住宅コンペが実施され、25周年記念に向けて昭和16年10月号誌上で入選案の発表、「これからの住宅」（市浦健）、や「極小住宅に於ける平面基準の問題」（西山夘三）の住宅論などがあり、戦後復興期の新しい住宅論の萌芽とみられるものでもある。なお同誌上では「建築資材の統制並に新興建材に関する座談會」記事もあり、戦時下の建築状況を色濃く伝えている。なお、25周年記念誌の刊行は準備がなされたものの時局下において発行は見送られており、戦色深まるなかの昭和19年３月、本誌は「建築と社会を戦ひに送る」という休刊の辞をもって戦前の刊行を終えている。その後３年余りの空白期には「日本建築協会会報」を発行し、会員にニュースを伝え、終戦を迎えたのである。

戦後、「復興住宅展」（昭和21年、天王寺動物園）など協会活動が再開されつつあった５月に会長片岡安が他界し、会報の第６号は「故片岡会長を憶ふ」特集号（昭和21年11月）として発行している。

35周年（昭和27年、1952）

会誌『建築と社会』は昭和22年３月に、「住宅経済の再建」（西山夘三）、「都市復興論文」（懸賞論文）などを掲載した１、２月合併号を発行し新時代を迎えている。続いて昭和21年より翌年にかけて、大阪市天王寺区公館地区復興コンペ、大阪市南区公館地区復興コンペが実施され、西山夘三の当選図案などが３～５号合併号に掲載されるなど協会活動も再開され、昭和24年の通巻30集より会誌も新誌面で蘇っている。

そして昭和27年（1952）、創立35周年を記念する住宅展（南海線羽衣住宅展）「之れからの住宅展」（南海高島屋）など盛大な行事が開催され、加えて「35周年記念史」（昭和28年12月）が企画発行され、三度の座談会記録のほか、創立以来の協会史資料が収録されている。

45周年（昭和37年、1962）

戦後の混乱期を脱して昭和30年代に入ると、昭和39年に開催される東京オリンピックを控えて、好転した景気を背景に建設ラッシュの時代を迎える。

すなわち昭和32年には南海ビル、近鉄アベノビル、33年には新朝日ビル、新大ビル、新歌舞伎座、35年の関電ビル、37年の新阪急ビル、天王寺駅ビルなど今日も市内枢要部を構成し、あるいは時代を画した建築が相次いで建った。そうした時期に広島平和会館（昭和30年）を竣工させた丹下健三は、機能主義批判としての「新たな伝統の創造」を宣し、以後建築誌上で「伝統論争」が展開されている。その昭和30年１月の『建築と社会』誌で「日本における建築的伝統特集」が組まれている。その主筆を受けもった西山夘三は「民族的伝統と国民的建築」と題していわゆる国際的近代主義建築と新日本調の双方に批判の論陣を張っている。氏はそれより先、『日本の住宅問題』（昭和27年、岩波書店）を著しており、当時関西を代表する社会派オピニオンリーダーであったのだ。

35周年以降の協会行事では、故片岡安会長の没後10年にあたる昭和30年に追悼会と五月午餐会が開かれ、その記事が36集６号に報じられている。協会創立期の会員諸氏の追憶談は片岡安の人柄を伝えるだけでなく、関西建築界の傾聴すべき証言ともなっている。

また39集１号の「関西の建築特集」（昭和33年１月）は大阪、京都、神戸の都市と建築史的論集からなる本文と、「正月随想―関西の建築歴史を語る」14編の文章で構成された記念誌的内容を有したものであった。その寄稿者13名は真に青年期における関西建築界の目撃者であり、ここに所属と合わせて列記しておきたい。

松井貴太郎（横河工務所）、白杉嘉明三（大林組）、今林彦太郎（大林組）、佐藤四郎（野村建築事務所）、竹腰健造（住友工作部）、鷲尾九郎（竹中工務店）、波江悌夫（片岡建築事務所）、大倉三郎（宗建築事務所）、元良勲（大阪市土木課）、加藤善吉（大阪府都市計画課）、中西六郎（大阪市営繕課）、藤阪捨治郎（錢高組）、上野伊三郎（京都高等工芸）。（掲載順）

また昭和34年７月に、関西一円の明治建築の記録と調査を目的に瀧澤眞弓（大阪市大）を委員長として近代建築調査委員会が設けられ、林野全孝、政岡基次幹事ら27名の委員が分担して調査に着手している。その成果は、会誌上に昭和35年１月より40年２月まで62回にわたって掲載されたもので、本格的な近代建築調査の先駆けとなったものであろう。

そして昭和37年には近代建築と対をなすように、45周年の記念出版として日本民家集『ふるさとのすまい』(今和次郎、竹内芳太郎、ほか) を編集発行している。本書はコンパクトな体裁ながら、民家の記録書として毎日出版文化賞を受けるなど高い評価を得たものであった。

50周年（昭和42年、1967）

昭和39年の東京オリンピックと軌を一にして、東海道新幹線の建設、千里ニュータウンの建設など国家的な建設事業が続き、建築界では国立京都国際会館コンペ（昭和41年)、大阪万博計画（「1970年万国博会場計画特集」昭和41年８月）も話題となっていた。会誌においては「プレハブ特集」(昭和34年２月)、「超高層建築特集」、(昭和38年12月)、「社会福祉施設特集」(昭和37年12月)など、今日に続くテーマも扱われていた。

昭和42年の50周年記念事業は、先の35周年記念に勝る規模で行われている。記念式典、「関西建築50年回顧展」(阪神百貨店) など記念行事のほか、記念誌「創立50周年記念号」(昭和42年３月)と、「創立50周年記念事業記録号」(昭和43年３月)を刊行し、両誌を合わせると230頁をこえる記録となっている。前書では時代に分けて３回延べ26名による座談会記録が収められ、「年表50年史」(嶋田勝次ほか) と合わせて精読すると、50年間の生彩ある動向が読める史料となっている。また「協会活動の記録」と「建築と社会総目録目次」は先の「35周年記念誌」を継ぐものであり、有用な史料となっている。

60周年（昭和52年、1977）

1970年万博を前後する時代は、我が国初の超高層霞が関ビル（1968年）に象徴される技術開発と、アーバンデザインというワードがイザナギ景気と呼ばれた時勢の下で明るい未来図を描き、また1973年の石油危機を境に過渡期に入ったニュータウンの問題、そして歴史的建築の再生や環境保全の問題に視線が集まるという多彩な動向を建築界は見せたのである。

会誌特集はそれに対応して「日本万国博と技術開発」(昭和45年３月)、「高層建築問題」(昭和45年６月)、「転換期のニュータウン」(昭和46年８月)、「歴史的環境保全」(昭和49年１月) などが企画され、加えて「住宅―60年代の総括と70年代の展望」(昭和46年１月)では今日的住宅問題を見渡した内容もあった。

そうした時流を追った会誌編集のなかで、「600号記念号」(昭和47年２月) は再び戦前の関西建築界を発掘し再評価する特集であった。そして50周年誌の回顧録的内容と異なり、当時気鋭の研究者による論評が次のように構成されたものだった。

「大正、昭和前期の都市問題」(三輪嘉男)、「大正期の住宅問題」(安田孝)、「大正、昭和期関西都市計画年表」(安田丑作)、「大正、昭和の建築運動」(竹嶋祥夫)、「日本建築協会住宅コンペ」(坂本勝比古)。

「60周年記念誌」(昭和52年３月) は、写真構成「目で見る日本建築協会60年近代建築60年のあゆみ」のほか、誌面の大半をあてて「特集・ニュータウンの管理―千里のフォロー」が編まれている。1958年に着手から20周年を迎えた時点における千里ニュータウンの生活都市としての多面的な評価と問題指摘の特集となっている。

70周年（昭和62年、1987）

1970年代後半にアメリカ建築の新しい流れとして「ポスト・モダニズム」が移入され、つくばセンタービル（1983年）をピークに我が国でのポストモダニズム、モダニズム建築の行方が話題を呼ぶ。また大阪在住の建築家安藤忠雄の「住吉の長屋」(1977年) が評価され、以後活躍の場を広げてゆく。さらに、身障者施設や高齢化社会に対応する建築計画研究が蓄積された時期でもある。

会誌特集を拾うと、高層建築設計基準を大きく変えてゆく「これからの建築設計と新耐震設計法」(昭和55年12月)、そして「都市景観―まちなみ美観への誘い」(昭和57年５月)などがあり、90年代への指針ともなっている。1983年の新年号で特集された「関西の建築文化を考える」は、幅広い物と事を話題にして関西建築文化の先駆性と特質を探る鼎談(小松益喜、玉置豊次郎、吉田光邦／福田晴虔)を中心にした充実した内容があり、特集誌として時宜を得た「現代デザイン―ポストモダニズム10年」(昭和61年３月)と並ぶものではなかったか。そこで主筆を執られた向井正也の「ポスト・モダンと日本の伝統―末期的近代の動向」は、地域文化から遊離したこの時勢のデザインに警鐘を鳴らしたものであり、それは「大阪モダニズム変容の70年」(70周年記念号、昭和62年３月)へと続くものだった。

90年代に入ると、バブル時代に計画されたであろう大型プロジェクトが各地に白昼夢のように姿を現している。それらは確かにテクノロジーによって支えられた未知の表現であるとしても、どこか空々しさが漂っているのではないか。そして1995年の阪神大震災は近代化を果たしたはずの建築と都市に甚大なる被害を与えた。その問題の深さは、求めるべき建築と都市のイメージがいまだに描ききれないところにある。

『建築と社会』の80年を顧みて、都市と住宅という主題を軸に建築と社会に広くかつ積極的にかかわってきた本誌の歴史をみてきた今、再び「発刊の辞」に謳われた建築家の職責に対する矜持が求められているように思う。

(やまがた　まさあき　大阪芸術大学助教授、工学博士)

1917~1926

□関西建築協会設立と機関誌の創刊





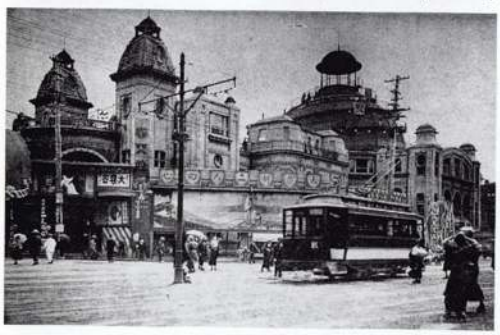


大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊されたが、大正8年に「日本建築協会雑誌」へ、さらに大正9年には「建築と社会」に改題している

□大阪の娯楽地区



道頓堀　VOL 1—9(1918—7)



千日前楽天地　VOL 1—13(1918—11)



通天閣　VOL 1—12(1918—10)

□大阪の中之島



中之島西端より見た安治川筋　VOL 2—3(1919—3)

私の生家の前の江戸堀南通りを、酒屋の三浦さんの前から約二百m西へ行くと、通称「七つ蔵」と呼ばれていた土蔵が道の北側に並んで建っていた。江戸時代には大阪の中之島あたりからこのあたりまで、諸大名の蔵屋敷等が並んでいた頃の名残であろうと言われていた。江戸堀川という掘割川の水運と、それに平行した倉庫群と、その南側に道路という陸運とを北から南へ順に、東西方向に並行して設けるという配置は誠に良くできた地区計画であったと感心させられる。……(中略)……その頃は蔵から江戸堀川の川ぶちへ出ると、石垣の間には蟹が這い回り、水中には小魚も見られた程川の水もきれいであった。

「私の八十年の記録」(堀内三郎著)
—江戸堀小学校時代より抜すい—

世相

1917 (大6) ロシア革命
1920 (大9) 国際連盟成立
1923 (大12) 関東大震災
1926 (昭1) 大正から昭和へ (12月25日)

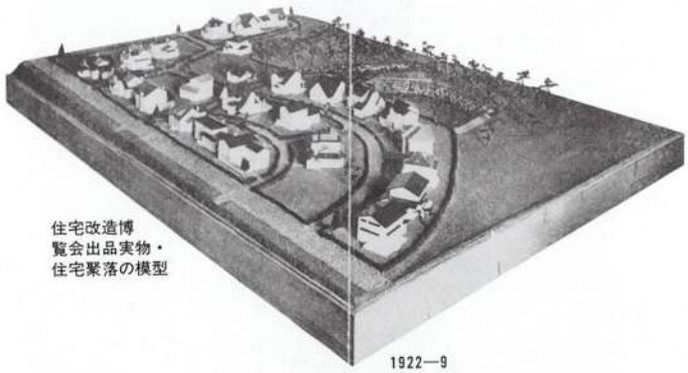
―大正デモクラシィから昭和モダニズムへ

□大正期の住宅改良コンペと住宅改造博覧会



第1回懸賞募集・改良住宅設計第1等当選案(大林組)　1921―11

1921（大正10）年に行われた日本建築協会主催の改良住宅競技設計は、「住宅改造博覧会」に実物を出品する予定で募集された。



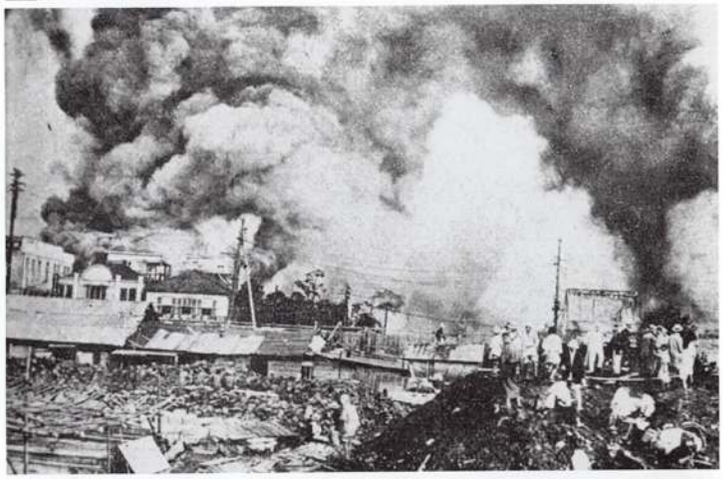
住宅改造博
覧会出品実物・
住宅緊落の模型

1922―9



箕面に建つ住宅改造博覧会本館　1922―10

□関東大震災



九段より神田方面を望む

□大阪市の橋梁設計コンペ



大江橋及淀屋橋懸賞図案概評

審査委員　GT氏

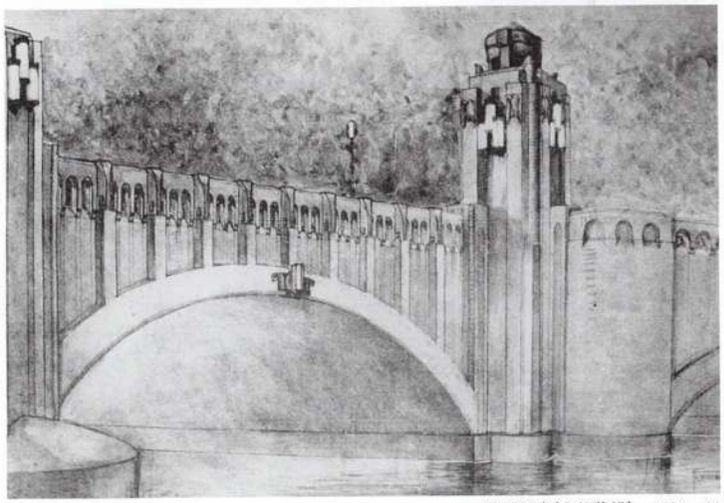
大正十三年九月廿日より二十二日に渉り審査委員協議上慎重に行はれたる概評次の如し

第一等賞　大阪市　大谷龍雄

様式は南欧中世紀の気分あるも近代式を用ゐ其の根底に於ては東洋趣味の横溢せるものなり。全体の形極めて端正剛健其の形状の比例最も洗練を経たり其の主要材料たるコンクリートを模式の上に表現せんとせる作者苦心の跡も注意すべし但し柱塔の飾壺上に火焔の形を付したるは少しく蛇足の感あるを惜しむべしとす製図の技極めて巧妙なり。



1923―10



一等当選案(大谷龍雄)　1924―11

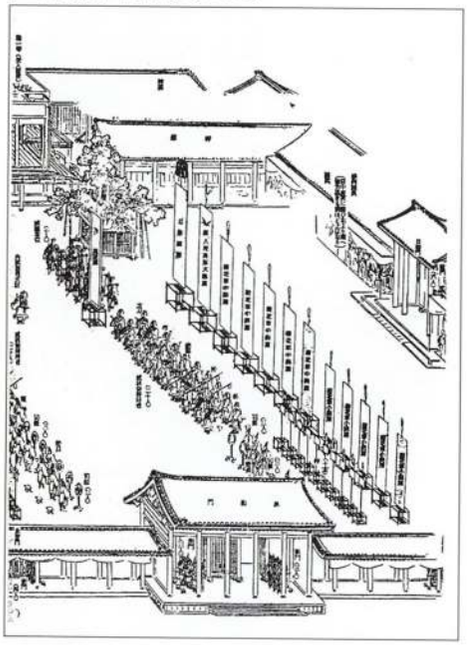
建築と社会の動き・特集・記事

1917　関西建築協会設立（3月30日）
　　「関西建築協会雑誌」発刊（9月15日）
　　発刊の辞／1集1号
　　組織的に計画し野性的ならざる郊外住宅経営（小林一三）／1集2号
　　都市住宅問題（関　一）／1集14号
1919　1月号より「日本建築協会雑誌」に改名
1920　1月号より「建築と社会」に改名
1922　住宅博覧会記事／5集9号
1923　関東大震災特集号／6集10号
1924　関東震災に目覚め大正維新の実を挙げよ（片岡　安）／7集1号

過去から現在へ I「建築と社会」と時代の世相

1927~1936

□昭和の即位大典



1928—1

昭和時代は63年にわたり、大恐慌、太平洋戦争、終戦、国際社会への復帰、オイルショック、そしてバブル景気へと、激動の時代であった。

□神戸・大丸呉服店



1928—3

阪神・淡路大震災で全壊した大丸神戸店は、1997年3月にようやく全面再開した。旧居留地のイメージに合わせた外観デザインは、大丸呉服店時代の面影を伝えている。

□昭和初期の建築ランキング



現代日本大建築一覧

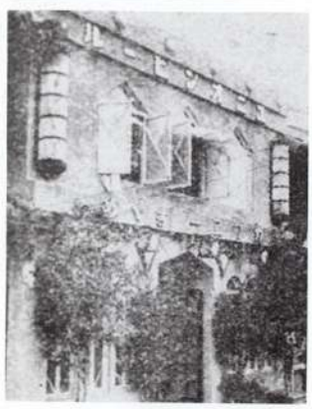
所在地	名稱	建坪	總延坪	高	卅	施工者
大阪	大阪市廳舍	1939.00	7567.00	100.00		大林組
	大阪鐵道局	1451.00	7585.00	75.4		清水組
	大阪市議會	1049.75	6336.13			鴻池組
	大阪控訴院	1336.00	4100.00			構造工務所
	中之島公會堂	659.00	2391.00			
	大阪ビルヂング	1245.00	9792.00	100.00		大林組
	住友ビルヂング	955.00	6872.00	80.00		大林組
	堂島ビルヂング	644.00	5895.00	100.00		竹中工務店
	大同ビルヂング	551.00	4128.00	100.00		竹中工務店
	新安田ビルヂング	1000.00	3500.00	100.00		大林組
	野村ビルヂング	414.00	2950.00	100.00		竹中工務店
	山口ビルヂング	575.00	2475.00	100.00		竹中工務店
	大林ビルヂング	450.00	2852.00	57.00		大林組
	三井使事務所	221.00	1548.07	81.9		構川工務所
	大阪大丸	676.00	4970.33	100.00		竹中工務店
	大阪三越	785.00	6525.00	108.0		構川工務所
	大阪高島屋	382.00	3078.00	100.00		竹中工務店
	大阪白木屋	556.44	5055.33	198.8		清水組
	帝國大學圖書館	1174.00	4662.00	97.5		大林組
	帝國ホテル		10000.00			
東京	帝國劇場	643.00	1826.00	56.9		構川工務所
	歌舞伎座	1310.00	2656.00	89.5		大林組
	工業俱樂部	458.50	2126.50	70.00		構川工務所
	株式取引所	914.00	2704.45	80.00		構川工務所
	丸ノ内ビルヂング					
	東京三越	1168.18	8685.60	98.33		構川工務所
	八重洲ビルヂング	707.80	5567.10	100.00		竹中工務店
	郵船ビルヂング		8458.00	100.00		竹中工務店
	第一相互ビルヂング	540.00	3300.00	88.88		清水組
	銀座ビルヂング	708.00	7144.00	100.00		大田組
	千代田館	429.04	3427.81	96.50		構川工務所
	大阪ビルヂング支店	445.00	3344.00	100.00		竹中工務店
	三菱銀行	853.00	2926.00	59.00		三菱地所部
	興業銀行	520.00	4060.00	100.00		大林組
	京都市廳舍	671.00	3019.40	120.00		大林組
	京都ホテル	525.00	1911.22	100.00		清水組
	勸業銀行支店	282.00	1108.00	45.50		大林組
	帝國ホテル新館	296.00	1201.00	52.50		大林組
神戸	第十五銀行支店	273.45	1474.57	90.00		清水組
	明治ビルヂング	282.00	2247.00	100.00		竹中工務店
	商船ビルヂング	447.00	3449.00	92.50		大林組
	生糸検査所	1531.00	9115.00	60.00		大林組
	住友ビルヂング	292.00	2409.00	100.00		大林組
	鈴木商店	731.00	5710.00	100.00		竹中工務店
	第一銀行	185.00	1085.00	80.00		大林組

建築第一宗 現代日本大建築一覧

出品者 日本建築協會

1928—10

□全国大流行のカフェー



船場カフェーすゞめ(大阪)

カフェーの改善に就て

岡部顯則

四、未成年者の飲酒喫煙

従来未成年者には禁酒法に依つて飲酒喫煙を禁せられてゐるに拘らず近時盛んに飲酒喫煙をやる。之はカフェー許りではないデパートの休憩室などで中學生が平氣で喫煙をやつてゐるのをよく見受けるが實に慨嘆に堪へない。要するに法律で定められてある以上は之を勵行せしめ違反者はビシビシ罰し絶滅を謀るよう取締つて貰ひ度のである。

1929—3

□……そして当時の編集室では



編輯室のごなり聲

蘇生作

だれだい、ガウ〳〵いつてやがるのはまんざら亀公じやあんめいしコラツボーイ彼奴を起こせよ

凸子（うるせいのはそつちよ、俺等は精鋭がいゝからな。夕べ小宵彼の女とのラブシーンの逃想に遠く思ひを馳らかしてゐるちゆー随分デリケートな問題にふれてゐる所なんだからネあんまりごちや〳〵いつてくれるなよ。

編チイ。ふざけやがつて、ボーイ今日の編風機は風がにぶいぞ。線が痛んでゐるんじやないか調べて見い。

1928—7

世相

1929（昭4）世界恐慌
1931（昭6）満州事変
1932（昭7）犬養首相射殺（5.15事件）
白木屋百貨店火災
1933（昭8）地下鉄御堂筋線（梅田～心斎橋間）開業
1934（昭9）室戸台風

—昭和モダニズムの開花

□婦人と住宅



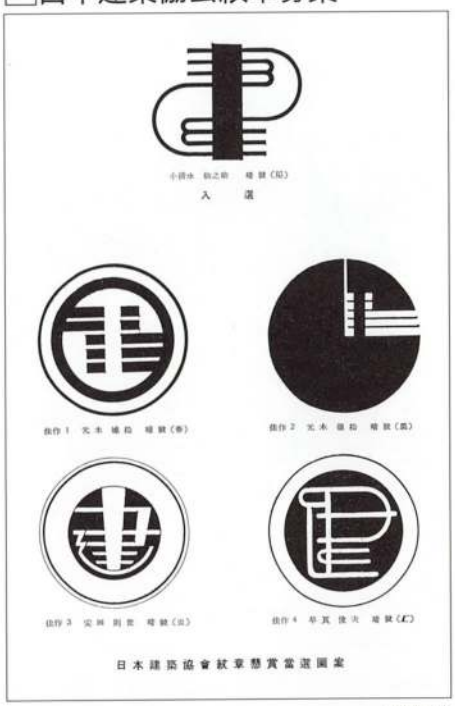
1930—10



1931—9

住宅改良運動の一環として、大正から昭和にかけて台所の改善が奨励され、『台所と湯殿の設計』(主婦之友社、昭和4年)などが広く読まれた。
また、実験に基づいて、流しの奥行きや幅などの設計寸法が示された。
しかし、台所の位置が北または東を向いている点は以前と変わらず、台所の根本的な変革は1950年代まで待たなければならなかった。

□日本建築協会紋章募集



1932—6

□阪急ビルディング

1932—2



伊東博士「阪急ビルの内部装飾に就て」の抄記　一階廣間東壁には青龍と白馬を配した。龍は云ふ迄もなく總ての動物の君主である。よく天に昇り地に潜み、よく地を走り水を行く。行くとして可ならざるは無き萬能の靈獣である。白馬の翼を備ふるは快速を意味する。翼馬は必ずしも希臘神話のペガススから來たのではない。既に周の穆王の八駿馬中に肉翅を有するものがあり、後漢の武氏祠の石壁に翼馬が空を駈ける姿がある。所謂天馬空を行くものである。

□紅蓮に包まれた東京白木屋百貨店



1933—2

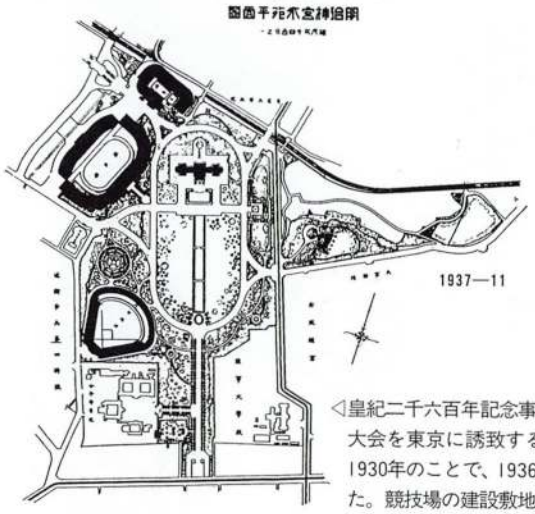
1932(昭和7)年12月16日朝に出火し、14人の死者と130人の負傷者を出した。わが国で初めての本格的な高層建築火災である。
鉄筋コンクリートは燃えないという神話が崩れ、建築学会などが徹底的に火災調査を行った。
当時のはしご車は4階までしか届かず、また防災区画がなかったなどの問題点が指摘され、以後、防災規定が整備される契機となった火災として名をとどめる。

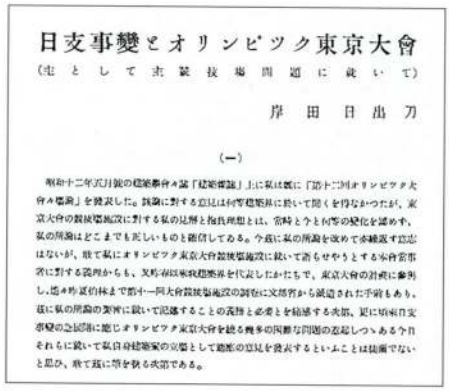
建築と社会の動き・特集・記事

1927　北丹後地方震災実況／10集4号
1928　大正より昭和の建築と社会(八木幸次郎)／11集12号
1929　御大礼記念号／12集1号
1932　メートル法による住宅の設計に就いて(藤井厚二)／15集6号
　　日本建築協会紋章懸賞当選図案／15集6号
　　創立満十五年記念号／15集10号
1933　百貨店の防火／16集2号
1934　飛行機より見たる大阪市に於ける偽装遮蔽に就ての感想(1)(2)／17集8、9号
　　台風関西を襲ふ(中島智喜)／17集10号
1936　都市に於ける公益企業としての住宅経営(日本建築協会)／19集11号

1937~1946

□幻のオリンピック東京大会





日支事變とオリンピック東京大會

（之として主競技場問題に就いて）

岸田日出刀

（一）

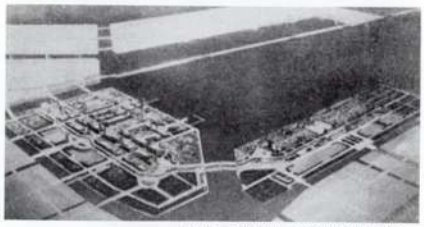
昭和十二年五月號の建築學會々誌「建築雜誌」上に私は既に「第十二回オリンピック大會々場論」を發表した。該論に對する意見は何等建築界に於いて聞くを得なかつたが、東京大會の競技場施設に對する私の見解と抱負理想とは、當時と今と何等の變化を認めず、私の所論はどこまでも正しいものと確信してゐる。今直に私の所論を改めて本稿發表の意志はないが、敢て私にオリンピック東京大會競技場施設に就いて語らせやうとする本會當事者に對する義理からも、又昨春以來我建築界を代表したかたちで、東京大會の計畫に參劃し、基本的諸條件まで決定の一因大會競技場施設の調査に文部省から委託された手前もあり、茲に私の所論の發表に當つて記憶することの義務と必要とを痛感する次第。更に昨春日支事變の急展開に應じオリンピック東京大會を繞る幾多の問題の惹起しつゝある今日それらに關して私自身建築家の立場として總括の意見を發表するといふことは猶豫でないと思ひ、敢て玆に筆を執る次第である。

◁皇紀二千六百年記念事業として、第12回オリンピック大会を東京に誘致するべく運動が始められたのが、1930年のことで、1936年にベルリンにおいて決定された。競技場の建設敷地に関しては、数箇所の候補地について環境、交通などの比較調査の結果、明治神宮外苑競技場を改築使用することとなった。1938年に突如として、政府による中止の命令が発せられた。

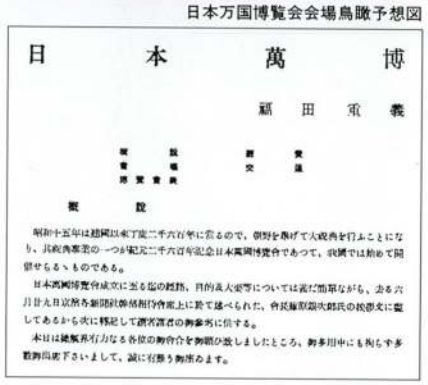
▷皇紀二千六百年記念事業として計画されたが、オリンピック同様、政府による突如の中止命令により廃案となる。

1937—6

□幻の日本万国博覧会



日本万国博覧会会場鳥瞰予想図



日本萬博

顧田重義

概説

昭和十五年は紀元二千六百年に當るので、御製を奉戴して大祝典を行ふことになり、其祝典事業の一つとして紀元二千六百年記念日本萬國博覽會であつて、我國では始めて開催せらるゝものである。

日本萬國博覽會成立に至る迄の經路、目的及大要等については既に簡單ながら、去る六月廿九日京都各新聞社幹部招待會席上に於て述べられた、會長藤原銀次郎氏の挨拶文に盡してあるから玆に轉記して讀者諸君の御參考に供する。

本日は建築界有力なる各位の御會合を御願ひ致しましたところ、御多用中にも拘らず多數御出席下さいまして、誠に有難う御座ゐます。

1937—11

□建築様式論争



最近の建築に現はれたファッシズムの傾向

新名種夫

1



日本折衷主義と我國の建築運動

西山卯三

1

1937—1



日本のインターナショナル建築運動

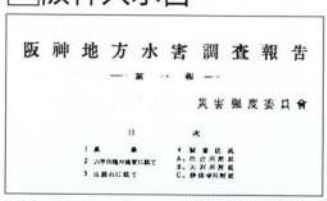
中尾保

1937—6

京大の教室主任であった坂静雄先生にいわれて卒業後、大阪府警察部に就職しました。私が配属された建築課の係の隣の係長が亀井幸次郎さんで、「きょうは早くすんだら建築協会へ来いよ。むこうには文献がいっぱいあるから」と声をかけてくださいました。昭和13年頃のことです。

堀内三郎氏・談

□阪神大水害

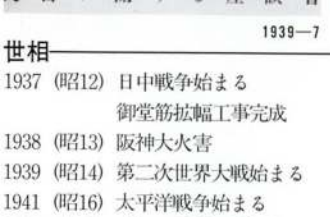


阪神地方水害調査報告

災害強度委員會

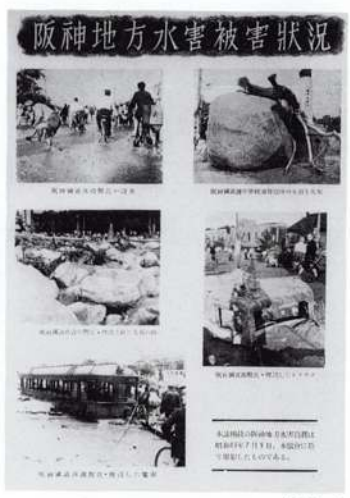


1938—9　災害に関する座談会



災害に關する座談會

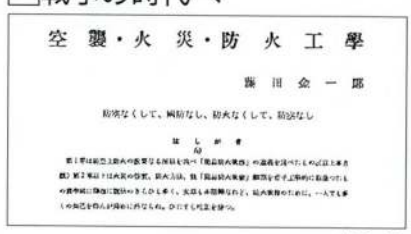
1939—7



阪神地方水害被害狀況

1938—7

□戦争の時代へ



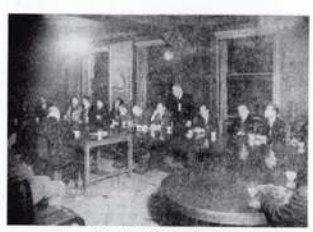
空襲・火災・防火工學

飯田吉一郎

防壕なくして、風防なし、防火なくして、防空なし

はしがき

1939—7



防空に関する座談会 1941—5

住友が満州に力を入れ始めていたので、竹腰事務所の仕事も当然満州での建築物が多くなってきた。また工場、特に海軍関係の工場設計をすすめていたので、当時、たくさんの仕事があったことを覚えている。私は尼崎で、伸銅場の設計監理で現場に常駐勤務していた。ある日、先生が突然現場に来られて、「とにかく、クレーンさえスムーズに動けばいい」と言っておられたのが印象的であった。

岡橋作太郎氏・談

世相

1937 (昭12) 日中戦争始まる
御堂筋拡幅工事完成
1938 (昭13) 阪神大火害
1939 (昭14) 第二次世界大戦始まる
1941 (昭16) 太平洋戦争始まる
1945 (昭20) 広島・長崎に原爆投下
終戦。国際連合成立
1946 (昭21) 日本国憲法公布

海軍技術者として徴兵され、2年間、南洋のパラー群島のコロロ島で、砲台施設建設現場の監理を命じられました。

島民を労力とし、資材は日本より運び込まれましたが，備えつけられる大砲を見ると、1890年代のアームストロング。全くナンセンスな行為としか思えず、すでに態勢は決まっていると、ひそかに思いました。

何の力にもならぬものがまことしやかにつくられ、しかし、それに対しても何も言うことが出来ぬ、むなしい時代でした。

近藤正志氏・談

一日中戦争、太平洋戦争、そして終戦

□皇紀2600年



1940—1

□竹筋コンクリート

竹筋『コンクリート』の學術的研究　　岩田恒

1 はしがき

鐵材は戰時體制に於て必要缺くべからざる資材である。戰爭には陸海軍とも兵器も裝備も鐵材による。支那事變完遂の長期戰と新なる米英に對する攻撃作戰には益々共の需用の激增を見る事は明かである。されば政府は種々の機構を法制化し加るに平和產業部面より又民間の低設建造物より一般家庭よりは鐵製品を回收すること奬勵しつゝあり、この時に當り防空設備は國土防衛上の對策として戰爭の範圍に屬するものなるが故に配給に考慮を加へつゝあり、更に平和施設に於ても交通は平戰兩時に共通する最も重要なる設備施設を要するかく考察するとき鐵材の需用は多々益々激增するばかりである。この情勢に於て鐵材に代ゆる代用品即ち竹筋「コンクリート」を研究發明し得ることは國策上最も重要なることであつて拾餘年間攜まず倦まずして成功を見るに到つたその功績偉大なるものがある。

共の研究發明者は神戸高等工業學校教授巽純一氏堺市技師島田一氏である、こゝに之を紹介し、更に興亞竹筋研究所員としてその研究しつゝあることを大方諸彦に報告し得ることを欣幸とするものである。

1942—2

徴兵解除され大阪に戻り、終戦の半年前、村野、森建築事務所に入所。そのころ事務所では、海運省よりの仕事を、わずかながらこなしていました。　**近藤正志**氏・談

□太平洋戦争へ突入



1941—6

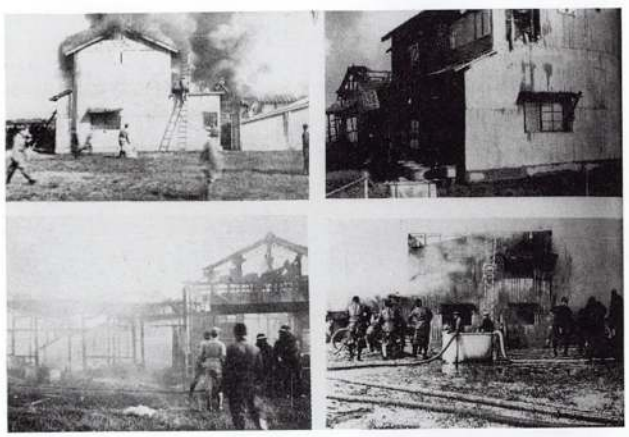


■爆撃防御

◁空襲、爆撃に対する論文、記事が、このころより増え始める。爆撃による被害例の紹介、爆弾の性能、カモフラージュの工夫、防護用のシェルターなどがくわしく述べられている。

■火災実験

▽一般市民を対象に、防火改修事業とはいかなるものかを十分認識してもらうために、各地で火災実験が行われた。焼夷弾が木造家屋に与える火害の程度の実験も何度も行われたが、実際には隣家からの延焼被害が大きく、普通家屋を防火改修すれば安全であると、観衆たちに示した。



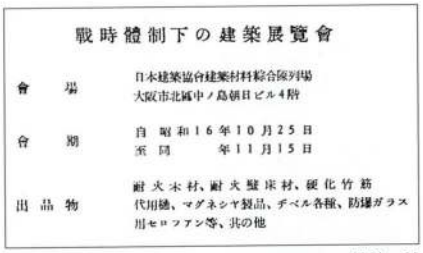
1942—2

昭和20年、戦地から引き揚げてきて大阪駅に着き、焼け野原の風景を見て、「これはいかん、建築屋のはしくれとして、まず安全なものをつくらないとだめだ」と。安全第一という信念は、あのときに決定したように思います。

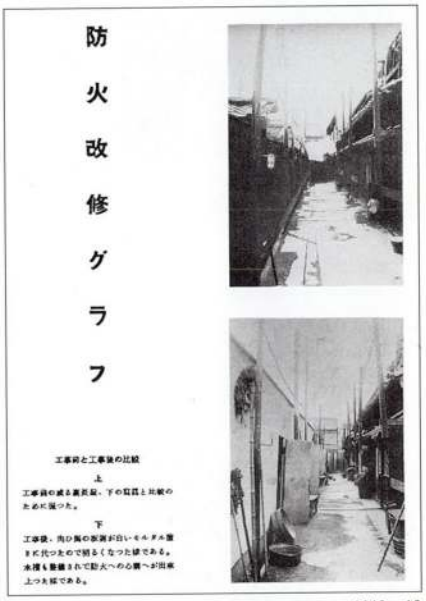
堀内三郎氏・談



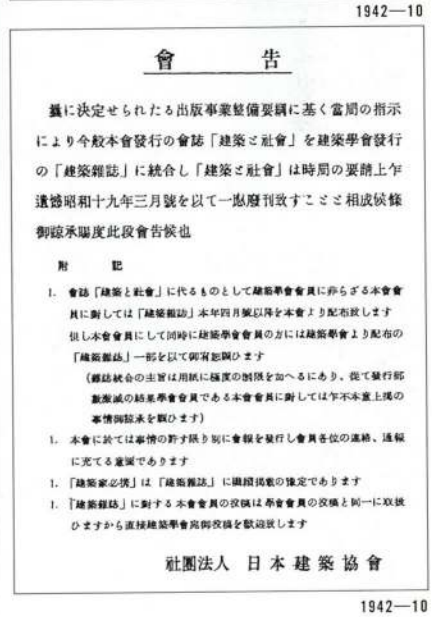
1943—4



1941—11



1942—10



1942—10

建築と社会の動き・特集・記事

1937　最近に現れたファッシズムの傾向（新名種夫）／20集1号
　　防空建築（田辺平學）／20集1号
　　日支事変とオリンピック東京大会（岸田日出刀）／20集11号
1938　防空壕試設（吉田信武）／21集11号
　　災禍の昭和13年（藤原義一）／21集12号
1941　南方共栄圏内の建築設計について（東畑謙三）／24集8号
　　金属類回収令／24集12号
1942　最低限生活の要請と建設住宅の基準（西山夘三）／25集1号
　　竹筋「コンクリート」の学術的研究（岩田　恒）／25集2号
　　戦時立法と建築物法（岡本正次郎）／25集5号
　　防空／25集7号
1943　大阪市に於ける建築用物資配給に就て（平山琴治）／26集2号
　　戦時建築／26集6号
　　戦争に勝つ家（杉山雅則）／26集7号
1944　27集3号（3月）の終刊号を最後に発行停止を命じられ、建築雑誌（建築学会誌）に統合。
　　「建築と社会」を戦ひに送る（編集幹事会）／27集3号
　　防空疎開の法的根拠／27集3号
　　大阪市の都市疎開に就て（山田正男）／27集3号
　　創立25年記念事業経過に就て（記念事業幹事会）／27集3号
　　「会合　雑誌用紙の統合に就て」で建築雑誌、建築と社会、早稲田建築学報の用紙統合を通知／建築雑誌58集709号（5月）

過去から現在へ Ⅰ「建築と社会」と時代の世相

1947~1956

□戦災からの復活



1947—1・2



1949—1

簡単なる現場英辞典

続工は十月卅日です。
It will be completed at Oct. 30 th.
貴方が御留守のときに何方に相談すればよろしいか。
To whom may I consult, when you are absent?

□建築の模索



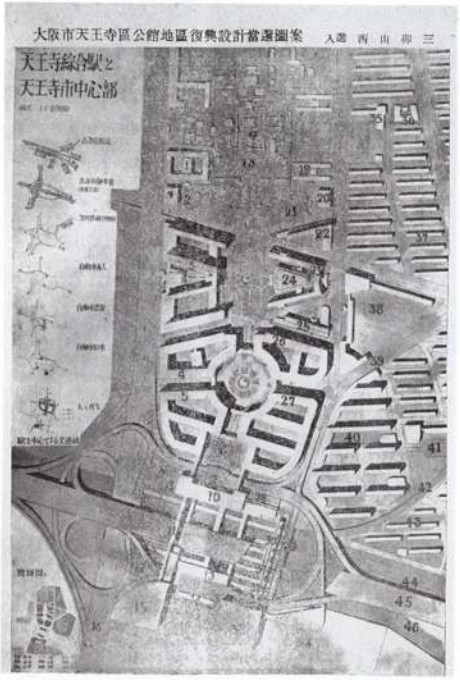
出席者

司會者	西山卯三（京大助教授工博）
梶原三郎氏（阪大醫學部教授醫）	竹腰健造氏（日本建築協會長）
小林一三氏（元商工大臣）	中野順次郎氏（都島工業高等學校教諭）
近藤博夫氏（大阪市市長）	西脇リカ女史（國際文化協會長）
坂靜雄氏（京大教授）	和辻春樹氏（元京都市長工博）
庄司光氏（生活科學研究所醫）	

場所……兒島邸本會分室

1948—2

□街なみの復興



1947—3・4・5



1947—9~12



1948—1(7月)

□住宅難時代



1948—1(7月)

世相

1947 (昭22) 第1回国会開会
1948 (昭23) 福井地震
1949 (昭24) 法隆寺金堂の壁画焼失
湯川秀樹ノーベル物理学賞
1950 (昭25) 建築基準法制定
特需景気
1951 (昭26) サンフランシスコ平和条約
1952 (昭27) 鳥取市大火
1953 (昭28) テレビ放送開始
1955 (昭30) 日本住宅公団設立
1956 (昭31) 千里ニュータウン建設開始

―廃虚から…復興の10年

□非戦災都市・京都

1950―5

京都の新建築を批評する

井手 重雄　小崎 修　佐々木米太郎　須田國太郎
西山 卯三　松井清之助　森田 慶一　(五十音順)



1950―9

ほとんどの大都市にとって戦災復興が焦眉の課題であった昭和25年、非戦災都市である京都では、美しい都市景観を守りながら、いかに近代都市化させるかという、京都ならではの問題意識があった。

□法隆寺炎上

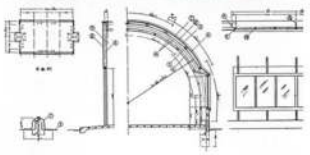


1949年1月26日、法隆寺金堂で壁画を模写中の職人の電気座布団から発火し、壁画12面が焼失したのが契機となって、1950年に文化財保護法が議員立法で制定・公布されたが、同年、金閣寺が放火により焼失するなど、文化財は受難続きであった。

□アルミニウム時代

日本の建築界が戦争以来十数年の空白時代を経て、技術の退歩はなはだしく、アメリカの技術を率直に学ばねばならないと、欧米レベルにとにかく一歩でも近づくことへの欲求のあふれる特集。原子爆弾すらもアメリカ技術の称賛の対象となっている。なかでも、軽金属の利用を第一にあげ、再興日本の建築界の一助とするよう、この時代特有の力強さで綴られている。この後、押出型材によるアルミサッシの誕生、サンドイッチパネルの開発、内外装材の乾式化の進行、各種ボード・合板類の生産普及と、新建材の夜明けの時代を迎えることとなる。





1950―2

□西日本に水害



1953―10・11

□神戸博とアメリカ博

昭和25年に、神戸・現在の灘区王子動物園の敷地で開催された神戸博では、山口文象、池辺陽、東畑謙三、丹下健三などのそうそうたる建築家による建築物が会場を彩った。「建築と社会」の紹介記事でその華やかさがうかがえる。

一方、ほぼ同時期に開催のアメリカ博については「全体を見て、そのロケーションや個々の建築のあり方、全てが無統制で、無思慮で、乱立で、猥雑である。この博覧会に建築家が参加されていないことは一見してわかる」と紹介され、やや冷やかな視点が目立つ。しかし博覧会としてはこの昭和25年の神戸博はアメリカ博に客をとられたのか不入りで、後の神戸市政に大きな赤字のツケを残した。



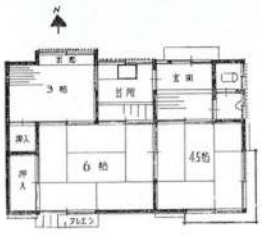
1950―5

□住宅の質的発展への希求



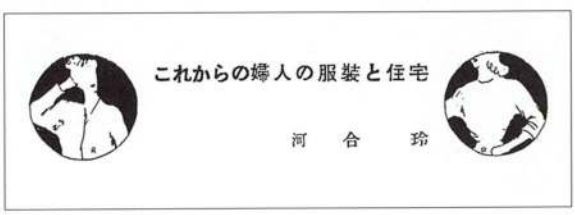
赤川モデル住宅を載る

1950―4



1950―4

廃虚での切迫した住宅問題が、このころようやく落ち着きを見せ、生活様式、家族制度の変化、婦人解放の気運に伴い、質的問題を顧みる流れが出てきた。住宅金融公庫法公布も、この年である。特集では、主婦の家事労働からの解放と合理化、「家」の格式的要素の象徴ともいえる玄関、座敷、床の間重視から、居間、寝室、台所、便所といった住む人間自身のための空間重視へと古い価値観の変化を挙げている。〝これからの婦人の服装と住宅〟〝女子学生座談会〟等、女性が誌面に登場し、生活者サイドの視点から、住まいの在り様について語っている。



建築と社会の動き・特集・記事

1947　「建築と社会」再刊
(28集1号は1、2月合併号、以後1948年まで合併号を不定期発行)
再刊の辞 (出版幹事会)／28集1号
我が日本建築協会は「かくありたい」(小崎 修)／28集1号
住宅復興とこれからの住生活 (藤田金一郎)／28集6～8号
1948　1～6月の間「建築と社会」の発行が途切れる
1949　30集1号 (1月) から毎月発行に戻る
大阪復興特集／30集1号
法隆寺炎す (中村直勝)／30集3号
学制改革と建築学科 (白石博三)／30集12号
1950　建築士法草案について (日本建築協会)／31集1号
建築基準法草案 (建設省住宅局)／31集2号
1951　住宅金融公庫について (竹内左平治)／32集1号
アメリカ／32集4号
建築を志す学生諸君へ (東畑謙三)／32集8号
1952　沖縄／33集7号
都市不燃化／33集8号
法隆寺／33集10号
1953　創立35年記念史／34集12号
1954　第1回青年建築家 (現・青年技術者) 特集／35集6号
「建築の眼」の連載開始／35集12号

過去から現在へ I「建築と社会」と時代の世相

1957~1966

□ダンチ族の出現

1960—11


小さなダンチ族

—公団住宅の子供に聞く会—

会場風景(右端が林光幸)

アパートに育つ子供たち、これを小さな"ダンチ族"と呼んでみよう。わずか13、4坪の狭い住宅のなかにも、次代に花咲く若き芽がすくすくとのびていく。永当にそうだろうか?この疑問を解いてみようと思って、この座談会を企画した。公団住宅香里団地のなかにある開成小学校の生徒会の子供たちのうち、建物の各型別(中廊・ポイント・テラス)にわたるように人選し、また周辺の子供たちも集まってもらって、先生にも参加していただいた。ひじょうに活発な意見がでて実に3時間半に

狭い部屋、音やプライバシーの問題、遊び場所の少なさ。様々な問題を抱えながらも、公団住宅は新しい生活スタイルを日本に定着させた。団地に住む子供は当時ごく少数派であったが、今や民間のマンションも含めると圧倒的多数の子供が集合住宅に暮らしている。子供の成長と住環境についてはもっと議論されるべきだが、昨今の受験競争の激化の中で、社会的な問題意識が希薄化している。

□プレハブ住宅

「1世帯に1戸の住宅を」というフレーズが、総選挙の際の公約となる深刻な住宅不足問題を背景に、昭和34年ごろより進められ、このころようやく新興産業として脚光を浴びてきていたプレハブ住宅を特集。
当時は、全住宅建設量の1～2%という低率だが、その将来性へかける期待は大きく、各メーカー担当者の文章にその熱意が感じられる。10年後のプレハブ占有率を30%とした予想をはるかに上回り、この後、本来、手仕事であった住宅建築は、大量生産、大量販売、大量建設を目的とした、工業生産化への一途をたどることとなる。
1940—55年代の、モダニズム思想を原動力とした、プレハブ住宅第1期を建築家のフィールドとすれば、60年代のそれは、"住宅産業の製品"といえる。全く魅力を感じない、との辛辣な意見も寄せられている。

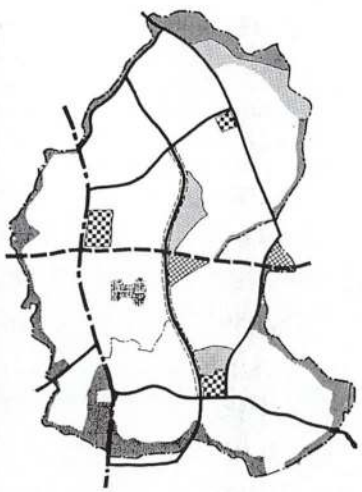


1964—2

□千里ニュータウン



1962—1



千里ニュータウンのマスタープラン(最終案)

千里ニュータウンの計画のとき、防火用水や消火栓のことで西山夘三先生にいろいろきかれました。消防用水を確保するために、水道担当者とけんかして水道管を太くしたり貯水槽を増やしてもらいました。新しい計画だから、そういうことができたんです。

堀内三郎氏・談

世相

1958 (昭33) 東京タワー完成
1959 (昭34) 岩戸景気
伊勢湾台風
1960 (昭35) 安保闘争
1961 (昭36) 大阪環状線開通
第二室戸台風
1963 (昭38) 名神高速道路(尼崎～栗東間)開通
1964 (昭39) 東海道新幹線開業。東京オリンピック
1965 (昭40) アメリカが北ベトナム爆撃開始
1966 (昭41) 日本の人口が1億人突破

見えない地下

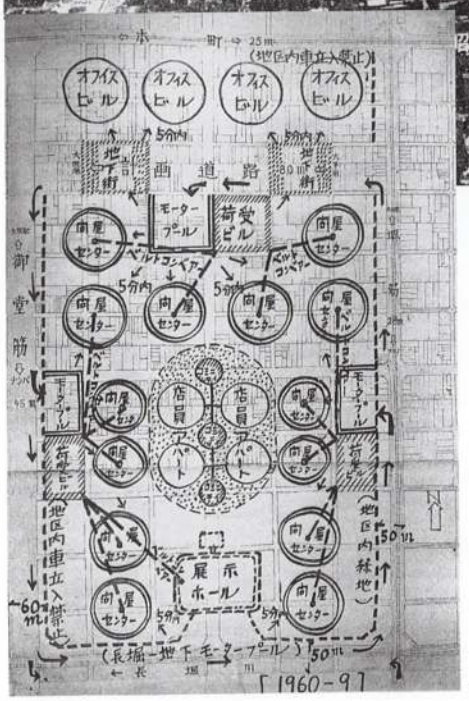
阪神大震災のあと、地震のことばかりを言っているが、
そろそろ大きな水害が起こっても不思議ではない。
関西にもその昔大きな水害があった。
最近の建築家は地上ばかり気にしているが、見えない
地下の地質や水のことも考えないといけない。

高橋慶夫氏・談

新しいライフスタイル！ ゆれ動く価値観

□問屋街地区改造





現在の中央大通りの計画に伴い、大阪・南船場の卸売問屋街を近代化しようとする提案。都市計画家の意見と地元の意見の双方を勘案し、実現可能な理想に近い案として提案されている。個々の店舗、事務所を集約して問屋センタービルを建設するアイデアは、立体道路化された船場センタービルとして実現したが、地区全体の改造には至らなかった。

1961—1

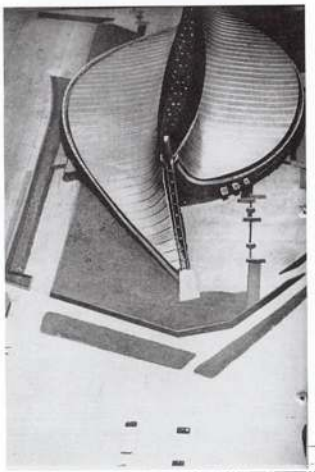
□レジャーブーム



国民所得の安定、労働時間の短縮から、時代はレジャーブームへ。各地の観光開発計画が盛んとなる。

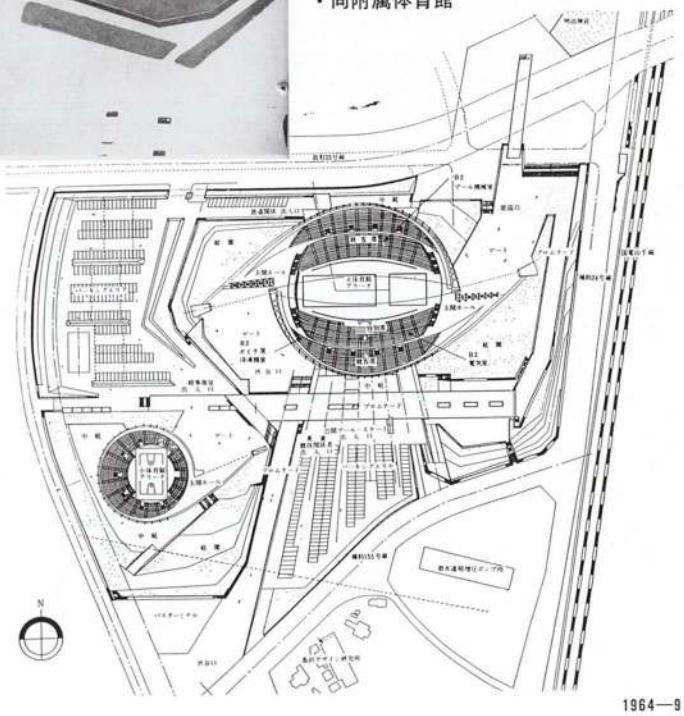


1964—3



□東京オリンピック

国立屋内総合競技場
・同附属体育館



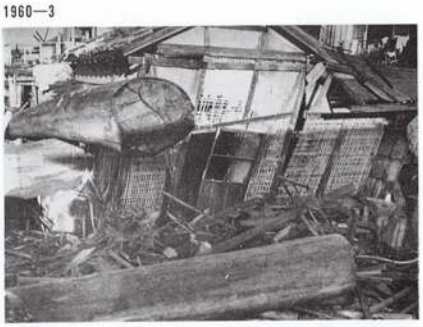
1964—9



□伊勢湾台風

災害対策基本法制度のきっかけとなった。

1960—3



建築と社会の動き・特集・記事

1959　共同住宅特集／40集３号
1962　阪神高速道路と近畿の開発特集／43集８号
1963　地下街特集／44集10号
　　超高層建築特集／44集12号
1964　プレハブ特集／45集２号
　　オリンピック競技施設特集／45集９号
1966　1970年万国博特集／47集８号

柔剛構造論争

東大を中心とした剛構造派と、京大を中心とした柔構造派があった。霞が関ビルが出来たときに武藤君と一緒にシンポジュウムに出たが、それは重箱をかさねたような実験で構造を確認したとかいって、最後まで柔構造とは決して言わずに、かわされてしまった。　**高橋慶夫**氏・談

過去から現在へ Ⅰ「建築と社会」と時代の世相

1967~1976

□高速道路



阪神高速道路は、昭和39年6月28日、高速大阪池田線（当時は高速道路1号線）湊町～土佐堀間、延長2.3kmを最初に供用して以来、各路線、区間とも早期着工に努めて来、マヒ寸前の街路交通を幾分でも緩和させるため、たとえ短区間であっても、完成区間は直ちに供用するという方針で進めてきた。

1968—7

□公害問題

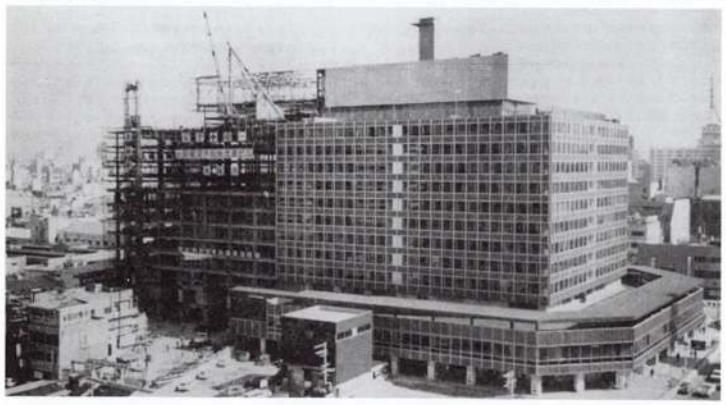
1969—9



昨年、大阪府では大阪湾の南端部、わずかに残された岬町の自然海岸に人工砂浜と青少年海水浴訓練センターを計画したが、実際には、海水の汚染のため、このうち人工海水浴場の案は放棄せざるを得ない羽目になったのである。大都市からの汚水の流入、産業廃棄物の不法投棄、タンカーの廃油投棄などが、加速度的に増加しつつある現在、海洋汚染問題は新しい公害問題となりつつあり、その直接的な被害者は、海水浴客や漁業者であることは明らかである。

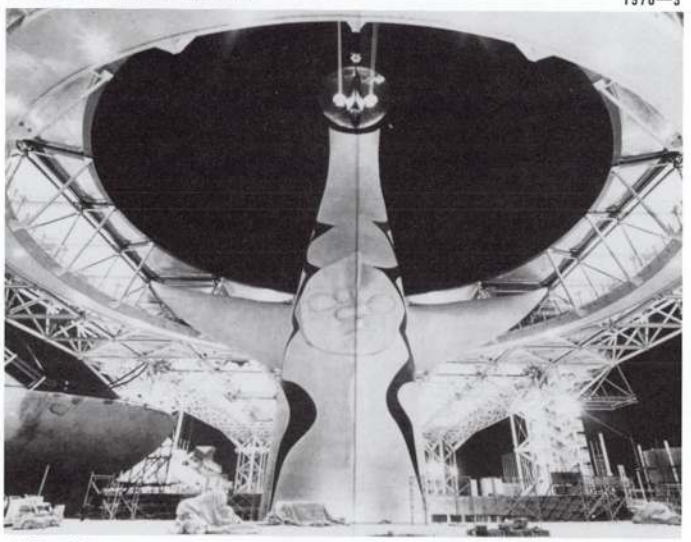
□駅前ビル

1969—7



□日本万国博覧会

1970—3

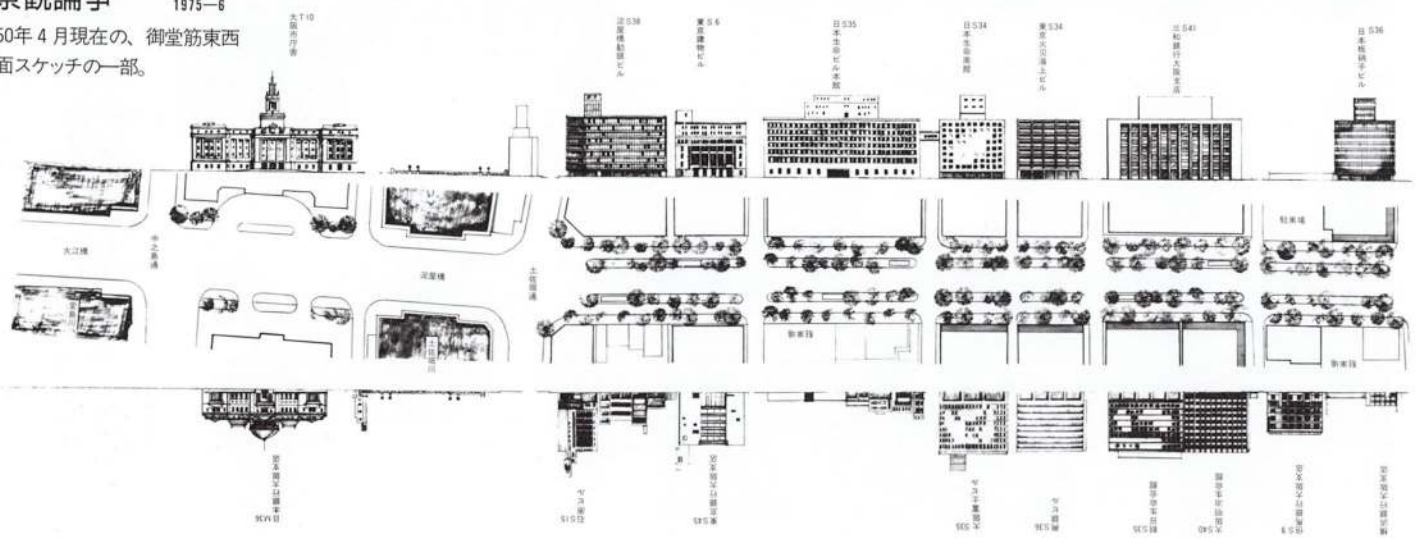


太陽の塔は、いまも万博記念公園にその雄姿をとどめる。

□景観論争

1975—6

昭和50年4月現在の、御堂筋東西面立面スケッチの一部。



世相

1967（昭42）　村野藤吾、建築界初の文化勲章
1968（昭43）　明治百年　イザナギ景気　霞が関ビル竣工　学園紛争
1969（昭44）　宇宙船アポロ11号が月面着陸
1970（昭45）　日本万国博覧会（千里万博）　千里ニュータウン造成完了
1972（昭47）　山陽新幹線（新大阪～岡山間）開業　日本列島改造論　沖縄返還
　　札幌冬季オリンピック
　　千日デパート火災
1973（昭48）　石油危機
1974（昭49）　企業連続爆破事件
1975（昭50）　沖縄海洋博覧会

―高度成長期からオイルショックまで

□市街地整備

1976―6

国鉄大阪駅、桜橋、梅田新道を結ぶ10.7ヘクタールの大阪駅前地区は、東に御堂筋、西に四ツ橋筋、南に国道2号線といった幹線道路に囲まれ、周辺に集まる鉄道網は国鉄をはじめ、阪急、阪神、地下鉄1、2、3号線があり、中之島のオフィス街や曽根崎新地の歓楽街を背後に控えた大阪の中枢ともいえる地区である。このうち北半分の4.7ヘクタールは昭和10～15年に都市計画法による土地区画整理事業により区画整理されたが、南半分の6ヘクタールは混沌とした状態のため、大阪市によって昭和36年に市街地改造事業として都市計画がなされ、大きく4つのブロック街区を整備し、スーパーブロックとして1号棟から4号棟まで四つの大規模な建築群にまとめられ、現在第2号棟を施工中である。一方、北半分のうち第一生命ビル、大阪神ビル、新阪急ビル等が民間の手により、昭和26年～38年頃にかけて建設されたが、残された梅田3番地、4番地、5、6番地のブロックは、老朽家屋が密集している状態にあって、民間による再開発が期待されているものの、容易に進まない状態にあった。



1972―10



□大火災続発

1972年5月13日の夜、難波新地の千日デパートで火災が発生し、7時間にわたって燃え続けた。2～4階の計8,800㎡が焼け、118名が焼死するという大惨事になった。

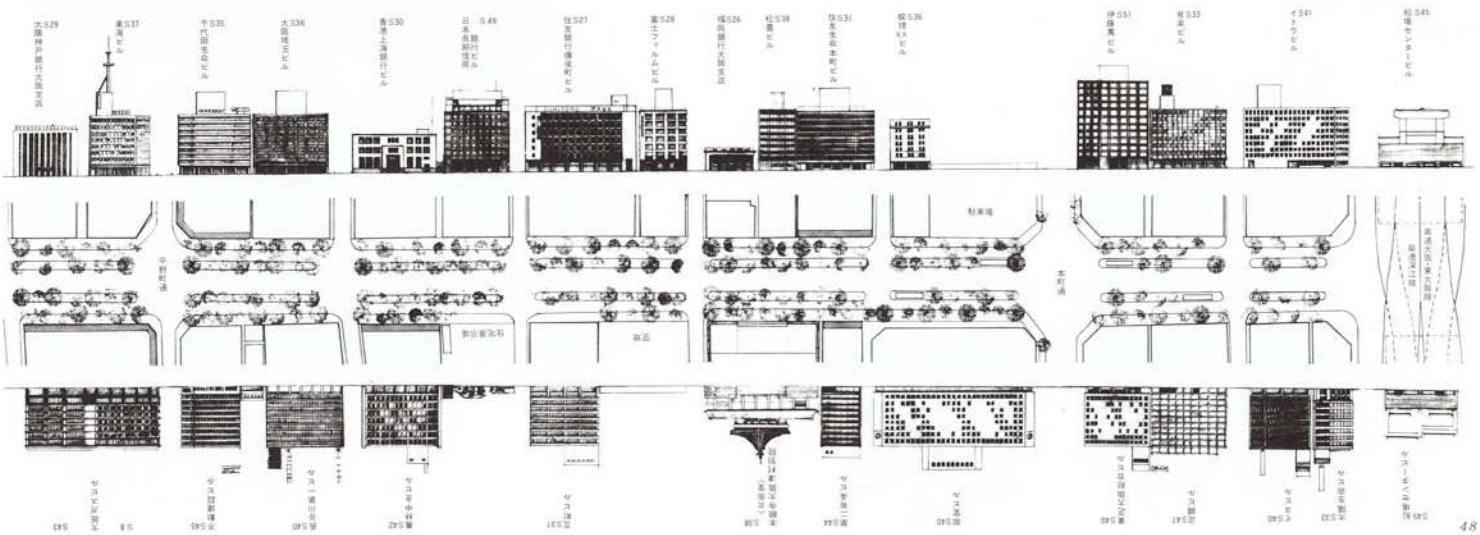
翌73年には熊本の大洋デパート火災が発生し、建築基準法の防火・避難規定の大改正につながった。

□超高層ビル建設の幕開け

1973―5



大阪にも超高層ビル時代が到来。手前の白い建物が大阪国際ビル。後ろの黒い建物が大林ビル。
ほぼ同時に工事が行われ、いやでもお互いに意識せざるを得なかったという。



48

建築と社会の動き・特集・記事

1967 日本建築協会創立50周年記念号／48集3号
　　モントリオール万国博特集／48集8号
1969 解決をせまられる公害問題／50集8号
1970 日本万国博と技術開発／51集3号
　　高層建築問題／51集6号
1971 転換期のニュータウン／52集8号
1972 冬期オリンピックと札幌／53集1号
　　600号記念号／53集2号
1974 歴史的環境保全／55集1号
　　ビルの省エネルギー化／55集7号

景観論争

御堂筋は100尺の高さ制限で高さのそろった町並みができたが、これからの町並みとしてはもっと自由に高さを計画してもよいのではないか。　高橋慶夫氏・談

1977~1986

□バリアフリー

建築的環境のバリヤーズ・フリー設計へむけて
—近畿地区における心身障害者施設・公共施設・住宅などの具体例をもとに考える—

藤本　尚久＋田中　直人

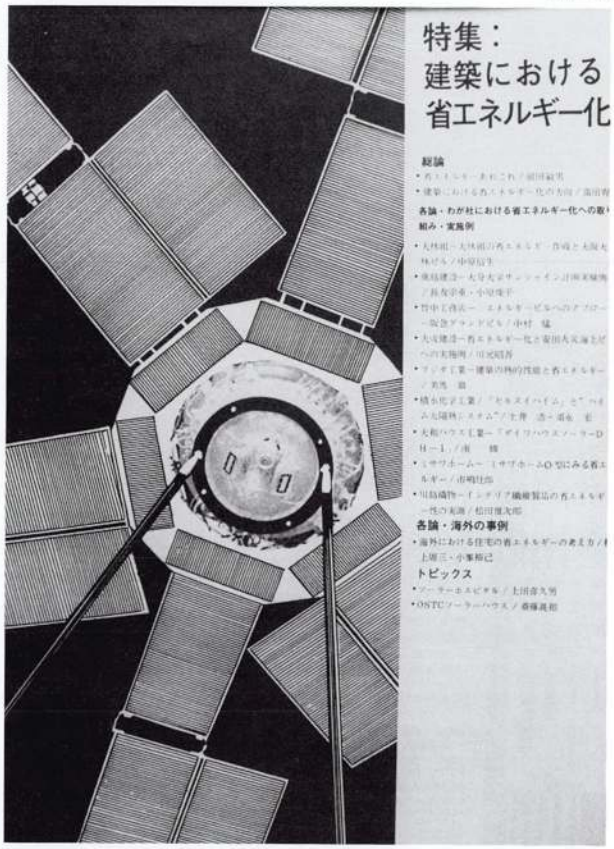
- はじめに
- 市街地複合化福祉施設へのモデルケース—神戸市立心身障害福祉センター
- 地域に根ざした総合リハビリテーションセンター—兵庫県玉津福祉センター
- 新しい施設機能の要請とそれに対応する空間設計—「松心園」大阪府立の自閉症児療育施設
- 生活の拠点としての住宅をバリヤーズ・フリーにする—身障者のための住宅計画のポイント
- 余暇生活のための屋外施設のテストケース—大阪府営大泉緑地・盲人コーナー
- 人間・福祉都市の足づくり—神戸市高速鉄道駅舎
- 身障者施設からバリヤーズ・フリー・スペースへ

1977—6

□省エネルギー

第二次オイルショック等を契機に、建築における省エネルギーのあり方が問われた。

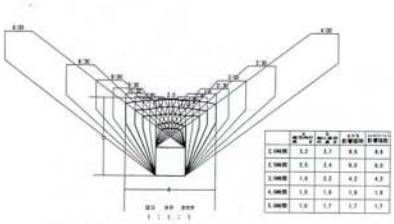
1977—11



□都市環境問題

日影や電波障害といった、都市における建築のあらたな生活環境へのあり方が問われることが多くなった。

1977—5



1978—5



予測平面図の例（H≒45メートル）

実際の障害範囲の例（H≒45メートル）

□ニュータウン

写真ルポ・その後の千里ニュータウン

●定着する生活



街びらきより10年近くを経た千里ニュータウンを、生活の様子から紹介している。

1977—3

□埋立地

1977—8



埋立地における高層建築—芦屋浜プロジェクト—

大阪ベイエリアは、新しい都市機能の受け皿としての開発がすすめられた。埋立地における高層建築に関する技術的成果が紹介された。

世相

1978（昭53）　成田空港開港
1979（昭54）　第二次石油ショック
1981（昭56）　神戸ポートアイランド博覧会（ポートピア'81）
　　新耐震設計法
1984（昭59）　グリコ・森永事件
1985（昭60）　国際科学技術博覧会（つくば）
　　日航ジャンボ機墜落
1986（昭51）　三原山大噴火

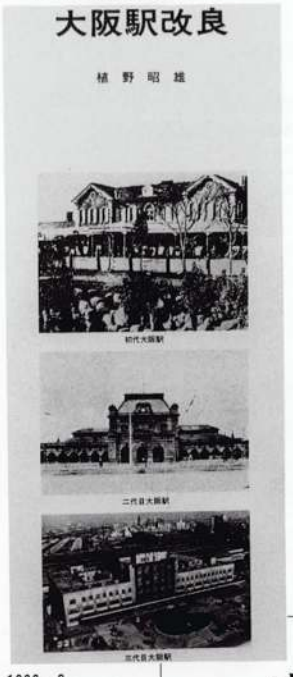
—オイルショックをのりこえて

□ポストモダン



1986—3

□大阪駅改良



1983—6

五代目となる大阪駅の誕生をめぐって、大阪駅をとりまく建築や都市環境がクローズアップされた。

福祉の建築とまちづくり

障害者の自立と参加を可能とするまちづくり、建物から、建築のバリアフリーデザインがすすめられ、1981年の国際障害者年を迎える。

その後、来るべき高齢社会へむけた生活環境への整備課題に関して、精力的に特集が企画されている。

□高齢化

特集

高齢化社会と生活空間

ここ数年来、にわかに21世紀社会に関するテーマがとりあげられるようになった。
未来を指向した華々しいプロジェクトが数多く紹介されている。
その反面、人口問題や資源問題等
将来の社会生活の中で解決してゆかねばならないテーマも多く指摘されている。
とりわけ我が国においては、戦後のベビーブームの世代、いわゆる"団塊の世代"が
社会の中軸戦力として活動する時代から中年、老年へと推移する中で
未曾有の高齢化社会が到来することがクローズアップされてきた。
老人、高齢者、お年寄り…いずれの表現をとるかはさておき
人口白書によると30年後には65歳以上の人口が約5人に1人の割合になるという。
これまでと様子が違うのは、
単に保護されるべきマイノリティ（少数派）としてどのような対策が講じられるのか
ということではなく、よりマジョリティ（多数派）に近い存在として
むしろ積極的にその存在を前提として
社会全体のシステムを考えていかねばならないという点であろう。
したがって高齢者階層の問題というより、それ以外の人口階層も含めて
いかに調和ある社会ができるかという問題であるともいえる。
高齢化社会から高齢社会へ、
着実に変化していく中で、建築と社会をとりまく諸問題としても
僕たちが考えていくべきテーマも生活空間とのかかわりで多く存在すると思われる。
このような背景の中で僕たちは、本特集の企画に臨んだ。
これから展開していく高齢化社会、さらに高齢社会に対する
僕たちの視座を整えるために、本号を位置付けたい。
したがって、本特集テーマは今回だけのものではなく、
これからの社会の情勢の変化に応じて、その都度
新たにシリーズの一環として設定されていくことを期待している。
本号が高齢化社会への問題を議論する際の参考になれば幸いである。

1984—9

□ポートピア'81

1981—2



神戸博ポートピア'81—地方博覧会ブームの先駆け—

ポートアイランドの完成を祝い、新しい海の文化都市をテーマに開催された神戸博ポートピア'81は大成功であった。ポートピア'81では「パンダ」が文字通り人寄せパンダになった。因みに、昭和25年の神戸博では、それが「象」であり、その跡地が動物園になっているのも何かの縁かもしれない。「神戸市株式会社」の異名をとった都市経営の手法としてのこの博覧会によるまちづくりはその後、全国の地方自治体に広まり、地方博覧会ブームを巻き起こした。

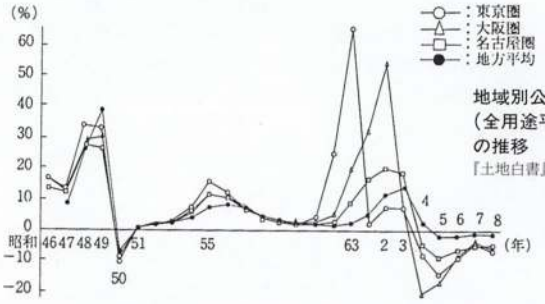
建築と社会の動き・特集・記事

1977 日本建築協会60周年・建築と社会660号発行記念／58集3号
日影規制と法／58集5号
身障者施設／58集6号
1978 CAD—設計とコンピュータ／59集9号
1980 設計のための新耐震設計法／61集12号
1981 ポートピア'81／62集3号
1983 マイコンの建築への利用／64集2号
1984 高齢化社会と生活空間／65集9号
1986 現代デザイン—ポストモダニズム10年／67集3号
インテリジェントビルの建築・設備設備計画／67集4号
CAD—その応用と展開／67集9号

過去から現在へ I「建築と社会」と時代の世相

1987~1996

□バブルの浮き沈み



地域別公示価格（全用途平均）変動率の推移
『土地白書』（平成8年版）より

“民活”が叫ばれる中、バブル景気と呼応しながら、東京・大阪などの大都市で地価が著しく高騰。地上げの横行、住宅地へのオフィスの侵食など様々な問題を生み、バブル崩壊後も大きな爪跡を残している。“バブル様式”とも呼べる建築遺産も残った。

□めざせ生活大国



経済大国への途をひたすら走り続けてきた“日本丸”が、ゆとりある生活を切に求め始めた。週休2日が定着し始め、バブルの追い風に乗ってリゾート開発も百花繚乱。安定時代の日常的生活大国の確立も重要である。

日本列島リゾート開発構想

1989—2

●都道府県の大規模リゾート開発構想（表A）と、民間活力導入型大規模リゾート開発計画をプロットしてみると、日本列島はリゾート列島と化する。新たな自然破壊の引き金とならないような計画が望まれる。

●リゾートの目玉施設はスポーツ関連が圧倒的に多く、なかでもゴルフ場（18件）とスキー場（17件）が群を抜いている（表B）。

●民間活力導入型の事業形態は、純民間が6割以上を占め（41件、61.2%）、第3セクター（23件、34.3%）、官民共同（3件、4.5%）と続く（予定を含む）。しかし純民間のものは、既存施設の名称を変更しただけのものも多い。

□関西復権に向けて

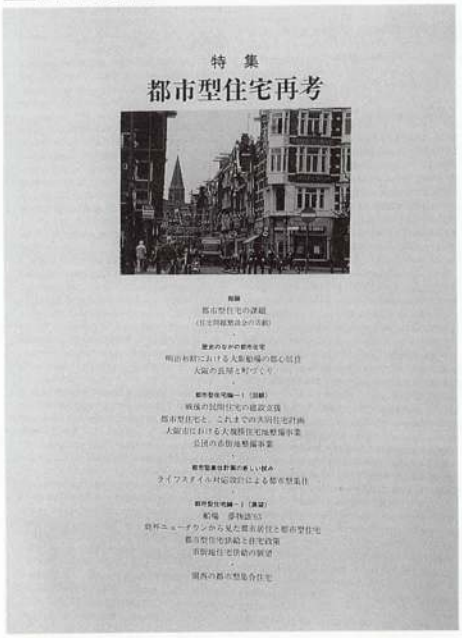
1994—12

タイガースの低迷に象徴される（?）関西の地盤沈下を何とかせねばの意気込み。花の万博、関西国際空港、関西文化学術研究都市、明石海峡大橋…etc。東京ドームに始まる“ドーム元年”から9年目にして大阪ドームも完成。オリックスに続くのは？

世相

1987（昭62）国鉄分割民営化
1988（昭63）バブル景気　青函トンネル・瀬戸大橋開通　東京ドーム完成
1989（平1）昭和から平成へ　消費税導入　ベルリンの壁崩壊　金融機関の土曜全休
1990（平2）国際花と緑の博覧会
1991（平3）雲仙普賢岳噴火　湾岸戦争　ソ連邦消滅　バブル崩壊　東京都庁が新宿移転
1992（平4）都市計画法改正（用途地域など）
1993（平5）細川連立政権誕生　Jリーグ開幕
1994（平6）関西国際空港開港
1995（平7）阪神・淡路大震災　地下鉄サリン事件
1996（平8）O-157猛威

□都市居住



1993—11



1988—9

バブルの嵐は、家々を郊外に吹き飛ばした。長距離通勤と引き換えに享受できる郊外環境。二者択一的な現実の中で、都市がいかなる魅力を提示できるかの正念場に差しかかっている。21世紀のライフスタイルを展望した真の都市居住・生活像の確立と場の提供が急務である。

□人にやさしい



1993—10



天に聳える摩天楼を見上げることに疲れた眼は、足元の凹凸の多さに気がつく。"福祉のまちづくり"は建築にとって必要不可欠の視点である。思う人に使ってもらえてこそ、建物冥利に尽きるというもの。

□地球にやさしい

宇宙船"地球号"は限りある存在であり、乗組員は人間だけではないことの意味性が改めて認識されてきた。大気・資源・生態系など、建築・まちづくりの与える影響を考えるべき事項は多岐にわたる。"地球環境"は21世紀へのパスポートである。



<エコマーク>
㈶日本環境協会が環境を汚染しないように配慮された商品を認定して付けるマーク。台所用品やスプレー製品、再生紙利用商品など

□阪神・淡路大震災

過去の出来事として語るべきものではない。今も続けられている復興はもちろんのこと、これまでの建築・まちづくりをもう一度見つめ直し、これまで提起されてきたテーマをより発展的・積極的に実践していくことが、建築技術者に与えられた使命であろう。



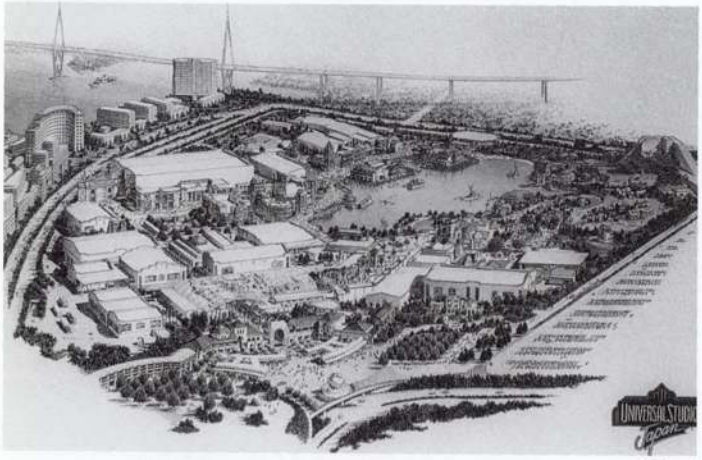
1996—1

建築と社会の動き・特集・記事

1987 創立70周年記念号／68集3号
1988 制振／69集8号
超高層住宅を考える／69集9号
1989 リゾート事情／70集2号
1990 ニュータウン・ルネサンス／71集2号
国際花と緑の博覧会／71集6号
1991 建築と土木／72集6号
建設現場のイメージアップ作戦／72集8号
1992 地球環境時代の建築／73集5号
1993 福祉のまちづくり／74集10号
都市型住宅再考／74集11号
1994 関西国際空港／75集12号
1996 阪神大震災から学ぶ／77集1号

1997～ ―近未来の建築と社会

□情報発信



1996―9

建築名称　ユニバーサル・スタジオ・ジャパン
計 画 地　大阪市此花区桜島
建 築 主　㈱USJ
設計監理　未定
施　　工　未定
敷地面積　約54ヘクタール
建築面積　未定
延床面積　未定
構造規模　S、など
主な用途　テーマパーク
集客性を高める装置内容　映画を題材としたアトラクション・ショー等
工　　期　1998年秋頃～2001年春予定

バブル経済期ほどの勢いはないとしても、大阪および近県において現在構想されている官民の建設プロジェクトの数は膨大である。
此花地区西部臨海地域では、2001年の完成をめざしてユニバーサルスタジオ・ジャパンが計画されている。圧倒的な集客力を持つこのテーマパークは、最先端の映像・音響や情報通信などの新しい都市型産業を育成する拠点として、この地域の中核をなすものである。
阪急ファイブは、梅田に計画されている物販・飲食店舗に加えて、イベントホール、アミューズメント施設を持った複合商業施設である。
これらを含めて、現在、計画・構想されている個々のプロジェクトのコンセプトは、「情報発信基地」「開かれた国際性」「自然との共生」「人と人の交流」など多様であり、またそれぞれに意味のあるところであろう。21世紀になってからこれらのコンセプトに対してどのような評価がなされるのか、また評価を与える社会がどの程度成熟しているのかをこの段階で予見することは難しい。この点については、本特集の第II部で詳しく取り上げられるところである。
さる3月1日に大阪の新しいシンボルともいえる大阪ドームがオープンした。ある程度予想されていたこととはいえ、はやくもドーム周辺路上の違法駐車が問題となっている。近未来の建築と社会を考える上で、開発という積極的行為を評価する際の反省的視点についても考えさせられる出来事といえよう。地球環境を考えた省エネルギーやリサイクル等の資源問題、巨大施設の出現に伴う周辺道路の渋滞などの環境問題、またそれを支える都市インフラの整備など、日本建築協会創立80周年を迎えた今、21世紀に向けて積み残された課題は少なくない。

世相／建築と社会の動き・特集・記事

●世相
1997（平9）ＪＲ東西線開通
1998（平10）明石海峡大橋完成
2001（平13）21世紀　2000年紀

●建築と社会の動き・特集・記事
1997（平9）協会創立80周年（3月30日）

□アミューズメント



1996―9

建築名称　阪急ファイブ
計 画 地　大阪市北区角田町
建 築 主　阪急不動産株式会社
設計監理　竹中工務店
施　　工　竹中工務店・大林組・森組建設共同企業体
敷地面積　5,542.14㎡
建築面積　4,942.75㎡
延床面積　52,611.00㎡
構造規模　S（一部RC）、B3F、10F、P1
主な用途　物販・飲食店舗、イベントホール、アミューズメント
集客性を高める装置内容　4人乗ゴンドラ52台、定員208名、周回所要時間約18分、頂部高さGL＋105.7m
工　　期　1996年7月～1998年秋(予定)

●本会名誉会員の方々にインタビューをして、本章の企画・編集をすすめました。ここに、インタビューした方々のお名前とインタビュー日時を記して、お礼申し上げます。
堀内　三郎氏（京都大学名誉教授・81歳）　1996年12月17日(火)
近藤　正志氏（村野、森建築事務所・81歳）　1997年1月23日(木)
高橋　慶夫氏（高橋上田設計事務所・88歳）　1997年1月31日(金)
岡橋作太郎氏（元・日建設計会長・90歳）　1997年2月11日(火)

●堀内三郎氏は昨年11月に自費出版で『私の八十年の記録』を刊行されました。誕生から傘寿に至る80年の、人々との交流と個人業績が記されています。この図書から、P18に、文章の一部を抜すいして使わせていただきました。

●本章企画編集
1917～1926　田中直人／吉村英祐
1927～1936　田中直人／吉村英祐
1937～1946　笹村欽也
1947～1956　倉渕奈千子／富田昌義
1957～1966　倉渕奈千子／富田昌義
1967～1976　吉村英祐
1977～1986　田中直人
1987～1996　梅村宏尚
1997～　渡邉秀俊

過去から現在へ I まちの風景80年

大阪のまちなみ、むかし



①通天閣



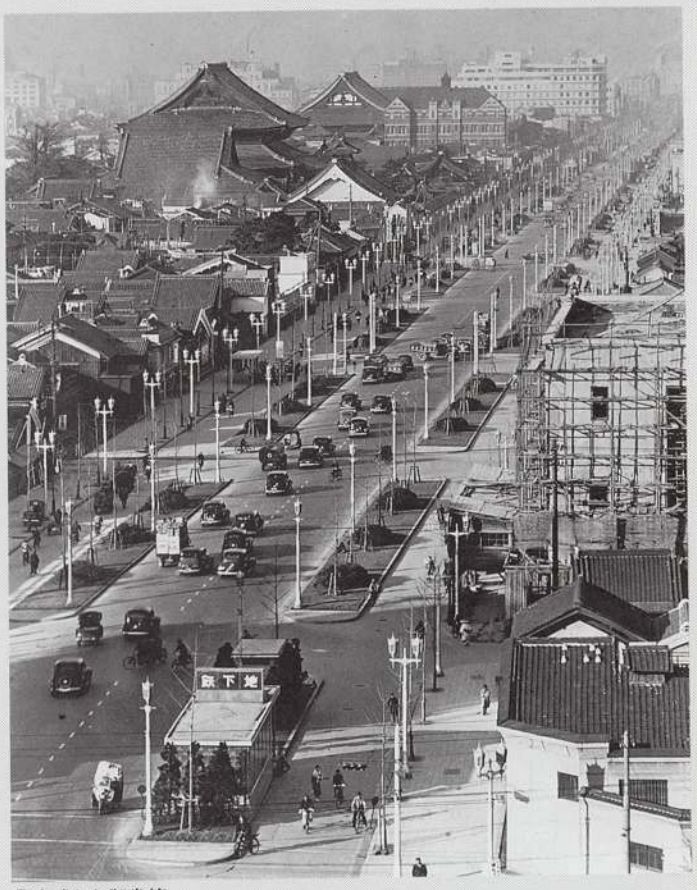
②心斎橋筋

大正

昭和初期



③道頓堀



④完成した御堂筋

①パリのエッフェル塔を模した新世界のシンボルタワーで高さ75m。展望台からは生駒・六甲までも眺望できたという。

②明治前期までは心斎橋北詰め以北が栄えたが、明治中頃から南へ繁栄の中心が移った。写真は大正初期の心斎橋筋。

③昭和13年の中座の入口近く。道行く男性はとんび（当時の男性用防寒コート）姿。

④阪急梅田駅前から南海難波駅前までの延長4,027m、幅員43.6mの御堂筋は、地下鉄開通4年後の昭和12年5月に完成した。4列のいちょう並木としゃれた街灯、グリーンベルトに区分された高速車道と緩速車道。写真は長堀通以北の景観。

大阪のまち、むかしといま



焼土と化した大阪市街地
昭和20年ごろ?



昭和63年当時の梅田新道。平成7年10月に地下街ディアモールがオープン。今年3月には地下にJR東西線が開通し、駅前再開発事業はひとまず完了した。

梅田新道界隈

昭和47年ごろの梅田新道。大阪駅前第2ビルの工事が始まっている。



昭和32年ごろの長居公園。競馬場(右)と競輪場(左)があるだけ。戦災復興資金捻出のために行われていた競馬は昭和34年に、競輪は昭和37年に廃止され、その後、公園として整備された。



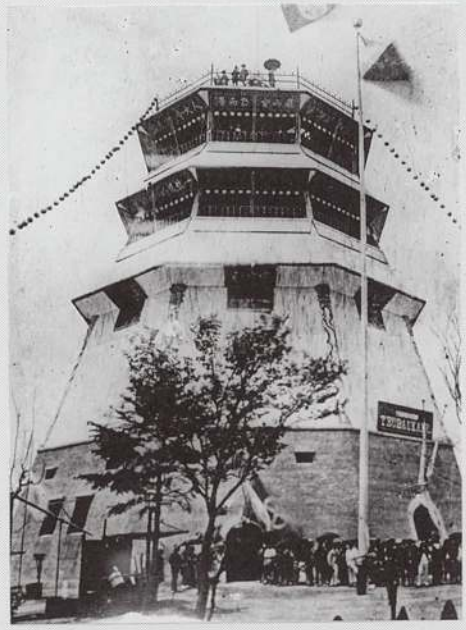


長居公園

平成8年の長居公園。前方白い屋根は、「なみはや国体」、さらに2002年のサッカーのワールドカップに向けて建設された長居陸上競技場。

むかしあった建物はいま…

明治、大正、昭和初期に竣工した建物の数々。そのほとんどは姿を消し、あるいは建て替えられている。
ここに掲げた6つの建物も、いまは人々の心の中にとどめられているだけだ。むかし、そこにあったことさえ知られていない建物もある。
明治時代は高い建物が珍しかった。明治21年、大阪の西成郡今宮村に完成した眺望閣は木造5階建てで、当時「5階」と呼ばれ、屋上の展望台からは市街地が一望に見渡せたという。ミナミのこの建物に対抗して、翌22年4月にはキタの北野茶屋町に木造9階建て・高さ130尺の娯楽センター凌雲閣が登場し、人々の目を驚かせた。



眺望閣



凌雲閣

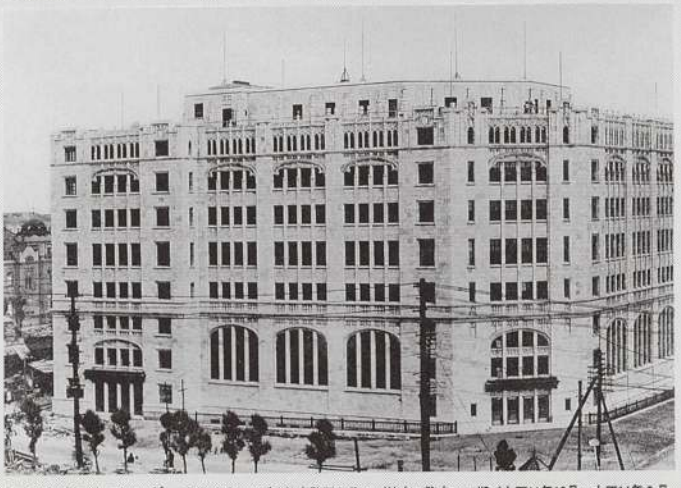


天王寺公園

ここに掲載した天王寺公園には、明治36年に茶臼山で開催された第5回内国勧業博覧会の名残の温室や美術館があり、木立ちの向こうに初代の通天閣が見えている。大正初期に撮影した写真と推測される。
大阪控訴院はそのレンガ造の姿を昭和44年に消し、いま大阪高等・地方・簡易裁判所としてSRC造・11階建てに建て替わっている。
大同生命ビルディングは、この外観イメージをまちなみの歴史と重ね合わせながら継承し、平成5年に同地に大同生命大阪本社ビルとして建て替わった。
大阪中央電信局は、昭和49年には大阪堂島電電ビルとして最高高さ120mの高層ビルに建て替わっている。



大阪控訴院　設計／司法省　施工／直営　建坪／1187坪813　延坪／3561坪　工期／明治43年8月～大正6年3月



大同生命ビルディング　設計／ヴォーリズ建築事務所　施工／竹中工務店　工期／大正11年10月～大正14年5月



大阪中央電信局　設計／逓信省　施工／大林組　工期／大正14年3月～昭和2年9月

社会の眼からみた建築

社会の眼

20世紀の面影

今井祝雄

造形作家・成安造形大学助教授

アートの立場から都市の景観や街づくりにかかわっている私だが、そうした視点から21世紀の街づくりについて思いを馳せるなら、そこでつくられる何かを夢想するまえに(これも夢想かもしれないが)まずは20世紀につくられた醜悪かつ不要な建造物を撤去することから始められなければならない。

それは経済効率を最優先させた今世紀のスクラップ・アンド・ビルドとは全く違う、ヒトと文化を主軸に据えた発想に基づくものであることはいうまでもないが、いっぽうで著名な建築、アノニマスな構築物にかかわらず、歴史的・文化的価値をもつものは、当初の使命を終えたあとも、単なる保存ではないリニューアルもしくはリサイクルによって、さらなる役割を与えることで、大切に使い続けていくことが必要だろう。

リニューアルといえば、かつて私自身所属し、解散して久しい具体美術協会の美術館を思い出す。大阪・中之島に江戸末期か明治初期に建てられた古い土蔵3棟を最小限にリニューアルした小美術館で、剝落した土壁に「GUTAI PINACOTHECA」の金文字が浮き上がる外観が印象的だった。

内部は黒ずんだ太い柱、梁、天井の木組みがそのまま存在感を放ち、垂直に貼られた半割り丸太の壁に架かる100号、200号ものカラフルな抽象画とのコントラストを鮮やかに記憶する人は少なくないだろう。同館は高度経済成長期の末期、都市計画によって取り壊され、そこにあった大作の多くは現在、各地の美術館に収蔵されている。

阪神・淡路大震災の前年に竣工したギャラリービル夢創館を、建



土蔵の美術館「グタイピナコテカ」



煉瓦塀と共存する「夢創館」　撮影／細川和昭

築家でない私がその構想設計に携わり、大正末期とおぼしき既存の煉瓦塀を新しい建物と共存させたのも、師・吉原治良による以上のグタイピナコテカが念頭にあったからかもしれない。

また、昨秋、俳人・永田耕衣の展覧会を観に真新しい姫路文学館を訪れた折、城郭が望める北館の裏手に、低く取り囲む古い煉瓦塀が残されていた。それは新旧の対比の妙をみせながら近代の名残をさりげなく彷彿とさせるものであった。

かつてのSF映画に出てきたような衛生的で無味無臭の未来建築ではなく、20世紀の良き面影を色濃く伝える歴史の厚みみたいなものが、来るべき未来都市の街づくりには求められるにちがいない。

(いまい　のりお)

社会の眼

小さなプラハのために

海野　弘

デザイン・美術評論家

私は19世紀の世紀末とはなにかを調べていて、ようやく、それぞれの国におけるちがいについて、いくらかわかりかけたと思っていたら、いつの間にか20世紀も世紀末になっていて、この世紀がなんだったかをはっきりとたどる前に、21世紀が来てしまいそうだ。したがって、とても未来にまで私の考えは及ばないのであるが、これまでに<世紀末>を調べてきた時に見出したいくつかのことを、未来への参考、未来への願いとしてあげておくことにしよう。

このところチェコのカレル・チャペックの本が読まれているそう

だ。しかし彼の、暗い時代をユーモアと静かな怒りで語ったエッセイは私も好きであるから、そのブームはとてもうれしい。

チャペックは1924年に「小さなプラハを支持する」という文章を書いている。これが気になったのは、このところハプスブルク帝国のバロックから世紀末にいたる歴史を調べていたからであった。世紀末からプラハの近代化がはじまり、古い街がどんどん壊され、アール・ヌーヴォからキュビスムにいたるモダン建築でプラハが変わってゆく。

その時にチャペックは、小さなプラハを支持するのである。そして彼はその理由が、過去へのノスタルジーではなく、むしろ、近代的都市計画の発想から、小さなプラハを望むのだ、としている。

世紀末を調べていて注目されるのは、ウィリアム・モリスなどのアーツ・アンド・クラフツ運動が、ヨーロッパからアメリカ、さらにはアジアにまで広がって、多数の芸術家村、芸術コロニー、陶芸や織物の工房といったものを生み出したことである。

これまでのモダン・アートの歴史ではあまり見えなかったが、それらの地方的なコロニーや工房は、地下水のように20世紀を流れつづけている。特にアメリカのカリフォルニアに広がったアーツ・アンド・クラフツ運動のコロニーは、60年代のヒッピーの運動などにも結びついている。

そのような、小さなコミュニティ(共同体)、芸術家村、コロニーの連鎖が20世紀をおおっている。互いに異なり、多様であるものがゆるやかに結ばれている。

21世紀がどうなるかはわからない。しかし私は新しい世紀に、それらの連鎖がのびていくことを望み、チャペックにならって<小さなプラハ>を支持するのである。 (うんの ひろし)

社会の眼

●

新たな批評の場を

江田修司

フリー編集者、住まいの図書館出版局参加

1970年代の建築シーンに関心を持っている。たぶんいま活躍している人の過半数にとっては、歴史というには生々しいし、なにを若いモンがと、善意でねつ造しかねないから、新しい目で見つめ直してもらいたい。いま語られるテーマも、たとえば雑誌特集の内容も、70年代にほぼ出つくしたパターンの、さらにヴァリエーションにすぎない。なにより、建築批評の存在(とは何か)と不在(とはどういうことか)、その境目も70年代にありそうな気がするから。

このところの通信技術の急速な発達と可能性にはワクワクするが、ネットに流れる建築関係情報も、文献検索以外は魅力を感じない。「情報」という言葉(これも70年代に顕著になる)の氾濫が、批評の影が、薄くなった遠因かもしれない。情報は批評の道具でしかないのに。それはメディア自身の責任でもあるが、新しいメディアにも、いまのところ先が読めない。しかし、これからの批評を担う新しい人々にとって、遺物となった70年代の建築シーンは情報の宝庫になるのではないかと、ひそかに思い描いている。 (えだ しゅうじ)

社会の眼

●

建築家の価値

栄久庵憲司

GKデザイン機構会長

私の家は昭和29年、東京は上石神井、京都の建築家・勝山俊一氏によって設計され、地元の請負師が建てた26坪あまりの平屋である。畑の中の瀟洒な白壁の一軒家。若い建築家たちの見学の的になっていた。

建ててから43年も経っているので、その間何度となく建て替えようと思った。だがそのたびに建て替えを思いとどめたのは、我が家は建築家の設計であって、大工ではないという自負だった。芸大の学生だった頃、戦後の近代建築の影響を強く受けていたので、あえて建築家に依頼したことに誇りを感じていた。デザイン運動を必要としていたデザイナーにとって、運動によってかち得た建築家の称号には、こよなく尊敬と憧れを感じていたのである。だから建築家の設計した建物のいのちがどれだけ続くかは、私にとっての職業的関心であり、建築家とデザイナーの心のかよう焦点でもあった。京



栄久庵氏自邸

都育ちでずっと年上の勝山さんからは、住む人の建築に対してのつき合い方を懇々と説いてもらったものだ。

新築後10年ばかりたった頃である。体の大きくなった弟妹のために増築を必要とした。空間の変化に多少心配したが、建築の基礎的アイディアは微動だにしなかった。中廊下というコアシステムを中心とした、公私にセクションを分けた半日本様式が建て増しを楽に可能にした。水まわりのディテールのチェック、壁、畳、障子、襖の張り替え、表情はまさに一新された。設備を替えたので、以前よりはるかに住みよくなった。勝山さんの建築はぐっと生きた。勝山さん自身が増築計画をやってくれたので当然かもしれないが、それにしても上手だった。

その後、弟妹は結婚して家を出、母も年をとり、家もどこか老朽化した感が否めなかった。戦後の建物、40年以上もたっている。デザインの専門家である私は建築の時代的変化を知らないわけではない。建て替えねば、そんな気持ちが頭をもたげる。だが思った。我が家の建築はまだまだ死ねない。

数年前、内部大改装に踏み切った。老齢家族向きの内部改装である。もちろん、建築の基本を変えずに装備をモデルチェンジした。立派に生き抜いた。勝山さんは世を去っていたので、私自身が手掛けた。新築とまごうばかりに再生したのは、勝山さんの建築が私からアイディアを誘い出してくれたからであろう。

今また、更なる老齢化用に設備を整え、居間を広げ、庭の奥に茶室を建てたいと思っている。私には確信がある。勝山さんの建築はますます強く生き続けるはずだ。

（えくあん　けんじ）

社会の眼

●

「場」の充実へ

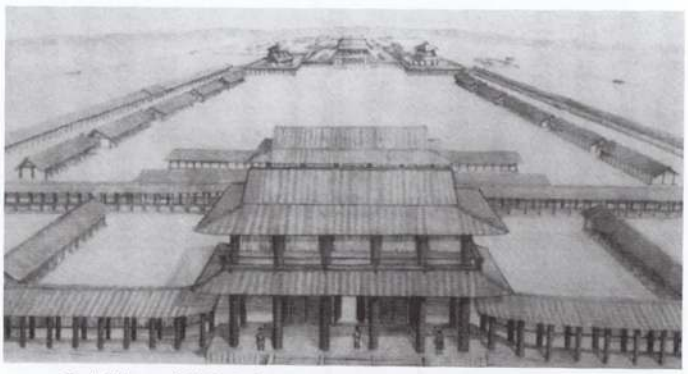
河内厚郎

評論家、文化プロデューサー

さら地を造成してハコをつくる時代は終わりつつあると思う。古い街並みを潰して次々と新しいビルを建てる再開発が、地域の活性化につながらぬ事例は山ほどある。せっかくの界隈性を奪ってしまうことも多い。インナーシティの活性化に求められている知恵は、その街の歴史性・界隈性を破壊せずに、付加価値を付け加えていく工夫であろう。神戸の南京街などは、旧来の街並みに少しずつ装飾的な意匠を施して再び名所となったのだから、戦前の三宮にあったボンベイタウン（インド人街）も復興してみてはどうだろう。そんなまちづくりのソフトを誘導するような建築物なら歓迎したい。

オールドタウンの高付加価値化は、欧米に先行例がたくさんあるが、だからといって欧米へ視察に行き、むこうのデザインを安易にそのまま日本に持ち込んでくるのでは、いっそう都市景観を混乱させることになる。

ＪＲ寺田町駅のあたりは、古代日本の国際交流拠点だったという難波宮の南大門があったところらしい。それなら南大門を想わせる駅舎にしてみるとか、工夫ができるだろう。四天王寺の景観とつなげてくれば、歴史都市のアーバンデザインが生まれてくるかもしれない。また、近代大阪の遺産である御堂筋を真ん中で切断して、せっかくの景観を壊しているのは、阪神高速道路と交差する本町の部分である。ここなど思いきって門（ゲート）の形をした建物にしてみてはどうか。



日本最初の本格的な宮都、難波宮の南大門（手前）―画・植木久一

河内厚郎編『大阪と海』（東方出版）より

「都」という核があれば、都城の周囲に商人が集まり「市」が形成されて「都市」になる。その都市から都が抜け落ちて「市」だけになってしまった例が多すぎる。いくら大阪が形式ばらぬ実質本位の町だからといって、形式が不要ということはない。都市という装置自体が人間の芸術品だ。三百年の歴史を誇る遊興の街、北新地も、せめて露面店の部分だけでも、もう少し日本的なデザインをとりこめないものだろうか。

「モノ」の量産から「場」の充実へと発想を転換して21世紀型の特産品をうみだすのが、文化資源や人材に恵まれた関西の役割であろう。それなのに大阪はせっかくの歴史を都市のＰＲに活かせていないし、神戸は海という景観資源を市民から遠ざけている。

今後は、「場」そのものの付加価値に着目させるような名建築が現れることを望む。

（かわうち　あつろう）

社会の眼

21世紀が来る前に

河村立司

漫画家

21世紀まで、わずかな月日しかない。その制約された期間に、業界に関係したひとたちは、物心両面にわたって反省に専念してもらいたい。もう、作業はそこそこにして、日向ぼっこでもしながら過ぎし日の功罪を、しかと検証してほしい。

日清、日露、そして第一次、第二次大戦で、戦争発起人たちは、どれほどの多くの庶民を犠牲にしてきたか。無垢な婦女子をも悲劇のどん底に突きおとした。そしてその罪業のすべてを『勝てば官軍』方式に処理して、すまし顔をしているではないか。

建築業界も、ミニ戦争の仕掛け人ではなかったか？庶民を泣かした事例は山積している。巨大なビル、優美な施設の陰で、どれだけの悪業を重ねたか。住民の苦情を丸めこむため、自治体当局、いわゆる悪徳弁護士、事件屋などなどとの狡滑な連携プレーを日常茶飯事のように推し進めたではないか。その推進力に政治屋が一枚加わって、すごい馬力を見せたではないか。私の友人にも建築業界の猛者が多いが、酒席でも、そんな事例はイヤというほど聞かされてきたし、しっかり取材させてもらい、漫画の紙面に活用している。

出来栄えのすばらしい建物を、いくら表彰したって、庶民にはなんの歓喜もない。むしろ、その建築の発起から完成までのプロセスが肝心なのである。目に見えぬが、「よくぞやった」という良心にもとらぬ施工パターン（物心とも）こそ表彰すべきである。

「日照権？ン？そんなもんはオテントサンに聞け！」とうそぶく現場責任者もいるではないか。「ワシなあー、こんな民事の仕事はしとうないんじゃ。ワシの得手は刑事関係でなあ、わけてもコレ関係が好きじゃ」と暗に㊋とのつながりをほのめかす弁護士が、苦情を持ち込む町内会代表の心を逆なでした例も多い。内容証明郵便を工事周辺の家々に送りつけて、何月何日に○○弁護士事務所へ来いと、まるで戦争中の召集令状もどきのヤリ方をしでかすとなれば、もしそのパターンが継続されるとなれば、建築業界にスマートな展望は開けないだろう。ビル余り、低劣住宅のひしめき、甘い見通しの埋め立て工事など、業界にのしかかる重荷は多い。どうか、21世紀を生きねばならぬ子や孫たちのために、業界の環境をスマートに明るくしてやってほしい。そして『仕事』を残しておいてやってほしい。いまの現役が蚕食し尽くすと、あとは「弱肉強食」の修羅場しか残らない。それでは暗い21世紀でしかなくなる。



夢物語——鉄やセメントに頼る工法をやめ、木造の長所を見直し、日本の山林の蘇生に建築業界の総力をあげてほしい。老人ホームなどを都心に建設し、商社などは周辺に持ってゆくべきだ。人工臭がプンプンにおう『自然環境づくり』は、いい加減ストップさせよう。

（かわむら　たつし）

社会の眼

建築家モーツアルトは天国で

北大路善之助

プロデューサー、21世紀スタジオ代表

モーツアルト—「キリストさん、お釈迦さん、天国の楽園は“愛”が生き生きと流れている“愛”の楽園にしたいんです！下界では人々にご両人とも“愛”を語り教えてられたから、いろいろなアドバイスをお願いしますヨ！」

キリストさん—「そうですネ、私の“愛”で多くの教会や建物が建造されたから、何か参考になるかも知れません」

お釈迦さん—「いつの時代でも“愛”が根本ですヨ！“愛”をいかに表現するか？それが一番大切です」

モーツアルト—「司馬遼太郎さんが菜の花とシャトーマルゴワインを持って登場！サアー何かご意見を！」

司馬さん—「イヤイヤ、私は楽園に菜の花畑とブドウ畑をつくり、このワインの女王を味わいたいだけですヨ！」

お釈迦さん—「それは素晴らしい。蓮（ハス）の花も池に咲かせ、インターネットの糸を下界に！」

秀吉さん—「楽園の建造は、私に！そしてお花見の風流茶会をしましょう！」

利休さん—「秀吉さんもヤット侘（ワビ）茶の心がワカリマシタナ！」

キリストさん—「そう！天国で心が純真になられ、悟られました。ところでロックフェラーさん、地球では21世紀中に石油がなくなるとか？」

ロックフェラーさん—「もうすぐ石油がなくなります。だから、より省資源リサイクル社会に大変革します。太陽エネルギーの時代

になります！」

エジソンさん―「下界のために太陽光ミラクル発電システムを発明中です。車、飛行機、パソコンも太陽エネルギーが主になります！」

モーツアルト―「天国の発電所は永遠に大丈夫ですヨ！“愛”の発電所ですから！さて今、楽園の上演オペラが創作出来ました。“太陽と天国の結婚”。楽しいオペラですヨ！私の設計した夢のオペラハウスで初演します！」



キリストさん―「天地創造のオペラですか？」

モーツアルト―「ソレハ秘密…！」

お釈迦さん―「そっと聞かせて下さい！」

モーツアルト―「ではチョットだけその大きな耳をコチラニ！」

キリストさん―「私にも！アレ！何か美しい音が？」

モーツアルト―「失礼！石焼きイモを食べたので！」

キリストさん―「サスガ、モーツアルトさんのはオナラまで音楽ですネ！」

お釈迦さん―「今、天国から雷さんがピカピカゴロゴロ下界へ走って行きましたネ」

司馬さん―「イヤ大変です！また大地震が。東京、大阪は震度８です！地獄になります！」

モーツアルト―「キリストさん、お釈迦さん、至急天使のボランティアを集めて下さい！救助隊をつくり早急に助けに行きましょう！楽園づくりは、下界の人々の命を、心を救ってからにしましょう！サアー天使さん飛んで行って下さい！“愛”の注射を忘れずに！」

キリストさん―「まだまだ下界の地震防災安全システムは不完全ですネ!!」

お釈迦さん―「人の命は地球より重いはずですがネ!!」

モーツアルト―「地上の亡くなった方々にレクエイムを…。」アーメン！南無阿弥陀！…。

（きたおおじ　ぜんのすけ）

社会の眼

「人の生活」をつくる

高橋恵子

㈱レモンバーム代表取締役

都市緑化を叫ばれて久しいですが、どうも建築の現場からは離れた所で叫ばれていて、現実をともなわなかった感があります。しかしここ３、４年の間でイングリッシュガーデンの流行があり、急にガーデニングが注目されてきました。今まで都市緑化を叫んでいた部門とはまったく違う、「家庭」からの動きです。だいたい「家庭」のような小さな単位での流行は一過性のもので、すぐ飽きられてしまう、というのが今までの園芸業界の常だったのですが、今回のブームは根強く衰える様子がまだありません。

思えば、今まで植物の流行はそれを本当に好きな人が広めたのでなく、「なんとなく今、植物の話をするとおしゃれだから」などの理由で、流行をつくる側の人がイメージのよさで広めたり、環境問題の一つで自然破壊や環境悪化を解決するための道具として注目したりで、植物そのものより植物が持っている機能や雰囲気に関心が集まっていました。それが、現在の流行は本当に植物が生活に必要で、共に暮らしたい、と考える人から動きが起こりました。つまり、ここに来て本当に生活に植物が無理なく入ってきたのです。だからこそ人々は飽きたりせず、“流行”ではなく“本物”になりました。植物と人との生活はやっとこれから始まりました。昔から自然をうまく生活にとり入れていた日本人は、戦後急激に経済成長したかわりにその知恵を捨ててしまいました。それをやっと拾い直して見つめ直す余裕ができたのでしょうか、どちらにしても建築関係者より一般生活者の方がよく知っている（と思われる）部門が生まれたのです。もう図面に“植栽”や“さつき列植”としか書いていないのでは恥ずかしいのです。ケヤキやミモザ、ハナミズキなどは知っててあたりまえ。どの木や草ならどんな雰囲気になり、その場所で生育可能か、などは数種類くらいは知ってほしいものです。これくらいは、たぶん“普通の生活”をしていればわかることですから。

植物のことに限らず建築関係者にいつも感じることは、「本当の生活者なのだろうか」ということです。ただ家と仕事場の往復をしているだけで、「人の生活」をわからぬまま建物をつくっているのではないのでしょうか。居ごこちがよい、とか住みやすい、などは生活に参加していなければわからないことです。大切な「人の生活」の場をつくり出す人たちよ、どうぞ、人のために生きた建物をつくってください。そして植物という命に向き合うには生活者の目線にならなければなりませんから、生きた建物をつくる入口になるでしょう。環境と建物は別のものでなく同時に考えていき、建物を建てることは人の生活をつくっている、ということを忘れずに。

（たかはし　けいこ）

社会の眼

生活美学の回復

疋田正博

㈱シィー・ディー・アイ代表取締役

東西冷戦が終結して、単一世界市場が形成され、一方で各国の相互依存が深まり、他方では国際分業と国際競争が高まるという環境のなかで、高コストの経済社会体制がなかなか改まらないし、ソフトへの投資も思い切ってやらない日本のような国は、21世紀前半経済成長はあまり期待できないというのが、おおかたの予測で、そんな予測はなまぬるい、へたをすると日本経済は衰退するだろうという不安も語られている。

ふりかえってみれば、日本企業がマンハッタンの不動産やハリウッドの映画会社を買収し、繁栄を謳歌した時期はなんと短かったことか。先端的な建築家はその短い繁栄期に、ふざけまくった建造物を日本各地におつくりになり、さぞや御満足のことと思う。それも文化であるに違いなく、成熟・爛熟し、様式を形成していくさまをしっかりと見とどけたかったが、経済環境の急変で大きな結晶体もできぬまま雲散霧消を余儀なくされ、きつい言い方になるが、本質的な贅沢やゆとりのなさを、外観の虚仮威(こけおどし)やアートと称する厚化粧でごまかしているのが今日の建築である。

これはひとり建築家の責任ではなく、本質的な贅沢やゆとりを知らないままに、表面的な格好良さや無理難題を建築家に要求してきた馬鹿な自治体首長や企業経営者の責任であるし、そういう人たちを代表として送り出している私たち日本人全体の責任であるし、日本文化全体の問題なのである。

建物や町並みの美意識は、机の上や家の中の暮らし方の美意識とシームレスにつながっている。「簡素の美」を旨とする床の間に、雉の剝製からゴルフのトロフィーまで所狭しと並べ、壁にいくつもカレンダーをぶらさげ、ダンボール箱をそのまま収納具として座敷に積み上げ、玄関だけ格好をつけている家庭景観と、先に述べた建物や町並みに本質的な贅沢やゆとりがないこととは、根は繋がっているのである。

安定成長が続き成金趣味の「飾り立ての美」意識が退潮する21世紀前半には、それを好機として地道に生活美学の回復に取り組んでみてはどうか。建物や町並みの美を形成するためには、迂遠のようであるが、それしかないのではなかろうか。（ひきた　まさひろ）

社会の眼

建築界に望みたいもの

諸岡博熊

UCCコーヒー博物館館長

建築物はアートであると声高に叫んでみると、誰も否定しない。たしかに、芸術作品といえる。外観は、まちなみの景観を形成し、内部は、安らぎの空間を演出する。人々に好感を持たれる色と形を備えていなければならないからだ。

最近、柔構造設計のおかげで、地震国日本のまちに巨大な高層ビルが林立しだした。これからのものは、世界の目からみると、二番煎じ、三番煎じといえば、設計者に叱られるだろうか。この社会に新しいものかも知れないが、なにか無機的でなじめない。

神戸が、地震で壊滅的なダメージを受けた。その結果、出現した建物は、復興を急いだためか、将来のまちづくりの指針となるようなものが見当たらない、といっても言い過ぎではなかろう。とりわけ、個人住宅が、新建材の使用で、どの建築も規格品の羅列である。まちなみの形成にはほど遠い。

震災直後、僕は提言した。「震災復興は、美しいまちづくりから。このチャンスを逃すな、美的規制をかけろ」と。しかし、美しい商店街を復興しようとか、美しいまちなみの復興を目印にしようと叫んだことは、黙殺された。日本一美しいまちづくりの夢は、潰れた。

これは、誰の責任だろうか。ひとつひとつの建築物には、それぞれの設計者の芸術的良心が込められているが、まちなみへの配慮は、一体どうなっているのだろうか。建築物はアートである以上、明日を暗示するもので、まちなみに溶け込み、美しさを永遠に保つものであって欲しい。とりわけ、最近は、ファサードが貧弱となってきた。1％運動もあるが、建築費の1％がどこに使用されたのか不明である。ファサードを飾る何かに使われたいものである。

生活科学に強い賢い消費者の時代から、いまや生活文化を楽しむ消費者の時代である。文化消費者の心の空腹に応える建築物を提供してほしい。人々を立ち止まらせ、何かを感じさせるものを。

人々の生活の中に自由な時間を創りだしたり、その自由時間を充実させたりする道具、場や機会を提供する文化産業が盛んである。建設業は、巨大な産業であるからこそ、文化産業であるとの認識を強く持ってもらいたい。（もろおか　ひろくま）

建築の眼からみた社会

建築の眼

建築をつくり出す人びと

相川三郎

京都国際建築技術専門学校長

建築をつくり出す人は、特定の少数の人、一般の人と異なった領域にある人と考えられてきた過去から脱却して、社会の諸現象を形として具現し、新しい時代の生活を創り出す集団のリーダーの役目を負った人という考え方が生まれつつある。希少価値のものでなくて、社会集団の真ん中にあって、新しい時代に向かっての推進力となるべき人びとでなくてはならない。あらゆる角度から建築に携わる人、建築の周辺にあって、温かくきびしい目をもって見守る人びとが、増大しつつある現在、建築をつくる人びとの独善と傲慢さは許されない。特に特定の領域から脱して集団の一員としての自覚が求められている。

建築をつくり出す機能は孤高なものではなく、あらゆるものを包含しピラミッド状に形成された機能集団であると考える。近年、建築をつくる人びとの数が増加し、その職能も多様化し、あらゆる階層に広がりつつある。そのことは、社会の底辺の拡大、いわゆる礎の強固さにつながり、建築が文化としての位置を確立するための大きな要素であることを力説したい。　（あいかわ　さぶろう）

建築の眼

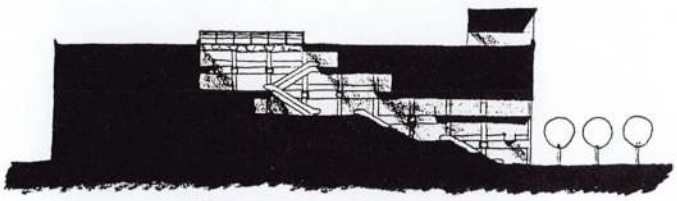
建築—夢の統合体

生井昌樹

阪急電鉄株式会社流通本部流通営業部調査役

社会に出て15年が過ぎた。

その間の会社生活のほとんどを、発注者の立場から建築生産の現場に携わってきた。「会社が事業を行う場としての建築をつくる」、これまでの自分の仕事をひとまずこう定義したい。建築に第一義的に求められるのは、事業を成功に導くための最良の手段であること、これは否定のしようがない。しかしながら建築は、生まれながらにして一企業の経営資源という枠組みを超えた社会性を有するものである。仕事の上で、それに異義が生じざるを得ない場合、自分の気持ちに何らかの折り合いをつける必要に迫られる。冒頭で建築生産という無機質な言葉で自分の仕事を表そうとしたのも、自分の仕事



I 計画—天空へ向け上昇する空間—

をつき放してみることで、少しでもこのような心持ちから楽になりたいという自己防衛本能が働いたためかもしれない。

そこで、自分の仕事と正面から向き合っていくためには、建築が時間を貫いて社会に存在していくことの意味を明らかにしたくなる。私はそこに「夢の統合体としての建築」の存在を見いだしたいと思う。建築を生産しているのではなく、さまざまな夢を紡ぎ出すシステムの創造に私は携わっている。そうであれば、その夢は誰のものであるのか。個人にも夢があるように、企業にも夢がある。願わくば、その夢が過去・現在・未来を通してあり続ける私たち社会と共有するものでありたい。

私は今、あの大震災の中で崩壊した駅の復興にかかわっている。商業施設と一体となったこの駅の再建に、さまざまな想いが巡る。かつての鉄道駅の華やぎ、四季の移ろいとともにある暮らしの機微、そして自らの再興を願う人たちの精気…そんな無形のことどもを情景として形にできたらと夢見ている。

自然の摂理の前に人間の非力を見せつけられたあの地震からの真の復興は、人間の特権である「夢見ること」をひとつひとつ積み重ねていくことからしか始まらないのではないだろうか。それが建築という営みに重なり合って行われていくことに、私は自分の夢を託したいと思う。それはまた「企業の社会性」を支える重要な営みに違いない。　（いくい　まさき）

建築の眼

心地良い場

石古　香

㈱石古建築設計事務所代表取締役

規模の大小、機能の別を問わず、請われれば引き受けて設計を行うというスタイルで、この四半世紀モノづくりをやってきました。建築が社会に何をなすべきか、何をコミュニケートできるか、と大上段に構えた物言いには、時には懐かしさを覚え、またある種の白々しさを感じる時もあるこの頃です。

でも、建築は社会の道具です。住む、働く、憩う、休む、楽しむ、

どんな建築にも役割があり、良くても悪くても存在し自己主張しています。ある人には心地良く、ある人には嫌悪感を与えながら。

2年前、神戸は地震の被害を受けました。私個人も例外ではなく、親の家－私が大学卒業まで暮らした家－は全壊し、全焼しました。この地区は下町で、木造とRCの建物が仲良く同居していました。それこそ微妙なバランスを保って。その中に、やや不自然なビル－私が建築に進む前の中学時代に建築され、当時建築にはまったく門外漢の私が、何かおかしい、間違っていると感じたビル（事実、法律上・構造上の欠陥等々幾多の問題に加え、地区住民からの反対等があったと聞きます）－があり、これが倒壊、炎上したことにより百数十m四方が延焼、焼野と化しました。

法律、構造の話ではありません。感性、感覚の話です。人間の五感は、良いものは良いと感じるし、個でも全体でもバランスのとれたものは心地良く、違和感なく受け取れるものだと言いたいのです。浮き上がって違和感のある存在、気持ちの悪い存在が、たまたま大自然の営みにより悪の主役を務めたわけですが、人の生活が都市化すればするほど、個々の構成要素の相互作用が問題となります。心地良いか、気持ち悪いかも倍加されます。

人は、自然から身を守る生存のためのシェルターとして建築をつくり、また偶像化のシンボルとして宗教建築をつくってきました。今日では、自分たちが主人公、自分たちの日々のドラマが楽しめる、生きていることを最大限楽しむための舞台を提供する装置としてつくっています。今は何をつくっても許される時代、何をつくっても満足しない時代。そんな中で、建築は人の生活の脇にあって、住む人が心地良く、使う人が心地良く、ひいては街・社会が心地良くなる場をさりげなく用意する。言わば、、気の効いた助演者たらん。

（いしこ　かおる）

建築の眼

国土の保全に科学的手法を

越智隆晴

建築総合研究所所長

ロシアのタンカー・ナホトカの重油流出事故による重油塊群・重油膜の漂着した海岸で、一隻の舟艇の高いデッキから海面へ小さいひしゃくを差し延べて油の回収をしている風景がテレビに出ていたが、それはいかにももどかしく、あたかも子供の金魚すくいを彷彿とさせるような光景であった。

さきの太平洋戦争の航空爆撃発進基地の構築・被爆走路の修復などの施工速度の比較において、彼の「ブルドーザ・ショベル系の大型建設機械」、対する我の「手掘り式ショベルとツルハシ」と論及したことがあるが、今次の油の回収における「ひしゃくとバケツ」は先の「ショベルとツルハシ」のことを思い出させる。

「週刊朝日」（通巻4181号）の次の指摘が強く印象に残る。『国際的に見ても、油流出事故が頻繁に起きている欧米では、油除去作業の主流となっている方法が周知の事実であるのに、なぜ日本の油回収システムは遅れているのか。世界の常識に目をつぶり続けてきたからではないか』。政府の態勢の不十分さについては、『2年前の阪神大震災でも政府は十分、危機管理態勢の貧しさを反省してきたはずなのだ』。

国土保全の見地から、危機管理態勢の速やかな確立が望まれる。

（おち　たかはる）

建築の眼

垣根をこえて

大野拓也

大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻

社会というものは、個人の集まりである。しかし、今まではその社会を考える際に、人々の個性は見えていなかった。あるいは、重要視されてこなかったのではないだろうか。これについては、建築の業界においても同じことが言えるだろう。それが最近変わってきた。例えば、「私はこんなまちに住みたい」と言うことがとても大切であること、そして活動を起こすことにより、まちに何らかの変化が起こることを人々は理解し始めてきた。

今後は、専門外だから口を出せない、肩身が狭いという状況はさらに崩れるだろう。逆に、専門を知らないからこそ生まれる新しい率直な意見をくみ取る活動が、もっと活発になる。専門家は、気取って難解な言葉を使うことよりも、簡単な言葉でいかにわかりやすく説明できるかという能力を求められる時代になるだろう。高度な知識を盾にしても、何も生まれない。技術屋も同じである。何のための技術かを考え、立ち止まる時間も大切である。

個人個人の純粋な希望と柔軟性を持った専門知識がとけあって、これからの豊かな社会をつくりあげていくのではないだろうか。

（おおの　たくや）

建築の眼
●
鏡+卵

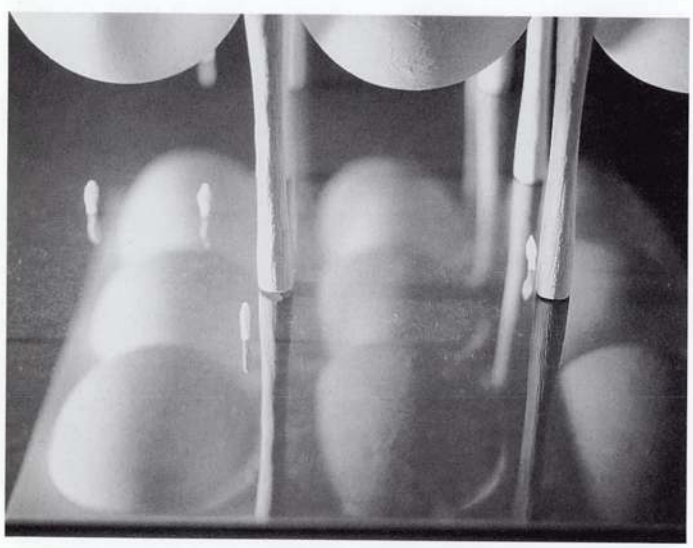
狩野忠正
狩野忠正研究所代表

歴史とは、その時代にいる人には時代を理解することはできない。過ぎ去ったときはじめて、その時代を理解することになる。現代人にとって、現代の部分的なことはわかっても全体像はつかみにくい。それは近代建築にあっても同じである。近代はもう終わったといっても、また近代はまだ続いているといっても、なかなか正解はみつからない。

近代建築の理解は、卵という空間概念—床・壁・天井をなくしてしまったもの—を見ているようなものである。
た卵を見ているといった方が正当である。また、人間の目というレンズを通してみているので、さらに複雑となる。本当の姿は定かではない。しかし近代は、複雑を許容しうるところから建築を考えざるをえない。複雑を肯定するとき、卵は時代の存在意義をもってくる。空間の領域とされる床・壁・天井をできるだけなくすことによって、新たなものを見つけだそうとすることである。

歴史をふりかえってみると、いつの時代も、意外な行為から空間を発見しているのである。そこには、最後に、たよりとする皮膚感覚でとらえようとする姿勢がある。その姿勢はいつの時代も変わらない。

（かのう　ただまさ）



建築の眼
●
「人の営み」と「場」の関係

久保清一
大阪芸術大学助教授、アルキーピ総合計画事務所代表

建築が社会と密接な関係にあるのは当然のことだが、必ずしも人々の生活を形成する上で市民的立場を保持してきたかというと、それは時代によって決してそうとは言い切れないであろう。むしろ社会との隔絶のなかに自立した建築の崇高性を発見したり、美しくも危険な香りを発散する建築に魅了されたりすることが、反社会的な思想と関係する場合がないとは言えない。いや反社会的だからこそ美しいと思えることさえある。明確な目的と特徴ある機能によって時代の支持を集めた建物であっても、変化のなかで次第に放置され取り壊されるものが何と多いことか。時を超えてなお人の心を奪う建築をつくりたいと思うのは、建築家であれば誰しも皆同じわけだが、現実は、建築が背負う複雑な運命によって、我々の手の届かない道程をひとり歩きしていく。ただ後ろ姿を見守ることしかできなかったのが、今までの時代のようにも思える。

しかし形式に埋没した不自由な時代、さらには無責任に自由を安売りした時代も夢幻のごとく終幕したのではなかろうか。

建築は、今ようやく長い氷河期を抜け、身近にその姿を現してきたように思える。これまでの建築の姿は、どちらかと言えばまず器（箱）を形成する様式が先にあって、後から人が当て嵌められてきたように思う。器としての建物には、あらかじめメッセージが設定されていて、それがある類型の中で操作され表出する。選択された「類型」—「タイプ」によってメッセージの内容が判別され、「操作」によってその建物のメッセージの強度が決定する。こういった特徴は、建築の歴史上、何度も反復され、近代以降のモダニズム建築にあっても同様の経緯が示される。建築が成立する場面、いわゆる「人の営み」と「場」の関係によって創出される仕組みがあまり見えてこなかった。したがって明解なコンセプトが成立していても、建物というハードに表明した場面では建築の成立が見えにくかった。

高度情報化時代に突入している今、そして将来を予測するに当たって最後に行き着く問題は、この「人の営み」と「場」の関係から導かれるより身近な感動の仕組みをどこまで掘り下げることができるか、そしてそのことがどれほど建築にとって重要なことと認識できるかが、ひいては今後の建築とそれを取り巻く人間社会との関係の発展の大きな影響を及ぼすことになる。

（くぼ　せいいち）

建築の眼

建築と時代の流れ

小西　岬

㈱小西設計代表取締役会長、㈳大阪府建築士会名誉会長

建築は、時代の流れに流される。

戦後の1945年代、我が国は窮乏と食料・物資の不足時代であった。食糧増産・第一次産業の復興時代へ入り、物の多量生産へと突入した。戦災を受けた建物の復興が始まったが、金融機関の建物等でも木造２階建が多く、鉄が不足で、工場復興には戦争中の軍需工場の鉄骨建家を解体し、改造・補強して移設する場合が多かった。

建設資材が出廻り出した1952年にはカラーテレビが放映され、その頃を境に戦争の打撃から立ち上がり、本格的な復興が始まった。しかし建物は機能本位で、必要最小限のスペース・使用資材の節約・無駄をなくし、ゆとりは全く認められなかった。

1970年頃より国民の間に文化生活の追求が始まり、家庭用電化製品の電気洗濯機、炊飯器、掃除機等が憧れの的となり、物が出廻って、ようやく物不足の時代から抜け出した。黒川紀章氏が外部と建物との間にパーゴラを設け樹木を配して、建物へ入る前に人の気分の転換を図ることを打ち出した頃より、国民に心のゆとりを求める声が出始め、当時の大阪市長が「街に緑を」を唱え、急速に公園・街路樹の整備が進み、住居の前に花を植え植木鉢が並び出した。

1980年代に入り国民は美しい街に心を引かれ、水辺を楽しみ、古建築に魅力を感じる。全国に先駆け、大阪府、大阪市、大阪府建築士会では「大阪まちなみ賞」を制定し、全国の都市で相次いで同じようなイベントが開始された。建築の設計に携わる者は街並みとの調和、人への優しさ、建物のゆとりを配慮するに至り、建材の進歩と相俟って、街の美化は飛躍的に進み、建物のみではなく街路樹・歩道・看板等の美化も目を見はるものがあり、文化生活の向上は一段とはずみを加えて現在に至っている。

21世紀を目前に控え、国民的文化生活をエンジョイしているが、今後さらに心の満足・生き甲斐を求めるであろう。健康な心身で生活を楽しみ、経済的・精神的ゆとりを持ち、趣味や創作に生きる生活を送るために必要な建物を求め続けると考えられる。

ところが、我が国の建設業界は国際競争力が弱まり、景気に暗い影を落としている。その改善には、建設に携わる者の能率を向上し、教育・研修を徹底して能率向上に資し、国際競争力に強い日本の建設業界をつくる必要がある。　（こにし　みさき）

建築の眼

「つくる」変革

小林弘昌

㈱フジタ建築本部新生産システム開発室室長

建築をつくるうちの、「運ぶ」ことをテーマとする職場にいる。

建築生産というのは、計画した場所へ資材や部品材を運んで、必要な空間をつくる行為であるから、建設のあるところには必ず付属する業務である。商品の流通単位である、キログラムや百グラム単位で換算すると、建物というのは、何と比較しても、ずいぶん安価な商品で、安物を運んでいることに愕然とするが、総量はあるから、ＧＤＰに占めるシェアが格別目立つ業界であることは、周知のとおりである。うちの約３割の仕事に相当するところが対象である。この部分はどちらかといえば、単調で苦渋なものである。

ハンドリングの効率追求こそが、生産コスト削減の基本であるから、いつの時代でも、必須の課題として、取り組んできた。ここにきて、性能のよい電子部品があふれだした。日常身近なものになり、あらゆる部位に取り込まれて、情報のやりとりが早くなってきた。どこにいても臨場の雰囲気を呼び出すことができるし、作業や技能は、論理回路にのせてしまって、いわばソフトが「運び」を実行してくれる。人に変わる部分を、機器、ロボットが分担して実行する。生産方法が変わり、苦渋部分をとりのぞいて、時代にふさわしい「運び」が、可能になってきたのである。

いくつかの試みが、すでに実行されている。自動的に組みあがる生産ライン、多くの生産工場でおこなわれているスタイルが実現しつつある。ほとんど無人で、あるいは、遠隔操作でも生産できる形がみえてきた。能力はまだ人に劣るが、これには技術の進歩が期待できる。管理の技術も、変革を求められる。インターネットで、世界中の必要情報を探しながら、一方では、次の生産のソフトをつくりかえている。

資質と意欲さえあれば、この複雑系の中にあっても、昔の大建築家がこなした範囲の仕事を、人を介さなくて実現できる姿が見え隠れする。このような「運ぶ」現場のイメージが近い。成果を享受できる、次世代の進攻を切に望んでいる。　（こばやし　ひろまさ）

建築の眼
●
建築とは何か

小山貴寛
大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻

土地が一つの資産として過大な力を持つようになって以来、上ものとしての建築は、経済的指標の中でのみその価値を測られるようになったといってもよい。しかし、地球環境問題や資源枯渇が取りざたされる現在及び未来の社会において、単に経済的価値にのみその（深層での）存在意義を見出し、いたずらに創造と破壊を繰り返していくわけには、もはやいかない。

現在行われている創造行為が、後々の社会でどのような評価を受けることになるか誰もわからない。「友よ、答えは風の中にのみある」という無責任なことを、どこかの誰かがいったかどうか知りうるところでもない。しかし一ついえることは、建築やその他の広義での環境は社会的存在であり、一部の人間のためのキャンバスではないということである。

私が、建築や環境デザインを志した動機は、子供じみた単純明快なものである。幼い頃から現在まで、公団の２K住宅にしか住んだことのない私は、新聞の折り込み広告を見ては「ここがボクの部屋！」などと言っては喜んでいたが、一向に引っ越しなどする気配のない我が家庭をみて、「ほな、自分でつくったろか」と思うようになり、現在に至っている。そのような私にとって、建築とは自己表現の場というよりは生活の場であり、最も優先されるべきことは、周辺環境も含めた総体としての建築が、より自らの生活体験を愉快なものにしてくれることなのである。はなはだ初歩的かつ幼稚な命題ではあろうが、突き詰めるとこのようになる。

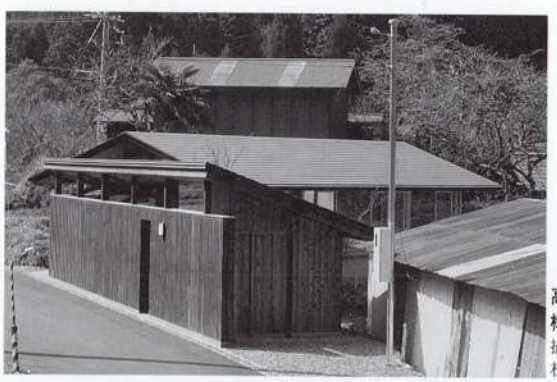
建築、というよりそれらの群としての環境は、多様な要素が長い年月をかけて、ある一つのまとまりをなしたものである。「誰が、いかにしてか」、それが問題なのではない。未来に伝えていくべきもの（時にそれは地域の文脈や風土、もしくは地域性と言い表されることもあるが）、それらの具象表現として建築は存在しなければならない。「誰がために、何を、いかにしてか」が、最も重要である。

（こやま　たかひろ）

建築の眼
●
風景をつたえる建築

高砂正弘
建築家

最近、ヨーロッパを中心としたデザインの緩やかな変化に注目している。今世紀初め、コルビジュエやミースなどが提唱した華やかな近代建築の根底を静かに流れてきたミニマルと呼ばれる建築が、徐々に拡がりつつあるのを感じる。ピーター・ズントーやジョン・ポーソンの作品に代表されるこれらの建築は、多くの人が持っている過去の経験から共通認識としてふさわしい心象風景を導き、それを素材が感じられる簡潔な素形に置き換えて設計しようとする試みである。すなわち建築を見ることは素形を見ることであり、素形こそが本質的なものであるという考えから、普遍的経験を素形へと簡素化してゆく。それによって、この建築に接するすべての人が自らの経験を建築に重ね合わせて心象風景を描き、自らの建築としてこれを認識するであろうことを意図している。



高槻市出灰農業構造改善センター
撮影
松村芳治

建築の社会に対するメッセージは、簡素な素材と自然の仕組みに沿った建築を介して、その場の風景に自らの経験を認識させることではないかと考えている。しかし簡素な素材は、扱い方によっては貧困なものになってしまう。洗練されたプロポーションと抑制の効いたディテール、そして丁寧な仕事があってはじめて素材の持ち味が引き出され、素晴らしい効果を生みだす。

あるがままに育まれた建築がどれほど素晴らしく、それをあるがままの状態に保っておくことがどれほど大切か、もう一度考え直す時がきている。素材そのものがゆっくりと古びても、価値や機能を損なわない構成とディテールが、時をこえた美しい建築をつくり、その建築がつくりだす風景が、後の人たちの普遍的経験として受け継がれていくことを願っている。

（たかさご　まさひろ）

建築の眼

自然の浄化能力を借りたまちづくりを!!

竹本俊平

住宅・都市整備公団関西支社管理部次長

職場の窓から外の風景に眼を転じると、事務所・住宅・電柱・防犯灯・道路標識・高速道路の柱脚・看板・街路樹が次々と眼に飛び込んできた。街路樹を除くその他のモノは、いずれも建築物や工作物の範畴(はんちゅう)に入るモノであり、いずれもが、まちの構成要素の主だったモノである。それらは、大方のまちなかで、そうであるように、自らが果たしている機能そのものを独自に主張した形で、そこに存在しており、その主張があからさまであるがゆえに、まちの景観はバラバラになっている。住宅しかり、高速道路の柱脚しかり、看板しかり…建築物でなくて、本来、自然物であるべき街路樹さえも、毎年の強度の剪定によって半ば工作物になり下がっている。

建築物を中層化、高層化することが難しかった時代には、建築物は周辺の景色と一体になり、「景観」という視点は必要なかったと思う。むしろ「安全」や「衛生」という視点での建物づくり、まちづくりが主流だった。工作技術が進むにつれ、建築物を大きく、高くすることが可能になったが、不幸にも日本では、その技術の時代は機能優先の時代でもあった。そして今日、機能優先・自己主張した建築物が、まちを占拠してしまっている。

土地がお金にとって替わっていた「土地本位制度」の終えんを迎えたこれからは、自然の価値がお金に換算される「自然本位制」の時代になってほしい。「自然にやさしい」とか「環境共生」という言葉が流行りつつあるのは、その萌芽かもしれない。身近な経験からみても、建築パースに樹木を描き込むや否や、建物が、生き生きと美しく見え出し、存在感を現すことを知っている。それほど、自然の樹木は人工物を浄化する力を持つ。

自然に囲まれた中であれば、建築物が自己主張することを許してやろう。グローバルな「まちの景観形成」に向けて、自然の助けを借りた建築計画を推進していくことが大事だ。



「公団団地建替事業での自然の力を借りたプロジェクト」より

(たけもと　しゅんぺい)

建築の眼

心身機能の恢復をめざす空間

知花弘吉

近畿大学理工学部建築学科講師

都市空間や建築空間は便利さや快適さ優先の構築がなされ、その目的は少なからず達成されている。駅にはエスカレータなどが設置され、公共、商業建築は言うに及ばず住居にも冷暖房が完備して、便利に、快適に生活ができるようになっている。また、ほしいと思うものはお金さえあれば何でも、いつでも、どこででも入手できる。将来に向かってもこの延長線上で展開していっていいのだろうか。便利性、快適性とひきかえに人間の本来持っていた機能が退化し、心もそこなわれていくのではないだろうか。人間の生活で最も基本となる、歩く・つくる・共に生きることの観点から、失われつつある人間の心と体の機能恢復について考えてみようと思う。

まず、歩くことについては、エレーベータなど機械的装置によって健常者もこれらに依存しがちである。都市や建築空間においては、昇降が楽しくなるような、ゆったりとした魅力的な階段を中心に据え、それを補佐する形で機械的装置を設置することが望ましい。

次に、自動販売機では飲み物をはじめいろいろな品物が買え、スーパーマーケット、百貨店などではできあいの食事が買える。このことは炊事機能を欠いた住宅出現の可能性を示唆し、生きるために最低限必要な食事を作る日常的機能が低下する。このような住宅で暮らすことは、人間性を喪失することになるのではないだろうか。

さらに、ワンルームやシルバーのマンションなるものが流行っている。気楽に誰にも迷惑をかけずに過ごせることも大切なことである。しかし、特に若い人たちがひとりでいることは他者を理解する機会を失いがちになる。そのため知らず知らずのうちに自己中心的になっていく。同じ境遇の人たちが特定の建物や地域に集まって住むのではなく、さまざまな家族や人たちが混合して住める多様な出会いのある建物や地域が望ましい。

目先の便利さからの合理性のみを追い求め、無駄やわずらわしさを切り捨てている現代都市や建築を見直す必要があろう。そして、非合理性にも着眼し、両者の接点を探りつつ、真に合理的な設計を推進していくことが大切である。失われつつある人間機能の恢復を、病院やリハビリ施設のみならず、建築物や都市空間にも組み込み、日常生活の中で自然に人間性を恢復させうる空間設計がより重要であることを、社会に訴えていかねばならないだろう。(ちばな　こうきち)

建築の眼

建築と自然・文化・生活環境

中島　一

彦根市長、愛知工業大学名誉教授、中国・湘潭大学名誉教授

まち（都市）を観ることは、心躍るたのしい経験です。そのまちの建築の与えてくれる感動は、他のどのような芸術の観賞にも劣りません。

永い歴史に育まれた美しく息づくまちの佇まいには、人びとの心をときめかす旅情があります。そこには数かずの栄光と悲哀を秘め、幾多の歴史と人びとの生活との絶え間ない調べは『交響詩』のようです。

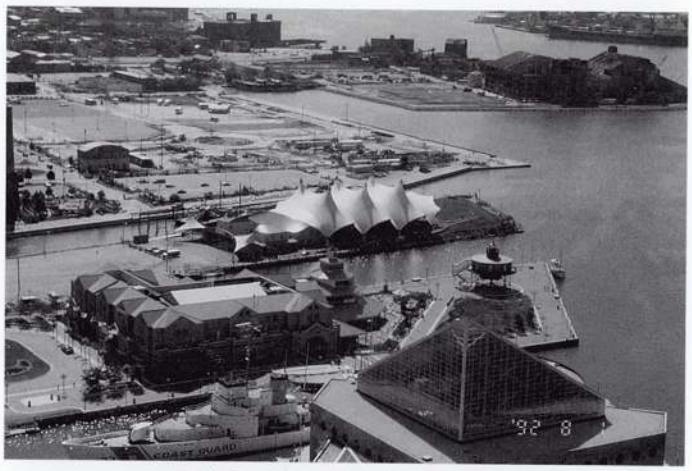
ところで、わが国の歴史にとって、明治100年は、他のどのような時代にも代えることのできない100年間でした。この100年間、わが国は欧米諸国に「追いつき追いこせ」の合い言葉のもとに、遮二無二頑張ってきました。そして世界に伍することになったことは事実です。そこで得たものに、実に大きいものがありますが、その間に失われたものもまた多いのです。この失われたものの一つとして、私はまちの個性をあげたいと思います。日本中のどのまちも一様化され、東京の亜流と化していきました。そこには生活の近代化に伴う大きな進歩もありましたが、必ずしも必要でない意味のない模倣も多く含まれています。

都市における個性は、その土地をめぐる自然と、そのうちで生活してきた人間によって形成された歴史的所産です。

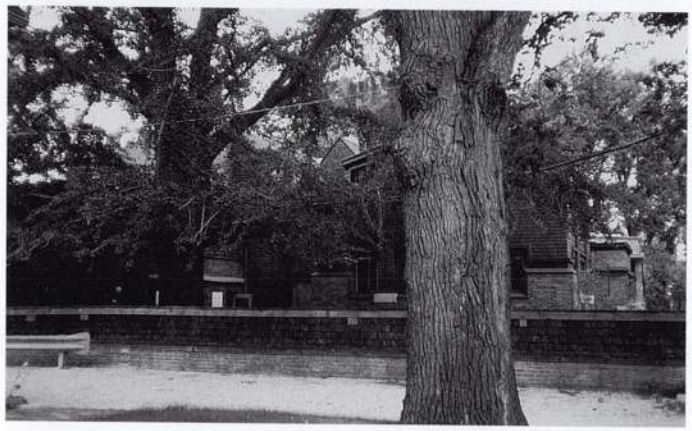
建築の設計図を読んでいると、あきることがありません。とくに住宅の設計図はたのしいものです。この空間の中でどんな家族が、どのような生活が行われるのだろうか、その家族像を手にとるように描きだすには、さほど時間はかかりませんし、容易です。その家族の一人ひとりが、彼らの生活を大切にし、個人の住まい方に、ある種の工夫をこらしながらも、なおかつ、家族という極小な社会域での生活を享楽する場を求めようと、ごく自然に同化されるありさまが、私の脳裏を埋めてしまうのです。

しかし、やがてこの住み手である家族の一人ひとりは自分の欲求を完全に表現された空間であるとは思わなくなるのも事実でしょうし、建築家は、ある意味において、家族の欲望を完全に表現することができないもどかしさを感じているに違いないでしょう。

ルイス・I・カーンは彼の論文“構造と形”の中で、次のように述べています。



アメリカ　ボルチモアのウォーターフロント



アメリカ　フランク・ロイド・ライト設計の住宅が多く建つウォークパーク

物理的自然は測り得るものです。感情と夢は尺度を持たず、言葉もなく、またすべての人の夢は１回限りです。人はいつでも、彼のつくる物よりも大きい存在です。

と。確かに、私どもの生活の中で、建築は常に知らず知らずのうちに何らかの形で働きかけ、働きかけられています。

従来『建築』の考え方は、個としての『建築』に中心をおき、その中での生活要求充足の場として考えられてきました。しかし、建築を通しての行為は、自然・文化・生活環境との密接なかかわりをもつ現実を認識するならば、これらを含めた『建築』をとりあげて研究し、追求しなければならないことはいうまでもありません。

（なかじま　はじむ）

建築の眼

切り刻むこと

中山　諭

大阪大学大学院

建築は可哀相だと思うことがある。運命的な不幸を背負って生まれてくる創造行為の産物はほかにもいろいろあるけれど、特に建築は不憫に思えてならない。

建築は社会と密接すぎる間柄で、建築がこういうものをつくりますというと、社会環境は簡単にそれについていく。社会の流動的で

多様な要求に対して、支配的な解答によって社会を固定してしまう罪悪感に建築は苦しんでいるみたいだ。

建築というのはそういうものなんだと言ってしまえばそれまでだけど、建築は必然的に空間を分割してしまうことに対する反省からか、つくり出す環境を何とか連続させようと努力しているらしい。でも分割の理論を機能させたまま連続の手法が使われているようで、自らますます複雑怪奇に混迷していくように見える。

分割の理論が制度として有効な社会では、ありとあらゆるものが切り刻まれていく。あんまり細かく粉々に切り刻まれてしまって、サラサラの砂が流れているように連続して見えるだけなのが、今の社会なのだろうか。それはそれで悪くない。

建築が社会に内包された偶然性を拡大するには、もっと徹底的に切り刻み続けたらいいんじゃないかと思う。空間環境に限らず、他にもまだ切り刻める隙間はいっぱいある。隙間は減るどころか、新たな概念が生まれればこれからもっと増えていくだろう。

うまく言えないけれど、密と疎、欲望と無私、離散と連続、善と悪、相反するそんなモノたちの間に存在する隙間を粉々に切り刻んで、これまであいまいだったおのおのの断片に与えられるイメージが、予期しない連続を生み出したらおもしろいだろうなと思う。

(なかやま　さとし)

建築の眼
●
いま思うこと

深谷浩一
深谷建築事務所

欲する人がいて、建築は生まれる。建てようとする人は社会の一員だから社会の要求から生まれたことになる。建築界は、どのような求めにも新しい技術を開発して克服し、労力をおしまず実現させてきた。

その結果の都市は、どうだろう。かつての建築には質感と量感と情感があったのではないだろうか。量は確保できたのではないか、新しい質も得た、新しい質感と量感で建築はつくられている。感という字には心がはいっている。心を入れなければと思う。情感はものを見て心が動くこと、私は、建築では威圧的ではなくやさしく、不快ではなく快感で、自然の風景をみるように動くさまだと思う、質感、量感、そして情感が一体となったものに接すると、風景と同じように経てきた時間も含めて心にひびく。

建築に携わって40余年、独立して20年、いままで考えてきたこと、つくってきたこと、捨ててきたことをも反芻して、これからも歩んでいきたいと思っている。

(ふかや　こういち)

建築の眼
●
実感するということ

本庄千恵美
筑波大学芸術研究科デザイン専攻修士1年

私が建築という分野を専攻し、その立場から社会を見るようになったのは、今から7年前、大学1年生の時である。それまでは、建築に対して特に意識して興味を覚えることはなかった。しかし、おかしなもので、建築の専門的な知識が増えるにつれて、今まで無意識に経験していたことが頭の中でフィードバックし、知識と昔の経験とが結びついたと実感するようになってきた。その実感は、行動や行為にまで影響を与えている。それを意識することで、初めて自分の中に積み上げられていくのだろう。意識しないことには、完全に理解したとは言えない。

私は、現在の大学院生活にいたる前の2年間、社会人として建築にかかわってきた。建築事務所での実務経験と過疎化の進む町での町おこし研究会への参加を通した数々の体験は、言葉や知識以上に人間と建築、そして社会との複雑な結びつきを学ぶ貴重な体験となった。今思えば、それが大学院に進もうと思ったきっかけになったと思う。もう一度、学生という立場に戻った今、実感するということの大切さをさらに強く感じ始めている。

最近、一番興味を覚えたことは、学生たちに実体感がないということだ。なんとなく活気がなく、空中に浮遊しているように感じるのだ。まるで、コンピューターでつくられたヴァーチュアル空間の中の人物のように。近年、コンピューターなどによるヴァーチュアル空間が、日常生活の広い範囲にわたって活用されるようになってきた。特に若い世代の人たちにとっては、すでになくてはならない空間になりつつある。もともと、リアル（現実）とヴァーチュアル（仮想）は、対比的な言葉として意味付けされていたはずであるが、今日では、ヴァーチュアル空間はリアル空間の一部だといっても過言ではない。建築の空間でも同様である。実体のない建築が、現実の建築として建設されていく。一見、ヴァーチュアルとリアルの距離が狭まっているという錯覚を覚えるが、実は大変大きなギャップをつくってしまっていることも少なくない。

21世紀を目の前にして、ヴァーチュアル空間とリアル空間の関係が、さらに複雑になっていくことは明らかである。そのような時代

にあって、私たちはその両空間を同時に把握していくことが重要な課題となるであろう。また、両空間を体験するにあたって、単に建築界にとどまることなく、日常生活を意識して体験し、さらに建築の中には生身の人間が生きているということを把握しなければならない。技術の進歩と感覚の変容は、加速度を増している。私たちは、建築を通して見失われつつある実体感を発信していく役割があるのではないだろうか。　（ほんじょう　ちえみ）

建築の眼
●
世界を拡げよう

増田敬彦
住友信託銀行本店開発事業部

近頃気になることは、建築の世界の狭小化である。

ソフト面をはじめとした様々な専門領域の拡大・深化に対し、建築の世界は侵食されるにまかせているかのような感がある。

だが、表層のデザインではなく使われ方も含めた総体の提案がまさに建築のメッセージだとしたら、建築家は自分たちの世界に閉じこもらず外の世界と交流し、おおいに学ぶ必要がある。仲間内の言葉ではなく、誰にでもわかる言葉で語ることのできる能力も必要だ。建築が単独で社会に対してメッセージを発信することなど、出来はしないのだ。　（ますだ　たかひこ）



建築の眼
●
震災復興と建築

丸川成平
神戸市住宅局建築部審査課主幹

■ 仮設住宅

図1は、昭和39年(1964)新潟地震後、新潟市が建設した応急仮設住宅で、木造平屋で636戸が建設された。**図2**は阪神大震災(1995)後、建設されたプレハブ造応急仮設住宅。神戸市内で、21,178戸建設されている。大正12年(1923)関東大震災直後、政府、警視庁、東京府、東京市、区、民間富豪、宗教団体は集団バラックを建設した。東京市内で101ヵ所、26,367世帯、86,581人が収容されたという。屋根はトタン葺き、下葺きも天井もなく、間仕切はトタン板やアンペラで、1坪に4～6人という密集居住であったという。

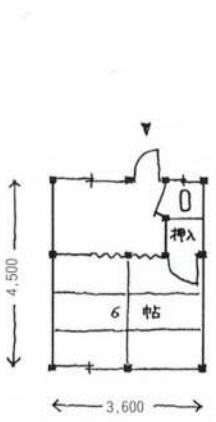


図1　5坪(16.2㎡)

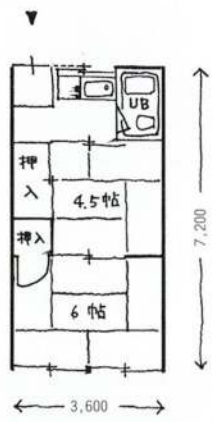


図2　8坪(25.9㎡)

■ 区画整理

関東大震災後実施された区画整理事業は65地区（国施行15地区、東京市施行50地区）約920万坪（3,036ha）におよんだ。最初の換地設計が完了したのは大正13年8月、震災後約1年後のことであった。しかし従前の権利関係は複雑で、区画街路は整備されたものの区画内は狭小な換地や、新たに私道を設けなければ利用できない換地が多く、区画整理をめぐる借地借家紛争が多発した。

阪神大震災後、神戸市が実施している区画整理事業は9地区、約124ha、最初の仮換地指定は平成8年8月、震災約1年7ヵ月後であった。換地設計においては、細街路についても街路設計と地区計画及び神戸市インナー長屋制度の導入により狭小道路の発生を防ぐ努力がなされている。

■ 耐震設計

関東大震災後の大正13年、市街地建築物法にはじめて耐震規定（設計水平震度0.1）が導入された。昭和23年（1948）の福井地震の後、昭和25年公布された建築基準法では水平震度0.2が採用され、木造建築に壁量規定が設けられた。阪神大震災後の平成７年12月「耐震改修促進法」が施行された。阪神大震災前わずか３件しかなかった神戸市内で建設中の免震・制震建築物は、早くも震災後20件に達している。

■ 震災復興と建築

大正、昭和、平成とつづく80年の時の流れの中で、大震災を機会に建築技術や法令は多くの犠牲を払いながら進歩してきた。阪神大震災の犠牲者約6,000人、そのほとんどが建築被害に起因するものであった。そしてその復興も建築なくしては考えられない。今回の震災ほど建築の社会的意義について考えさせられたことはなかった。

そして、その復興期にある21世紀までのこの数年間が、建築技術や建築法制度の大きな転換期であるように思えるのである。

（まるかわ　じょうへい）

建築の眼

80年の未来社会と建築へ

三輪泰司

アルパック㈱地域計画建築研究所取締役会長・工学博士（京都大学）

80年の未来を創る作業は、その時代の人々にゆだねられるが、いま生きている世代からのメッセージを伝えたい。

その時代、“建築”は、いまの概念とは異なった、あらゆるテクノロジーとデザインのジャンルの境目のない姿になるであろう。

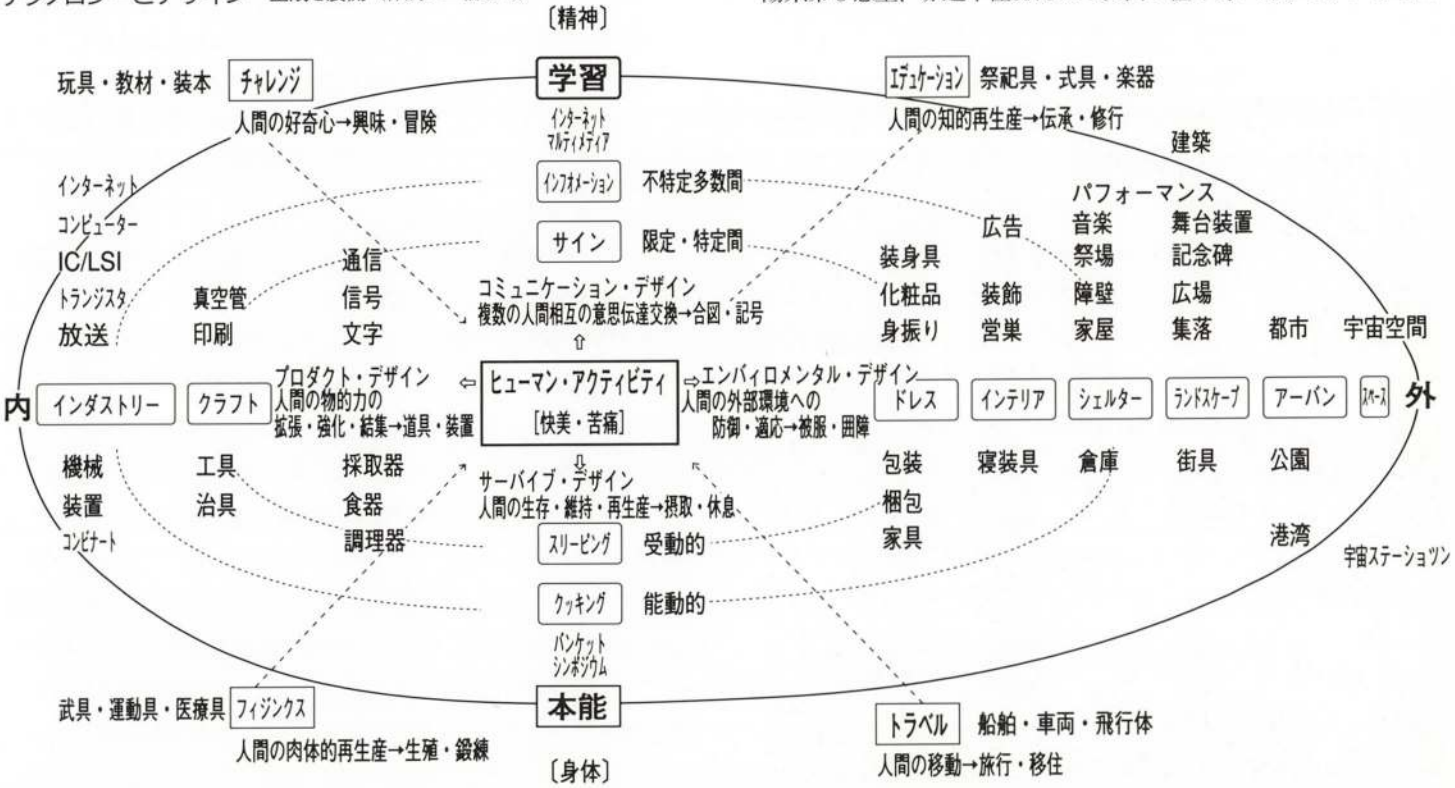
“建築”とよばれるようになった人間の営為の産物は、人間の外界＝環境への適応から始まった。

地球系に生命が生まれて生物系をもちこみ、400万年前、人類が人類になって人間系をもちこんだ。人間によるテクノロジーの発達は、“環境”と別の方向へ向かった営為の産物とつなぎあわされ、複合し、人間社会を巡る壮大にして複雑な世界に組みこまれた。

未来は、単に過去からの道のりの、延長線上にあるだけでなく、人間の意志の結果として描かれる。

人間がデザインしたつもりのこの世界を支配する社会のシステムが、人間をしばる“鎖”となったことに気付くと同時に、人間は太陽系第３惑星、赤道半径6378kmの表面の極く薄い部分で、いまなお

テクノロジーとデザイン　生成と展開（作成：三輪泰司）



進化の過程にある存在であることも自覚させられた。

美しさ、心地よさへの欲求は、人類が人類になる前から受け継いだ本性であろう。いま21世紀末の世代は、この“鎖”の痛苦を美しく、心地よいものに変えるかどうか、苦闘の中にある。

地球環境への適応が、ヒューマンな本性であるように、人間社会における世界社会は、地域社会の集合であり、共存を運命づけられている。

しかし、21世紀末の状況は、インフォメーション・テクノロジーの発達が、グローバリゼーションを進め、リージョナリゼーションと共生へ、熾烈な“闘い”のプロセスにある。

いま、建築と一括している営為の産物も、地球と人間を尺度に、碑や庭として評価を受けてところを得るもの、あいまいな産物として葬られるものと、仕分け作業の対象になるであろう。

それは、80年の未来に建築が、美しく、心地よく、のびやかにひらくために、現代に生きる世代の務めであると考えている。

（みわ　ひろし）



建築の眼

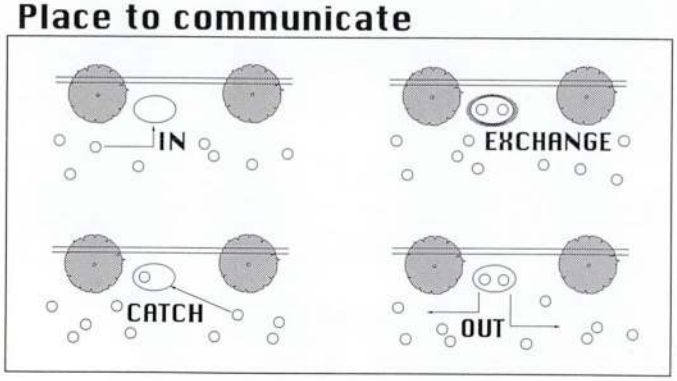
人と場所とコミュニケーション

森　　傑

大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻

ここ近年、ポケベル、携帯、パソコン、インターネットなど大変便利なものやシステムが一般社会に広まりつつあり、デジタルな世界、サイバースペースな未来を非常に感じさせられている。ほんのちょっとした卵形の箱の中に（ヴァーチャルな）生き物が飼えるのだから、本当にすごい世の中だと思う。

確かに、このようなデジタル化はある意味で一般の広い人々の参加性を高め、ボーダーレスやバリアフリーの社会を促進しているといえる。現に私自身もこのような環境を堪能している人間のひとりであるから、何も否定や拒否をするつもりもない。



しかし、これが建築ということになるとわけが違う。私はそのようなデジタル情報化の方向ではなく、むしろそれとは正反対のもう一方の現代性に、これからの建築のあり方を考させられている。テレクラ、クラブハウス、フリーマーケットなどといったミニコミの世界である。

昨年（95年度）の卒業設計でも、「場としてのインター・ネット」として公衆テレクラボックスみたいな近未来の身体的なコミュニケーション空間を提示したのだが、そもそもコミュニケーションとはそのように身体的に行われてきたはずであり、今もこれからもそうであると思う。やはり、人々には出会う場所が必要であろうし、誰かが言うように街がなくなったり、それが場所から離れるということはないだろう。

便利になった社会に氾濫する他の情報や商品と同じように、テーマパークみたいに見栄えだけするものを追うのは、これからの建築としてちょっと違うのではないかと思う。あらゆるものの解体や身体からの遊離が進む中、コミュニケーションということにおいてだけでなく、人々にとって本当に必要で身近な場所や空間を社会に誘発させること、それこそが建築することの意味だと私は考えている。

（もり　すぐる）

建築の眼

常識を疑ってみませんか?

藪　達彦

三井物産㈱本社建設資材部国内営業室

規制緩和・構造改革・パラダイム転換・世紀末とか心配なことばかりですが、常識を疑ってみて、別の見方もあると社会に発言したいものです。

?疑ってみる常識―1―「日本の工事費は高い」

・日本の住宅の工事費は高いといわれるが、建設省調査（94年）を調べてみると、日本の価格は「Mホーム・Tホーム調べ」でした。高くてるのは当たり前、国の調査は科学的とはいえません。

・官公庁の建物は高いかもしれません。埼玉県の特養ホームは、丸投げの会社が政治資金を捻出できるほど、役所の査定が甘かったようです。

・民間工事費はサービスの対価として適正だと考えます。施主に直営工事の経験がなく、施工者に甘えて見えないサービスをたくさん受けているのだから。

?疑ってみる常識―2―「日本の建築の寿命は短い」

・組織（公共・企業）が20～30年継続して成長し、人が増え、器が小さくなっただけ。ライフサイクルコストとかいって設計・施工で配慮することが、どれほど寿命を延ばしますか?

?疑ってみる常識―3―「高齢化社会で国民負担率が増える」

・国は生産年齢を15～64歳とし、2015年危機を煽っていますが、生産年齢を25～60歳とすれば、2045年がピークと試算できます。予算を獲得する役人は「これからの10年間、税金を上げて2015年に備えよう」と煽っていればよいのですが、個人・企業は次の世代に責任を持つわけで、2045年まで高負担を継続されてはたまりません。個人・企業とも徴税吏から逃げて、地下経済・同族企業化・多国籍化して当然です。

・地下経済・同族企業が、国・地方自治体の知らないところで活躍する経済もあります。建設界こそ中小企業・同族企業体質で、パラダイムが変化する時代のトップランナーではないでしょうか。

（やぶ　たつひこ）

建築の眼

創造と想像

山本俊輔

㈱スペースクリエーション代表取締役

建築を始めたころ、遠くに感じていた21世紀が、すぐそこまでやって来た。近頃、教育施設、障害者施設や高齢者施設、といった仕事をさせていただく機会に恵まれているのは、おそらく偶然なのであろうが、何か、これからの私自身の在り方を示唆しているような気がしてならない。

ものを創るという行為の対極には、必ず破壊あるいは消滅という事象がある。建築を創る環境が自由になればなるほど、創り手の責任は大きくなっていく。こうしたいではなく、そのものがどうあるべきかを考え、自分に何ができるかを問うところから、創るという行為は始まる。

教育や福祉の分野で、その設計にかかわる機会を得るということはこれからの教育、これからの福祉について思惟することであり、社会を考えるということにほかならない。

建築は、物理的にはものであるが、その中であるいはその周りで様々な人間模様が繰りひろげられることを考えるとき、このものは、それが個人の住宅であれ、公共の建築であれ、単にものとしてでなく、社会的な空間として存在する。人と共に生き、人と共に成長し、でき得れば人の幸せにいくらかでも寄与することのできる建築、笑顔の似合う建築……。

そのためには、例えば障害を持つということを対岸にいて考えるのではなく、自らの明日に重ねて思惟することが必要だ。社会のあり方を、より真剣に考えていくことが求められるのである。創造と想像、この二つの力を、与えられた与件にかけ合わせていかにあるべきかの答えを導き出すことこそ、これからの創り手の使命であり、建築が社会に発するメッセージではないだろうか。そして、おそらくは無限にあるであろう答えの中から、たった一つを選び出すことが私自身の表現であるのかもしれない。

（やまもと　しゅんすけ）

20年後の建築・都市の夢を語る

20年後の建築・都市

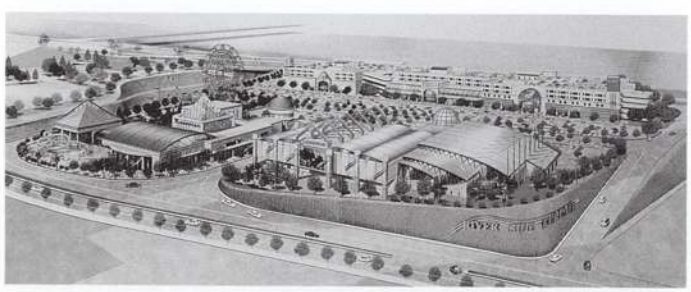
商いと街—そして建築

香川英行

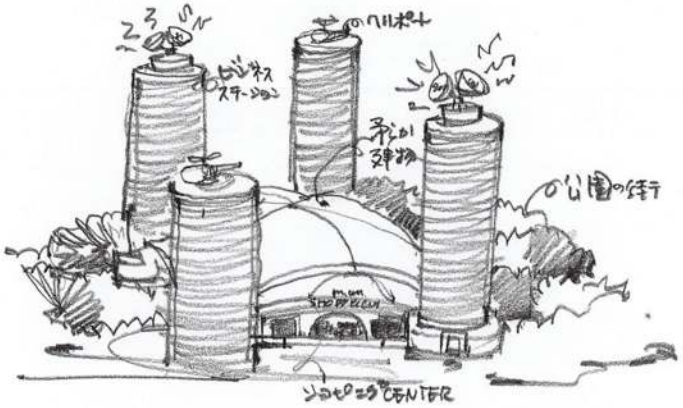
ディ・ブレイン研究所代表取締役

久しぶりに平日の午後、街に出た。街には同じような服を着た青年と年老いた人が目立つ。大阪を代表する心斎橋商店街にもゲームセンターやカラオケが増えている。あの老舗の商店はどこへ消えたのであろう。都心商業は、一部のターミナルの地下街を除いて荒廃の一途をたどっているのではないか。新しくできたファッションビルにも立ち寄ったが、店員が一人退屈そうに立っている。都心商業は、買い物の街から歓楽の街へと姿を変えている。

一方、郊外に目を向けると、インターチェンジの近くの土地には百貨店、量販店、大型専門店、専門店、レストランを組み合わせたS・Cと2000席もある映画館、ボウリング、遊園地、役所の出先機関、銀行等一挙に計画された大きな街が出現している。今や商業の主戦場は郊外に移っている。都心商業は、個を大切にしたパーソナルマーケティングが中心であり、カンパニーやオフィス需要が大きなマーケットである。



今、第二次流通革命の時代と言われている。30数年前の第一次流通革命は、生産者の販売代行者としてのセルフサービスと、大量販売として流通業の役割であった。しかし第二次流通革命は、生活者の購買代行者としての革命である。第一の変革は立地革命といわれ、交通体系、農地政策の変化に伴う新たな商業立地の創出。さらに都心近くの工場移転・閉鎖等による商業施設への転換が増えている。第二は業態革命といわれる、生活者の生活様式に合った新たな業態開発なしに今後は生き残れない時代である。第三に情報革命といわれ、これは飛躍的に発展しコストも安くなった情報技術を、販売、物流、生産の中にネットワークで活用しきることにある。さらに、価格に対する革命。国際化に伴う海外の流通業の日本への上陸なども活発である。



このような大変革期の真っ只中、私がたずさわる商業施設としての建築。21世紀を目前にしての提案として、"柔らかな建築をつくろう。"商業の変化は7～8年のサイクル、15～30年のサイクルとコンドラチェフの50～60年の経済のサイクルの変化の連続である。商いの業態の変化に伴って建物も変わると、どんなに楽しいだろう。私たち生活者の価値観は、人間がこの世に生存する限り変わり続けるのである。柔らかなさなぎがパッと蝶に変わるように、形も姿もイメージも変わる、進化し続ける楽しい楽しい街づくりをお手伝いしたいものである。

（かがわ　ひでゆき）

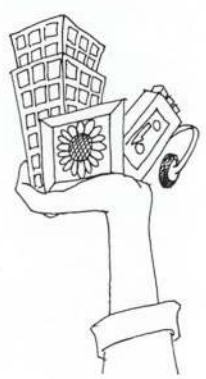
20年後の建築・都市

20年後にそうなれば

片山孝治

大阪大学大学院

建築というものは、それ一つで街を変えたり人を変えたりする影響力を持っている。それにもかかわらず、建築に携わる人以外の、建築に対する普段からの認識度、意識度は、現代の日本においてはあまりにも低すぎる。もし建築にアート（それはおごりであるという意識は置いておいて）と呼ばれる要素があるならば、そして我々建築に携わる者の中に建築を創り上げていくことへの喜びがあるのならば、絵や音楽と同じように、建築というモノをもっともっとみんなに知ってもらうべきなのだ。社会のごく一部の者の意識と知識で建築を建てていく状況がこのまま続けば、建築は次の段階へ踏み出せない可能性が大きくあると思う。



20年後は、建築雑誌とかコンペとか、もっとみんなが普通に読めたり参加したりする世

界になっていればいいと思う。それには積極的に、しかしもっとラフな面も見せながら社会にアピールすることも必要であろう。

「最新のアーキテクチュアランキングは」なんて番組が出来たり…？。

(かたやま　こうじ)

20年後の建築・都市

●

時は2017年

喜多俊之

プロダクトデザイナー・IDKデザイン研究所

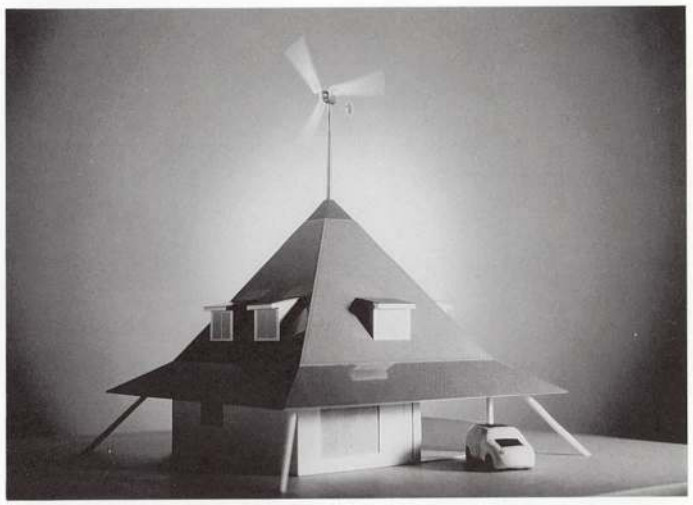
今から20年後、時は2017年、緑豊かな街づくりが計画通り進行していて、やっと木陰が楽しめる街が出現しつつある。何と言っても日本は四季折々、植樹さえすれば比較的容易に木が育つ。杉の並木路、けやき通り、桜の並木路、真冬でも美しい花を咲かせる寒椿など、種類が多い。

1960年代からの凄まじい高度成長期からバブル崩壊、そして2000年頃からはインターナショナル化の波が一般の暮らしにまで急速に入り込み始め、インターネットが家庭に果たす情報化の日常性は、生活を大きく変え、ますます英語化が進んでいく。

関空が開港したころ、泉州から大阪市内に入るまでの電車の窓からの眺めは、外国からの帰国便の外国人を含む乗客の目にはとても美しい日本のイメージではなかった。当時、日本は豊かと言われていたにもかかわらず、まるでそう感じることはなかった。歴史的建築物の保存と再生、広い住宅の確保、先進国では当然のスローガンとその実行が遅れてしまっていた日本。戦後50年はほとんど困難であったこれらのことが、2000年になるとやっと動き出す。

広い住宅と美しい街並みづくりに早くから取り組んで成功したアジアの国々のシンガポールやマレーシアなどに比べて、20年ほど前に外国から来た建築家たちがよく言っていた。「一体、この街並みはどうしたんだ。日本には何人の建築家がいるのかね。日本の都市は建築エンジニアだけに任せているだけではないのか」と手厳しかった。そう言えば、建築専門誌に掲載されている立派な建築物のある所へ行ってみると、たいがいの場合は、周りの街並みとは調和していないのがほとんどで、電線に取り囲まれた作品は哀れでもあった。

ハイテクが入り込んでソーラー・エネルギーや雨水の利用、紫外線を避ける新素材の出現、建築とインダストリアルデザインの大接近、2000年を過ぎた頃から地球規模で進む環境の悪化、そんな中でやっと人々が本当の生活に目を向けて、環境の整備が進んで多くの外国からの観光客やビジネスマンがやって来る日本の出現など、高



い文化遺産を土台に世界に果たす役割と自分たちの暮らしと暮らし方を考える建築や都市計画は、そのための手段として本来の姿に向かって大きく変貌しているに違いない。

(きた　としゆき)

20年後の建築・都市

●

地下都市はできるか
―人類の新たなる夢への挑戦―

金　泰彦

日建設計設備設計主管

地球環境問題が一般市民にも広く浸透してきたように思われる。ただ各方面での認識の度合いや取り組む姿勢、レベルは様々である。大雑把に日常生活レベル、社会生活レベル、産業レベルに分けられるが、職業上、この中で私が最も深く関与しているのが社会生活レベルである。地球環境保全対策論は膨大であり他の優れた識者に委ねるとして、本稿では私の守備範囲である建築がいかにこの社会問題の解決を図ることができるかについて、私案の一つを紹介させていただく。

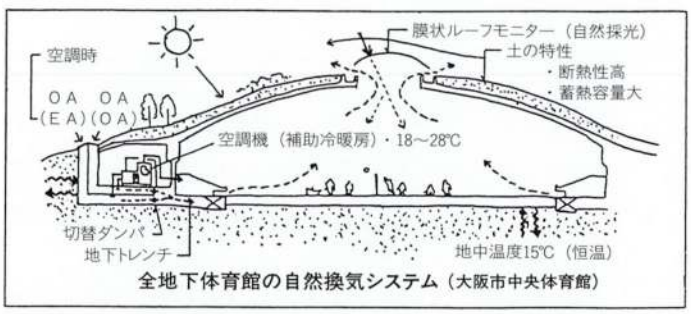
地球環境問題の一つに年々過密化の一途をたどる都市環境問題がある。人類社会の行く末はどうなるのであろうか？

あるＳＦ映画によると、地球環境が悪化した人類は、大きな決断をする。それは地上に残る人類と地下を新たな開拓地（生活場所）とする棲み分けである。やがて地下人類は強大な技術力を身につけながら逆境を乗り越え、地下文明を築き上げた。一方、地上に居留した人類は悪化する地球環境に怯え、経済発展もままならない消極的な生活を強いられた。地下人類の勝利であると思われたが、その選択の代償に、地下環境への順応のためか、視覚機能が失われ、二

度と地上生活ができなくなってしまったというストーリーがある。

それでは、現代社会におけるジオフロントとか大深度地下構想も、この物語の二の舞いになるのであろうか。

現在、世界各国では地下利用に対して積極的な研究や実験がなされている。例えば反射鏡を使って自然光を導くとともに、屋外の風景を虚像として映し出し、あたかも地上に生活しているかのごとく視環境上の工夫を行っている。温熱環境についても地中の恒温性を活かし、夏涼しく冬暖かく過ごすことができる例もすでに存在している(イラスト図参照)。これは、日本以上に年間の気温変化が激しい地域では、より有効な省エネ手段となろう。また日本同様、用地難にあえぐ都市や国にとっても新たな土地活用が生まれ、法制上の問題をクリヤーできれば、その有効性は図り知れないものがある。



全地下体育館の自然換気システム（大阪市中央体育館）

古来、人類は雨・風・日射を凌ぐ棲み家として大地を掘り、竪穴や横穴式住居—シェルター—をつくったが、今またその原点に立ち返り、本能的あるいは衝動的発想をするのではなく、地下利用は、今後ますます技術革新を遂げるであろう人類が、積極的に挑戦していかなければならないテーマの一つと思う。建物も社会も、まずは適応可能な部分から、地上から地下にシフトしていくことは、もはや空想の世界ではない。限りなく実現性の高い夢への階段を登っていきたいと考える。

(きん　やすひこ)

20年後の建築・都市

失われた都市を求めて

黒田　清

黒田ジャーナル代表

私の一生に不幸があるとすれば、それはうんざりするような都市に住んでいることだ。

私はそんなに美的感覚がすぐれた人間とは思わないが、私の住んでいる街はどうしてこんなに醜悪なのか。また、それがどうして許されるのか。

本体より大きい広告が乗っかったビル、不揃いに窓や壁面にぶらさがった文字。ときにはわざと斜めにして、日常生活に必要な平衡感覚をゆさぶるような傲慢な広告まである。しかも道路には不揃いのコンクリートむき出しの電柱。それはなにも私が好きな大阪だけではない。過密都市といわれる日本の都市に共通した姿だ。

私が育った戦前、戦中の大阪の下町は、木造建築がほとんどで、煉瓦や石の洋館は、それが2階建てか3階建てでもゾクゾクするくらい魅力的に見えた。しかし、不揃いの木造の住宅がひしめいていた貧しい街は、いまよりずっと美しかった。

私は夜の街を彷徨するのが好きで、月天心貧しき町を通りけりという句をよくつぶやいた。貧しい街は悲しいような風情があった。美しささえ感じた。歩いていて、わが街がいとおしかった。

なぜなのか。街に匂いがあったからだ。

私の生まれ育った大阪の天満市場前の猥雑な街並みにも、落ちついた住宅の並んだ芦屋の屋敷町にも、それぞれの匂いがあった。それは生活の息吹であり、必然性を持っていた。

しかし、木と紙の文化は戦争には弱く、戦後の復興期が成長期に変わると、新建材の都市がニョキニョキと誕生した。なんと軽佻で無機物的な空間だろうか。思い思いの設計で立ち並ぶマンションの群れのなんとひよわな風景であることか。一方で郊外に移転した大学のキャンパスは、鉄腕アトムが出て来そうな空間だ。

パリのアパルトマン、イスタンブールの裏町、オスローの住宅街、ワルシャワのスタレミヤスト…。私はこれまでに歩いた異国の街角を、折にふれて思い出す。そこには、生きている人の匂いがある。日本の建物、日本の街には、どうしてそういう美しさがないのか。非常に美意識が発達した日本人に、どうしてそれがないのか。恐らく都市に住む私たち自身の責任なのだろうが、やはり建築家や政治家に、より大きい責任があるように思う。

(くろだ　きよし)

20年後の建築・都市

われわれの「建築の夢」

佐藤重夫

広島大学名誉教授、日本民俗建築学会会長

明治初年、E．S．モースが広島から厳島へ船で渡る時、海難を恐れて最も大切な金時計を宿に預けようとしたら、女中がお盆を持参して、載せておくようにと言った。そうして無事に帰着して時計を持ってくるようにと告げたところ、女中は丁重に盆を捧げてきた。見ると自分が置いたままで、誰一人として触ることなく、位置も鎖も微動だにしていない。彼は驚いて、人の心のわかる立派な心に恐れいって、日本人を真に羨ましく思ったと書いている。[注1)]

これは、古来建具のみの開放的住居の中の可動的使い分けで育てられ、歴史的に社会的に培われてきた生活習俗の中にある哲学のせいである。

また、家の多用性、開放性、家の内外調和した生活習俗の良さに注目し、かたがた丹下作品の実見にと昭和29年に来日したW・グロピウスは、日本に建っている現代建築の全くの新旧不調和に失望して、倉敷の瓦屋根と宇品などの瀬戸内海の自然景観を皮肉にも称揚して帰っていった。[注2)]

日本の建築界もやっとこのことに気付きかけたところもあるが、れわれれは建築人である前に社会人であり、社会人である前に家庭の人で、みんな個性あるそれぞれの立場のある老若男女なのである。しかも外人たちが羨む心の培われたその基は、建具で適宜開放される一つの空間の住居であり、その環境であった。これを忘れては日本の家はつくれない。家は人であり、心を育て和楽と健全と礼節と自由を育てる。日本には日本の家をつくりたいねと、敗戦後のバラック時代に、一緒に釣りをしながら、ふと呟かれた恩師・故岸田日出刀先生のお言葉を私は忘れることができない。

それゆえに、建築が社会にメッセージをとか、町づくりをとかいうことは恐るべき建築の自惚れで、山河、林野、海浜を生活の友としている田舎の土地建物を、都市的産業や経済業務を生活の友としている都市のいろいろの建物と同じ法制で取り扱っている文化的レベルの低迷さでは、建築よりのメッセージなどと言えた義理ではない。都市と農山漁村とは結ばれて平安健全でなければならない。しかし田舎の不動産をはじめ、生活習俗はすべて宝であり、悦びであって、経済社会的商品や雇傭的労務ではなく、全く別の範疇と哲学下のものであることを銘記しなくてはならない。しかし双方とも南宋の文人黄公望の言う『邪甜俗頼を去れ』の名言に徹したいものである。[注3)]これは邪心、ものや人間も甜めてかかる心、下品な心、依頼心、こういった心をすべて断ち切らねば、本ものはできないということである。見せるものはたちまち廃れる形骸で、都市も近郊も田舎も、真に日本の家であって欲しいと百年先を夢み、まず人づくりからで、覇権主義の建築を、猛省の必要ありと信じている。

注1）E．S．モース著「日本その日その日」　東洋文庫　1971年
注2）グロピウス会編「グロピウスと日本文化」　彰国社　1956年
注3）陳舜臣著「中国の歴史」第10巻　124～126頁　平凡社

（さとう　しげお）

20年後の建築・都市

20年後、の夢—ん?

末次攝子

文化オーガナイザー、高槻市文化振興財団常務理事

21世紀を見る気もなく暮らしている私に「20年先の夢を」の御注文は…と思案したが、かねて「都市景観賞」などで建築界にはご縁もあるので、ペンを執ることにする。

折しも大阪のパワーアップはめざましく、交通網の東西軸、南北軸、湾岸線の整備開発、大阪ドームやスポーツアイランド、博物館、美術館、文化レジャー施設の建設も急ピッチで増強、プロジェクトマップを眺めると気分が浮き立つ。

いや待てよ、植樹並木が育つメインストリート沿いの舗道で、自転車が走る恐ろしさ。商店街に病院もつらなる都市部で、歩道のない府道がある。雨の日や幼児づれの母親が、車やトラックにおびえて、店の軒下に身をひそめるさま、をご存じだろうか。

ビジネスパークの建設で見たように、みごとなビルとその機能とが確立した後になってから、アクセス道路の開発、という愚を繰りかえして欲しくない。緑化は望ましいが、暑さに弱くてすぐ枯れる街路樹の植栽なんか、ご免こうむる。玄人の仕事とは？　手直しの経費も、予算に計上してあるのだろうか。

公共輸送の増強はうれしいが、格好をつけただけのエスカレーター設置もある。改築して、7段ほど上昇のエスカレーターを新設、その4倍の階段を上らねばならぬ駅が。福祉とかに名をかりて、建設資金を調達した“おしるし”としか思われない。

地下鉄、私鉄の駅ホームにトイレット整備は結構だが、線路上の車輌から、モロに入口が見える位置、のケースが少なくない。同じスペースを使って、横から入る設計にしないのがダサイ。と申せば地方の新しい文化会館の会議室で、入口ドアの正面がトイレの入口

に向きあって、開閉のたびにトイレを見る。センスの問題だろう。

不細工な、駅前広場のデザイン。景観をそこねる彫刻やモニュメントと称する物体。大げさで空虚な表現の「市民憲章」や「市民宣言」などの掲示。21世紀に姿を消すことをこそ、期待しよう。

ミナミの周防町通りは、街づくり市民商店主の協力と聞く“おしゃれなたたずまい”と感じていたが、この春のはじめに行ってみたら、友禅染めみたいな色調に「ヨーロッパ通り」と染め抜きの、のぼり旗がズラリ。泣けてくる。

昔、飾り立てた道頓堀商店街に、司馬遼太郎氏が眉をひそめて、『五流の女郎の厚化粧』とキツイ評言の、記憶。1970年代のことだ。向こう20年の、洗練に待ちたい。（すえつぐ　せつこ）

20年後の建築・都市

危機への対応と心の再教育を

高田秀三

北海道東海大学名誉教授

80年前に創刊された本誌。その翌年に生まれた私が、建築に志したのは16歳。御堂筋に姿を現した「そごう」の造形に強く心を惹かれたのがきっかけである。

以来60年余。折目節目に“これからどうなる”と先達諸賢の声に何度耳を傾け、自らも考えたことか。リタイアして数年をへた老人に、過去は書けても“未来を予測しても確率は少ない、という予測が最も確率が高い”のジョークを想うほど、これからを予測しての発言はやさしくない。以下、老いの繰り言である。

ひとつは、情報化の進展によって文明の遺伝子（というものがあるとすれば）を異にする人々が、加速的に同質・均質化されるのだろうか、の懸念を払拭してほしいこと。

人口と年齢構成の変化に適応した生活様式の創出と確立、地域と伝統文化の再評価を加えたい。私に、アメリカ文化の影の部分からは脱皮したい、の潜在意識がまだ完全に消えないから。

予測をはるかに超えた技術の進歩に瞠目するが、19世紀末の欧州にあった退廃的風潮を連想させる表通りの絢爛豪華は見せかけのようで、混沌と乱雑の風俗・風景の背面から、燥ぎすぎと映る。

爛熟した文化が廃墟につながるとは歴史が教える、と識者はいうが、戦災の焦土と悲惨が瞼に灼きつく私は、今もこれからも、あらためて天変地異と人災への危機対応の完璧を希っている。

いまひとつ。先送りされる社会資本の充実を前提に、自然と共存する（私・公・共を包含の）第四空間を創出して、生活者の倫理と作法を再構築し、幼時段階からヨコ割りの教育を現実にしたい。

米国の傘から抜けたいと書いたが、ミースの“レス　イズ　モア”には共鳴し、レーモンドの“簡潔・機能的・経済的・自然と共生”と日本建築礼賛の辞は、時空を超えてこれからも敷衍したい。

“行く河の流れは絶えずして、もとの水にあらず。淀みに浮かぶ泡沫は消えかつ結びて、久しく止まりたる例なし。世にある人と栖もまたかくの如し”。方丈記の一節を実感しつつ。（たかだ　ひでぞう）

20年後の建築・都市

自立する建物

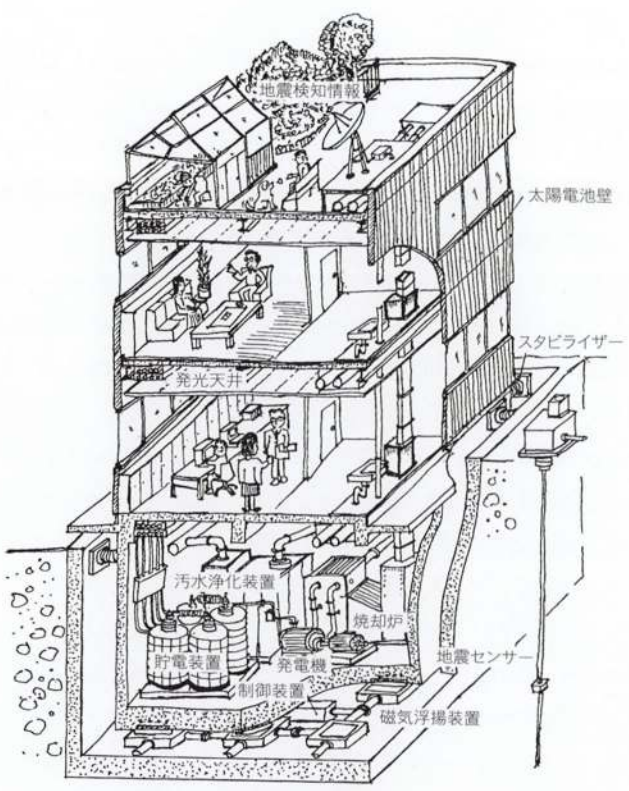
徳田裕英

㈱東畑建築事務所

住む人の生命を守る建物は、安全が第一であることは20年後も変わりない。

阪神大震災（兵庫県南部地震）以来頻発する内陸型断層地震、それに伴う海洋型巨大地震の発生で、建物は被災の試練を乗り越え、それを教訓とした技術の進歩によって急速に防災機能を完備する。

地震発生検知情報システムの完成によって、制振（震）機構はよ



自立する建物

り効果を高め、アクティブ化した免震機構も機能を十分に発揮する。量産による経済効果と高性能化、制御技術の進歩によって磁気反発浮揚装置を備えた免震建物も出現し始めている。

一方、災害時の生命線たるライフラインの確保は都市防災の充実もあろうが、建物内部での自給が当然となる。自然に優しいエネルギー利用、高効率化とローコスト化により壁体やカーテンウォールに惜しみなく組み込まれた太陽電池と超電導貯電力装置の実用化が建物完全自給電力を可能にする。熱源・照明などの直接利用、通信情報機能の確保はもとより、飲料水の生成も可能にする。

自然環境保護は当たり前、建物内で発生する廃水は浄化装置によって循環再利用され、塵芥等の固形物は、バクテリア等による有機処理や高電熱燃焼処理によってクリーンにコンパクト化して搬出される。いわば建物内に都市機能の一部としてミニ処理工場を内蔵している。

建物はこれからも、より安全さと快適さを求めて自立を目指す。

（とくだ　やすひで）

20年後の建築・都市

●

えくぼのある都市

橋本秀夫

日本建築協会中国支部副支部長、㈱門出工務店取締役

20年後の都市は、100年前の町を覗き見れば良い！

10年たつと悪臭の出るマンション、RC造30年説のビル…、疲れを知らない明治100年が笑っている。ゴルフに明け、リゾートに暮れ、海外の旅につかれた今日（いま）、名目だけの文化住宅は、デザインと呼ばれるウサギ小屋……？　災害は隣に座っている。

…20年たって、人を育る都市（まち）が出現する。……幼老弱者が憩い、四季を楽しみ、生気を養う空間がある。都市は10階で統一し、防災地区（ブロック）を並べ、内外に樹林（ポケットパーク）を配する。3階までは自己負担、4～10階を市町村の行政が経営管理する。1～3階は商店、事務所、4～10階は住居（うち7階は四季風の階）。

風力、太陽熱自然エネルギーを主体とし、雨水は消火と散水へ。室内は呼吸する自然建材使用（石油化学製品は最小限とする）。川や海のため山間部に植樹し、保水と魚介の育成を図り自然循環を計る。自然を掠奪から守り、朝日を拝し夕日に礼する。町中が四季の光と風を浴び、小都市ながら国際交流の花の咲く文化都市を創りたい。

（はしもと　ひでお）

20年後の建築・都市

●

活力ある高齢社会としての日本

服部万里子

服部メディカル研究所所長

21世紀の日本は、人類史上はじめて、一つの国の高齢者人口が20パーセントを超す超高齢社会になっている。この日本において、2500万人に及ぶ高齢者が、社会から保護されサービスを受けて生活する「負担」になるか、社会に参加し生産や文化や生活の担い手として「活力」になるかは、大きな分岐点であり、日本のみならず世界が注目している課題である。

点から面、形から哲学としてのバリアフリー　この高齢社会の中で、高齢者が自宅で転倒したり、風呂で溺れたり、調理や洗濯などの家事に参加できないような家では、自力による生活はできない。多くの建築家が「高齢者に配慮した住宅づくりと、経済性やデザイン性と、どちらを選択するのか？」と悩む時代は終わり、「誰もが暮らしやすいが、ステキなデザインの家」があたりまえのこととして考えられていくであろう。そして、意識してデザインされた個人の住宅と、一定規模以上の建物と、町づくりの計画のモデルとなった地域だけがバリアフリーで、一歩町に出ると危険がいっぱいではなく、住宅や設備、公共建物、生活施設、街づくりなどで、バリアフリーが点から線、線から面とつながり、生産現場からお茶の間まで生活の場全体に広がっていなければならない。

日本と同じく海に囲まれたオーストラリアの、シドニー郊外の海岸では、砂のところまでスロープと道がついており、車イスの青年が自分で海を散歩していた。

アメリカのように法律で、障害を持っていてもあたりまえにアク



セスできる町づくりを行うことも一つの方法であるが、高齢になることも何らかの障害を持って暮らすことも一つの個性として尊重し、共生することが人々の価値観として位置づけられることが大切である。町づくりの根本に、バリアフリーのフィロソフィーがある社会であってほしい。

技術は人を超えられない　現在、ハイテクノロジーが大手を振って歩いており、その速度についていけない人は、あきらめるか、みじめな思いをしている。「ハイテクではなくロウテクが良い」という声すら聞こえてくる。人のための技術がひとり歩きをしてはならない。時計の構造は分からないが誰にもが便利であるように、住まいや町の暮らしやすさの見えないところに、先端技術が生かされている。そんな住まいや町づくりが、20年後の日本の暮らしやすさと、団塊シニアの参加できる社会を支えているであろう。　（はっとり　まりこ）

20年後の建築・都市

●

21世紀の建築士に期待する

藤谷　宏

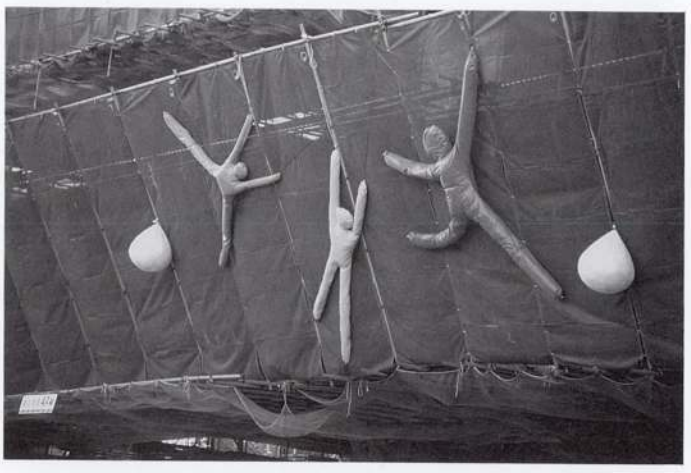
㈱日本ディスプレーデザイン協会研究教育委員・大阪市立デザイン教育研究所非常勤講師

想いもよらない敬愛する友人の紹介で一筆啓上ということになった。あの偉大？なるソビエト連邦が崩壊し、ドイツの東西の壁があっと言うまにくずれ、そして今、北朝鮮の書記が亡命、今日は、中国の鄧小平氏追悼大会の模様を衛星放送の画面が我が家に伝えている。ペルーのリマでは、世界の人々をまきこんで問題解決の方策がとられている。地球のあちこちで変化という名の活性化が進行中である。国内では阪神大震災が発生、自然の驚異を思い知らされた。併せてオウム教集団の勃発である。何か世の中おかしいぞと感じ始めたとき、我が国の指導者であるべき官僚層から汚職が発覚。併せて地方行政のお役人からも出るわ出るわで、日本列島いたるところで大合唱。民主主義推進を自認し言論の自由に生きてきた新聞も、勝手に休刊日を作るやら数桁の広告文で新聞の値上げを強行する。お陰さんで毎朝のチラシ広告の多いこと…。このチラシの実体こそ今のマスコミの実体なのでしょう。ゴミ戦争を報じておきながらゴミの源を毎日毎日運び続けている、そのチラシの裏をエスキースやメモに利用している私のささやかなお願いは、チラシの用紙はアート紙ではなく上質紙にしていただきたい。賢者ならおわかりいただけると思う。

数年前、私が所属する協会（DDA）―免許など一切の資格なきデザイナー及びクリエーター集団―の機関紙に“奇妙な標準喪失の時代だ！”と書いたことがある。とにかく、哲学をはじめとする宗教、芸術、経済、教育 etc.,標準なきがごとしである。

ボクは未完成の作品が好きである。未完成の作品には未来がある、夢がある。作り手の一方通行ではなく観る側と共生しようというコミュニケーションの空間がある。おもいやりがある。

建築基準法やらにしばられて我が国土に建つ建造物を作る免許証を持つ諸君に申し上げたい。ぜひ未完成作品を多く製造願いたい。完成品を作ろうとするから、権威やお金が必要となる、完全なものを作ろうとするから、権威や権力にすりよろうとする。また、せざるを得ない時代になってしまった。20世紀が生み出した、奇妙な標準なき文化を考え直し、ノーマルな文化を21世紀に伝えるために、事物の創造の基準は知性や数字ではなく感性や色や音で表現するようにすれば良いのではないかと思う。私はソビエト連邦の我が国における最後のイベントであったつくば博ソ連館内装を契約受注し、当時のソ連のエリートたちと親しくウォッカを飲んだ経験から、クリエーターたちよ急がずあわてずゆっくりゆっくり感性の美を発揮せよと言いたい。そして数年後、ソビエト連邦は74年で崩壊し、ロシアにもどった。　（ふじたに　ひろし）



20年後の建築・都市

●

空っぽの建築
—心の庭をつくる環境彫刻—

八木マリヨ

神戸女子大学大学院助教授・環境芸術家

全ての生きもののDNAには
二つの螺旋がむきあって、空・空間をつくっている。
DNAのように、縄も一つの螺旋では縄にならない。
縄も空・空間を芯に、「な」汝と「わ」我がむきあって、
はじめて「なわ」になる。
だから、縄はあなたとわたしからはじまり終わりがない。

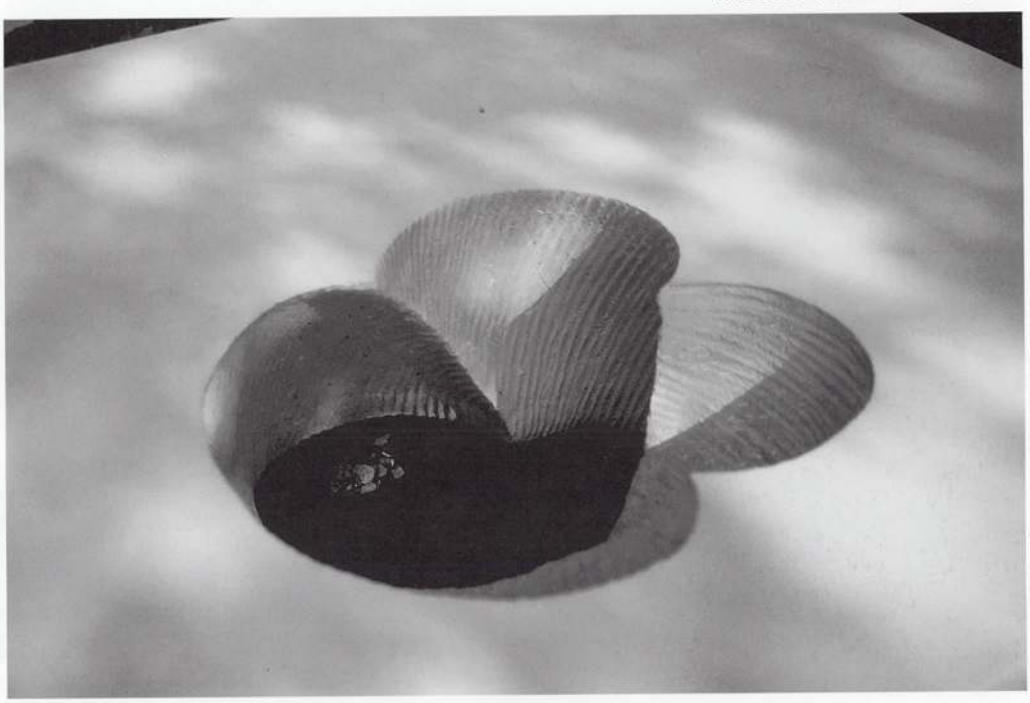
人も一人では生きられない。
都市もあなたとわたしからはじまる。
あなたとわたしに大切なことは
心の出会い、心が動く、心が踊る、心がぬくもる、
心が生き生きしてくること。
だから、DNAや縄のような有機的都市に暮らしたい。

有機的都市はあなたとわたしの身体のように、
自立する小さな街の集まりのこと。
都市に住むからこそ、寄り道が楽しい、
心の散歩を楽しめる街であってほしい。
歩いていけるところに
「心の庭」のような不思議な風景がほしい。

建築の中に入ったら空っぽ。そこには水と空がある。
地の底と空の底がつながってみえる。
人と人のつながり、人と自然・地球のつながり。
地球のへその緒がみえてくる。これこそ、
地球のライフライン。都市のライフライン。
都市のおへそに、こんな謎を秘めた
「心の庭」環境彫刻はいかがでしょう。
たとえば、このような空間に
街の歴史・地理の小さな博物室や音楽室など内包してもいい。
目に見えないものを見る、触れられないものに触れる。
その感動。
これが芸術の世界。これこそ、
地球のライフライン。都市のライフライン。

(やぎ　まりよ)

"MISSING CUBE" 1992 八木マリヨ



未来のまち

―子供たちが画くまち―



西船場小学校3年(当時) **今村有希**

地下1階に人工の空がある街をつくり、地上は緑でいっぱいに。プロが考えるよりも、ずっと人間的な“大深度地下開発構想”。



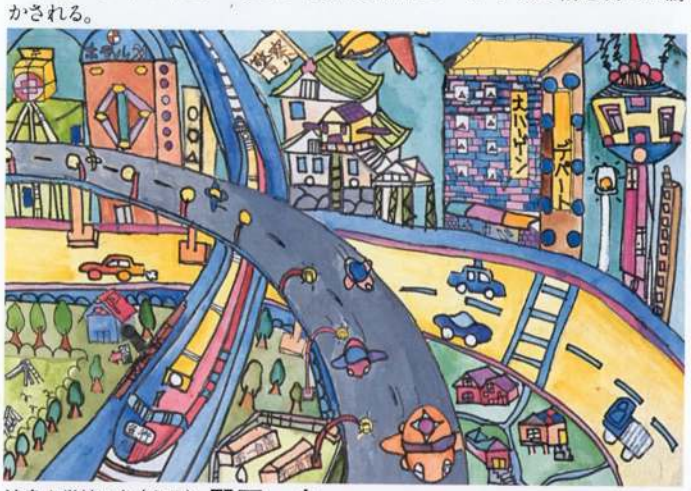
港晴小学校4年(当時) **天野弥生**

9年前の小学4年生が考えた“連結超高層ビル”。子供の構想力には驚かされる。



北恩加島小学校5年(当時) **井川智収**

クラゲのようなUFOや連結ヘリコプターが自由自在に空を飛びまわる。カラフルで夢があふれる未来の街。



池島小学校6年(当時) **野下　力**

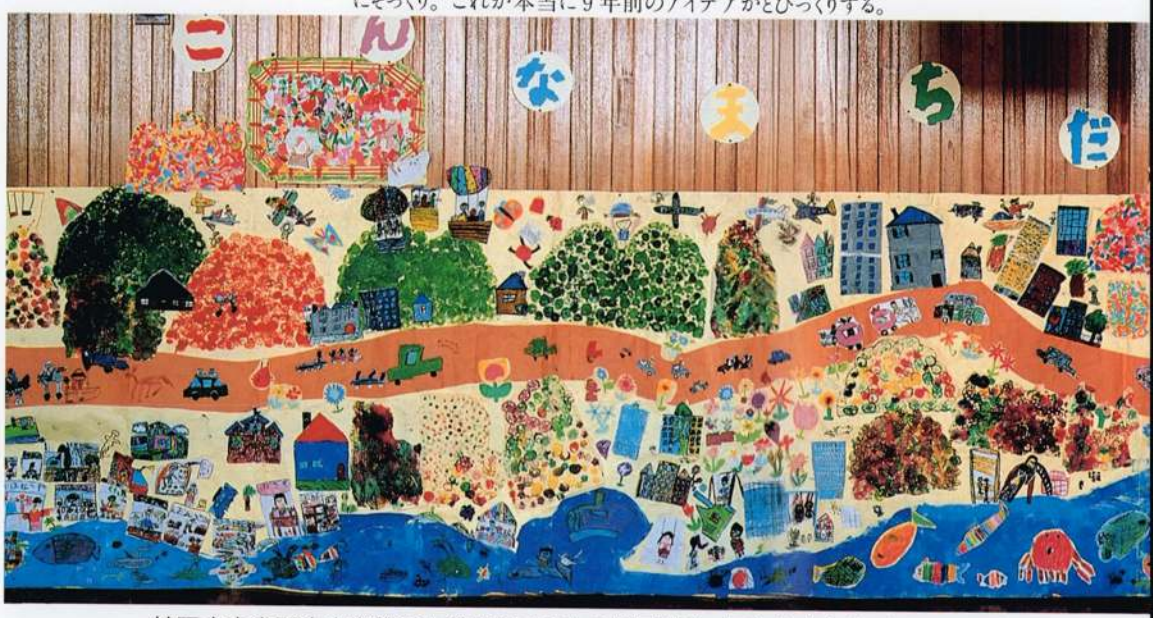
九州行きの急行の型は、この3月に走り出したJR西日本の500系のぞみにそっくり。これが本当に9年前のアイデアかとびっくりする。

9年前の大阪の子供たちは……

大阪市は『21世紀の大阪のまちづくり』をテーマに、小学生から絵画を募集しています。昭和63年に小学生が応募し特選になった作品10点を、大阪市からお借りしました。

9年前の小学生が画いた特選作品の中から、近未来の予想がほぼ的中したものを編集委員会で選んでみました。この子供たちも今は20歳前後。建築の道を志している子供がいるかもしれない……と言いながら。

注) 絵のコメントは編集委員がつけました。



神戸市立多聞南小学校の小学生75人による協同制作「こんなまちだったらいいな」



神戸市立二葉小学校６年 **楠原康正**「未来の町」
せ中につけると飛べるジェットで未来の神戸を見回っています。



神戸市立二葉小学校６年 **西尾太一**「明日の神戸」
背中につけると飛べるジェットで未来の神戸を上空から見回っています。



神戸市立二葉小学校６年 **松田直子**「未来の街」
未来には、スーパーマンや、ロボットがいる街になっている。



神戸市立二葉小学校６年 **中田優佳**「海の中の家」
この海は息が海の中でもできる。海の中の生き物が人間と仲良くできる。



今年、神戸の子供たちが画いた夢

震災に負けず、神戸の子供たちが神戸のまちの未来を明るくのびのびと描いた作品を選びました。新長田駅前に遊園地をつくるなど、夢いっぱいのアイディアです。絵は、神戸市立二葉小学校(神戸市長田区)、神戸市立多聞南小学校（神戸市垂水区）からお借りしました。

注) 絵のコメントは子供が書いた原文です。

建築と私と社会—21世紀を見据えて—

與謝野（司会）　大阪商人の不文律に「三方徳」という言葉があります。これは客と自分と世間、それぞれに徳をもって接すれば、共に栄え共に発展するという大阪商人の要諦です。客の徳というのは、建築に翻訳すれば建築主としての幅広い見識あるいは社会に対する責任感とか、あるいは利益のみに走らない幅広いものの考え方などを指します。自分の徳というのは、分をわきまえる自分のあり方、人格、常識の広さ、あるいはバランス感覚などでしょう。それから世間の徳というのは、先人の教えとか教訓、あるいは社会道徳、倫理などです。

その三方徳をきょうの座談会の冒頭に挙げたのは、自分の問題として自分と建築(世間)とのかかわり方、自分と建築主(客)とのかかわり方を80周年を期して考えるのも大切であろうという意味でご紹介しました。自身の生活にかかわる問題として、まちづくりをはじめ、環境アセスの問題、環境との共生の問題、あるいはぐっと視点を変えてグローバリゼイションなどをじっくり過去の流れから未来まで見据えるという、そのような視点を持つことが大切ではないかと考えています。

21世紀における自分と建築のかかわり、あるいは自分と社会と建築主とのかかわり方の望ましい姿なりをいろいろ活発にこの場で打ち出していただいて、意見を交換する中で自分の考えをさらに磨いていただく、そういう座談会になればと思います。

出席者（順不同）
横尾義貫氏（京都大学名誉教授）
田中直人氏（摂南大学教授）
本保基人氏（坂倉建築研究所）
川島克也氏（日建設計設計部）
増田俊哉氏（竹中工務店設計部）
司会　與謝野久氏（編集委員長・日建設計）

日時　平成9年2月11日（火）13時～15時
場所　日本建築協会



■ コラボレーションにより社会と接点を持つ

増田　1960年に京都で生まれました。関西を一歩も出ず、狭い世の中で暮らしてきました。

関西に住んでいて感じますのは、自分が動かなければ情報というのはつかめないというところですね。私が通ってた大学は、ニュータウンの中にアカデミズムとしての大学がどんとあるという環境ですから、自ら求めなければ、様々な社会とコネクトできなかった。

私の個人の素養の問題だったのかもしれませんけれども、やはり仕事を始め出してからの寮生活で、いろんな地域、大学の出身者が来ておりますので、語らいの中でかなり刺激を受けまして、それから建築に対しての視野をもう一度見つめ直したというところです。

竹中工務店に入社しましたのは1984年ですけれども、個人資本の企業家の事務所ビルのプロジェクトがほとんどなんですね。ゼネコンの設計部におりますから、そういう点からしまして、プロジェクトのどういうところで社会とコネクト、つまり接点を持っていくかということに、いつも悶々としておりました。

たとえばあるアパレル・メーカーのビルの場合、ファッションデザインという世界で常々この企業は営為として社会とといいますか、大衆とコネクトしているわけですね。そのビルをどう表現するかということで、その関係性を昇揚するため、空間に物語性を持たそうと考えました。89年ごろの作品ですが、ＳＦ的な物語空間を、訪れる方々が体感することで、この建築空間と濃密にかかわって、今までと少し異なる知覚体験をしていただける、というようなことを考えました。

それで後のほとんどの建物では、建築が実体として存在するという、プレゼンスという観点に興味を持ちました。形のあり方から観る人にいろんなイメージを得ていただくということもできるんですけれども、メッセージ性という点でアートとのコラボレーションというのに興味が向かい、アーティストの方々にいろいろと参画していただきました。これが……、クライアントを説得するのにもちょっと困難が伴い、とにかくアートを置きましょう、それがあなた方のスタンスを発信する装置になるんじゃないですかということを訴えて、彫刻家とのコラボレーションで社会とのコネクトの切り口を見いだしていけやしないかということを、考えておりました。

社会の主体が多様になったというお話が與謝野さんから出てましたが、それとともに社会も一元化して考えられてよい。今までは、ある程度一定の方向を見つつ社会が進化論的に進んでいったという世界が想像できましたけれど、今はそうじゃない。いろんなことが考えられてますが、たとえばマルチメディア社会到来とかと言いな



大宮西田ビル―テナント・オフィスビルのエントランスホールに、街路の貫入をモチーフに彫刻家・椎原保氏とコラボレーション―

がらも、実態がなかなかつかめない。そこでアートとのコラボレーションということでも、たとえば変容する社会に対して我々が投げかけるメッセージも、接点の持ち方も、やはり多様になってきているはずですから、どういうことがこれから私に出来るかという点で、いま試行している最中です。

■ 建築は人と人とが一緒につくる

川島　私は増田さんより３年早く生まれまして、会社に入社するまでず～と京都で育ち、生活していました。

日建設計に入社して４年目か５年目のころに、神戸市新庁舎を担当せよということになりまして、このプロジェクトが言ってみれば自分自身の転機であったかと思います。

これ以降、ある種の自信がつきもしました。一方で自分自身はもう少し自分の手のうちに入るスケールというか、小さなプロジェクトもやりたいというような希望があったのですが、広島のＮＴＴクレドビルとか大きな仕事が続きました。

その後景気が後退して、プロポーザルやコンペが増えてきたときに、「琵琶湖博物館」のプロポーザルで当選して、これを担当して、高層ビルとか巨大複合ビルからひとつ違うものに踏み込めました。これが竣工してようやく１年弱たとうかというような状況です。

実は私、きょうが30代最後の日でして、明日誕生日を迎えますと40代になる。偶然30代最後の日にこういう場にいるわけですが、私が入社したときに40代の方を見た目と、40代になった自分の気持ちというのにギャップがあるということをつくづく感じています。後輩たちとチームを組んで設計を一緒にやるにあたって、こういう節目節目というのは、考えさせられることが多いと思っています。

入社して10数年も仕事してますと、いろんなクライアントと接するわけですが、先ほどの與謝野さんの話にありましたが、我々が設計する上で一番大事なのは何かというと、「クライアントと一緒につくる」ということだと思うのです。一緒につくってるということがうまくいったと感じられるかどうか。感じられたときはやはり自分なりにも、あるいは作品そのものもいいものができるという実感を持つようになりました。というのも、建築主が大会社の方であろうが、オーナー会社の社長であろうが、結局人と人が、一緒に共同作業でつくっているということなんだろうと、思うからなんです。

特にオーナー社長の仕事を担当した場合に、最初は極めて厳しい目というのがあるわけですが、私を一人の人間として認めていただける何かきっかけがあるものです。そういうきっかけさえ経れば、こちらに対する信用というのを強く感じますし、そこには独特の情を感じることができます。そこがいわば関西の潜在的なバイタリティの一つではないかというふうにも思うのです。

結局、人と人がつくる建物にはやはり情というか、温もりというか、そういうものがなければ……。見た目だけとか、そういう表層だけのものであっては決していけないと。そこに手の温もりをいかに込め得るかということは、やはり21世紀になっても変わらないのではないかと思っています。関西にはそれを受け入れる素地が極めて強くあるのではないでしょうか。

■ 外部空間とつき合う

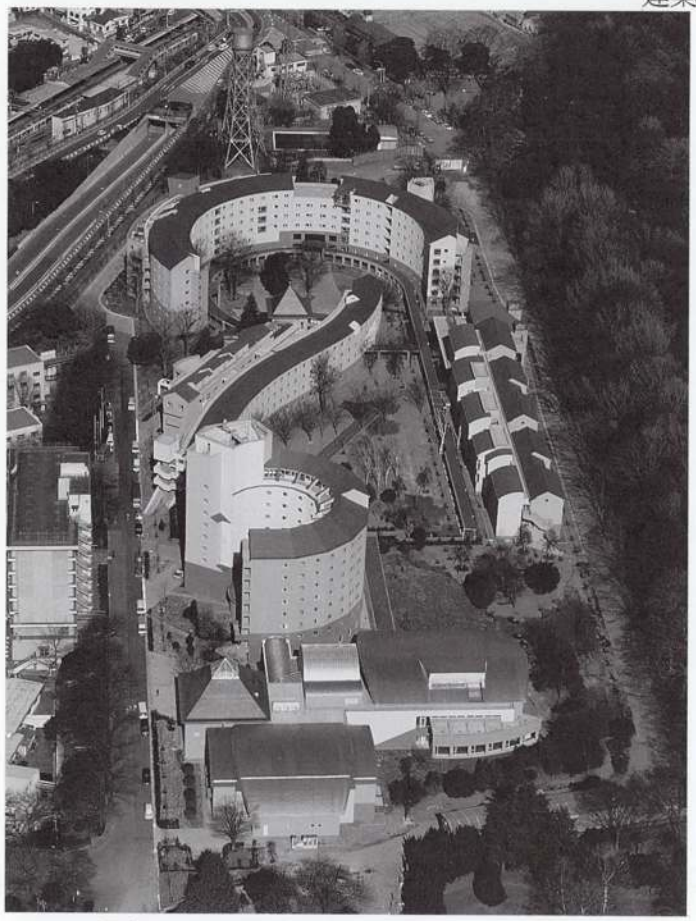
本保　私は1954年に金沢市で生まれました。

81年に坂倉建築研究所に入りまして、87年ころまでに住宅を３件設計して現場を見てというのを繰り返しておりました。その後、公共建築を主に担当してきましたが、結果として、住宅が出発点になったと思います。気持ちのいい空間づくりといった点で、つながっていくのかなと感じております。

公共建築としては、それから芦屋市立図書館、そして代々木のオリンピック青少年センターの設計と監理を担当してきました。オリンピックセンターは、今もII期、III期と続いておりますが、その仕事で東京に行っておりました。

大阪に戻ってきまして、今度は「ビッグバン」という、大阪府の子供の施設を担当いたしました。

これらの仕事を通して浮かんできて、ふるいにかけ、残ってきた



国立オリンピック記念青少年総合センター　撮影／三輪晃士

考えがあって、これから先もずっと大切にしていきたいなと考えています。

一つは、オリンピックセンターのⅠ期計画の設計を担当したときです。都心で9万平米ぐらいの敷地に建物をつくるんですが、代々木の森の緑の中に施設をつくるときに、どういうふうな施設をつくろうかということで一番考えましたのは、敷地全体をデザインしようと、外部空間を建物と同じくらい注意深く扱った点です。そして、外部空間をどういうふうにつくるかというところに苦心したように思います。既存の緑だとかレベル差のある地形だとか、そういったすでにあるものに畏敬の念を持って、大切に生かしたいという形で進めておりまして、この考え方はこれからも生かしていけないかなと思っております。

それと「子供の城」は、バリアフリーが中心テーマのひとつになっている建物でして、設計してたときは夢中で、あまり余裕がなかったのですが、今は非常に深く勉強したいと考えております。

■ 歴史を見直すことの重要性

田中　私は中堅というよりも、ちょっと古堅のほうに（笑）近いんじゃないかと思います。神戸で生まれ育ったわけですが、大学院のときに東京へ出て、初めて神戸を外から見るという、自分の生まれ育った町を外から見るという経験をしました。

ある日、神戸はいいまちだということから話が盛り上がりまして、私の恩師の池辺陽先生から、仕事をするなら、あなたの夢をぜひ神戸のまちで描いてみなさい、というおすすめがありました。

僕もずっと神戸は好きですし、じゃ、夢づくりを神戸でやってみようかということで神戸市役所に入りました。神戸市では、最初に福祉のまちづくりの条例、全国で初めてできたというその条例の制定ワークに担当者としてかかわりました。

その後、博覧会ポートピア'81にタッチし、ポストポートピアということでポートアイランドのファッションタウン、続いて計画された六甲アイランドの計画、西神ニュータウンとか学園都市、明石海峡大橋関連の舞子地区計画などのいろんな計画を担当することになりました。

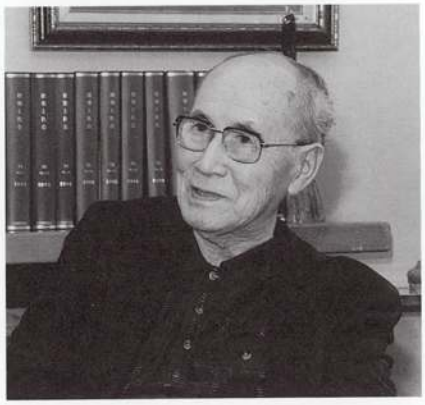
当時私の周りは土木職の人ばっかりで、役所の中で建築職は、ほんの数人だったんです。その中で建築の人がこういった行政、こういったプロジェクトの中で一体何ができるんだろうかと考えました。そこで逆に自分の役割とか使命みたいなものを強く感じたわけです。そのときに開発をやっても、イベントをやっても、中心になるのはやっぱり人間であり、自然であり、こういった自然環境の中での人間を大事にするようなまちづくりとか建築が大事なんだなということをずっと感じとってやってきました。

今回、この80周年記念誌のワーキングの中で、改めて「建築と社会」のバックナンバーを拝見する機会を得ました。そこで驚いたんですが、営々とワークされて出来た「建築と社会」の中で多くの建築家あるいは会員の方が述べていることが、現在のこの社会でも通じることがたくさんあるんですね。たとえば阪神大震災とか自然災害についても、震災のみならず水害もあるんですけれど、そういったことについては何回も取り上げられているんですね。だから自然と環境、環境と建築、建築と人間という、そういう一連の関係を見るには、やはりもう一度歴史を謙虚に振り返って見るということが必要ではないかと思います。新しいものを目指す、21世紀を目指すということも大事ですが、やはり今までの歩みの中で培ってきたものをもう一度振り返ってみるというのは大事だなと痛感してます。

■ 建築の枠組みを超えて

横尾　ここでは、最も古い人間です。1914年、九州・佐賀の生まれで、小学校2年のときに、父の勤務の関係から神奈川県の逗子に行きましてね、逗子での一番大きい経験は、小学校3年のときの関東大震災。旧制高校は逗子にも近い静岡の高等学校へ行きまして、そこで與謝野さんの伯父さんにもお会いするんです。昭和10年に、これまた大学はどこへ行こうかと。結局、京都へ行こうということにしまして……。それも何となしに建築へ行ってしまったというよ

うなことで、昭和14年に大学を出ました。



最初に海軍に3年ばかりおりまして、それから多少僕の卒業論文がよかったせいか、坂静雄先生が、京大へ戻らないかとおっしゃってくださって、爾来京都におります。

その間、大学の成長に伴って、私自身もいろんなところへ動きました。京大建築学教室、土木工学教室、防災研究所、工学研究所等、それから名古屋大学へ参りまして、創設期の名古屋大学に在職。また京都大学へ戻りました。また、定年を待たずして新設の豊橋技術科学大学へ行きまして、70歳で退職しました。

僕自身は、本来構造をやらなければいけないんですけれども、構造、さらに建築を超えた雑学を楽しんでおりましたが、日本建築総合試験所に赴任し、また建築的なことを考えなきゃいけないということになりました。そこへ地震がやってきて、その思いは複雑で、いろいろな面にわたっております。

■ 自己の問題としての「バリアフリー」

與謝野　生活の根本で、震災などを経験して初めてわかった「安全」という当たり前のことがいま改めて問われている。その辺の福祉、高齢化という分野で、皆さんの考え方、何かございませんか。

田中　バリアフリーというときに、よく段差や階段をなくして、できるだけスロープにするとか、できたら床面を揃えていくような空間構成を強要しがちです。某建築家は、「階段というのは建築の一つの手法で、階段によって視点を変えるそういう空間構成の妙があるんだから、何でもかんでもスロープだとか段差解消とか、そんなことばっかり言っていてできるか」と言われたんですが、従来の建築における空間構成のデザイン手法とそういう要求とを、どういうふうに展開していくかが重要になってきますね。

本保　わたしにもまだその答えはなくて…。近代建築では階段だとか、レベル差だとか、いろんなところで空間の妙といいますか、評価されているところがあると思います。私も学生時代からそういう空間が好きで、それをやってきたんです。レベル差なしとか、すべての人が普通に使える空間というのは、長い間ラップしないものだと思っていた。ですからバリアフリーはやっぱりやりたくないつもりでいたんですけれども、それがいまは、ひょっとしたらラップするんじゃないかというふうに思い始めたところなんです。そしてそういうふうに認識しますと、価値観や考え方も大きくシフトして、とても創造的な分野だと思えてきております。

與謝野　いずれ高齢化すると、段差があると困ることが多くなります。自分の問題としてバリアフリーをとらえないと、やっぱり川の向こうの問題と認識しがちで、事の本質に迫れないでしょうね。

川島　設計する側からすると、すぐにぶつかるのが、いろんな規則なんです。スロープは何分の一以内で、何センチ上がったら踊り場があってと、事細かく決めている。それとの格闘なんですね、設計は。この規定はフレキシビリティーがないわけですよ。これでないといかんという絶対基準になっている。でも、その規定がすべてというよりは、なぜそうなのだというところがわかっているかどうか。何も75センチ上がったら踊り場がないと絶対いかんわけでもないと思うのです。もうちょっと、なぜそうなのかというところを学ぶべきと思います。

田中　現在のいろんな基準というのは、ほとんどが車椅子の方中心ですね。高齢者になると車椅子に乗る人ばっかりじゃなくて、杖の人もいますし、それから視覚、目の不自由な方、聴覚、いろいろな方がおられます。だからまだまだわかってない人間属性への空間対応の話が落ちているんですね。ということは、建築家が本来人間のために空間をつくるという使命があるとすれば、人間をとらえる幅をもっと広げてみるという、そういう心を持てば、おのずと答えはデザイナーとして出てくるわけで、いまのままでいくと、その基準とかそういう福祉のいろんな条項というのが、それは「バリアありデザイン」ですね、設計者にとってはバリアになってるんですよ。ぜひその辺はもっと根本に返って、人間と環境というんですか、人間と空間の関係について思い至る、立ち返るということが必要じゃないかと思います。

川島　建築基準法なんかも、性能でということになってきているけれども、本来の話だと思いますね。

與謝野　バリアフリーのバリアという言葉がある間は、まだ社会としては未熟なんですよね。たとえば階段の段差をやめるということ、それは生活のライフスタイルからいけば、転びにくくする、滑りにくくする、ごく普通の人間の生活の基本からすれば、当たり前のことなんですね。建築と生活との距離がドンドン縮んでくる成熟化した社会に入っていくと、建築家の意識も上がり目線も下がって、一般の人の意識も高まれば、バリアという言葉は消えているはずなんですよ。

川島　基準というものが二重、三重、四重に出来上がっていく。

基準の、じゃ、これだけ守ってればいいんですねという感覚になるのが非常に危ないと思うのです。これは福祉のことに限らず、様々なことで情報が増えれば増えるだけ、これをやっとけば大丈夫という、それは何のためなのかとか、そこもとを知らずしてこれだけを知るということが、世の中非常に、多いと思うんですよ。

増田　先ほどのスロープの話でも、僕は当初、車椅子のことばっかり考えてましたけれども、自分に子供が生まれたときに感じたんですが、乳母車にとっても大切なんだ、と自己に翻って考えが及ぶと、はじめて腑に落ちるんですね。だからやはり建築家としてそれを解釈していかなければいけないんだと。決める側は、やはりカリスマ的な数字はどこかで決めざるを得ないと田中先生がおっしゃった。ただし、これは、いずれはまたいろんな検討をもって変える素地があるんだという意識で決められるのが、一番大事だと思いますね。



僕が言いたかったのは、主体の多様化ということもありますから、選択肢を多分に多様化して考えるべきじゃないかということです。

本保さんもおっしゃったモダニズム初期も、たとえばあの当時はダイナミック空間、4次元空間とかという背後にはそういう理念がありましたけれども、コルビジュエがスロープで建築を作品をつくっているわけです。

田中　建築家そのものに関して言えば、もう少し生活者の視点というか、ユーザーサイドに立った原点に戻るだけだということと、それからいま確かにいろんな情報がありますので、その情報をどういうふうに提供するかということと、情報をどういうふうに受け取ってどう判断するかという、そういう価値観をもう少しみんなで議論しないといけないと思います。

それから一点、たとえばどこの駅に降りても同じような駅前があるというように、その地域性とか個性というのがなくて、なんか金太郎アメみたいにいろんなものがつくられているというのも、ちょっと問題じゃないかなと。先ほどおっしゃったように人の温もりとか、その場の関係で読み取ってつくっていくというようなやり方が、より求められるわけです。先ほどの福祉のことにしても、その高齢者と、こちらの高齢者は違うわけで、同じものをどうぞと与えるのでは、かえって問題が出ると思います。まちも同じことで、まちに合ったまちづくりの仕方はそれぞれ違うと思うのです。それだけに、ほんとの意味でのその場所での条件をうまく読み取れる技術、設計、デザイン、そういうものがこれからより求められます。

時間（とき）を読む

與謝野　たとえば大阪のまち、関西のまちには、結構歴史的遺産が多いわけです。そこで大阪ならではのまちづくりの知恵というか、その辺の「まちづくり」について、21世紀へ向けての提言や視点をお話し下さい。

田中　デザインというのは、古いものを守るだけじゃなくて、新たな歴史をつくるみたいなところがありますから、非常にむずかしいんですが……。その地域とかまちがなんであるかということが全然わからなくて、ポーンと暴力的に何か持ち込んでつくってしまう、場合によっては現在あるものを邪魔ものとしてスクラップしてしまうみたいなところが一番問題で、いかに過去の脈絡を読み取るかが大切です。みんなで共通のスタート台に立つためにタウン・ウオッチングとかサーベイとかを、まず当たり前のこととしてやる必要があるんじゃないかと思います。

それから、いいものはいい、悪いものは悪いというように、建築家だけじゃなくて建築家を取り囲む人々が同じようにものを見る目を持つ、そういうチャンスもつくるべきじゃないかなと思うのです。

與謝野　本物を見極める目ですね。それと今のお話に関連しては、やはり「時間を読む」という視点は大切ですね。要は新しいものをつくるにしても、その環境の50年前から今日に至るまでの歴史を読み、その上で、50年後を読み通す設計をする、時間の連続性というか、これがなかなかまちづくりの上で、抜けるんですよ。「守る」ということが不得手なのか。まあ日本の家屋は、紙と木で出来ているからすぐに新陳代謝して、守るということをあまり大事なものとは思わない国民性はあるように思います。その国民性がスクラップ・アンド・ビルドという発想につながっているのではないかなと思うんですけれども、その辺についてどうですか。

本保　いつも極論なんですが、古いものを壊すのはやめたらどうかということを考えております。そういうエリアや通りを指定するということになるのかもしれません。すでにあるものや、先人のなしたものへのオマージュがもう少しほしいと思います。また、30年前は古くさいんだけど100年もてば価値が出てくるんじゃないかと、そのあたりを期待し



たいのです。子供のときの自分が育った風景が、大人になって変わって、また大きくなってどんどん変わっていく、あるとき戻ってきて、その風景から、何も感じとれないような風景は非常に寂しいといいますか、やっぱり辛いなというところがありまして、そのすぐ変わらない風景みたいなのがあって、自分がどんどん時間の中で変わっていく中で、それを指標にして、自分がどれだけ変わってきたかというのを常に確かめるような、そういった役割みたいなものが風景や景観にもあるんじゃないか。ですから、そういったのを壊さないでいたい。50年前のものでも100年前のものでも。

横尾　今から14、15年前、「建築と社会」が盛んにアメニティ特集をやっていました。イギリスでは1967年にアメニティ条例というのが出来たんですね。それは産業革命以後の資本主義社会のもたらしたいくつかの矛盾に対する答えであって、どんどん壊していくというんじゃなくて、やはり懐かしさとか親しみとかいうものが自然に対して、また建造物に対してもあるわけですね。そこで歴史的建造物のヘリテージ、遺産を継承するというような思想が出てきたんだと思うんです。

それともう一つの点は、日本の建築的遺産は木と紙なんです。だからその伝統を継承しようと思えば、お伊勢さんみたいに式年造営をやっていかなきゃならない。

国土が狭いものだから、スクラップ・アンド・ビルドはやむを得ないと思うんです。そのときには形の継承もありましょうが、その中で一つの発展があるわけですね。それは日本の特色だと思うんです。極度に狭いということの証拠としては、低平地当たり人口密度の比較によりますと、昭和45年ごろの統計ですが、日本の人口はほぼ1億ですね、そうするとヨーロッパは二千数百万。日本の中世。江戸時代の三千万にも満たないんです。アメリカは三百万だったと思うんです。そうすると日本の奈良時代が六百万とか七百万といいますから、これは古墳時代だと。だから古墳時代のゆとりと、中世のゆとりを持ったものは、そのまま日本には当てはまらない。

與謝野　昔の言葉で「我等臣民三千万」とかいう言葉がありましたね。そうすると日本国人口は明治初期の三千万から、いま一億二千万ですね。三千万だったら、この国土はもっとおおらかになったでしょうに……。

さっきのアメニティの話で、イギリスは当時からもう環境という社会的なプロパガンダを上げていたんですが、まあ「環境」という問題のとらえ方と、先ほどの「生活」というとらえ方とは、建築というジャンルの中では、もう全く同じなんですね。

この辺で、環境とそれまでの生活の歴史とのかかわりにおいて、何かお考えがあればお伺いしたいのですが……。

■ 社会的ストックの時代



川島　これからはストックの時代であると言われていますよね。

最近、神戸税関の増築を担当しました。昭和の初めに建てられた旧館はきちっと残して、新しくウィングを延ばすという形で設計し、現在、施工中です。この旧税関というのは歴史的な意味もあるし、大いなるストックだと思うのです。ただ、もとのまま記念碑的に残しましょうというだけでよいというものでもないと思うのです。じゃ、そこに新しい機能を加える。研修に来た人の研修施設にし、あるいは一部泊まれるような施設にしようかとか、意匠的にすぐれた部屋は特別応接室として残そうとか、そういう議論をして、リフレッシュしようとしている。

一方で、昭和50年ごろの設計の建物を、新館も建てるが、古い建物もリフレッシュして使いたいというような仕事にも巡り合いました。時を同じくして、昭和に入るか入らんかの建物と、昭和50年代の建物のリフレッシュを設計したわけです。

まさに21世紀というのは、リニューアルの時代になるのではないでしょうか。紙と木で出来ていた建築がどんどん都市部ではコンクリートの建築に様変わりしてきています。コンクリートの建築をそうたやすく壊してスクラップ・アンド・ビルドできる時代じゃもうなくなっている。じゃ、これをどう使うか、どう生かすかという時代になってきたときに、何かそこにテーマ性を持たして、今までのイメージと違うインテリアがつくり出せるはずだし、ひょっとしたらエクステリアだって一部変わっていくような時代になるんじゃないかということを感じています。

田中　建築のファサードとして、町並みを構成している骨格はまず残しておいて、中身は機能更新をどんどんしていくとかですね。ヨーロッパなんかでやっている技術であるとか、そういうようなつくり方をもっと学ぶべきじゃないかなと思いますね。

與謝野　ヨーロッパではこれはもうごく当たり前の生活の知恵になっています。結婚した当初は、あるアパートの、新婚さんにふさわしい大きさと雰囲気の間取りの住居を選ぶ。子供ができて3人、4人になると、その間取りの住居―築後300年だったりするアパートですが―へ移り住む。自分が動いていって、しかも内部は結構更新できるようなものがあって、そこに生活受け入れの多様性が生ま

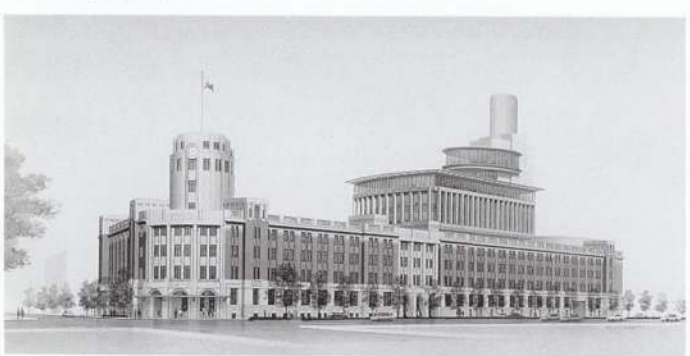
れるんですね。そのような長寿命のまちの仕組みの考えを早く取り入れないといけないと思います。

増田　それで考えてますのが、残し方の問題にあると思うのですね。これは事業所サイドと、クライアント、資本家サイドの話ですけれどね、博物館的に残してもほんとにその建築は幸せかというところで議論していかないと、ヨーロッパではもう日常的というか歴史的にいろんなプログラムを組み替えて、だから今使えている、残っているという世界がありますね。日本の場合、地価の高騰で土地に対してかなりな価値がありますから、建物は残すよりは建て直したほうが得だという収支の世界で、経済合理的に決まっちゃうわけですね。それに歯止めをきかせるのに、クライアントと我々との協議だけでいけるかとなると、やはり行政の力を借りないとしようがないですね。で、神戸では、比較的それがうまくいってるように感じるのですが、大丸とかがある程度、商業という枠組みの中でですが、ストックの展開を続けています。

田中　旧居留地ですか？あれは、そういう建物の古い文化的な側面を、お客さんの目を引き寄せるポイントに使った非常にうまい戦略だと思いますね。だけど、単に商業ベースの話じゃなくて、文化としてそういうものが大事だと、自分たちのまちでそういうものを大事にしないといけないという風土をつくらないとダメなんじゃないかと思います。

川島　税関は昭和になってすぐぐらいに竣工した建物ですから、“ロ”の字型プランをしてまして、ウィングが全部事務室で、真ん中に大きな2階吹き抜けの大ホールがある、そんな建物です。当初、それを建て替えようという考え方があったようです。

玄関に丸い円筒形の時計台があるから、そこだけ残して、その後ろにどんと高層ビルを建てようという企画もあったようですが、旧館の“ロ”の字の中心の吹き抜けのところを中庭にして“ロ”の字の西のウイングを撤去して、新しく10階建てぐらいの低層オフィスを“コ”の字型で、中庭とアトリウムをはさんでつくるということになったのです。



神戸税関　写真提供／日建設計



大同生命大阪本社ビル　撮影／黒田青巌

まさにこれが発想の転換だと思います。古いものでもこう使える、形を変えながらもこの庁舎は生き続ける、新たに息吹を入れる、そういうことだったのかなと。

階高は決して豊かではないのです、この建物は。だけど、場合によってはエクステリアが多少変わることがあるわけですよ。変わったっていいと思うのです、変わり方さえ健全であれば。

横尾　根底にあるアメニティ。愛らしさ、親しみ、よさ、そういうものをつなげということでしょう？

■時間（とき）をつなぐ

與謝野　肥後橋の大同生命ビルをやったときに感じたのは、「時間をつなぐ」という先ほどの教訓です。旧ビルは非常に優れた建築で、市民に愛されていました。耐久性の限界を迎えて建て替えるにあたり、旧ビルのイメージをぜひ継承してほしいという依頼を受けて、設計に取り組みました。まちの中のランドマーク性という、そのビルが果たしていた歴史的な役割をつないでいったというわけです。単につなぐんじゃなくて、時代精神と技術と息吹を吹き込んでいくことにも注力したわけです。いまの税関の例なんかでもそうですね。やはり日本のまちの景観には、もっと深みを持たせる努力を広げていくべきですよね。深みを持つには時間をつなぐという考えがないとダメで、全く博物館的に残すというやり方もあるけれども、まあその時代の息吹も入れてつなぐ考えもあってもいいと思うんですよ。

横尾　一つの標識でも、そこにイマジネーションを誘うものがあ

れば、歴史性があるわけですよ。かつておりました豊橋には、戦災ですっかりやられていたが、名前に「大手町」とかが残っているんです。京都には、「池田屋」は残っていませんが、池田屋騒動で坂本竜馬が遭難したというのが街角に建ってると、それだけでも歴史性を感じます。だから豊橋でもそんな工夫はどうだ、と言っていたら、市長は早速、そのいろんな歴史的スポットに標柱を立てました。

僕はそういうイマジネーションを誘うような、それもただ立てりゃいいというんじゃなくて、やっぱりそこに雰囲気が必要ですわね。だから大阪には、例えば中之島あたりにはところどころに標識があります。非常にいいんじゃないかと思うんですがね。



田中　それは、アイデンティティをどういう形でデザインしていくかということにつながると思うんですが、建築とか具体的な道路であるとか、構築物だけでつくるんじゃなくて、生活の中で語り継がれてくる歴史的なものを大切にする。だからさっきおっしゃったように時間のファクターであるとかですね。

それは、音楽であってもいいですし、食べ物であってもいい。いろんなものでその都市とか地域に対する人々のイメージをうまく引き出してくる、活性化するという、そしてわが街を感じるという、要は感じる場面をどうやってつくるかというのが、建築家とか環境デザイナーの役割ではないかと思うんですけれどね。

横尾　僕自身、とくに環境問題に関心を抱いてましてね、ドイツあたりは、非常に環境問題への取り組みが進んでるようですね。例えば自動車も、完全リサイクルへ持っていこうと。日本は国土狭隘でね、だから環境問題は一生懸命やってても、その捨て場の問題とかで突き当たってくる。

建築に限定して言えば、建築はいずれ廃棄物になるわけですよ、また、土地が狭隘だから、スクラップ・アンド・ビルドはある程度やむを得ない。そのときに、できるだけリサイクルするような心がけで建てていかなければならない。

そうすると、建築には仮設性が求められる。デザインのうえでも発想が違ってくると思うんですよ。現代建築は構造はパーマネント性を要求しているが、実は要求してない面があるんじゃないんですか。ガラスを張った壁なんか、仮設性が強いですよ、初めから。透過性が強い、また取り替えてもいいというような感じがあるでしょう。構造耐力的には、しっかりして恒久性があるんだけれど、古いもののように主張を持たない。よく煉瓦造の後ろにガラスの壁をくっつけますわね。

田中　デザイン的には、そういう本質的には固いものと、やわらかい軽いものといいますか、仮設性の対比でデザインをやるという面白さというか、新鮮さもありますね。

ちょっと話は戻るんですが、阪神間の住宅地は、きょうも電車に乗ってくるときに見たんですが、凄い町並みになってきてるんですよね、今。プレハブ住宅といいますか、どこかの住宅展示場が六甲山を背景にして建ち並んでいるような……。

與謝野　さっき本保さんが言った外部空間ね、ハコ物の建築も大切ですが、植栽であるとか自然とか、そういうことで新旧の建築を覆い隠す、それで緑の町としての歴史を厚くしていく。建築の群ではなくて。阪神間には、そういう風光明媚なところがありますから、六甲山の裾野の緑がずーっと続いてね。そういう発想でまちづくりにおける「時をつなぐ」概念をとらえたらいいかもしれないですね。

■ 未来都市への夢

田中　だけど、その山麓はいいんですけれど、どんどんどんどん上へ登ってきて、六甲山の縦の幅が随分と減ったなあという感じがします。一方で、たとえば超高層建築とか、大深度地下とか、いいとか悪いとかいうより、どこまで出来るかやってみよう、みたいな話がありますよね。それはある種、未来都市の夢みたいな形で、子供の絵で見ても、超高層のビルなんか描いたりしてるんですけれど、そういうのは一体どう考えたらいいんでしょうね。(笑)

横尾　もっと率直に好き嫌いを語っていいんじゃないですかね。構造屋の仲間に言うと、超超高層とかいうんですが、まさに都市なんですよ、これ。都市をつくろうというんです。バベルの塔じゃないが、僕自身は全然いただけませんね。ただ、技術的可能性を探るという訓練のためにはいいと思う。たとえば宇宙が狭くなったから、どこかの宇宙空間に住まおうなんて発想に近いと思うんですよ。

田中　果たしてこれからの都市環境の中で建築空間を考えていくときに、「交通」はどんなものがどう来るんだろうかという話が、大きく影響するんじゃないかなと思うんです。

たとえば今の超高層ビルの話でも、ヘリコプターがとまれるようにするために水平な部分が出てくるとなると、スカイラインが途端に変わってくるわけですね。あるいはグランドレベルでも、どういうところにどういうものが来るかによって違いますし。だからそういう交通との関係で建築のあるべき姿みたいなのを、もうちょっと

議論してもいいんかなあという気がするんですね。今までは土木屋さんとか別な人がやってるという、別問題だったんですが、そうじゃないと思うんです。

與謝野　日本のタテ割り行政の泣き所ですね、道路と建物が別々に開発されている……。これは規制緩和で、なんとかならないのでしょうか。省庁を統合するとかね。あれをやれば、ちょっとは……それこそバリアがはずれるんじゃないかと思いますけれど。

増田　そういった意味で、原広司さんが梅田スカイビルをやられましたね。ただし、20世紀初頭ニューヨークの摩天楼アーキテクトが摩天楼の上層部で鉄道をつなぐといった、夢を描いていた時期があったんですよ。あの当時は輝く未来、マンハッタンという限られたエリアでの都市動線への提言という意義があった。それが今、実現して果たしてどういった社会的意義があるのかと、常に社会性を問い続けなければなりませんが……。

田中　あのスカイビルのプレゼンテーション、全く宇宙ステーションですね。最初出てきたときのイメージがね。だから僕は都市のイメージを新しくつくるということで、物凄くインパクトがあったなあと思いますね。ただ、全部があんなビルばっかり建ってしまうと、落ち着かないなあという……。

増田　だからビルとビルの間を上空で歩けるというのは、非常に夢に近かったところがあると思いますね。

■「公」の概念

與謝野　ある社長さんがおっしゃるんですが、日本というのは、「おれが、おれが」の建築が多いと。結局自分のビルだけの……自分のビルの主張を優先してしまう。向こう三軒両隣がどうで、それからその環境のいわゆる「コンテクスト」を読み取って、こうあるべきだという発想が弱いと嘆いておられた。

ヨーロッパの場合は、歴史が300年、400年続いている中でやっと得られた更地があって、その場合でも両隣、向こうの建物がどのような歴史を持っていて、その上で新ビルは「こうあれかし」と打ち出す。さっきの時間をつなぐ話とも重なっていけばいいんですが、日本では、さっき横尾先生から度々出た国土狭隘のため、この貴重な土地があるから、自分の「存在証明」ができるんだと。それはもうガーンと建てるんだと。隣はどうでもいいというね。もうこれからはこれを脱皮しないといけない時代ですよね。

横尾　僕はこのごろ考えてるんですけれど、「公」って何だと。そうすると、建築基準法の第１条なんかでも、最後は公共の福祉のために、都市計画法も公共の福祉のためにと書いてある。

司馬遼太郎の絶筆みたいになったのに土地問題があります。同氏の古い著書に『日本人と土地』があります。結局それは土地の公共性を追求した座談会なんです。日本人の「公」というのはなんだ、ヨーロッパの「公」とどう違うんだ、結局、精神的風土にかかわる問題になってくると、非常にむずかしい問題だけれど、この際いろいろ考える必要があるんじゃないか。

川島　たとえ話で、美しい川が流れて、その川沿いに敷地がずーっとあるとします、区画がバーッとあるとします。日本人なら、川に向かって目いっぱい建てて、道からすぐ目立つところに駐車場をつくって……。ところが、アメリカなんかではどちらかというと少し短冊状に建てて、道行く人に川が見えるように……。

増田　「存在の社会性」といいますか、個人も社会的存在であるという認識が日本人に果たしてしっかりとあるのかどうかと。個人もやはり社会的存在だとすれば、建築もそうであると考えることができれば、そんなことにならないはずなんですけれども、元来の精神風土が、そうさせているんでしょうね。

横尾　今日のわれわれの精神状態は、あまりにもギスギスしちゃってるから、もうちょっと日本人の昔に戻ってね……。われわれの精神的風土にはもっとおおらかなところがあったんじゃないかと思うんですがね。

田中　そういう意味で、市役所なんかで超高層をつくった場合に、上を市民のホールにするという……神戸市の新庁舎でされてますが、ああいう形というのも、僕はパブリックな意味で、いいと思うんです。もっといい空間の出合いを市民に提供するという役目が、空間をつくる人には要るんじゃないかなと思いますね。それが先ほど言った商業主義だけでやられると、ほんとに寂しいですよね。

横尾　だけど、商業主義の背景に、さっきおっしゃったようにいろんな心構えを昔の人は持っていた。

與謝野　結構倫理観はあったんですよ、「三方徳」というように。大阪は商人のまち、「卸商」のまち、つまり薄利多売の商行為のまちでしたので、自然と人と人との付き合いも大切にした。だから「信用」という基盤が大事であると伝えています。非常にデリカシーある人情の機微まで育ててね。その反面、ビジネスも厳しいものでした。ところがなにか……最近は、随分様相が変わってきたようです。

■サステーナブル・ディベロップメント

與謝野　先生、どうですか、30年前では予測もできなかった社会現象の、激変を経たことといいますと？

横尾　1970年にローマクラブが「成長の限界」を出した。それ

は、世界モデルで考えて、30年後には資源の危機が来るという予言をしたんだけど、実は資源の開発が進みましてね、危機が来ない。あれは嘘じゃないかという気分が起こってきたんだけれど、やっぱり警告されていた食糧と人口はどうしようもない。それからCO_2の温暖化、温室効果というのが出てきた。さらに、フロンガスによるオゾン層の破壊。新しい問題が出てきたわけです。

それに対する先進諸国の答えは、サステーナブル・ディベロップメント、維持可能なディベロップメントという考え方です。それを受けて、いまISO14000というのが出てきたわけです。企業の環境とのかかわりを問いかけることになってきている。これは、ぜひやっていかなければいかんと思うんですよ。ISO9000というのは、ある意味で自由競争の世界における企業形態はかくあるべし、ということでしょうか。それをいま日本の建築界でも取り組まざるを得なくなってきているようです。だけど、21世紀のためにISO14000という課題があるわけです。こういうのは、20歳代の人にとっては「自分たち」の世紀の問題ですね。今日的課題として取り組んでいかなければならない。

與謝野　自分の未来の生活とかかわりの深い課題ですね。

田中　環境を地球的な視点に立って考えるとなると、建築の歴史というのはまだ短いですよね。建築協会が80年、人生70年か80年、ちょうど人生と同じぐらいですが、おそらくそれの何倍も大きなスパンでないと、さっきの兆候がはっきりわかってこないというのがあります。だけど長期スパンで考えなさいといっても、個人はとりあえず今の仕事をやってますから、そんなことを考える余裕もないですよね。だから時間的なベクトル、空間的なベクトル、広がりをもって見るという、もうちょっと大きな立場でものをつくる技術が要るんじゃないかなと思いますね。

横尾　技術が要りますしね、やっぱり社会の認識がそこへいかないとだめですね。

與謝野　社会の価値観と自身の価値観との「融合」の問題とでもいいましょうか。

横尾　企業には、かえって敏感な人が多いわけです、企業のトップは。ローマクラブだって、企業のトップが考え出してきたことですからね、イタリアの自動車のフィアット。

與謝野　日本の文化についての価値観も、企業がつくってると言えばそういう側面もありますね。

7時に起きて8時には家を出て、9時から就業して5時半、何千万という人たちがほとんど同じようなライフスタイルを営んでいる。考え方も、会社によってそれぞれ特徴はありますけれどね、その企業が文化の醸成に随分影響を与えてしまっているというのがある。これは決していいという意味で言ってるのではない。ある本では、日本というシステムそのものが不幸であると書かれている。あのような視点に出食わすと、我々のライフスタイルと価値観について、いささか反省せざるを得ない。何千万人がザーッと同じような行動をしている、比較的同じ価値観を持ってね。これからは、全く発想のベースの異なる文化と接触し、融合を繰り返して、価値観をもっと多様にしないといけないでしょうね。

それと、少し次元が異なりますが、昨今の未成年世代の精神の荒廃を見るにつけ、社会の「価値」の基準がなくなってしまっている寒々しい現象が目の前にあります。

横尾　しかし、一番大きなファクターは、やっぱり環境問題。グローバルな環境問題というと地球の温暖化とか、フロンガスとかいろいろありますけれども、ローカルな環境問題は国土狭隘なために随分あるんですよ。

大阪でまた廃棄物の島をつくると、今朝の新聞で言ってるでしょう。海のある都市はハッピーだが、海のない京都みたいなところは困ってくるんですよ。だからある程度そういうことをやりながら時代を切り開いていかなければしようがないと思いますね。その中に、「サステーナブル・ディベロップメント」という思想を建築家の中にもだんだん取り入れていくとか……急にはいかないけれども。

與謝野　さて本日の座談会は、21世紀を見据えて「私はこの視点を大切にしたい」という主旨で、皆さんに活発に意見を出していただきました。出席者一人ひとりの視点は明瞭になったのではないかと思います。

この中であえて共通の視点があるとすれば、社会の中で「変わらない部分」に目を向けることではないかとの印象を受けました。実は、タイトルを「建築と私と社会」としたのは、最近精神の荒廃からよく話題に出る「公」という概念を、「個」との関係において、ご自身の体験を踏まえて、21世紀へ向けての望ましい姿として、座談会の中で打ち出していただきたかったわけです。この「公」と「個」との関係について、社会の中での「変わらない部分」に目を向けることで貴重な提言を含めて活発にご意見を出していただき、所期の成果は十分に得られた思いがしますので、ここで座談会をお開きにしたいと存じます。



本日はお忙しい中を、本座談会にご出席いただき誠にありがとうございました。

80th Anniversary

特集●建築と私と社会—80人の眼

特集に登場した人々

堀内三郎
近藤正志
高橋慶夫
岡橋作太郎
興謝野久
石田潤一郎
山形政昭
田中直人
吉村英祐
笹村欽也
倉渕奈千子
富田昌義
梅村宏尚
渡邉秀俊
今井祝雄
海野　弘
江田修司
栄久庵憲司
河内厚郎
河村立司
北大路善之助
高橋惠子
疋田正博
諸岡博熊
相川三郎
生井昌樹
石古　香
越智隆晴
大野拓也
狩野忠正
久保清一
小西　岬
小林弘昌
小山貴寛
髙砂正弘
竹本俊平
知花弘吉
中島　一
中山　諭
深谷浩一
本庄千恵美
増田敬彦
丸川成平
三輪泰司
森　傑
薮　達彦
山本俊輔
香川英行
片山孝治
喜多俊之
金　泰彦
黒田　清
佐藤重夫
末次攝子
高田秀三
徳田裕英
橋本秀夫
服部万里子
藤谷　宏
八木マリヨ
横尾義貫
川島克也
本保基人
増田俊哉
今村有希
天野弥生
井川智収
野下　力
楠原康正
西尾太一
松田直子
中田優佳
神戸市立多聞南小学校の子供たち

特集の編集にかかわった人々

前田　衛（日建設計）
貝森忠人（神戸市教育委員会）
新賀先生（神戸市立二葉小学校）
吉井教頭（神戸市立多聞南小学校）
畑　康之（本会編集委員）
西岡道雄（　〃　）
長瀬　正（　〃　）
河原正雄（　〃　）
城戸史郎（　〃　）
江副敏史（　〃　）
上田セキ子（日本建築協会）
大島正樹（　〃　）
黒田能弘（　〃　）
増田栄一郎（　〃　）
森本　勉（　〃　）
吉崎裕子（　〃　）



撮影／上田セキ子

震災復興とまちづくり協議会

三輪　康一

昨年11月に神戸の長田区で「世界鷹取祭」が野田北部まちづくり協議会など地元まちづくり組織を中心に、数多くの声援、応援のグループの支援を得て開催された。被災後地元を離れて暮らす人々が戻ってきて旧知の人と再会するコムスティの実践の場として、また復興まちづくりを再認識する場として、写真展、映像祭、建築展、各種シンポジウム、ワークショップ、住宅再建相談会、コンサート、スペインの子供サーカス、大道芸、だんじり、スタンプラリーなどの催しが３日間にわたって行われた。この祭りの成功は、実行の核となる協議会の確固たる存在とさまざまな企画を持ち込む支援団体との柔らかな連携による。いうまでもなく、復興まちづくりは地元住民の主体的な取り組みが不可欠であり、その組織としてまちづくり協議会があるが、それがあればまちづくりが順調に進むというものでもない。震災後３年目になっても成果が目に見えず、役員の負担増、若い人の参加が少ないことから疲れもでてくる。しかし、まちづくりは息の長い取り組みであり、そのため、鷹取祭のような元気をだす仕組みが必要となる。協議会方式によるまちづくりでは、ものづくりとルールづくりが大きな柱であったが、こうした復興の取り組みから、ひとづくり（地元や支援の人々のネットワーク）がその基礎にあることを思い知らされる。

神戸大学工学部建設学科助教授

日本の原風景

――石窟社寺の魅力と技法

上野　卓男

日本人の心に通う原風景の一つに石窟社寺をあげておきたい。日本人の原風景は、うつろいゆくものに愛着を覚え、人工と自然との同化を願い、永遠的なるものを好ましいものとしてきた。鵜戸大社や那谷寺など石窟社寺の魅力の源泉には、それなりの深さを感じて止まない。

一般的に、空間と人間とは心的関係を抜きにして考えられない。好ましい関係であるためには空間の作用による刺激が何らかの感情の高揚を呼び起こすことが前提になる。そのためには、設計構想として外界に与えた制約が人々にバーチャル・リアリティー（仮想現実）を体感させるものであらねばならないと思う。

石窟社寺の魅力は、山水画のそれと共通するもので、そこでは単に自然の中に洞窟や庵がかかれているだけでなく、その中に人を導いて見せる技法としてバーチャルが働いていて、見る人を知らず知らずの内に桃源郷に誘うことを可能としたことだと思う。その場には、人を動かし位置関係を変え３次元に浮遊させる力がある。様式的とも言えるこの技法は、人の本能に内在する“始源的な詩情”（Poesy Originality）を誘引することで心に通う原風景に高めるものと解している。

世の中が近代化を突き進む中、私達はもう一度この“永遠的なるもの”の価値について一考する必要があるのではないだろうか。

大阪府建築部営繕室長

エジソンと竹

塘　　伸夫

今年は偉大な発明王エジソンの生誕150周年にあたる。人間社会に役立つ多くの発明は、1,000件を超えるといわれるが、中でも白熱電球は、世界に明りをもたらす画期的発明であった。その電球のフィラメントに京都の八幡の竹が使われたというのは驚きである。

ところで竹と言えば日常生活での利用は広範囲で、竹のやらない事は何かと言った方が早いくらいである。建材としても利用度は高く繊細な直線美は数寄屋建築の造形美に欠かせない材料だ。わずかな肥料と水で育ち、公害にも強いことからビルの谷間等にも多く植られ、清潔で静かな緑のたたずまいは、見る人を都市の喧噪から逃れ幽玄の世界に誘なう不思議な魅力を持っている。

竹の特性を人のよすがとして引用される場合も多い。竹は竹の子として地上に頭をもたげて、わずか３ヶ月で急速な生長を遂げ、以後地上では大きくならず、栄養分をもっぱら地下茎に送り続け、新しい竹の子の生長に寄与するそうだ。地中の見えない所での弛まぬ努力が、新しい生命を生み出しているのである。天才エジソンとて、多くの発明の陰に、人知れぬ努力があったに違いない。エジソンがこう語っている。「天才とは99%の努力と１%のひらめきである」と。

東畑建築事務所設計部長

建築家の文章

田中　英一

ある雑誌の編集会議で、建築家の先生方の書く文章は難解で何を言っているのか分かりにくい、と言う発言があった。そう発言した方は以前建築雑誌の校正に携わっており、オリジナルが分からなくなるほど手を加えたこともあるそうである。また、そこまで手を加えて分かり易くするのがその雑誌の特徴であるともおっしゃる。しかし、そんなに手を加えて原稿とは何んぞやという疑問が残るが、確かに建築雑誌には難解な文章が多いことは否定できない。このこととは他の専門分野の人達との会議の席でもよく出る話である。仮りに建築がそんな難しい言葉や理論の上に成り立っているとしたら、建築とは大変理屈ぽく窮屈なものであり、のんびりと欠伸や居眠りなどしてはおれない。とりわけ私達が目指す建築は次の４つに集約されよう。「環境との調和」「美と永続性」「明確な理論と意図」「適切な技術の統合」。これをまともに説明すると確かに難しく難解な文章になる可能性がある。しかし、本来建築とは人に優しいものでなければならず、気持ち良く住める、働ける、楽しめる器に過ぎない。難しい言葉を使って説明したほうが簡単かも知れないがそれはごまかしになる。建築家はもっと分かりやすい言葉で建築を語り、多くの人に理解されるよう努力する必要がある。

大成建設大阪支店設計部長

建築と社会 4

1997

1917年創刊　第78集／通巻901号

ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

今月の表紙
京都の産寧坂
撮影　松村芳治
表紙デザイン　安里俊久

CONTENTS

特集●　建築と私と社会—80人の眼—

Ⅰ部●過去から現在へ
[建築と社会の80年]
＜関西建築界＞の成立●石田潤一郎 —— 12
「建築と社会」誌にみる関西建築の波頭●山形政昭 —— 15
[「建築と社会」と時代の世相]
1917～1926　大正デモクラシィから昭和モダニズムへ●田中直人・吉村英祐 —— 18
1927～1936　昭和モダニズムの開花●田中直人・吉村英祐
1937～1946　日中戦争、太平洋戦争、そして終戦●笹村欽也
1947～1956　廃虚からの復興…戦後10年●倉渕奈千子・富田昌義
1957～1966　新しいライフスタイル／ゆれ動く価値観●倉渕奈千子・富田昌義
1967～1976　高度成長期からオイルショックまで●吉村英祐
1977～1986　オイルショックをのりこえて●田中直人
1987～1996　十年一昔●梅村宏尚
1997～　近未来の建築と社会●渡邊秀俊
[まちの風景80年]
大阪のまちなみ、建物 —— 35
Ⅱ部●現在から未来へ
[社会の眼・建築の眼]
●社会の眼からみた建築 —— 38
20世紀の面影●今井祝雄　小さなプラハのために●海野　弘　新たな批評の場を●江田修司　建築家の価値●栄久庵憲司　「場」の充実へ●河内厚郎　21世紀が来る前に●河村立司　建築家モーツアルトは天国で●北大路善之助　「人の生活」をつくる●高橋恵子　生活美学の回復●疋田正博　建築界に望みたいもの●諸岡博熊
●建築の眼からみた社会 —— 44
建築をつくり出す人びと●相川三郎　建築—夢の統合体●生井昌樹　心地良い場●石古　香　国土の保全に科学的手法を●越智隆晴　垣根をこえて●大野拓也　鏡十卵●狩野忠正　「人の営み」と「場」の関係●久保清一　建築と時代の流れ●小西　岬　「つくる」変革●小林弘昌　建築とは何か●小山貴寛　風景をつたえる建築●高砂正弘　自然の浄化能力を借りたまちづくりを!!●竹本俊平　心身機能の恢復をめざす空間●知花弘吉　建築と自然・文化・生活環境●中島　一　切り刻むこと●中山　論　いま思うこと●深谷浩一　実感するということ●本庄千恵美　世界を拡げよう●増田敬彦　震災復興と建築●丸川成平　80年の未来社会と建築へ●三輪泰司　人と場所とコミュニケーション●森　傑　常識を疑ってみませんか?●藪　達彦　創造と想像●山本俊輔
[20年後の建築・都市]
●20年後の建築・都市の夢を語る —— 56
商いと街—そして建築●香川英行　20年後にそうなれば●片山孝治　時は2017年●喜多俊之　地下都市はできるか—人類の新たなる夢への挑戦—●金　泰彦　失われた都市を求めて●黒田　清　われわれの「建築の夢」●佐藤重夫　20年後、の夢一ん?●末次攝子　危機への対応と心の再教育を●高田秀三　自立する建物●徳田裕英　えくぼのある都市●橋本秀夫　活力ある高齢化社会としての日本●服部万里子　21世紀の建築士に期待する●藤谷　宏　空っぽの建築—心の庭をつくる環境彫刻—●八木マリヨ
●未来のまち—子供たちの画くまち— —— 64
[座談会]
●建築と私と社会—21世紀を見据えて— —— 66
横尾義貫、田中直人、川島克也、本保基人、増田俊哉、興謝野　久

あいさつ　建築協会創立80周年を迎えて●会長　市川　宏 —— 1

会告　第4回日本建築協会賞入選発表　総会および定時評議員会議決お知らせ—平成9年度評議員会正副議長　平成9年度会長・副会長・理事　平成9年度収支予算書　平成9年度事業計画　監事並びに本部所属評議員の当選　名誉正会員6名が推挙される　神戸ファッションプラザ見学会　フェスティバルゲート見学会　京都駅ビル見学会　30 'sEYE（23）吉本剛darn—原点から　ハービスOSAKA見学会　平城宮跡「朱雀門」復原工事見学会　茶室見学会（8）大徳寺玉林院の養庵と霞床席　講演と見学の会—琵琶湖博物館とロータス館　アジア建築文化誌研究会（11）写し霊場にみる模倣と創造 —— 2

建築の眼　瓦礫復興とまちづくり協議会●三輪康一　日本の原風景—石窟神社の魅力と技法●上野卓男　エジソンと竹●塘　伸夫　建築家の文章●田中英一 —— 78

作品作風　兵庫県警察本部庁舎 —— 80
セキ美術館
アーバンエース肥後橋ビル
ジャスコシティ西大津

gallery　いとなみの中で（設計：小笠原絵理）富田昌義 —— 90

being　河崎晃一（ARTIST&CURATOR）●小林孝一 —— 92

大先輩に聞く　前野慶太郎●毛谷村英治・伊藤郁郎 —— 94

法令コーナー　神戸旧居留地地区内の斜線制限の適用除外●中元淳仁 —— 97

構造の頁　京都駅ビルの構造設計●木村俊彦 —— 98

設備の頁　研究探訪：昼光の研究—人工天空あれこれ●野口太郎 —— 99

基礎講座A　建築文章作法（4）推敲は15回行う●山田　修 —— 100

基礎講座B　意匠設計者のための設備図の見方（4）給排水・衛生設備図●河津隆之 —— 101

REPORT　スライドレクチャー第10回アルヴァ・アアルトとフィンランドの建築を訪ねて●宮内　宏 —— 102

GBRCニュース　機器紹介／着火性試験装置 —— 103

ブックステーション　短評4題●伊藤郁郎、稲木裕子 —— 104

追悼　竹中工務店相談役・元本会副会長／竹中錬一氏を偲んで —— 105

Information　福岡道雄個展.世紀をまたぐ巨人—ムンク展.毛利元就—その時代と至宝.デンマークの椅子200脚展.17人のアジア建築家展.出版記念・多井幸男個展.花と緑のまちづくり総合展示会.播磨科学公園都市—近未来戸建住宅デザインコンペ.第4回デザインコンペ＜ガラスブロック＞.国際コンペ「21世紀・京都の未来」.東京デザインセンター特別セミナー.「春秋建築塾」開講.ハウジングアンドコミュニティ財団助成対象決定.建築設備診断技術者講習.デザインセミナー.USAパブリックアート視察旅行.「復建協'95」新刊発行 —— 106

月間の動き　平成8年1月分 —— 109

■特集予告
5月号／木造建築物の伝統技術とその将来
6月号／住む空間の復興　住宅・都市整備公団関西支社15周年

編集委員会（平成8年度）
■副会長　河津　隆之　田ノ畑好幸　金多　潔　葉貴　公明　※西岡　道雄
■編集理事　野口　太郎　荒巻　恭士　樹井　貴廣　井上　豊　松浦　肇　小島　雄　水谷　昇　村上幸三郎　立野　一郎　横平　光伸　真塚　達夫　★施工材料分科会　松村　慶三　※植田　実　溝神宏至朗　小椎八重猛　山田　修　志水　史典　◎與謝野　久　十倉　毅
■編集顧問　野口　和宏　東　孝光　吉田　茂二
■編集委員　米澤　秀暢　★計画系分科　★法令分科会　☆計画系　入江田吉仁　伊礒　憲幸　江山　雅己　梅村　宏尚　樫田　攻　小浦　久子　※城戸　史郎　鈴木　克彦　中村　正昭　田中　直人　浜野　幸雄　松川　敏正　■作品作風小委員会　横関　真紀　赤木　隆　※吉村　英祐　秋山　茂　☆建築計画系　朝倉　一晃　荒井　博　小笠原絵理　磯村千恵子　川上比奈子　上杉　秀隆　倉渕奈千子　江副　敏史　杉原　繁　荻窪　伸彦　◎富田　昌義　菅野　忠司　中村　文紀　笹村　欽也　藤城　義丈　佐藤不二男　前川　治彦　※塚本　史郎　前田　幸宏　刃金　国雄　増田　敬彦　山本　匡　増田　俊哉　☆インテリア・住宅系　宮地雄一郎　石川　佳子　■会員企画小委員会　加藤　力　伊藤　郁郎　角方　利幸　秋山　克彦　北浦かほる　◎稲木　裕子　小梶　隆　大谷由紀子　小島　陽人　糟谷　浩史　下村　陽子　毛谷村英治　中村　孝之　小板橋鉄雄　中村　雅人　佐野　洋　西田　和子　高岡　伸一　※畑　康之　高田　光雄　渡邊　秀俊　高橋　麗子　★構造分科会　塚口　明洋　太田　寛　東宮年一郎　岸本　一蔵　増渕　昌利　西郷　慈師　山寄　章子　鈴木　勝博　■広告企画小委員会　※長瀬　正　池渕　俊男　平野　富之　小幡　義明　北條　稔郎　加納伸太郎　松本　孝弘　勝　一弘　宮本　光則　◎河原　正雄　★設備分科会　長野　洋一　岡野　均　岩井　武夫　梶井　宏修　山下　修司

◎委員長　○副委員長　※幹事

印刷　平成9年3月25日
発行　平成9年4月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　06-348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本電植株式会社
定価　1200円〔本体価格1143円〕



作品

設計監理■
兵庫県都市住宅部営繕課・昭和設計

施工■
鹿島・竹中・奥村・明和・神崎特別共同企業体

兵庫県警察本部庁舎

県庁や県公館等、県の行政・文化施設の集中する官庁街の一画に位置する新庁舎は、県が提唱する「本庁舎周辺整備構想」の一環として分散・老朽化した旧庁舎を一元化し、高層ビルとして建替えたものである。

建替えにあたっては、都市計画法等の規定に基づく「特定街区制度」を活用し、敷地の統合・再編を行い土地の高度利用を図るとともにまとまった空地を確保し、周辺の「県民オアシス」や「プロムナード」と一体化した街区の環境の整備改善を行った。

また低層部、中層部、高層部の三層で構成された庁舎外観の低層部を、隣接する建築家・山口半六の設計による近世フランス・ルネッサンス様式の代表作品である「県公館」と同一の素材、色調で仕上げ、そのクラシカルなイメージとの調和を図ることによって、街区の良好な景観形成に努めた。

庁舎は「地域の安全センター」にふさわしく耐震性を高めた堅牢な構造とし、21世紀に向けた警察機能と防災機能を整備強化する一方、井水利用による節水、ガス発電による廃熱回収など、省エネ・省資源対策にも積極的に取り組んだ。

また、1階には大きな開口部を通して公開空地へと連続する「県民ホール」を配し、神戸市街が一望できる屋上展望台、交通管制センター等の見学コースを整備するなど、県民に親しまれる庁舎としている。

(戸田隆彦／兵庫県都市住宅部営繕課、檜垣晴夫／昭和設計)

所 在 地 —— 神戸市中央区下山手通5-4-1
敷地面積 —— 7,400㎡
建築面積 —— 2,080㎡
延床面積 ——44,300㎡
構造規模 ——S、一部SRC
工　　期 ——1993年6月～1996年12月
最 寄 駅 ——JR神戸線元町駅
撮　　影 ——島　修一



▲見上げ



▼東面アプローチ



交通管制センター


通信指令室



県民ホール



1Fエレベーターホール



見上げ



全景

美術館全景



北側の施主住宅と馴染む群造形.



南側立面を望む.外壁は中国産の錆石サンブラスト仕上げ.土塀部はリシン吹付仕上げ.

作品
作品

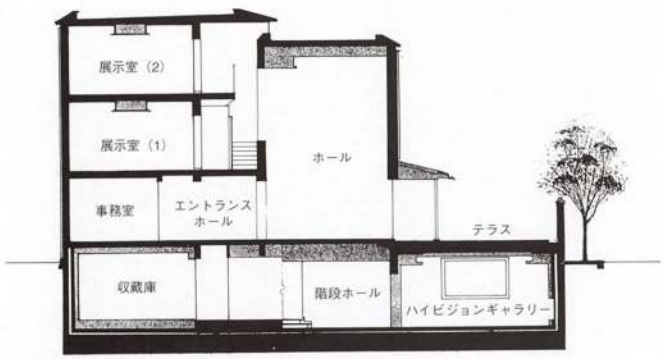
設計監理■
大成建設設計本部・大成建設四国支店設計部

施工■
大成建設四国支店

セキ美術館

日本の多くの地方都市には古くからの街のイメージがある。しかし、実際にはモダニズムの影響で都市の無個性化が進み、類型化された街並が全国的に広がって来ている。そして、古来からの豊かな文化と長い歴史を持つ松山市でも刻一刻とこの近代化が進んでいる。
美術館立地は、整備の進む市中心部住宅地にある。この計画では、街の潜在的な物語を掘り起こして、新たな街作りのひとつの指標となる様に優れたイメージを持った建築を創造する事をテーマにした。そして、その様な建物こそが、未来に繋がる豊かな街の環境作りに貢献出来ると考えた。
施主が約40年かけて収集したロダンの彫刻や近代以降の日本人画家による洋画、日本画等約200点を、随時公開してゆく空間のベースとして、全体デザインは美術館をひとつの箱として捉え、シンプルなマッスによる構成とした。またランドスケープスタディーから建物ボリュームはセットバックした群造形とし、近隣に建物を馴染ませた。
空間構成は、様々なコレクションに対応して階段を中心に展示室等を巡るスキップフロア型とし、奥行き感のある室内空間となる様に心がけている。デザインイメージは、松山の歴史に育まれたゆったりと大らかなイメージから、しっとりと落ち着いた和洋折衷を基調とした。さらに地域交流の小さな核として街の中に息づいて行ける様、地階に地域に開かれたハイビジョンギャラリーを併せ持ち、限られた条件を最大限活かした美術館が完成した。そしてこの小さな建築によって改めて街並に大きなイメージを与える事で、松山市の一角に新たな場所性を獲得し、街の大切な物語作りの一助となればと思う。

(川村信之／大成建設)



断面図　1：300

所 在 地 ——愛媛県松山市道後喜多町1010-10
敷地面積 ——280.97㎡
建築面積 ——194.96㎡
延床面積 ——464.81㎡
構造規模 ——RC、B1F、3F
工　　期 ——1996年２月～1997年１月
最 寄 駅 ——JR予讃線・松山駅
撮　　影 ——三輪晃久写真研究所


▲ 吹抜けを見上げる.


▼ホールよりテラスを望む.彫刻は多摩美大彫刻科教授石井厚生氏による作品「時空・111」



作品
作風

設計監理■
エヌ・ティ・ティ関西建物(株)一級建築士事務所

施工■
共立建設・熊谷組・大木建設・松村組共同企業体

アーバンエース肥後橋ビル

古くから“土佐堀”をはじめ、周辺の“江戸堀”“京町堀”などの地名からもよく知られているように、商業の大動脈ともいえる多くの運河が走っていた一帯で、それらに合わせ江戸時代の藩の蔵屋敷跡なども残る歴史的にも全国に名高いビジネスゾーンとしての伝統と誇りを感じさせる商都・大阪を代表する場所のひとつである「肥後橋」。この好立地に高度情報社会の最先端を行くNTTならではの設計コンセプトのもとに、アメニティーを高め、人間性豊かな環境を創造した新しいインテリジェントビルとして「アーバンエース肥後橋ビル」が誕生しました。

内部はメインアプローチとなる玄関ホール床・壁に大理石を使用し洗練された美しいデザインを心掛けた。事務室は（3.6m×2.4m）のモデュール寸法を採用し、柱のない無柱空間を実現、床は配線の自由度が高く、容量も大きい全面二重床とし吸音性・断熱性・クッション性にすぐれたカーペット敷フロア、天井高は余裕のある2.8mを確保しゆとりのある快適なオフィス空間を提供している。

外観は南北面をカーテンウォールとし、方立のパターンにより縦ラインを協調、軽快でゴージャスなファサードを提供したほか、シンメトリーを基本としたデザインで、空に向かって一体感を出し溶け込むなど、外壁面をリズミカルに構成して話題性をもたせている。

外部は壁面線を考慮して、南に開放的な広場を設置、樹木やモニュメントの列立により、ここちよいアプローチを創造しています。

（エヌ・ティ・ティ関西建物(株)一級建築士事務所）



1階平面図　1：600

所在地 ——大阪市西区土佐堀1-4-14
敷地面積 —— 1,669.61㎡
建築面積 —— 1,006.82㎡
延床面積 ——15,099.88㎡
構造規模 ——S、SRC、B2F、14F、P1F
工　期 ——1994年12月～1997年1月
最寄駅 ——地下鉄四ツ橋線・肥後橋駅
撮　影 ——新極　求


南側外観


応接フロア


▼エントランスホール



メインエントランス

作品

設計監理■
大林組

施工■
大林組・桑原組共同企業体


遠景

ジャスコシティ西大津

比叡の山々と琵琶湖に挟まれた豊かな自然環境の残る街、西大津は都心圏からも近く交通の便がよいところながら、駅前開発のなされていない場所であった。キーテナントであるジャスコは滋賀県で初の出店ということもあり、地元のオーナーとともに15年の歳月をかけて計画を進めてきた施設でもある。

敷地は道路を挟んで２カ所に分断されており、収容台数1,300の駐車場と40,000㎡の店舗面積を確保する為、人・車のスムーズな動線計画を心掛け、２棟を結ぶ上空通路はその解決策の要となっている。

外観は山と湖をイメージした色調で、全体は暖かみのあるアースカラーの濃淡でシンプルにまとめ、ポイント部分にはブルー・グリーンを配し100m近くある壁面に変化をもたせながら周囲との調和を図った。メインエントランス部は逆三角形のモチーフを使ったダイナミックなデザインで、商業施設としての「賑わい」の演出と地域のランドマークとしての「顔」を表現した。

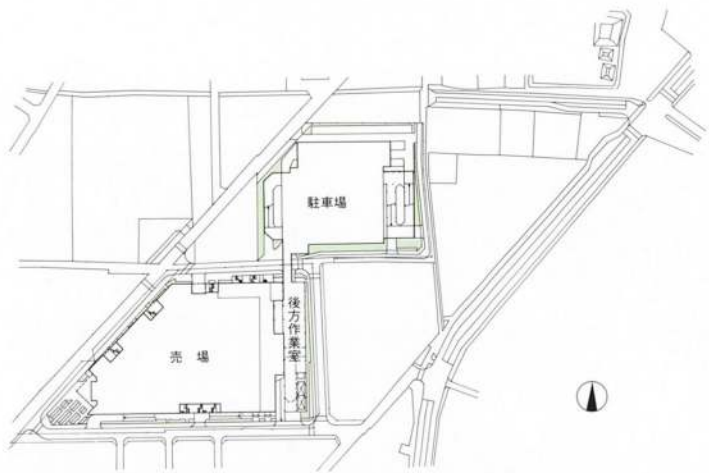
（神道　浩・大橋眞由美／大林組）



近景



エントランスホール



配置図　1：5000

▼夜景



所 在 地 ――滋賀県大津市皇子ヶ丘３丁目
敷地面積 ――22,067.29㎡
建築面積 ――16,589.66㎡
延床面積 ――71,011.44㎡
構造規模 ――S、SRC、5F、P1F
工　　期 ――1996年３月～1996年11月
最 寄 駅 ――JR湖西線西大津駅
撮　　影 ――上諸尚美

gallery

いとなみの中で

設計
小笠原絵理

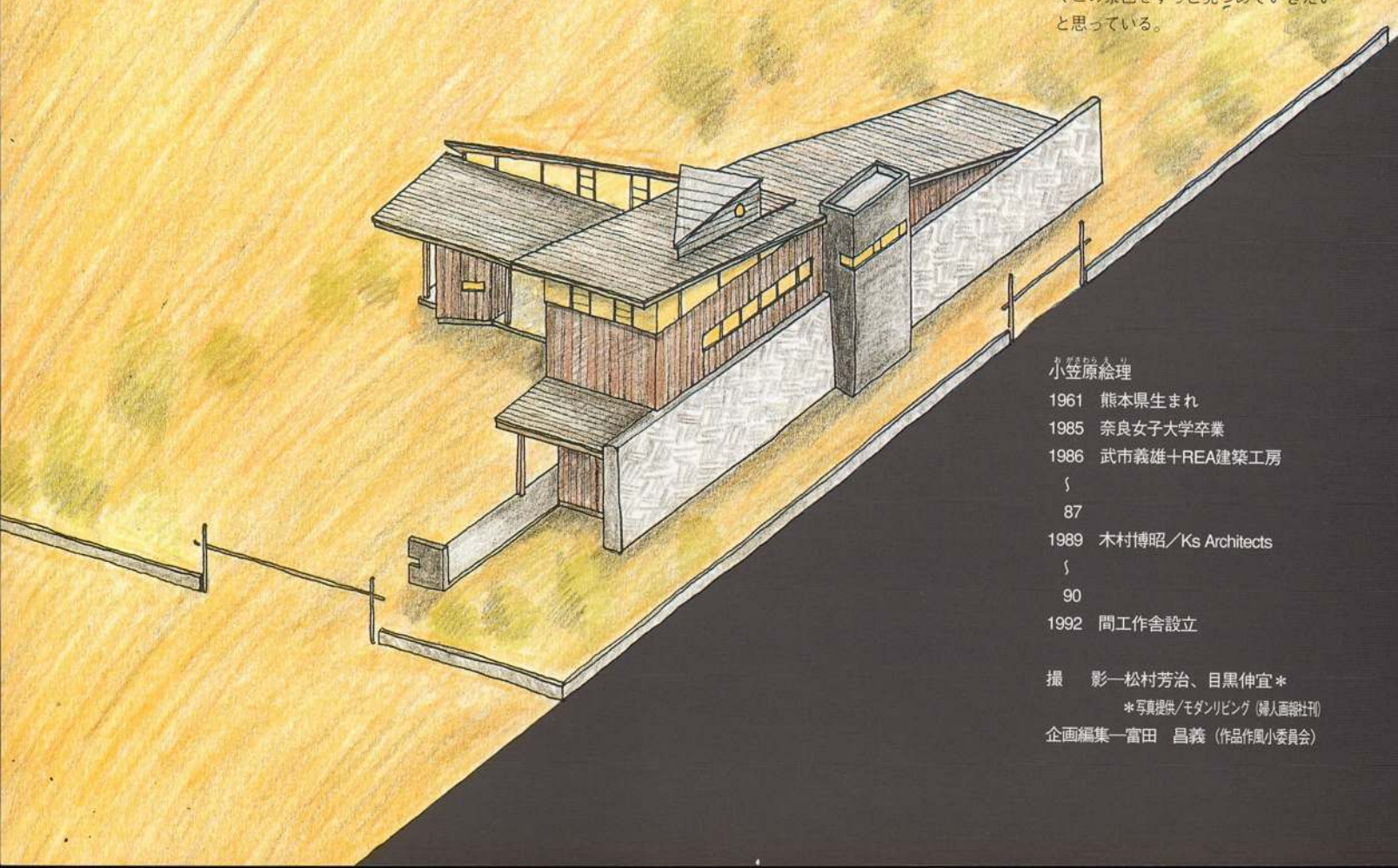


建主と共にこの地を訪れたのは２年前の夏。北側接道の300坪ほどの敷地は、琵琶湖対岸に比良山地、東に鈴鹿山系を望み、車で10分程の距離にある湖岸まで田畑が広がっている。山々に囲まれたこの大地で、人は田畑と共に息づいている。自然の大きな営みに向かい合い、包まれて、穏やかに、水の流れのようにときが過ぎていく。この建物は、そのようなときを仲間と共に過ごす小さな楽しみの場としてつくられた。

開閉自在、外部と一体の土間と、スサ入りのシックイで塗り込まれ、炭の火囲みながらとき包まれる囲炉裏間を中心に、各々の場が人とのかかわりや固有の風景をもち、また、一つの穏やかな流れとつながる空間構成がこの建物をかたちづくり、自然の営みに息づくものとしている。

この地は、冬は雪一色に染まり、春の訪れと共に緑が芽吹き、秋には稲穂が金色の絨毯、風に揺れ、年月がめぐる。今回の計画も、自然という大きな営みに少しでも近づきたいという思いから生まれた。

新たに始まった営みを、表情変えていくこの景色をずっと見つめていきたいと思っている。



小笠原絵理（おがさわらえり）
1961　熊本県生まれ
1985　奈良女子大学卒業
1986　武市義雄＋REA建築工房
〜87
1989　木村博昭／Ks Architects
〜90
1992　間工作舎設立

撮　影―松村芳治、目黒伸宜＊
＊写真提供／モダンリビング（婦人画報社刊）

企画編集―富田　昌義（作品作風小委員会）

年々歳々花相似たり、
歳々年々人同じからずや





42 河崎晃一

being

being

ARTIST & CURATOR





芦屋市立美術博物館にて

芦屋に拠を置き、現代美術作家として活躍する傍ら、芦屋市立美術博物館の学芸課長を務めるという、世界でも例の少ない役割に挑戦している河崎晃一氏にインタビューした。

ARTISTとしての顔

ARTISTとして先ず異色であるのは、大学は甲南大学の経済学部卒業であり、学生時代はスポーツに熱中していたことである。およそARTISTらしからぬ堂々としたスポーツマンとしての体をもつ氏の、後年2つの仕事を両立させるバイタリティー溢れる活動力の源は、甲南中・高時代の野球、大学時代のラグビーと、スポーツで鍛え、培われた体力がものをいっているものと思われる。

大学卒業後、京都芸大の聴講生として学ぶと同時に、同大の中野光雄教授に師事し、染色を勉強した。その後、自身で創作活動することになるが、染色の中では、型染めを学んでクラフトや、テキスタイルに進む人が多いなかで、工芸的なものには飽き足りず、より自由で独自な表現をめざす。このへんは、人のやらないことをやりたいという反骨精神が窺える。

'80年に初めて個展をひらき、今日まで精力的に個展で作品発表。作品は、当初、型染め的な作品が中心であったが、途中より、全く新しい独自の手法をうみだしてゆく。染色は、通常植物染料を使用するが、それは決まった色しかでない。それに鉄を使うことによって、色が変化することと、時間の経過とともに変化することに興味をもった氏は、「美術館の作品は、耐久性のあるものを想定しているが、逆のほうが面白いのではないか。」「人と変わったことをやりたい、固定観念を破りたい。」と考え、鉄触媒での染めを自分の表現として捉らえた。鉄線と染めた布地を組み合わせたり、染めた布地のコラージュに、鉄粉を組み合わせ、鉄に触れた部分が、時間の経過とともに変色してゆく優れた作品を創造している。作家としてのテーマは、あくまで「染めること。」であるが、その中で独自の道を歩もうとする反骨精神に溢れているように見える。

受賞

1987　第4回吉原治良賞美術コンクール展　優秀賞
　　第18回現代日本美術展　大原美術館賞
1993　兵庫県芸術奨励賞

CURATORとしての顔

一人で創作活動を続けている時期、戦前の甲南の生んだ芸術家長谷川三郎氏の画集を作る仕事に参画したり、母校甲南小学校の図工を教えたり（10年間）していた関係で、'88年芦屋市の美術博物館の構想が固まり、準備室がつくられる時、人材を募集しており声がかかった。ARTISTとしての活動をやめる気はなかったので、かえって、世界でも稀な異色の存在となるCURATORの仕事も面白かろうと思い、引き受けた。'89年より準備室に参画し、美術館着工、'91年オープン時より学芸課長となる。

学芸員の役割

日本での美術館の学芸員の多くは、美学、美術史を学んできているが、中には、学芸員の仕事を、美術を言葉にかえて伝えることだけだと思っている人が多い。フィールドワークをやってきていないため、昔の文献に頼った評論家、解説者になり、自分の言葉で伝えられないきらいがある。それに対して、氏は、「美術品は、観る方側に判断を任せ、もっと楽しめる部分があることを知らせたい。」と云



<WORK '96> '96.11 番画廊個展 190×260cm

う。

市立美術館の役割について

近年、県や大都市だけでなく、小規模都市でも美術館を持つ市が増えたが、日本では、地方の市も国レベルと同様の「美術館は美の殿堂である。」という発想しか出来ていない。氏は、「ランクで云えば、市立は美術館の中の幼稚園、小学校の初歩のレベルであり、もっと地域に密着した存在であるべき。」と考える。但し、学校教育と美術館には、まだまだバリアーがあり、現状では両方に問題がある。

阪神大震災について

芦屋市立美術博物館は、新しい美術館でもあり、大きな被害は蒙らなかったが、再開は、7月中旬となった。震災の際、地域に開放出来なかったことは、今後の課題であろう。　氏の抱負として、震災5年目の2000年1月には、是非、震災と表現をテーマにした展覧会を開催したいと考えている。一つには、作家は、震災直後にはなかなか作品が出来にくいこと、又、10年後では、長すぎて風化してしまうので、5年が適度と考えている。出展は、震災を経験した心の痛みが分かる、阪神間在住の ARTIST 中心に依頼したいが、美術だけでなく、文章や詩等も集め、震災記念博物館的なものに出来たらと思う。

染色作家としての自身のテーマ等は変わらないが、CURATOR としての自身は、震災で変わったと感じている。

インタビュー後記

芦屋生まれで、生粋の甲南ボーイである河﨑氏は、戦前の古き良き時代の阪神間モダニズム文化の継承者の一人と呼ぶに相応しく、氏のもつバイタリティーで、震災後の阪神間に、新しい美の境地を拓くべく、今後の一層の活躍を期待したい。

インタビュー：小林孝一



1994年に芦屋市立美術博物館にて発行した具体美術協会に関する資料集とカタログ（河﨑氏編さん）



自宅アトリエにて

大先輩に聞く

前野　慶太郎



まえの　けいたろう
明治41年　大阪府にて生まれる
大正14年　大阪府立西野田工業学校本科建築科卒業
大正14年　株式会社あめりか屋入社
昭和２年　大阪市立都島工業専修学校（夜間）高等部建築学科卒業
昭和22年　株式会社あめりか屋代表取締役社長に就任
昭和60年　代表取締役会長に就任、現在に至る。

阪神間であめりか屋の家に住んでいると聞けば、洋風のお家に暮らすハイカラな家庭を想い浮かべる。行儀の良さそうな少女が奏でるピアノの音が流れ、お手伝いさんが庭を掃除しているような家である。伝統の技を使って大工の棟梁が建てた純和風の邸宅ではなく、設計士とインテリの主人が話し合った末に新しい技術や設備を用いて建てられた洋風の家といったイメージが浮かんでくる。決してケバケバしい豪邸ではなく、その家に憧れることを他人に話しても照れ臭くないような住宅であった。近年、ハウスメーカが販売しているツーヴァイ・フォーやコロニアルスタイルの輸入住宅とは違って、周辺のまちなみに馴染むデザインがなされていたことも特徴であろう。

あめりか屋の由来

あめりか屋の住宅はその社名通り、アメリカに渡っていた創業者橋口信助氏が日本からの移民制限が厳しくなり帰国する折に輸入した組立て住宅の販売に端を発する。彼は米国のビジネスカレッジで建築を学んだ後明治42年に帰国し、劣悪な日本の住環境を改善すべくあめりか屋を創業するとともに住宅改良会を設立(大正５年８月)し、機関紙として月刊「住宅」を発行して良好な住宅についての啓蒙を一般に対して行っていた。大正５年には軽井沢出張所等を開設し、貿易商社であった野沢組の別荘地開発において住宅改良会の方針提案に従い多くの別荘の建築を行った。ここで、当時目指していた合理的な洋風生活を実践できる住宅の形態を貸別荘として実現するとともに、ここで建設した注文別荘は大正期以降の和洋折衷の洋風住宅の方向を暗示することとなった。この軽井沢出張所長の西村辰次郎氏（東京高工卒）が大阪出張所長、そして社長となり戦争により事務所を閉鎖する昭和17年まで大阪で活躍する。

現在中之島にある事務所は、仕事に対するあめりか屋の誠実な取組み姿勢を表すかの様に丁寧に使い込まれたもので、決して先進的なデザインの建物ではないが顧客の信頼を得るであろう生真面目さが窺える。ここの２階にある打ち合わせ用の応接室にあめりか屋現会長前野慶太郎氏を訪ねた。前野さんは、大正14年に旧あめりか屋に入社以来70年以上にわたって終始一貫して住宅とその他の建物の設計と質の高い施工にあたるとともに、絶えずその進歩に意を注いできた。明治41年生まれの前野さんは今年89歳を迎えるが、今もなおフリーハンドで図面をかくことができ、あめりか屋のオハコである洋風住宅だけでなく中山寺をはじめとした寺院建築や和風建築も少なくない。

建築への目覚め

前野慶太郎さんは大阪の四条畷で住宅の建築や中学校の営繕工事を請け負っていた父圓次の長男として生まれ、家業を継ぐために父親の勧めで西野田職工学校に入学した。父親は「堅い仕事をする」と評判が良かったが、その死後に莫大な借財を抱えていたことが判明し、私財の大部分であるニ箇所の家と土地、田地、山林のすべてを処分し、辛うじて祖母と２人だけで住める家を得た他は一切の財産を失った。その一方で、前野さんはまだ学生であったにも関わらず休学して、見様見真似で父親の残した請け負い工事を監督して終え、世間に対する義理を欠かさずに済ませた。学校への復学後、実務実習で北畠にあった大阪高等学校の外人教師用住宅の建設工事に指導的立場で取り組み、建築技術を磨くとともに住宅に対する興味を覚え、学校の建築部長の酒井先生が西村辰次郎と同窓であった関係からあめりか屋に大正14年に就職することとなった。

当初の２年間は設計部に所属したものの学力不足を感じたため、勤務の傍ら夜間都島工業専修学校高等部建築科へ入学して昭和元年から１年間勉学に励み様々な知識を身に付けた。当時、都島工業の夜間部は昼間と同じ授業を昼間と同じ先生が行っていたので、夜間といえども教育の水準は高かった。その後、前野さんは唯一の身寄りで身の回りの世話をしてくれていた祖母を昭和３年に亡くし、それまでにも多くの家族と死別し、天涯孤独の身の上になったものの、仕事に夢中になり、現場において技術的な興味を掻きたてられていたのが幸いし、あめりか屋での仕事に人生の張り合いを覚えたという。

工事係になる前からは、ライトの弟子であった高島司郎(早大卒)設計の讃州武田謙氏本邸の新築工事などを通じて、宮内省内匠寮からあめりか屋に移って来た石田敏樹（工手学校卒）の指導を３年間受け、昭和10年から大阪支店の工事責任者として幾多の高級住宅などを関西地区において建設した。しかし、戦争の熾烈化にともなってあめりか屋は社名を建拓社としたものの一時閉鎖を余儀なくされ、前野さんは大阪橋本組にて軍事施設の設計に従事することとなった。

戦後、西村辰次郎に代わって前野さんが店主として個人経営あめりか屋を再出発させ、以前の社員を集めて昭和22年５月に株式会社にして社長に就任する。同年、東京本社は石川社長が病に伏し閉鎖することになって以来、大阪あめりか屋が業務を引き継いで住宅の建設、戦後の復興、社会福祉に貢献することになった。

建築情報の発信と伝承

戦争による事務所の一時閉鎖にともなって廃刊となった雑誌「住宅」はかつて「住宅」の編集を行っていた小林清（東京高工卒）を社主として昭和21年に「新住宅」として復刊した。もともと常磐松女学校長で婦人の動作経済研究者であった三角先生が在来住宅を洋風に改良することを橋口信介氏に求め、それに共鳴した橋口氏が住宅の改良を実践する機関として住宅改良会を組織し、その機関誌として「住宅」を発刊していた。前野さんも建築の情報を集めて発信するのは重要だと考え、「新住宅」として「住宅」を復刊した。この「新住宅」も昭和63年に休刊することになったが、最近も住宅に耐久性を持たせる方法や新しい設備、住み方のノウハウ、空間の利用法などをテレビ(KBS京都)を通じて一般に普及するとともに、建築資料研究室からは通信衛星16chを通じて全国の工務店向けにあめりか屋で培った独自の技術を紹介したりして情報発信を行っている。

前野さんは、現在もこれまで培ってきたあめりか屋の信頼を守るべく、全ての物件の図面を自らチェックし、毎日現場に出かけて施工を監督・指導している。毎朝、芦屋の自宅から車と電車を使って通勤して来ているが、会社に到着するのは社内で一番早い。午前中に事務所で図面を全てチェックし、午後は対外的な活動の暇を見つけて現場を見て回り、細かなポイントまで自ら指示することにしている。そして、経験により培った施工現場における知恵を一つ一つ若い世代に直接伝授することにしている。

黒光りする年期の入ったデバイダーをクルクルと器用に回転させ、眼鏡も無しに図面を引くことができるのは若い頃に体で覚えた技術のおかげだという。今までを振り返ると、状況に応じて仕事の内容がかわることもあったが、一貫して先輩や同僚と親しく交わり、彼等が持つ経験や長所を出来るだけ学び取るように心がけてきた。そして、設計や積算などの仕事を担当した時も精一杯努力し、担当したすべての仕事を「自分のもの」にしてきたと言う。したがって、会長になった今も仕事の隅から隅まで理解することができ、細かなことまで目が届いてしまうようである。

建築技術の習得

建築を志す人で新しい職場に入った人は、各々の持ち場に於いて一刻も早く専門家になれるよう努力することが望ましい。前野さんは自ら努力することによって、担当する仕事の内容に実に興味が湧いて来るようになったと言う。仕事に関心を持ち続けていると、ちょっとしたチャンスやヒントを生かし、設計や積算、施工などの分野に於いても第一人者になれる位の研究をすることができる。こうした努力の結果、その職場で「どうしても彼でなければこの仕事は出来ない」と、言われるようなかけがえのない技術屋に一日も早く各自が育って欲しいと願っている。前野さんの気骨は父から譲り受けたものであろうが、石田敏樹という当時最高の技術を持った優秀な建築技術者に出会い、直接に施工技術を学べたことによる影響も大きい。

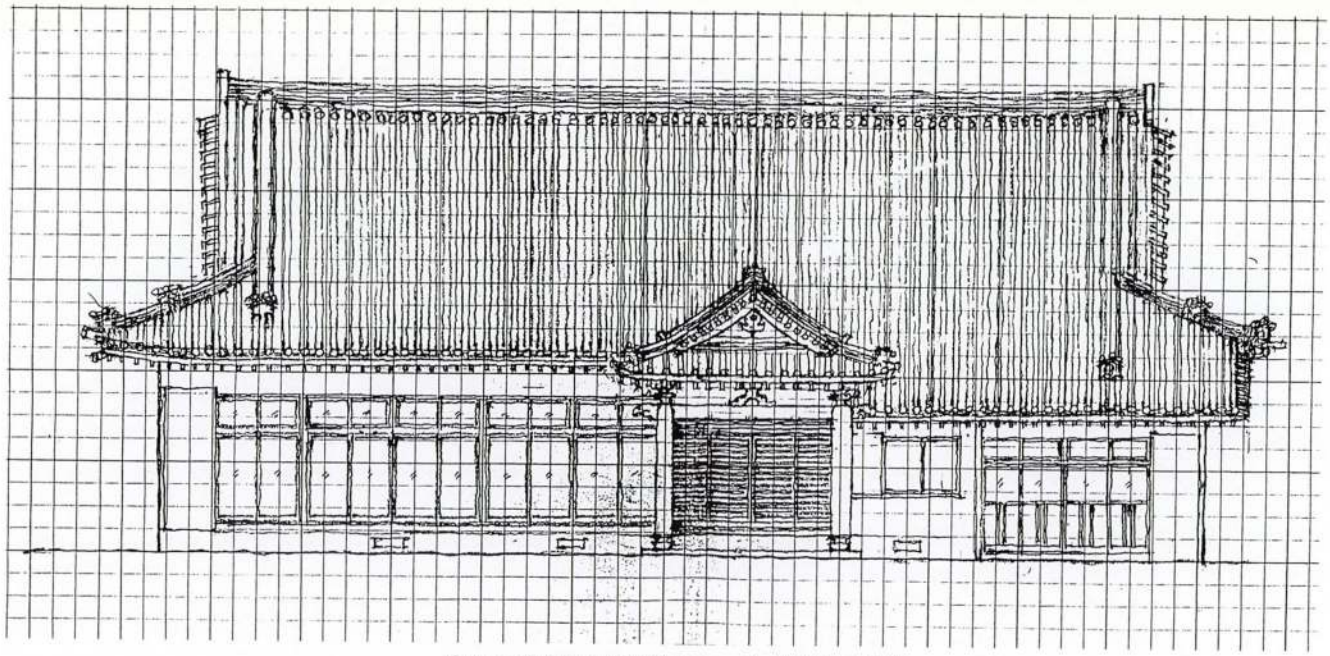
いかなる仕事においても建築主の希望を考慮しながら、かつ施工者としても納得の行く良心的な仕事を継続してきた結果、その作品が高く評価されるようになってきたと前野さんは自負している。そして、常に良心的な工事を主眼とするため各責任者の目の届く範囲の工事を手掛けてきたのであまり社員も増員せず現在に至り、大手ゼネコンとは違った道を歩むことになった。阪神大震災の被災地においても数多くの住宅を設計・施工してきたが、幸いにして大きな被害を受けたものは皆無で、あめりか屋の建物の安全性についての信頼を高めることになった。基本的には見えないところでも手を抜かず、頑固なまでに材料を吟味し、余裕を持たせて安定した構造に仕上げることが大切だと言う。この考え方があめりか屋の建物を近年の洋風建築に比べてしっとりと落ち着いたようにみせているのではないだろうか。

公人としての役割と視点

住宅に対する啓蒙活動を早くからしてきたことも手伝って、前野さんは各種団体において要職を重ねてきた。例えば、創立５周年記念として住宅改造博覧会（大正11年）を主催した（社）日本建築協会の主旨に賛同し当時有名な設計事務所や請負人と共に木造住宅を出品、75年経った今も異常なく、又昭和25年からは大阪建設業協会の評議員として業者間の問題解決や従業員の福祉増進に貢献してきた。また、(社)大阪府建築士会においては副会長として財政建て直しを行なったほか、住宅委員長として朝日新聞の家庭欄において読者からの住まいについての質問を３年にわたって回答した。また、昭和55年には近畿一円の木造住宅実務経験者を執筆者に迎え、日常の業務活動の中から得られた生きた知恵を総収した「木造住宅の設計とおさめ方」を編集し刊行している。このほか、(社)大阪府建築士会顧問、(財)大阪建築防災センター顧問、(社)大阪建築士事務所協会参与、(社)日本建築協会理事、大阪商工会議所名誉議員、国際連合協会関西本部理事など様々な団体の要職にあり、日本の建築界の発展のために尽力してきた。どの団体においても分け隔てなく実直な姿勢で臨み、積極的に任務を遂行してきたことから、その実績と指導性を高く評価され信望を得ることになった。

仕事が健康の秘訣

10数年前から冷水摩擦を続けているが、毎日会社へ通勤し、頭を使って設計を検討し、足を使って現場を見て回ることが一番の健康



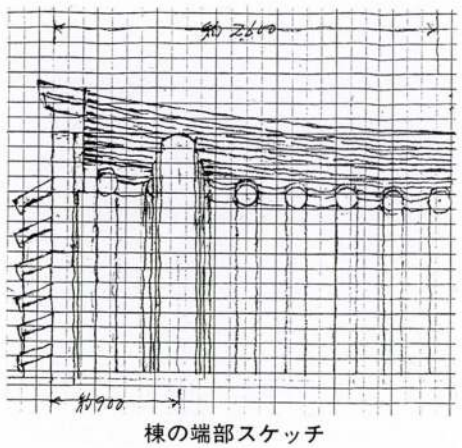
中山寺成就院本堂再築スケッチ 前野氏の設計

法になっている。近頃は自ら進んで何かを勉強しようという者が少なくなったが、若い時には仕事を買ってでもしておけば技術が身に付くので年をとってからでも自由に技術を扱えて大変良いと言う。基礎を堅牢に作ったり材料をきっちり選ぶ等の地味な手間も、一たび震災などでその大切さが分かると仕事に対する自信が持てるようになるので手抜きは決してしてはいけないと戒める。持てる技術を駆使して注文者の意図を酌みとり、技術的検討を加えた上で建築にすることが今日のあめりか屋の信用を形作ってきたのだと自負している。

文責：毛谷村英治（編集委員／京都大学）・伊藤郁郎（編集委員／日建設計）

（主な団体歴）

昭和50年　社団法人日本建築協会理事
昭和60年　同上常任理事、現在に至る。
昭和47年　社団法人大阪府建築士会理事
昭和50年　同上常務理事
昭和54年　同上副会長
昭和58年　同上顧問、現在に至る。
昭和55年　財団法人大阪建築防災センター常任理事
昭和57年　同上副理事長
平成６年　同上顧問、現在に至る。
昭和51年　社団法人大阪建築士事務所協会理事
平成６年　同上参与、現在に至る。
昭和41年　大阪商工会議所１号議員
昭和53年　同上２号議員
昭和59年　同上名誉議員、現在に至る。
昭和46年　日本国際連合協会関西本部理事、現在に至る。



棟の端部スケッチ

神戸旧居留地地区内の斜線制限の適用除外

中元淳仁
神戸市住宅局建築部指導課整備係長

神戸開港以来、中心業務地として栄えてきた旧居留地は、大正から昭和初期に建てられた近代洋風建築物を含む100棟余りの建築物によって地区の個性的なまちなみが形成されていた。

しかし、平成７年１月17日の阪神大震災によって、近代洋風建築物４棟を含む約22棟の建築物が解体を余儀なくされた。

当地区では震災直後から復興へのまちづくり活動を開始し、旧居留地地区にふさわしい「風格」「伝統」あるまちなみ景観を再生するため、「街並み誘導型地区計画制度」を策定した。

街並み誘導型地区計画制度とは

昭和55年に地区計画制度が創設されて以来、まちづくりのルールとして積極的に活用されているが、より有効に地域の環境改善を図る上でも、規制の強化と緩和による誘導的な手法が望まれていた。

平成７年の都市計画法及び建築基準法の改正では、地区計画制度が拡充され、地区計画で一定の制限を定めた場合、そのルールに適合し、かつ特定行政庁が認定した建築物については、法第52条（前面道路幅員による容積制限）及び法第56条（斜線制限）を適用除外とすることができる街並み誘導型地区計画制度が創設された。（法第68条の３第４項及び第５項の規定が追加された）

この地区計画制度の趣旨は、建築物の形態等に関する制限を次に掲げる事項に置きかえることにより、土地の有効高度利用を促進し街並みを整えることにある。

制度の要件としては、次の①～⑤を地区計画に定めること、また②～④を建築条例に基づく制限としなければならない。

①建築物の容積率の最高限度
②建築物の敷地面積の最低限度
③壁面の位置の制限
④建築物の高さの最高限度
⑤壁面の位置の制限に係る後退部分における工作物の設置の制限

旧居留地地区の事例

(1) まちづくりへの取り組み

旧居留地のまちなみ景観は、居留地当時からの「格子状街路」や「敷地割り」、その後に建てられた「近代洋風建築物」等が骨格となり、伝統・風格あるまちの雰囲気を継承していくことに重点が置かれている。

まちづくりへの取り組みは、昭和58年に「都市景観形成地域」に指定されたことを契機として、近代建築物の保全、活用等を講じながら、旧居留地のまちなみ景観の形成を主体に展開されてきたもので、震災後には、地区の早期復興に向けて「神戸旧居留地／復興計画」及びガイドラインが示された。

ここでのまちなみ形成の目標は、都心業務地として土地の有効高度利用によるにぎわいのある街並み、歴史的環境に配慮した風格ある都市景観の形成である。

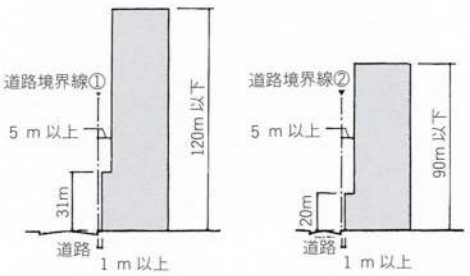
(2) 地区計画の内容

旧居留地の地区計画では、格子状街路沿いの建築物の低層部分の高さ、意匠、形態に配慮し、スカイラインの揃った「囲まれ型まちなみ」の形成を目標としている。

ここでは、法第56条による「斜線型」の制限ではなく、道路からのセットバックと高さの制限による「ボックス型」の制限とする方が旧居留地が目標とするまちなみ景観の誘導には効果的である。

また、法第52条の容積率の緩和は必要とせず、地区計画に公開空地の割合に応じた容積率を定め、高度利用が図られている。

これらの地区計画による制限のほか、別に認定基準を定めて、低層部分のボリューム感の確保、高層部分のスレンダーな形態・意匠を誘導する仕組みとしている。



壁面の位置の制限高さの最高限度

神戸市での適用

旧居留地地区では、まちづくりの目標と街並み誘導型地区計画の趣旨がうまく合致し、早期に地区計画を策定することができた。

現在、地区内ではすでに再建されたものもあり、当制度の趣旨を実際に確認することができる。今後も地区内の再建状況や新しい建築計画には期待し、注目していたい。

神戸市では、復興にあたって市内の各地でまちづくりに取り組んでいるが、各地域ともに、市街地環境上の課題を抱えている。地域に必要な各種規制の合理化を図ることは、復興へのまちづくり支援には不可欠である。

当制度を活用した旧居留地地区を先導的な事例として、被災地域を含めたまちづくりに活用されることを期待している。



「開放型まちなみ」の事例
デファンス地区
（パリ郊外）

『開放型まちなみ』より



『囲まれ型まちなみ』の形成を

「囲まれ型まちなみ」の事例
パリ旧市街地

（なかもと　じゅんじ）

京都駅ビルの構造設計 −1−

木村俊彦
㈱木村俊彦構造設計事務所所長

京都駅ビルコンペの当選者の原広司先生に、「平面的に異質なプランができると困るでしょう。そのときは、剛な階（マトリックスと後日命名）をつかって、上の柱割りと下の柱割りを変えればよい。また、長い建物で、どこでエクスパンションを切ればよいか、と迷ったならば、それは神様に任せなさい。その代わり、神様が身振るいをしたら（地震がきたら）壊れるであろうところを用意して、入念に点検しなさい」と言ったのは憶えている。

それが、ここに掲げた写真を見ると、95%は出来上がっている。もちろん、設計に監理に、私の約束したことは守ったつもりだ。

しかし、何といっても、建築は構造だけではない。ホテルといい、売店といい、駅のコンコース上のアトリウムといい、これはさすが原先生ならではの出来栄えである。高さに反対された方も、これならば…と許容されることだろう。それは、永く京都を守り、京都を知る人へ、いかにすれば京都駅はつくれるかと原先生が悩み、すべて、関係した人々が苦心したからこそできたものであろう。

（きむら　としひこ）







建築設計　原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所
構造設計　木村俊彦構造設計事務所
施　　工　京都駅ビル建設工事共同企業体

全景
ホテル棟北面1　ホテル棟北面2

撮　影　東出清彦
撮影日　1997年2月19日

研究探訪 昼光の研究ー人工天空あれこれ

野口太郎
関西大学工学部建築学科

人工天空

昼光照明の計画や予測のための模型実験を行う際、自然の空の下ではその明るさや明るさの分布が一定しないため、安定した再現性のある実験は不可能である。このため、世界各地の研究機関で種々の人工天空が考案・製作されている[1]。ここでは人工天空の種類とその特徴について簡単に紹介する。

人工天空は、原理的にはドーム型と鏡函型に大別される。

ドーム型人工天空

空間上半部を球面で構成し、その内表面に一定の明るさを与えることによって、自然の天空を模したものである。照明方法の工夫次第で、その輝度分布を調整することが原理的に可能であり、心理評価実験にも利用可能である。内部に人工太陽を付加することもある。この型は、照明方式によって、さらに反射型と透過型などに分類される。

反射ドーム型は、拡散反射性に仕上げたドーム内面を下部から投光することによって所定の輝度分布を得ようとするタイプである。

透過ドーム型は、拡散透過材料で作製したドームを上部から照明するもので、反射型に比べて高い輝度が得られる。建設省建築研究所に設置されているのはこの型（直径4.1mおよび7.0m）である[2]。

そのほかに、ドームそのものを多数の照明器具で構成した自発光型が、積水ハウス総合住宅研究所に設置されている（直径5m）[3]。

鏡函型人工天空

正方形平面の室の周壁を鏡張りとし、輝度一様な光天井を組み合わせたものである。光天井のみでは光源としての広がりに欠けるために、四周の鏡での反射を利用して、空全体から光が来るような状況を再現している。見かけの要素の高度が低くなるにつれて鏡面での反射回数が増えるために、輝度が低下し、結果としてCIE曇天空に近い輝度分布となる。ドーム型に比べて製作が簡単である。

国内では、九州大学（2.7m×2.7m×2.0m）[4]、関西大学（3.6m×3.6m×2.5m）[5]、大和ハウス工業総合技術研究所（3.6m×3.6m×3.5m）[6]等に設置されている。

現実には……

計算技術の発達した今日でも、採光部や室形状が少し複雑になると昼光照度の計算はかなり煩雑になるため、模型実験の有用性は大きなものがある。ただし、人工天空の輝度分布の調整は、現実にはかなり難しいものがある。昼光計算用の天空輝度分布モデル（一様天空・CIE曇天空など）の忠実な再現は、現実には至難の業と考えた方が無難であろう。

参考文献
1）中村他：照明学会全国大会講演論文集（1988）75-76
2）乾他　：照明学会誌51-9（1967）518-527
3）河崎他：日本建築学会大会学術講演梗概集（1991）53-54
4）中村他：照明学会全国大会講演論文集（1988）77-78
5）関原他：日本建築学会大会学術講演梗概集（1969）89-90
6）松浦他：日本建築学会大会学術講演梗概集（1995）427-428

（のぐち　たろう）

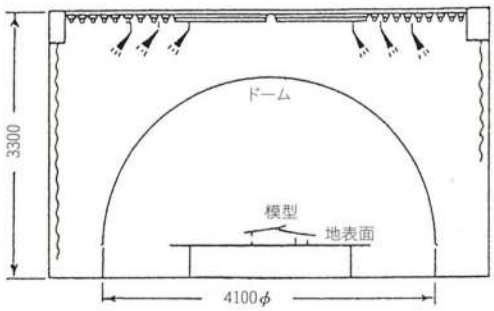


図1　透過ドーム型人工天空の断面図（建築研究所）[2]

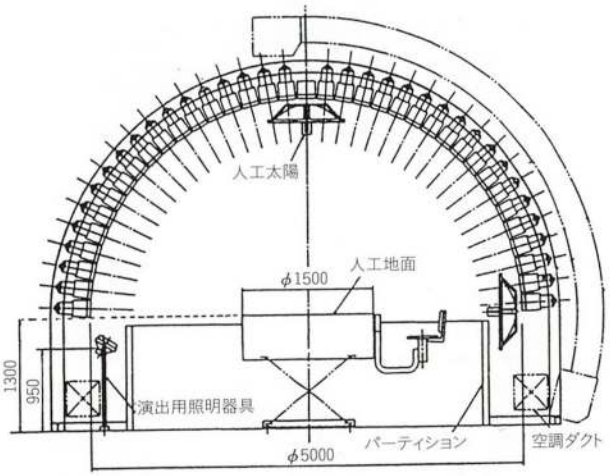


図2　自発光型人工天空の断面図（積水ハウス）[3]

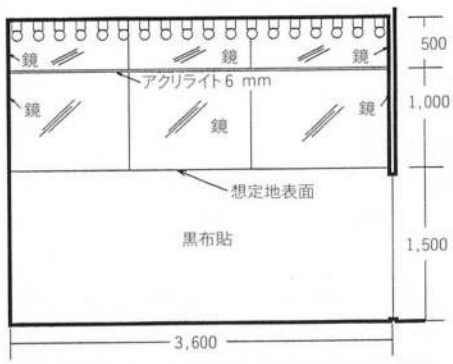


図3　鏡函型人工天空の断面図（関西大学）[5]



図4　鏡函型人工天空の内部（シドニー大学）
撮影のため扉を開けている（扉の裏にも鏡が張ってある）。
扉や室の隅に置かれた模型の鏡像が多数認められる。

推敲は15回行う

山田　修
修　建築事務所

1）推敲は遂行することなり

推敲は，自作の原稿を明確に他人へ伝えるため，文章を訂正する行為である．推敲は物事を遂行することに通じるから，徹底して推敲を重ねよう．

何度の推敲がよいかは，人によって異なる．わたしは15回行っている．下書きで5回，清書時に5回，清書後に5回だ．ほんとうはもっと推敲する方が好ましい．しかし，たて続けに推敲すると，原稿を完成された作品として読んでしまうから，時と場所をかえ「最悪の作品を添削する」とみなして推敲するのがよい．わたしは，電車のなかや病院の待合室などで読む原稿を，突然にひらめいた判断力で直したことが何度もあった．推敲にも時の経過と心のゆとりが必要ということだ．

下書きノート上で推敲した文章は，400字づめ原稿用紙(コクヨの横書き20字×20行）に2Bの鉛筆で清書する．この原稿用紙がいちばん書きやすくて推敲しやすい．その理由は次に示した．

① 2～3行をこえると長文になる．その目安がつく．

② 漢字とひら仮名の使用率30：70（標準値とする．技術文章は，漢字・記号・数字：ひら仮名の使用率は40：60を目安値とする）のチェックに便利である．

③ 写真説明のときは，上10行に写真をはり，下10行の1行目にキャプション，次の7～8行に説明文（150字）を入れるのに適する．

④ 1頁1分間の音読にピッタリと合う．

「建築と社会」の原稿用紙は，1頁30字×15行＝450字である．わたしは執筆するとき，他社の原稿用紙は使わず，すべて400字づめ横書きを使っているので，日本建築協会の原稿用紙はなじみにくかった．400字づめに書いたものを，改めて450字づめに清書した．

文章作りは，清書のときが一番苦しい．が，苦しさを通りこせば，あとは5回の推敲の楽しみが待っている．楽のための苦と思えば，力も入ろう．

清書後の5回の推敲は，しんちょうに運ぶ．写し違えや，同じことを続けて書くミスがあるからだ．そして，下書き時の目標を再点検する．あらためてその3目標を次に示してみた．

① 主題が明確に出ているか（全体的）．

② 細部の一文は，粗末な文章になっていないか（部分的）．

③ 文章は気持よく目にとびこんでくるか（外観的）

同時に，印刷された頁を頭に浮かべながら一読者の立場で推敲する．清書されて読みやすくなっているから，楽しく読める．楽しく読めなかったら失格である．その時は，もう一度いちからやり直さなければならない．

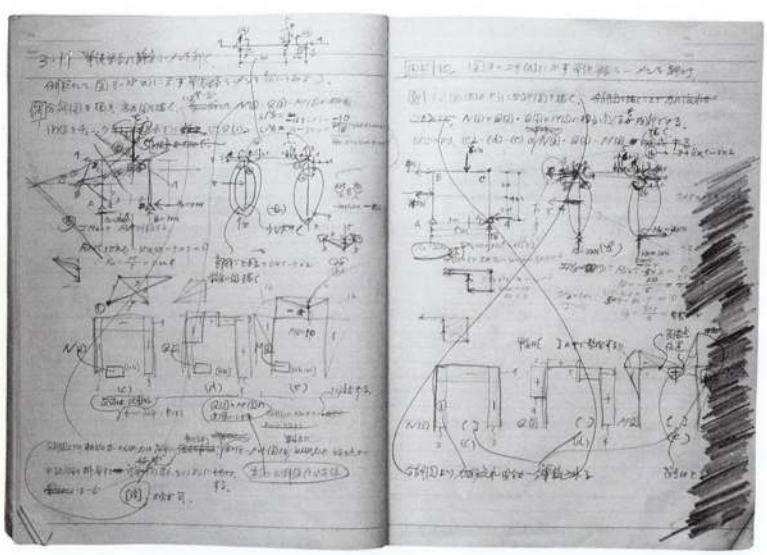


写真1　下書きノートで推敲した拙著の元原稿

略図を描き、計算をし、さらに図の訂正・計算のチェックを行った。

ノートは鉛筆が主で、あとは訂正用の色鉛筆・朱のボールペンが交錯する。右端の濃い鉛筆の斜線は、図を清書するときに鉛筆の芯をとげた名残だ。

この段階で正確を期しておかないと清書時に写し間違え、あとで大恥をかく。実際に大恥は何度もかいているが……。

当原稿は、本の仕上がり頁に合わせて書いたもので、新しい進め方をした。字は小さくなっているが、仕上がり頁はB4版176頁の本（'96年11月刊。やさしい建築の構造力学：オーム社）で見やすい。

2）視覚的観察が大切なり

本は，読む前に見開き頁を一見（内容の吟味は考えていない）する．そのとき，視覚的観察（外観的）により，読みやすいかどうかの判断は瞬間的にくだせる．それが，段落であり，漢字とひら仮名の配分であり，写真・イラスト・図表の有無である．

例文を示してみよう．「故郷忘れがたく候：司馬遼太郎著」の最初の出だし文である．イラストはないが，一見して読みやすい，と判断できよう．とくに小説は，最初の出だしで勝負が決まる．

『雨が壺を濡らしている．壺は，庫裡のすみにころがっている．「朝鮮ではないか」とU氏は縁から降りて壺をおこそうとした．が，起きなかった．てのひら二枚ほどの破片が，濡れた地面にかぶさっていたにすぎない．』

この文章の漢字使用率は21%である．視覚的な文章デザインまで考えられた，と思う．わたしは，技術文章にはこの文字デザイン（視覚的観察）が大切だ，と考える．

雨・壺・濡の漢文調の導入に比べ，結語はひら仮名の連続で柔らかい．導入と終結の対比がよい．「おこそうとした．が，起きなかった」と後半に漢字を使い．起きない現象を強く訴えている．きょくりょく漢字の使用をさけたことが分かる．がの使い方は絶妙だ．

それと，U氏がよい．これが他の英文字では視覚的観察がくずれる，と思う．Uの形が朝鮮壺に似ているからだ．

リズムにのった活力ある文章は，新鮮そのものである．みずみずしい印象を受けた．

この章のしめくくりとして念を押しておきたいことがある．それは期日のことだ．締切期日は破られるためにある，という俗語があるが，それはプロの世界に通用することばで，われわれ素人には通用しない．締切期日を厳守することは，当たり前のことだ．

推敲が遂行なのだから，遂行するためには期日を守らねばならない．わたしは，期日に遅れたことは一度もない．初仕事のとき，本になった心のときめきと感激を忘れずに大切にしているからだ．「初心忘るべからず」は，どこまでも維持しなければならない．

（やまだ　おさむ）

給排水・衛生設備図

河津隆之
河津隆之事務所

建築設備設計図には、次のものがあります。

配管系統図

一般に、設計図では特記仕様書の次に配管系統図が綴じられていることが多いようです。この図は普通、衛生配管（給水、給湯、排水・通気）と受水槽、高置水槽、ポンプ類および専門工事用配管（ガスおよび消火など）とその関連機器類を立面的に描いています。

『空気調和・衛生用語辞典』（空気調和・衛生工学会編）によれば、各種システムの考え方や全容を理解しやすくする目的の系統を追った線図、とあります。

配管系統図を見ますと、平面図だけではわかりにくい、立ち上がり管、立ち下がり管などの判別や、機器類とのつながり方、あるいは給水の方式、排水・通気の方式などもわかるようになっています。

また、平面図にはない階高寸法の書き入れもあり、縮尺はノースケールで、普通、アイソメ図でなく立面図で描かれていることが多いようです。

このような意図で描かれた図ですから、見方のポイントは、機器や水槽類などがどの階に設置されているか、設備システムはどのようなシステムであるか、機器や水槽と管はどのようにつながっているかなどを見ていって、大まかな系統の全体像をつかむようにします。

図1を見て下さい。この図から市水本管・ガス本管からの分岐や、2階以上の階からの排水立て管を通しての排水横主管と1階からの排水横枝管は別々に屋外に出ていることなどがわかります。

配管平面図

この図では建築平面図に配管その他が描かれており、原則的にはその階のスラブをはさんで床下の配管と床上（一般には壁内）の配管が表示されていますが、ときにはその階の天井内配管も描いてあります。すなわち、床下、床上、天井の3空間にまたがって同一平面図にかかれている場合もあるようです。

また、水槽や機器類の設置階ではこれらの形式・仕様などを特記仕様書の機器リストで知るための機器記号・番号などが描かれています。

階数の多い建物では、地階平面図、1階平面図と配管が異なる階それぞれに平面図があり、同じものはまとめて基準階としての平面図になります。

これらは、建築設備を全体的にとらえるものですから、こみ入った配管になる場所には、別に詳細図があります。この場合、配管平面図（一般に1：100、1：200のスケール）では器具類だけが表記されて配管は描かれていません。

したがって、配管平面図では図示記号によって給水系統、排水系統などを識別し、色鉛筆などで色分けしながら経路を見ていくことが必要です。

詳細図

配管が複雑で表現しにくい機械室やトイレ、洗面所などを拡大して詳しく、わかりやすく描いた図（**図2**）で、縮尺は1：50程度です。

配置図

建物の配置図上に市水本管の位置・管径、下水道の管渠の位置・管径、公設ますなどの位置やガス本管の位置・管径なども描かれています。また建物に引き込む給水管、ガス管、建物より出てきた排水管、いわゆる屋外給排水・ガス管のルートを描いてあり、どの位置から、どのようにして、どんなサイズで給排水・ガス管が配管されているかがわかります。なお、付近見取図を併記していることもあります。

（かわづ　たかゆき）

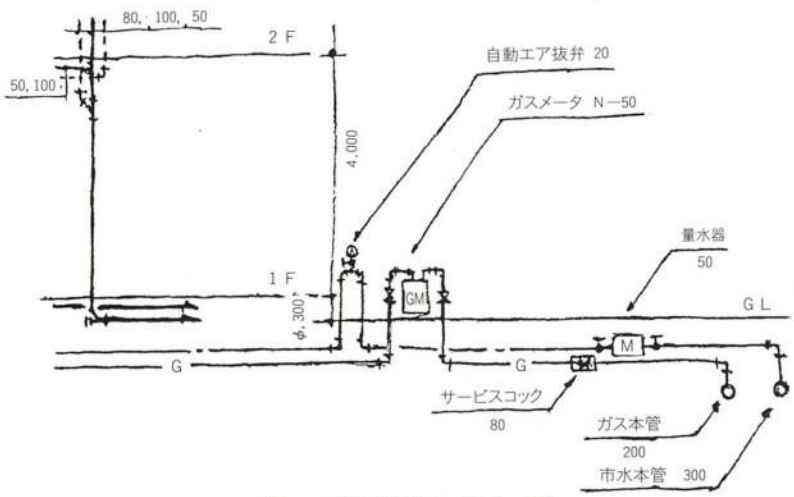


図1　配管系統図の一例（一部）

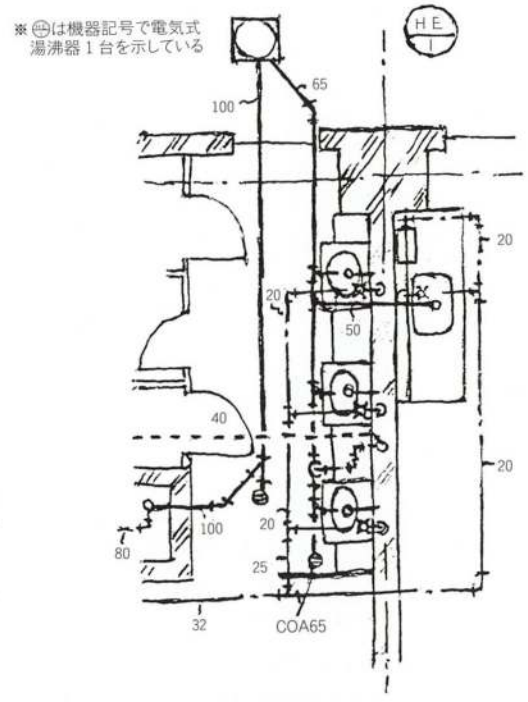


図2　1階便所詳細図の一例（一部）1/50

スライドレクチャー第10回（最終回）

『アルヴァ・アアルトとフィンランドの建築を訪ねて』

宮内　宏
事業委員会委員／宮内商会

広報小委員会は、大阪芸術大学建築学科専任講師（建築史、建築計画）杉本真一氏が10数年にわたり見聞した建築を、スライドを使ってお話しいただくため、『ぶらり海外建築見て歩き』スライドレクチャーを企画して、95年9月の第1回「東欧の華」の開講以来、多数のご参加をいただいた。シリーズ最終回『アルヴァ・アアルトとフィンランドの建築を訪ねて』は、97年1月28日に開催した。

フィンランドの歴史

フィンランドと言えば、そのイメージは森と湖の国・白夜・シベリウス・サンタクロース・ムーミン・アアルト・サーネリン。食べ物はザリガニが有名だ。しかしこのフィンランドは、被征服の歴史を繰り返している。

1157年スウェーデン十字軍の遠征を受けて以来、フィンランドは、1809年までの約650年間スウェーデンに帰属し、スウェーデン文化を完全に吸収した。この間、最大の町トゥルクでも人口は1500人で、歴史的価値のある建物はなかなか出来なかった。13世紀には全土ローマ・カトリックになるが、東のロシアからはギリシャ正教会が迫っていた。

1808年から1809年のスウェーデンとロシアの戦争で敗れ、ロシアの一公国としてロシアの支配下に置かれた。ロシアから遠いために、首都はトゥルクからヘルシンキに移され今日に至っているが、歴史的価値のある建物は少ない。

1939～40年にソ連と交戦（冬の戦争と言われる）。1941～44年再び第二次世界大戦でソ連と交戦し、敗れて国土の一部を失い、今日に至っている。

言語は、フィンランド語とスウェーデン語が使われている。

フィンランドの建築小史

独人エンゲルが、ペテルブルグを手本に官庁街の建物を設計した。

ロシア正教の建物などは、ロシアの支配下にあったときは、入口には普通はライオンだが、熊が使われている。

フィンランドの建築家はスウェーデンの建築家を注目していたようで、静かなる民族主義文化運動が起こっていた。

ヒューゴ・アルヴァ・ヘンリク・アアルトは、1898年に中西部のクオルタネで生まれ、1921年にヘルシンキ工科大学を卒業した。

1890年にはラルス・ソンク、エリエル・サーリネンがヘルシンキ工科大学を卒業し、新たな建築の歴史を築くようになっていった。

1899年にはシベリウスの「フィンランディア」、また芽生え出したナショナル・ロマンティシズムの代表作（第二期黄金時代の建物）として1905～12年にサーリネン、ゲゼリウス、リンドグレンの「国立博物館」、1907年にソンクの「カッリオ教会」「タンペレ大聖堂」がつくられている。

1904年にはサーリネンの案でヘルシンキ駅のコンペが提案されたが、合理主義的な立場（後の近代建築の主張と同じ）から反対され、修正案（単純化、合理主義的な配慮）で1916年に完成した。

1917年に帝政ロシアが崩壊し、フィンランドは独立した。

1924年にはJ.S.シレンの案（新古典主義的な作品）で国会議事堂のコンペが行われたが、単純さや明るさはなく、古典本来の質は失われており、フィンランド建築界の汚点ともいうべき建物と言われている。

アアルトの人生

アアルトは1923年に25歳でユバスキュラに事務所を設立、1927年にはトゥルクに、1933年（35歳）にはヘルシンキに事務所を移した。建築設計だけでなく、1935年には家具会社アルテク(ARTEK)を設立し、建物に付随する内装家具分野までも手掛けるようになった。そして、1940年にはマサチューセッツ工科大学教授に招聘され、ベーカーハウス（MITのドミトリー）をつくった。

アアルトとは、フィンランド語で『波』を表す。そのためか、アアルトには『波』を意識したデザインが多い。彼のデザインする家具は大量生産が可能な集成材を多用しているが、フィンランドでは硬い木が採れず、柔らかなシラカバなどが使われている。アアルトの建物にはトップライトの多用が見られ、多数の建物を残し、1976年（78歳）5月11日に死去した。

フィンランドの風土と生活・点描

・フィンランドは大きな山がなく、どこへ行っても地平線が見える。
・広い国土に人間よりもトナカイの方が多いとも言われている。
・言葉は、若者は英語も可能で、フィンランド語が分からなくても通じる。
・北欧は雪が多いためか、自動車は昼間でもライトを点灯している。
・市民が商品を持ち寄り、街の中でフリーマーケットが開かれている。
・寒い国のため、アトリウムを備えたショッピングセンター等が多く見られた。
・ヘルシンキは岩盤の上のため、岩をくりぬいた『岩の教会』もある。
・ヘルシンキオリンピックの競技場の塔は国民の大抵に人気がある。
・第二次世界大戦で敗戦国となりロシアに賠償を支払っているせいか、戦後の建築には国家の財政状況によって使用する材料も変化していて、高価な輸入材ではなくレンガが多くなっている。
・フィンランドの建築では『トップライトの多用』が大きな特徴と言える。
・若い建築家には、アアルトの影響が相当に出ている。
・どこに行っても、アアルトの建築を見たいと言うと、彼らの自慢の建築家であり建築物であるためか、気安く見学させてもらえたとのこと。

*

今回は230枚のスライドが映写され、建築だけでなく街の様子、人の生活など幅広い説明が行われた。

質疑応答では、『フィンランドは福祉国家だが、建築物には健常者用と思われる階段が多いように見える。しかし最新の建物には車椅子を配慮した設計がなされている』との回答で終わった。

*

杉本講師には長い期間にわたり、この企画にご協力いただいたことを、誌上をもって感謝と御礼を申し上げる。

なお、学芸出版社から『世界の建築』（仮）として刊行するべく、まずヨーロッパ編をご執筆中と聞く。　（みやうち　ひろし）

GBRC ニュース
GENERAL BUILDING RESEARCH CORPORATION OF JAPAN

財団法人 日本建築総合試験所
〒565 吹田市藤白台5-8-1
TEL.06-872-0391 FAX.06-872-0784
業務時間 9：00～17：15

機器紹介

着火性試験装置

耐火防火試験室では、平成８年度施設整備計画の一環として「着火性試験装置」の整備を平成８年９月に実施完了したので、ここに紹介します。

着火性試験装置を使用して次に示す試験が実施出来ます。

「ISO 5657 Ignitability of building products」

この規格については現在、ISO(国際標準化機構)／ＴＣ92で提案されています。

また、本試験装置を使用して以下の試験も実施可能です。

・JIS A 9521「住宅用人造鉱物繊維断熱材」付属書　発火促進試験方法
・JIS A 9523「吹込み用繊維質断熱材」付属書１　耐着火性試験方法

試験の概要

試験は、ある一定の放射熱を受けている材料が小さな種火で着火する時間を評価するものです。

試験体(165mm×165mm)表面を直径140mmの開口をもつアルミニウムはくで覆い、試験体を水平に保持します。上方から円錐台形型の電熱ヒータにより所定の放射熱強度（1、2、3、4及び5 W/㎠)を加えながら、試験体表面近くに４秒に１回の割合で種火(パイロットフレーム）を近づけます。その種火が試験体表面に発生した可燃性の熱分解生成ガスに着火し継続した炎が生じるまでの時間（着火時間）を測定し、着火時間と放射熱強度との関係を調べます。

装置の主な仕様

１）本体

ヒータ	外径8.5mm、長さ４m
	ステンレス製シースヒータ
	電力３kW（200V）
パイロットバーナ	電動式
	フレーム長10mm
	ノズル径1.5mm
	（シンクロナスモータ）
二次フレーム	フレーム長15mm

２）流量調節部

流量計	プロパンガス流量計
	測定範囲５～50ml/min
	空気用流量計
	測定範囲30～300ml/min
ニードル弁	二次フレーム調節用
	マイクロメータ式
着火時間測定計	デジタルタイマー式
	最大999.99秒

３）輻射計

検出器	水冷式
	ハイカルエンジニアリング社製
表示器	$3\frac{1}{2}$桁デジタル表示
	直読式
圧力計	冷却水圧力監視用

４）電源供給部

スライドトランス	200V　３kW用
トランスジューサ	電力用
	出力０～10mV
表示器	３桁デジタル表示
	電力直読式

着火性試験装置を使用した試験のお問い合わせは耐火防火試験室吉田、田坂または小川までお願いします。Tel：06-834-0157(直通)

着火性試験料金表

１条件当りの実施数量	料　金
３体実施の場合	168,000
５体実施の場合	199,500

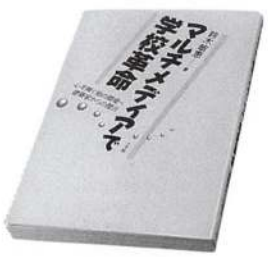


写真　着火性試験装置

BOOK STATION
ブックステーション

マルチメディアで学校革命
鈴木敏恵 著

小学館
1996.8.1刊
B 6判　231頁　1,500円



本書は、筆者のCAVシステム設計などの経験をもとに、学校にマルチメディアを持ち込んで、子供たちがワクワク学習できる環境を造ろうという提案書である。学校にマルチメディアを取り入れるとこんなにすばらしくなる、こんなことができるようになるということが書いてある。もっと専門的に、事例や解説が載っているのかと思ったが、専門書ではなく、むしろ一般向きの紹介本である。筆者の主観が多く入っているのと、柔らかすぎる表現のために、時に何を言いたいのか把握しにくい点が難。読みにくいのだ。テーマがおもしろいだけに、専門書でもなく、一般向きにしてはあれもこれもで中途半端になってしまったのが残念である。　（Y・I）

SD選書
芸術としての建築
スタンリー・アバークロンビー 著
白井秀和 著

鹿島出版会
1996.9.10刊
B 6判　234頁　1,854円



「建築と普通の建物との違いは何か。それは、建築は芸術の領域にまで高められた建物であるということである。それでは芸術とは何か」。この書は、建築を芸術としてとらえ、建築がいかに芸術として成立し得るかについて、具体的な事例をあげ、興味深い独自の要素設定を手がかりとして、幾つもの問題点を明らかにしながらその本質を分析解明し、この問いに答えようとしている。問題提起の内容はわかりやすく説明されてはいるが、それは因果律的な線的な対応で説明され結論づけられるものではない。原著の初版は1984年で10年を経ているが今なお新鮮で、訳者のあとがきに「この書はその内容を覚え学ぶのでなく、柔軟に感じとり何かのきっかけとして欲しい」とあるように、建築入門書としてふさわしく、さらに建築のみならず広く芸術・文化に関心のある人々に是非読んで頂きたい書である。　（I・I）

SD選書
フラクタル造形
三井秀樹 著

鹿島出版会
1996.9.15刊
B 6判　195頁　1,854円



フラクタルとはいったい何であろうか。フラクタル理論は1975年に提唱され、その自己相似性をもつという性質により、定量的に捉えられず、非定形で数理的な規則性がないと思われていた自然界の多くの形・パターンや現象が、簡単な仕組みで成り立ち、しかも数式で表現できることを証明した。造形構成学の研究者である著者は、この書でまずフラクタルとは何かを説き、そのフラクタル幾何学をベースに、形の体系と造形の秩序の見直しを計り、改めて造形の様々な様相と普遍性を、建築との関連性も踏まえながら、考察している。著者が「フラクタルは結局これまでの形の体系の中で曖昧にしてきた領域を埋める要石であり、読者がフラクタルを知ることにより体系化された形の概念を把握し、それぞれの立場で造形原理を再構築して欲しい」というように、この考え方は建築・デザインに対する造形能力と感性を磨くために非常に有効であると思われる。　（I・I）

映画のなかの現代建築
飯島洋一 著

彰国社
1996.12.10刊
B 6判　266頁　2,330円



本書は、映画の中に現代建築がどのように取り入れられているのか、またその選定に当たって一体どのような意味がそこにはあったのか—ということについて考察したものである。筆者は「虚と実の境が見えにくい現代において、映画の中に私たちは果たしてどのようなリアリティを発見できるのだろうか？」という問いに答えている。よって、本書で取り上げられている建築物は、すべて現実に建てられていて、日常的に使用されている作品に絞ってある。背景として使われた“建築”から映画を見直してみる、またその逆も考察してみることによって、新しい映画と建築の見方に出会えるというわけだ。映画の解説と建築作品および設計者の意図、映画作製者の方の意図が鋭く考察され、ビデオの案内もついている。　（Y・I）

担当：会員企画小委員会／伊藤郁郎・稲木裕子



竹中工務店相談役・元本会副会長

竹中錬一氏を偲んで

明治44年３月１日　兵庫県神戸市に生まれる

学歴

昭和８年３月　早稲田大学理工学部建築学科卒業
昭和９年３月　早稲田大学大学院修了

職歴

昭和９年３月　竹中工務店　入社
昭和20年２月　同社　取締役社長　就任
昭和52年３月　同社　取締役会長　就任
昭和52年10月　同社　取締役社長　就任
昭和55年３月　同社　取締役会長　就任
平成８年３月　同社　相談役　就任

団体・公職歴

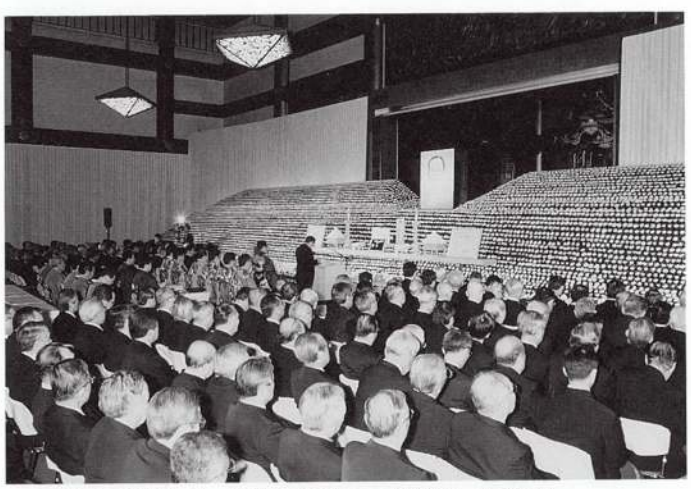
昭和23年２月　㈳大阪建設業協会　理事
昭和26年４月　大阪府建築士審議会　委員
昭和27年４月　㈳全国建設業協会　理事
昭和29年２月　㈳大阪建設業協会　会長
昭和29年４月　大阪労働基準局大阪労働者災害補償審査会　委員
昭和29年５月　建設省中央建設業審議会　委員
昭和29年10月　㈳関西経済連合会　常任理事
昭和29年12月　大阪府建築審査会　委員
昭和30年４月　㈳海外建設協会　理事
昭和33年３月　㈳関西経済同友会　代表幹事
昭和34年４月　㈳大阪工業会　理事
昭和37年４月　㈶建築業協会　理事
昭和40年４月　㈶建築業協会　理事長
昭和42年11月　㈳日本建設業団体連合会　副会長
昭和44年５月　㈳日本建設業団体連合会　常任理事
昭和47年２月　㈳大阪建設業協会　会長
昭和52年７月　㈶日本科学技術連盟　評議員

受賞歴

昭和27年６月　紺綬褒章　受章
昭和32年５月　大阪府知事表彰　受章
昭和34年７月　労働大臣表彰　受章
昭和35年７月　内閣総理大臣表彰　受章
昭和35年７月　建設大臣表彰　受章
昭和43年10月　藍綬褒章　受章
昭和43年11月　労働大臣表彰　受章
昭和45年９月　教皇シルヴェストロ・コンメンダトーレ騎士勲章　受章
昭和58年11月　勲二等旭日重光章　受章
昭和61年５月　日本建築学会賞　受賞
昭和63年11月　デミング賞本賞　受賞

協会歴

昭和22年４月～昭和23年３月　評議員
昭和23年４月～昭和36年３月　理事
昭和36年４月～昭和42年３月　副会長
昭和44年４月～　理事



５千人が参列して、最後のお別れ　故竹中錬一氏の社葬
平成９年１月30日
大阪市中央区の難波別院（南御堂）

竹中工務店相談役竹中錬一氏は、竹中家十四代竹中藤右衛門氏の長男として明治44年３月神戸市中央区にて出生された。
地元の旧制甲南高等学校から早稲田大学理工学部建築学科へ進まれ早稲田大学大学院修了と同時に竹中工務店に入社。取締役、副社長を経て終戦の年の昭和20年、33歳で代表取締役社長に就任された。

昭和52年３月、弟竹中宏平氏が社長に就任し会長となられたが、同年８月、宏平氏急逝により社長に復帰された。

昭和55年３月、長男竹中統一氏の社長就任に伴い再び会長職を務められ、平成８年３月、社長・会長在任期間50年を超えたのを節目に相談役に退かれた。

この間、戦後の混乱期から、高度成長期、オイルショック、その後の低成長時代、バブル期、バブル崩壊と幾多の波乱の中で、常に経営の第一線でリーダーシップを発揮され、社業はもとより建設業界の発展にも寄与された。

また、同氏は、慶長15年（1610年）宮大工として創業された竹中家の十五代当主にあたり、棟梁精神の伝統を継承して品質経営を踏襲、「最良の作品を世に遺し社会に貢献する」を企業理念に、近代化、合理化を進めグローバル企業としての経営基盤を確立するとともに今日のスーパー・ゼネコンの一角を占める企業規模に育て上げられた。特に、品質向上への取組では、昭和42年にＺＤ（無欠点）運動を業界に先がけて導入、この運動の経験をベースに昭和51年には、TQC（総合的品質管理）活動を、同様業界に先がけて導入し、昭和54年に建設業界初の「デミング賞実施賞」を平成４年には「日本品質管理賞」を受賞された。また、個人としても品質管理活動に貢献した人に与えられる「デミング賞本賞」を受賞されている。

一方、業界活動においては、㈳大阪建設業協会、㈶建築業協会をはじめ各種団体の役員として経営の近代化、生産性の向上、労務環境の改善、安全対策等々幅広い分野にわたって指導的役割を果たし、業界の体質改善に努められた。
公職歴では、大阪府建築士審議会、建設省中央建設業審議会、大阪府建築審査会など公的な活動にも業界人の立場から建設行政面で尽力された。
本会での役員歴としては、副会長（昭和36年～昭和42年）をはじめ評議員、理事として長年にわたり協会の事業にも深く理解をしめされ、本会発展のためにご指導・ご助力を賜った。

また、海外との建設交流にも早くから関心を寄せられ、昭和31年以降、欧米、ソ連（当時）、東南アジア諸国への訪問・視察を重ねる中で技術交流を積極的に進め、併せて、海外からの技術調査団や海外留学生の受入れ、開発途上国への技術支援にも積極的に取り組まれた。中でも中国とは、国交回復と技術交流を切望し、昭和46年に中国広州交易会に建設業界で初の正式招請があり参加、翌年には自ら団長として技術交流調査団を引率して訪中、以来交流は活発に行われ日中両国の親善の一役を果たした。

さらに、㈶竹中育英会の設立や、竹中大工道具館の設立など人材の育成、文化活動面にも情熱をそそがれた。

福岡道雄 個展

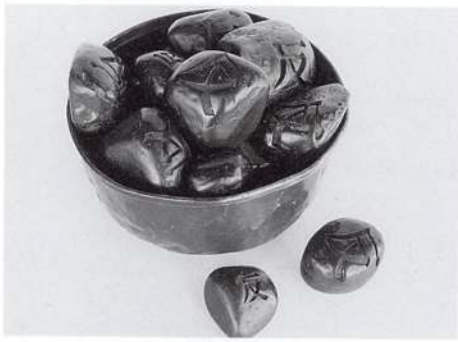
彫刻家・福岡道雄氏は、「奇蹟の庭シリーズ」「僕達がピンク色の女王のバルーンとなるとき」などの作品を発表、樹脂やブロンズを使い鋳造の作品の制作を行っている。

近年は、黒い箱状の天板だけに波の情景と自分の周りをのせるユニークな作品で知られ、現代美術彫刻展K氏賞や中原悌二郎賞優秀賞などを受賞している。今回は1983年～1997年の作品10点を展示。

会期　1997年4月1日(火)～13日(日)　11：00～19：00
月曜休廊

会場　アートスペース虹　TEL075-761-9238
京都市東山区三条通神宮道東3丁目東町247
(京阪電車、京津線蹴上駅、都ホテル西隣)

問い合せは上記まで。



福岡道雄氏彫刻作品

世紀をまたぐ巨人ームンク展

〈叫び〉〈不安〉などの傑作で知られるノルウェーの画家・ムンクの、いままで日本でほとんど紹介されていない初期の名作や後期の作品など約170点を、関連写真約110点とともに展示する。

会　期　1997年4月5日(土)～6月8日(日)
10：00～18：00
(休館日は4／14、4／28、5／12、5／16)

会　場　世田谷区美術館
東京都世田谷区砧公園1－2
TEL03-3415-6011

観覧料　一般当日1200円／前売り1050円
学生当日900円／前売り750円

問い合せは、NHK事業部 TEL03-5478-4324
NHKプロモーション TEL03-3476-5688

毛利元就展ーその時代と至宝

NHK大河ドラマ「毛利元就」が現在、放映されているが、今年は毛利元就の生誕500年にあたり、それを機会に戦国時代に大きな足跡を遺した毛利元就の生涯の紹介と、ゆかりの絵画・工芸・書跡等を中心に各地に伝わる貴重な文化財と宝物多数を展示する。

会　期［広島展］
1997年4月8日（火）～5月11日

会　場　広島県立美術館
広島市中区上幟町2－28
TEL082-221-6246

入場料　一般1100円（当日）
大学・高校800円（当日）
小・中学生400円（当日）

問い合せは、NHK事業部 TEL03-5478-4320まで。

デンマークの椅子200脚展

デンマーク家具のデザイン性の高さは、よく知られているが、長年にわたってデンマークの椅子を研究している織田憲嗣氏のコレクションを同氏の著書「DANISH　CHAIRS」出版を記念して、一堂に展示する。出展作品は、ハンス・ウェグナー26点、フィン・ユール24点、ボーエ・モーエンセン16点、ポール・ケアハン19点、アルネ・ヤコブセン20点をはじめ総64名のデザイナーの作品200点。

会　期　1997年4月9日(水)～5月5日(祝)
10：00～18：00（最終入場17：30）

会　場　アジア太平洋トレードセンター(ATC) ITM棟
10F大阪デザイン復興プラザ・デザインギャラリー＆ショーケース
大阪市住之江区南港北2－1－10

入場料　一般500円（前売400円）
学生300円（前売200円）
中学生以下無料

●講演会

日　時　1997年4月26日(土)　15：30～17：00
場　所　ATC　ITM棟10Fセミナールーム
定　員　200名（予定）
参加料　2000円（懇親会費含む）

申込みと問い合せは、アジア太平洋トレードセンター㈱ITM事業部 TEL06-615-5002まで。

「17人のアジア建築家」展

アジアの経済的成長が注目されるなか、アジアで活躍する17人の建築家の作品と、それをとりまく都市や風景を紹介する展覧会が開かれる。

同展は、建築史家の村松伸氏と写真家の浅川敏氏がアジア各地を取材し、観察したアジアの現代建築の姿を、スライド・写真・音・ビデオなどで展示構成している。なお、展示と並行して、アジア建築に関するレクチャーや音楽のパーフォーマンスも行われる。

会期　1997年4月14日(月)～6月13日(金)
10：00～17：00（土・日・祝日及び4／28～5／2は休館）

会場　ギャルリー・タイセイ
東京都新宿区西新宿1－25－1新宿センタービル17F TEL03-5381-5510

入場　無料

詳細および問い合せは上記へ。

出版記念・多井幸男 個展

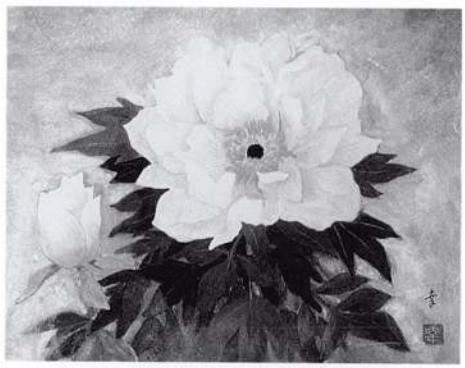
このほど出版された建築家・多井幸男氏のエッセー集『のみ屋のカウンターで――都市景観視学入門』(定価1200円→1000円に)の出版記念として、多井氏がこれまで描いてきた日本画の個展が、大阪・梅田新道の近くの画廊で開かれる。

同書は「日本の生活文化についての警告、啓蒙の書」（向井正也氏の序文より）であり、人間生活に密着した都市のさまざまな事柄について、きめ細やかな観察をとおしてシャープな批評を行っている。

個展では約30点の日本画が展示される。

会　期　1997年4月14日(月)～4月19日(土)
11：00～19：00（最終日17：00）

会　場　ギャラリー安土
大阪市北区西天満4-15-1（梅田新道ひとつ南の筋東へ入るすぐ）
TEL 06-364-4393



多井幸男氏作品(日本画)

花と緑のまちづくり総合展示会

花と緑のまちづくりに関する商品や知識、情報及び技術を一堂に集めた総合展示会「FAGOT'97」が、「花の万博」ゆかりの鶴見緑地で開催される。

花壇、庭園、フラワーアレンジメント、種苗、球根、切り花、蘭、園芸用品などのほか公園遊器具、ストリートファニチャーなどを出展及び即売するほか、フラワーデザインコンテストや花と緑のまちづくり紹介、園芸・緑化相談なども行われる。

会　期　1997年4月16日(水)～4月20日(日)
会　場　花博記念公園鶴見緑地（大阪市鶴見区）
入場料　500円（65歳以上は300円）
主　催　FAGOT'97実行委員会
後　援　大阪府、NHK大阪放送局、㈶大阪21世紀協会
問い合わせは、㈶大阪市公園協会
TEL06-252-5140

播磨科学公園都市ー近未来戸建住宅デザインコンペ

社会生活のメディア化とハイテク機器の住まいへの導入による新しい家族関係は、これまでの戸建住宅の枠組みを超えた新しい住宅のあり方を求めている。
そうしたところから、兵庫県企業庁では、「播磨科学公園都市」をステージにした戸建住宅デザインコンペを開催する。同コンペの審査員がすべて女性建築家というのもユニーク。

応募締切　1997年5月20日(火)
応募資格　(1)一般部門：不問
(2)学生部門：大学(大学院を含む)、高等学校、高等専門学校、専修学校及び各種学校
提出図面　配置図・平面図・立面図・断面図（縮尺自由、但し、縮尺明記）・透視図（模型写真も可）その他、設計意図を表現する図面及び説明文（400字程度）
用　紙　中判ケント紙、またはそれに類する厚紙、1枚に図面及び説明文を収める。パネル化は不可。
提出方法　応募作品裏面に応募部門名、自宅住所、氏名、年齢、電話、勤務先(学校名)、その所在地、電話番号を明記した紙を貼付して下記まで持参、または郵送。
審査員　長谷川逸子（委員長）／妹島和也／Astrid Klein／加茂紀和子／山根千鶴子／酒居淑子
賞　金　一般・学生部門：最優秀賞各1点100万円
同上　：優秀賞各1点30万円
同上　：入選各5点各10万円
発　表　審査結果は入賞者に通知するとともに、1997年8月号「新建築」に発表する。入賞作品の展示会は1997年8月1日から約3ケ月間の予定で播磨科学公園都市内にて行なう予定。

提出先及びお問い合わせは、兵庫県企業庁都市整備局播磨整備課都市建設係内「近未来戸建住宅デザインコンペ」係まで。〒650神戸市中央区下山手通5－10－1
TEL078-362-3697

第4回空間デザイン・コンペ〈ガラスブロック〉

A〔提案部門〕
課題：都市のなかのガラスブロック
登録締切　1997年8月11日（月）
作品締切　1997年8月25日（月）
提出図面　提案意図を表現する図面及び簡単な説明文（模型写真を含む）
用　紙　中判ケント紙或いは厚紙1枚（600㎜×840㎜）に収める。
提出方法　応募作品裏面に必要事項を記入した登録票を貼付のうえ、下記へ持参または郵送。
質　疑　課題に対する質疑応答はしない。
その他　応募作品は返却しない。未発表作品に限る。
B〔作品例部門〕
〈ガラスブロック〉を使用したデザイン性、機能性、快適性を追及した感性豊かな作品。
応募資格　1994年4月1日～1997年8月11日までの期間に日本国内で竣工した建築物、構築物。
登録締切　1997年8月11日(月)
作品締切　1997年8月25日(月)
提出作品　応募用台紙に所定事項を記入し、作品の完成写真（カラー）を貼り提出。写真の大きさ及び枚数は自由。作品内容を補足する図面提出は可。
その他　応募作品は返却しない。
審査員　香山壽夫（委員長）／岸和郎／針生承一／古谷誠章／八木幸二／戸谷文隆／馬場璋造
賞　金　A〔提案部門〕
金賞1点100万円、銀賞1点50万円、銅賞1点30万円、佳作10点各10万円
B〔作品例部門〕
金賞1点50万円、銀賞1点30万円、銅賞1点20万円、佳作10点各5万円
発　表　審査結果は、応募者に通知するとともに、1997年12月号「新建築」に発表。
提出先　㈱新建築社空間デザイン・コンペティション提案部門係及び作品部門係
〒113東京都文京区湯島2－31－2
TEL03-3811-7101

国際コンペ「21世紀・京都の未来」

京都市では、グランドビジョン（次期基本構想）を策定中で、その一環として京都の将来ビジョンの提案を、広く国内外から募集する。提案内容は、都市政策、都市論、或いはハード・ソフト両面にわたるものなど、都市計画に限らず新しい都市のあり方を求めて、既成概念にとらわれない自由で斬新な発想にもとづく多様な提案を、広範な分野から求めるもの。

テーマ　21世紀・京都未来
主　催　京都市
賞　金　2000万円（総額）
提案様式　ビジュアルボード又は論文形式(併用可)
登録締切　1997年7月31日
登録料　無料
応募締切　1997年10月31日
事務局　国際コンペ事務局
京都市下京区烏丸七条下ル京阪京都ビル8F
TEL075-342-0626

問い合せは上記事務局まで。

東京デザインセンター特別セミナー

東京デザインセンター主催のプロを対象とした建築の現場の問題点や今後の方向性を探る研究会「建築 Next Phase」は、毎回、多様な分野からの講演者を迎えて好評だが、今回は同センター開館5周年を記念して特別セミナーを開催する。

第25回公開セミナー
テーマ　組織設計のデザイン戦略―日本設計、竹中工務店の最新状況
講　師　内藤徹男（日本設計社長）
村松映一（竹中工務店常務取締役）
司　会　細野透（建築ジャーナリスト）
日　時　1997年4月15日(火)18：30～20：30
（20:30から懇親会）
会　場　東京デザインセンター
東京都品川区東五反田5－25－19
TEL03-3445-1121
参加費　2000円（学生1500円）
申込み　参加希望の方は、住所、名前、勤務先、TEL及びFAX番号を明記の上、東京デザインセンター「建築 Next Phase 研究会・公開セミナー係」Fax03-3445-1125まで。

「春秋建築塾」開講

最近、関西の建築界の元気が失われているという声が多々聞かれる。そうした状況を打開するための方策のひとつとして、このほど大阪で建築塾があらたに開かれる。内容は毎回、テーマを選び、複数の講師の対談形式に一般参加者が質問や持論をからませる参加型のスタイル。

日　時　1997年4月10日(木)18：30～
毎月第2木曜日18：30より開催予定。
場　所　INAX大阪支店8F会議室
会　費　1回毎支払いの場合2000円
11回分支払いの場合10000円
（申込書必要）
講師陣　渡辺豊和（建築家・京都造形芸術大学教授）
大島哲蔵（評論家）
福田晴虔（九州大学教授）
安原盛彦（建築家・東北大学非常勤講師）
磯野英生（成安造形大学助教授）
新田正樹（建築家）
高崎正治（建築家）
などの講師がテーマに応じ出席する。

ハウジングアンドコミュニティ財団助成対象者決定

㈶ハウジングアンドコミュニティ財団では、「住まいとコミュニティづくり活動助成」及び「若手デザイナー助成」の二つの助成事業について、つぎのように公募を行い、選考した結果、平成９年度の助成対象者を決定した。

第５回住まいとコミュニティづくり活動助成（18件）

・「弘前市茂森町」の参加型まちづくり／アカンサス
・Twinかやぶきアートスペース＆かやぶき演芸館／古民家愛好協会
・環境と共生のまち＝早稲田いのちのまちづくり／同実行委員会
・文京区の歴史的建物を町づくりの核として保存活用する／文京たてもの応援団
・都心居住方策としてのコーポラティブ住宅における意志決定方策について―その２／愉快な住まいの会
・公的団地立て替え後のコミュニティと団地環境の育成／深沢びおとーぷを育む会
・実験都市「多摩」は住みよい街？バリアフリーの見地から／多摩サロン大学
・入居者参加のくらしとすまいの支援ネットワーク／くらしとすまいのネットワーク（KSN）研究会
・消えゆく街並み、解体する建物のイラストによる記録／大渕・アデックとその仲間達の手仕事
・高齢化社会に向かう集合住宅の未来像を探る／並木第１住宅管理組合修繕委員会
・京都・まちなかの借地型コーポラティブハウスづくり／相国寺コーポ建設組合
・住まい手の生活を生かした京町家の再生／緋扇の会
・シマントプロジェクト―賃貸コレクティブハウジング構想／SHIMANTO PROJECT
・民間主導参画型まちづくり活動拠点の運営／芦屋市民街づくり連絡会
・都市型エコミュージアムの実現めざした研究・実践活動／津山・城西まるごと博物館研究会
・「やまさかコミュニティ」の高齢者居住支援活動／（仮）やまさか暮らし研究会
・町内回遊路を活用し町の活性化とコミュニティの再生／津屋崎町並み保存協議会
・「島原湧水・水屋敷トラスト」をめざして…復興へ／島原復興青年会議

第５回若手デザイナー助成（５件）

・都市に住む身体に障害を持つ単身者を核とした雑居的集住像の研究／安部　良
・ディスタンス・エデュケーション（通信教育）のための複合集住体／中田千彦
・ハイパー・コンプレックス・シティにおける都心居住の研究／古谷誠章
・共同居住：マージナルな社会における共同生活空間の形態に関する研究／フローレンス・テルマオリビア
・インナーシティにおける新しい集住体の可能性への研究と提案／松原永季
・〈自前の公共性〉原理に基づく集住の可能態／宮本佳明

建築設備診断技術者講習

BELCAと㈶日本建築設備・昇降機センターの２団体共催により、建築設備の総合的な診断技術者の育成を目的に平成７年から実施し、建築設備のリニューアルのニーズの高まりの中、数多くの受講者があり、平成８年の第２回目の講習を終了した現在、約1400名のビルディングドクター（建築設備）が誕生している。平成９年度の講習概要はつぎのとおり。

講習日・東京（１回目）1997年７月１日㈫～７月４日㈮
科学技術館サイエンスホール
東京都千代田区北の丸公園２―１
募集定員250名
・札幌1997年７月８日㈫～７月11日㈮
北海道教育会館
札幌市中央区南三条西12
募集定員60名
・大阪1997年７月15日㈫～７月18日㈮
大阪科学技術センター
大阪市西区靱本町１―８―４
募集定員150名
・東京（２回目）1997年７月22日㈫～７月25日㈮
発明会館ホール
東京都港区虎ノ門２―９―14
募集定員150名

講習案内　1997年３月３日㈪より。希望者はBELCA事務局まで、190円分切手を貼った返信用封筒（Ａ４判）を送付（案内書は無料）。

申込期間　1997年４月１日㈫～５月23日㈮
定員に達し次第、期間中でも締切予定。

受講料　52,500円（テキスト料・消費税含む）
申込後は、受講料は返還しない。
但し、受講資格なしの場合、手数料2500円を控除した50000円を返還

問い合せは、㈳建築・設備維持保全推進協会事業推進部〒100東京都千代田区有楽町１―８―１日比谷パークビルヂング403　TEL03-5252-3873

デザインセミナー

講　師　黒木靖夫氏（黒木靖夫デザイン事務所）
テーマ　「デザインの意味と移り変わり」
日　時　1997年４月12日㈮　15：00～16：30
会　場　アジア太平洋トレードセンターATC・ITM棟10Fデザインセンター内セミナーハウス
大阪市住之江区南港北２―１―10
参加費　2000円
定　員　100名（先着順）
申　込　アジア太平洋トレードセンター沖野・林・川西　TEL06-615-5510、FAX06-615-5173

問い合せは、アジア太平洋トレードセンターITM事業部、沖野、林　TEL06-615-5002

USAパブリックアート視察旅行

パブリックアート研究所では、アメリカの主要都市のパブリックアートを視察する研修旅行を企画している。パブリックアートの長い歴史をもつアメリカでは、現在、地域社会との結びつきを重視し、住民参加型のパブリックアートプロジェクトが注目を集め、各地の自治体や公団・公社が民間ボランティア団体の支援を得ながら行っている。

こうした現状の中で関心の高い事例を中心に視察地を得び、同研究所代表の杉村荘吉氏と現地プロジェクト関係者の案内・解説によって視察する。

企画　㈱パブリックアート研究所
時期　1997年６月12日（木）～６月22日（日）
料金　49万円以内

問い合せは、パブリックアート研究所〒150 東京都渋谷区神宮前5-2-8　TEL03-3407-9132担当森山・須田まで。

「復建協'95」新刊発行

阪神大震災で被災した分譲マンションの管理組合や居住者を支援する目的で、平成７年５月にマンション問題研究会を母体に発足した「復建協'95」（分譲マンションの復旧と建替えを推進する協議会）の活動終了を機会に、「復建協'85」参加者の意見や活動の報告を一冊にまとめ出版した。被災居住者の立場からは初めての刊行。

書　名　「阪神大震災・被災分譲マンションからのメッセージ」
編著者　先田政弘（マンション問題研究会代表）
発行者　マンション問題研究会
体　裁　Ａ４判総頁139Ｐ（本文62Ｐ・資料63Ｐ）
発行日　平成９年２月21日
定　価　1600円（税込）
講　読　書店で扱っていないため、購入希望者は同研究会へ直接申込み。

問い合せは、マンション問題研究会〒541 大阪市中央区瓦町4-3-9-303　TEL06-202-7630

送金先は、郵便振替で下記宛送金、用紙に氏名、送付先住所、TELを明記。口座名マンション問題研究会、口座番号00980-２-52640

日本建築協会

月間の動き

【平成9年1月分】

理事会

第4回常任理事会
22日・4時10分～5時30分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか16名
議　事　(1)名誉正会員の推挙の件
(2)平成8年度第2回通常総会開催の件
(3)80周年記念事業協賛金に関する件
(4)後援名義承認の件
(5)入退会者承認の件
(6)事業報告

編集委員会

第10回会員企画小委員会
7日・6時30分～8時45分・於本会会議室
出席者　稲木副委員長ほか6名
議　事　(1)「建築と社会」(シリーズもの)の報告と掲載予定
(2)新しい企画案について
第6回80周年記念特集編集幹事会
14日・7時～9時30分・於本会会議室
出席者　梅村・倉渕・笹村・田中・富田・吉村委員
議　事　80周年記念特集「80人の眼―建築と私と社会―」の具体化
第10回編集委員会
21日・6時～8時20分・於本会会議室
出席者　興謝野委員長ほか6名
議　事　(1)9年2月号「鉄ものがたり」特集経過報告
(2)9年3月号「東海―風土・文化とまちなみ・建築―金沢・能登」特集経過報告
(3)9年4月号「創立80周年記念：80人の眼―建築と私と社会―」特集案検討
(4)9年5月号「木造建築物の伝統技術とその将来」特集経過報告
(5)9年6月号「住む空間の復興」特集・「住宅・都市整備公団関西支社」特集企画検討
(6)平成9年1月号からの会誌体裁の検討
(7)平成9年度収支予算案検討
(8)その他
(9)収支状況報告
第9回広告企画小委員会
21日・5時～6時・於本会会議室
出席者　興謝野委員長ほか5名
議　事　(1)2月号「鉄ものがたり」特集広告途中経過報告
(2)3月号「東海支部―風土・文化とまちなみ・建築―金沢・能登」特集広告途中経過報告
(3)4月号「80周年記念：80人の眼―建築と私と社会」特集広告途中経過報告
(4)5月号「木造建築物の伝統技術とその将来」特集広告途中経過報告
(5)6月号「住む空間の復興」特集・「住宅・都市整備公団」特集広告途中経過報告
(6)独自特集企画経過報告
(7)作品作風関係報告
(8)平成9年度収支予算案検討
(9)その他
(10)収支状況報告
第9回設備分科会
23日・6時～8時・於本会会議室
出席者　西岡幹事ほか8名
議　事　(1)「設備の頁」の企画
(2)8月号設備特集の企画
(3)設備の新シリーズ頁の件
第7回計画系―インテリア・住宅―分科会
24日・7時～9時・於本会会議室
出席者　畑幹事ほか2名
議　事　7月号「インテリア・住宅」特集企画
第10回作品作風小委員会
30日・6時30分～9時・於本会会議室
出席者　富田副委員長ほか7名
議　事　(1)前回編集委員会の報告
(2)作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(3)作品の選定
(4)「Gallery」掲載報告・予定
(5)「SKETCH BOOK 欄」の掲載予定

事業委員会

第6回見学会小委員会
9日・6時～7時15分・於本会会議室
出席者　福島副委員長ほか8名
議　事　(1)前回事業委員会の報告
(2)実施報告
(3)今後の予定について
(4)今後の見学会の候補について
(5)平成9年度事業計画(案)について
第6回広報小委員会
9日・6時～7時・於関西電力「中之島プラザ」
出席者　原見、川村両副委員長ほか10名
議　事　(1)前回事業委員会の報告
(2)今後の予定について
第9回若い会員の集い小委員会
14日・7時～9時10分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか8名
議　事　(1)今後の予定について
(2)委員の時間
(3)その他
第6回事業委員会
16日・4時～5時30分・於本会会議室
出席者　多井委員長ほか5名
議　事　(1)各小委員会からの報告と検討
(2)次年度の事業計画並びに委員編成について
(3)その他

出版委員会

第9回出版委員会
16日・5時30分～6時15分・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか9名
議　事　(1)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
(2)今後のテーマと執筆者選定
(3)創立80周年記念出版の経過報告と予定
(4)その他

教育委員会

第3回工高生教育委員会
20日・6時～8時30分・於本会会議室
出席者　和田副委員長ほか7名
議　事　次年度・第43回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討

見学会・講演会

大阪松竹座見学会
14日・1時30分～4時・参加者68名
建築家に何ができるか―阪神大震災・被災地の現場から考える
野崎隆一／建築家・遊空間工房・関西建築家ボランティア
「白地地域復興の現状」
24日・6時30分～8時45分・参加者32名

スライド・レクチャー

ぶらり海外建築見て歩き
アルヴァ・アアルトとフィンランドの建築を訪ねて
28日・6時30分～8時30分・参加者24名

30's EYE―21世紀へのエスキス

橋本　純／編集者・新建築社編集部副編集長
「雑誌の中の建築」
31日・6時30分～9時・参加者47名

創立80周年記念事業

第4回実行委員会
21日・4時～5時30分・於本会会議室
出席者　三品委員長、多井相談役ほか6名
議　事　創立80周年記念事業の企画

第4回日本建築協会賞

第1回選考委員会
22日・2時～4時・於本会会議室
出席者　青柳委員長代行ほか6名
議　事　第4回日本建築協会賞の選考

建築クラブ

建築クラブ新年宴会
14日・6時～7時30分・参加者50名

入会者(敬称略)

〔団体会員10社〕

KYタイル㈱	三宝建設㈱	㈱タイエ
タイヘイ建築㈱	㈱田中組	㈱利倉
藤本タイル㈱	マルコマ㈱	㈱松岩組
陽光工業㈱		

〔個人会員2名〕

横地　修三(丸八建設)　　田中　昇(佐田建設)

創立80周年記念特集
―建築と私と社会―80人の眼

協　賛

建築事務所（積算事務所を含む）

浅井謙建築研究所株式会社　大阪市北区西天満2-9-4　TEL06-361-0035

株式会社石本建築事務所　大阪市中央区南本町2-6-12 サンマリオン大阪　TEL06-251-7507

株式会社泉沢建築設計事務所　大阪市浪速区日本橋3-1-26　TEL06-631-8721

株式会社板垣建築事務所　大阪市浪速区日本橋4-7-23　TEL06-633-7535

株式会社伊藤建築設計事務所　名古屋市中区錦2-2-13 名古屋センタービル　TEL052-222-8611

株式会社歌建築設計事務所　和歌山県那賀郡打田町打田315　TEL0736-77-2711

株式会社浦辺設計　大阪市北区梅田1-12-39 新阪急ビル内　TEL06-341-1680

株式会社エヌ・ティ・ティファシリティーズ関西支店　大阪市中央区博労町2-1-13　TEL06-267-7035

株式会社大阪雑賀建築事務所　大阪市天王寺区上本町8-3-23　TEL06-772-4426

株式会社神戸積算一級建築士事務所　神戸市中央区北長狭通6-3-10 ロイヤル花隈2FB TEL078-371-5587

株式会社小西設計　大阪市西区立売堀1-12-16　TEL06-532-4051

株式会社建設技術センター　大阪市淀川区西中島5-7-17-602　TEL06-304-1148

株式会社三伸建築事務所　大阪市天王寺区玉造元町12-16　TEL06-761-8558

株式会社昭和設計　大阪市西区新町1-5-7 四ツ橋ビル　TEL06-532-3421

株式会社綜合積算　大阪市北区天神橋3-2-10 TKH南森町ビル9F　TEL06-351-3466

株式会社創美設計　大阪市北区天神橋3-2-10　TEL06-881-1778

高積算（タカ）株式会社　大阪市北区菅原町11-11 DAISAKUAMビル6F　TEL06-367-0846

株式会社髙橋上田設計事務所　大阪市西区新町1-4-21 大幸ビル　TEL06-533-0972

株式会社大建企画設計　大阪市西区阿波座1-13-13　TEL06-536-7372

株式会社大建設計　大阪市西区京町堀1-13-20　TEL06-449-6800

株式会社地域計画建築研究所　京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 大和銀行京都ビル　TEL075-221-5132

株式会社ツジモトユタカ設計事務所　和歌山市東長町中ノ丁20　TEL0734-26-2030

株式会社東畑建築事務所　大阪市中央区伏見町4-4-10　TEL06-202-0391

株式会社都市問題経営研究所　大阪市中央区本町3-2-6 日住金本町ビル　TEL06-245-5081

株式会社内藤建築設計事務所　兵庫県小野市上本町240-4　TEL0794-62-4757

株式会社日建設計　大阪市中央区高麗橋4-6-2　TEL06-203-2361

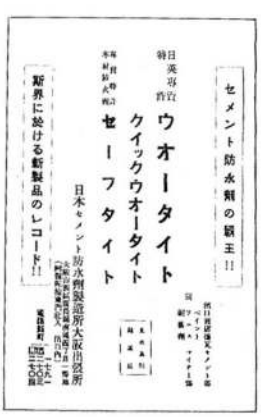
株式会社日積サーベイ　大阪市中央区谷町3-1-9 MG大手前ビル　TEL06-944-2755

株式会社日本設計関西支社　大阪市中央区淡路町3-3-7 興和淡心ビル　TEL06-201-0321

株式会社平田建築構造研究所　大阪市北区堂島2-2-23 白雲ビル　TEL06-341-4137



大正11年1月号掲載



大正11年6月号掲載



大正11年6月号掲載



大正11年8月号掲載

創立80周年記念特集
―建築と私と社会―80人の眼

協　賛

株式会社松田平田大阪事務所　大阪北区曽根崎新地2-5-3 堂島TSSビル　TEL06-344-7821

株式会社安井建築設計事務所　大阪市中央区島町2-4-7　TEL06-943-1371

建設業

株式会社あめりか屋　大阪市北区中之島4-3-25　TEL06-444-1501

株式会社新井組　西宮市池田町12-20　TEL0798-26-3111

株式会社淺川組　和歌山市小松原通3-69　TEL0734-23-7161

株式会社淺沼組　大阪市天王寺区東高津町12-6　TEL06-768-5222

礎工業株式会社　大阪府枚方市杉北町1-1059-20　TEL0720-59-0845

株式会社今西組　大阪市天王寺区上本町6-6-23-309　TEL06-779-3361

大木建設株式会社大阪支店　大阪市西区南堀江2-12-10　TEL06-538-3071

大之木建設株式会社　広島県呉市中央3-12-4　TEL0823-26-1511

株式会社大林組　大阪市中央区北浜東4-33　TEL06-946-4578

鹿島建設株式会社関西支店　大阪市西区阿波座1-3-15　TEL06-536-3311

共立建設株式会社関西支店　大阪市中央区内本町2-2-5　TEL06-942-2491

株式会社熊谷組大阪支店　大阪市都島区片町2-10-5　TEL06-353-2516

公成建設株式会社　京都市下京区五条通西洞院西入　TEL075-365-8300

株式会社鴻池組　大阪市中央区北久宝寺町3-6-1　TEL06-244-3500

株式会社金剛組　大阪市天王寺区四天王寺1-14-29　TEL06-779-7731

栄建設株式会社　大阪市東成区中道3-4-24-103　TEL06-974-5030

三和建設株式会社　大阪市淀川区加島1-55-6　TEL06-301-6636

清水建設株式会社大阪支店　大阪市中央区本町3-5-7　TEL06-263-2800

神鋼建設株式会社　兵庫県尼崎市開明町2-11　TEL06-412-2221

株式会社新宅工務店　大阪市都島区高倉町2-3-11　TEL06-922-1071

住友建設株式会社大阪支店　大阪市中央区北浜4-7-28　TEL06-220-8712

積水ハウス株式会社　大阪市北区大淀中1-1-88 梅田スカイビルタワーイースト　TEL06-440-3111

株式会社錢高組　大阪市西区西本町2-2-11　TEL06-538-7810

大成建設株式会社大阪支店　大阪市中央区南船場1-14-10　TEL06-265-4522

株式会社竹中工務店　大阪市中央区本町4-1-13　TEL06-252-1201



大正15年７月号掲載



大正15年７月号掲載



大正15年７月号掲載



大正15年７月号掲載

創立80周年記念特集
—建築と私と社会—80人の眼

協　賛

大幸建設株式会社　大阪市西区新町1-4-21　TEL06-538-0881

大日本土木株式会社大阪支店　大阪市北区堂島2-2-2　TEL06-341-5211

大豊建設株式会社名古屋支店　名古屋市中村区角割町5-7-2　TEL052-481-4101

鉄建建設株式会社大阪支店　大阪市中央区瓦町3-3-7　TEL06-201-1874

戸田建設株式会社大阪支店　大阪市西区西本町1-13-47　TEL06-531-6095

東急建設株式会社大阪支店　大阪市北区豊崎3-19-3　TEL06-377-6513

東洋建設株式会社　大阪市中央区高麗橋4-1-1　TEL06-209-8711

株式会社東和組　大阪市北区西天満4-5-14　TEL06-363-4051

株式会社中道組　大阪市都島区片町1-3-4　TEL06-352-4771

南海辰村建設株式会社　大阪市浪速区難波中3-5-19　TEL06-644-7823

西松建設株式会社関西支店　大阪市中央区釣鐘町2-4-7　TEL06-942-1131

野村建設工業株式会社　大阪市中央区高麗橋2-1-2　TEL06-226-9500

株式会社間組大阪支店　大阪市中央区瓦町4-4-8　TEL06-201-2752

株式会社樋口組　大阪府大東市大字龍間308-20　TEL0720-69-0121

株式会社フジタ大阪支店　大阪市北区堂島2-1-16　TEL06-348-4510

株式会社藤木工務店　大阪市西区新町2-4-2　TEL06-539-8301

不動建設株式会社　大阪市中央区平野町4-2-16　TEL06-201-1121

豊國建設株式会社　大阪市北区天満橋2-3-1　TEL06-353-1001

前田建設工業株式会社大阪支店　大阪市西区江戸堀1-3-15　TEL06-446-9511

株式会社増岡組　広島市中区鶴見町4-25　TEL082-504-5050

株式会社森組　大阪市中央区道修町4-5-17　TEL06-201-2761

山岡建設株式会社　大阪市中央区船越町2-2-1　TEL06-941-2590

空調・衛生・電気・各種工事業

浅海電気株式会社　大阪市北区西天満3-7-4　TEL06-362-8701

浦安工業株式会社大阪支店　大阪市北区天満2-3-5　TEL06-351-7502

ネオン看板・サイン工事
大阪クロード株式会社　大阪市福島区海老江8-11-21　TEL06-451-1273

鳳工業株式会社　大阪市北区堂島2-3-23　TEL06-344-4788

株式会社小野工業所　東京都墨田区石原4-12-1　TEL03-3624-2261



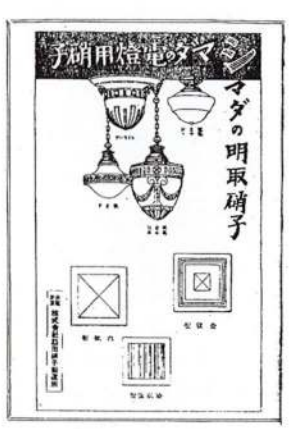
大正15年7月号掲載



大正15年7月号掲載



大正15年8月号掲載



大正15年11月号掲載

創立80周年記念特集
—建築と私と社会—80人の眼

協　賛

株式会社カンダン　大阪市住吉区万代6-1-1　TEL06-676-2100

サッシ・屋根工事
株式会社神治屋　京都市伏見区下鳥羽長田町70　TEL075-601-6301

川北電気工業株式会社　名古屋市中区栄4-6-25　TEL052-251-7111

栗原工業株式会社　大阪市北区角田町1-1　TEL06-313-1101

近藤金属工業株式会社　大阪市西区土佐堀2-1-21　06-441-8676

株式会社山陽瓦　岡山県倉敷市中島2360-20　TEL0864-65-1988

三和電気土木工事株式会社　大阪市北区南森町1-4-19　TEL06-361-6451

株式会社清水工業所　大阪市北区豊崎1-11-19　TEL06-372-2851

新菱冷熱工業株式会社　東京都新宿区四谷2-4　TEL03-3357-2151

住友電設株式会社　大阪市西区阿波座2-1-4　TEL06-537-3430

ダイダン株式会社　大阪市西区江戸堀1-9-25　TEL06-441-8231

大晃設備株式会社　大阪市此花区西九条2-13-28　TEL06-466-2268

朝陽電気株式会社　大阪市北区中之島3-2-4　TEL06-385-1362

株式会社内外テクノス　大阪府大東市谷川2-7-1　TEL0720-72-2161

株式会社西原衛生工業所大阪店　大阪市北区中津6-8-4　TEL06-458-3628

花豊造園株式会社　京都市下京区大宮通五条下ル　TEL075-341-2246

日立造船株式会社　大阪市此花区西九条5-3-28　TEL06-466-7500

不二熱学工業株式会社　大阪市中央区南船場2-1-1　TEL06-261-2436

タイル工事
八木惣株式会社　大阪府堺市津久野町3-28-10　TEL0722-62-3838

建材・設備メーカー

株式会社アーレスティ大阪営業所　吹田市垂水町3-23-10　TEL06-386-7575

株式会社アイエス工業所　大阪市城東区鴫野東3-5-13　TEL06-961-2488

アイビ産業株式会社　大阪市西淀川区姫島4-19-6　TEL06-473-4771

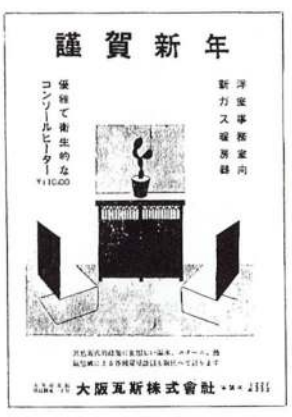
旭コンクリート工業株式会社阪神営業所　大阪市北区西天満4-11-23 満電ビル5F　TEL06-361-7951

株式会社エービーシー商会大阪営業所　大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル8F　TEL06-944-4911

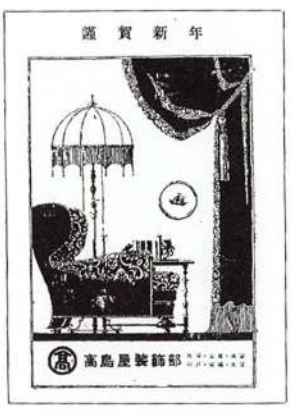
オリエンタルメタル株式会社　兵庫県尼崎市長洲中通3-24-35　TEL06-487-2146

大阪化工株式会社　吹田市山田東1-12-12　TEL06-876-2334

王建工業株式会社　大阪市北区西天満6-1-2　TEL06-362-9402



昭和8年1月号掲載



昭和8年1月号掲載



昭和8年5月号掲載



昭和8年6月号掲載

創立80周年記念特集
―建築と私と社会―80人の眼

協　賛

株式会社小笠原工業所　愛媛県松山市南斉院町347　TEL089-972-0043

小俣シャッター工業株式会社大阪支店　大阪市北区天神橋2-5-3 第5新興ビル　TEL06-353-7377

株式会社川島織物　吹田市広芝町8-26　TEL06-369-6239

瓦寅工業株式会社　大阪市生野区林寺1-5-14　TEL06-715-0201

元旦ビューティ工業株式会社　神奈川県藤沢市湘南台5-36-5　TEL0466-45-8771

コマニー株式会社関西市場開発部　東大阪市長田中5-56　TEL06-746-5502

三協アルミニウム工業株式会社　大阪市西区靱本町1-9-15　TEL06-448-5456

三晃金属工業株式会社大阪支店　大阪市中央区北浜4-1-21　TEL06-231-8571

三友化工株式会社大阪事業本部　大阪府高槻市桃園町5-6　TEL0726-72-6306

神東塗料株式会社　兵庫県尼崎市南塚口町6-10-73　TEL06-426-3355

鈴木シャッター工業株式会社大阪支店　大阪市旭区新森1-7-47　TEL06-956-6221

住友スリーエム株式会社　大阪市北区中之島6-2-40　TEL06-447-3903

株式会社西部技研大阪営業所　大阪市淀川区西中島5-2-12 新大阪駅前サクセスビル6F　TEL06-305-9251

タイセイ商工株式会社大阪営業所　東大阪市川田3-9-21　TEL0729-63-6355

株式会社タジマ大阪営業所　大阪市西区京町堀1-10-5　TEL06-441-5961

田島ルーフィング株式会社　大阪市西区京町堀1-10-5　TEL06-443-0431

テクノ・ナミケン株式会社　大阪市西区新町1-4-26　TEL06-533-3855

株式会社トウペ　大阪府堺市築港新町1-5-11　TEL0722-43-6458

東陶機器株式会社　大阪市北区曽根崎2-3-7　TEL06-364-1624

東洋ゴム工業株式会社　大阪市西区江戸堀1-17-18　TEL06-441-8803

東洋シヤッター株式会社　大阪市中央区南新町1-2-10 ＴＳビル　TEL06-943-6571

東リ株式会社　大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル7F　TEL06-943-1645

ナカ工業株式会社　大阪市淀川区田川3-9-36　TEL06-886-8961

株式会社ナルックス大阪支店　大阪市北区西天満3-14-16 西天満パークビル　TEL06-363-1868

中西産業株式会社大阪営業所　大阪市鶴見区中茶屋1-3-9　TEL06-911-2212

西谷陶業株式会社　大阪市中央区東心斎橋1-18-24 香川県ビル　TEL06-241-5967

日新工業株式会社大阪支店　大阪市西区新町1-12-22　TEL06-533-3191

日本住宅パネル工業協同組合　東京都文京区本駒込6-15-7　TEL03-3945-2311

株式会社日本セメント防水剤製造所　吹田市垂水町3-16-12　TEL06-386-1981

日本電気硝子株式会社　大阪市淀川区宮原4-1-14 住友生命新大阪北ビル　TEL06-399-2728



昭和15年９月号掲載



昭和15年９月号掲載



昭和15年９月号掲載



昭和15年12月号掲載

創立80周年記念特集
―建築と私と社会―80人の眼

協　賛

株式会社ノザワ大阪支店　大阪市北区曽根崎新地1-3-16 京富ビル8F　TEL06-345-1031

パラマウント硝子工業株式会社　東京都中央区日本橋久松町11-6 日本橋ＴＳビル3Ｆ　TEL03-3665-0301

福西鋳物株式会社　大阪市西区南堀江4-25-17　TEL06-541-2924

不二サッシ株式会社大阪支店　大阪市中央区本町3-4-10　TEL06-262-2545

文化シヤッター株式会社関西営業推進部　大阪市中央区北久宝寺町4-3-11 エーユー本町ビル　TEL06-282-0945

丸五基礎工業株式会社　大阪市北区東天満2-6-2　TEL06-358-3601

ムツミ産業株式会社　大阪市西区靱本町1-17-15　TEL06-441-0378

山本窯業化工株式会社　吹田市豊津町41-20　TEL06-338-8601

株式会社ユニオン　大阪市西区南堀江2-13-22　TEL06-532-3731

YKK アーキテクチュラルプロダクツ株式会社　大阪市中央区谷町4-8-7　TEL06-945-0568

青葉印刷株式会社　大阪市都島区中野町2-10-11　TEL06-351-5428

株式会社市ヶ谷出版社　東京都千代田区九段南4-2-10　TEL03-3265-3711

オーエム工業株式会社　大阪市住之江区北加賀屋3-3-44　TEL06-685-0681

大阪エスピー紙工株式会社　大阪市中央区玉造2-25-20　TEL06-765-5650

大阪工業技術専門学校　大阪市北区天満1-9-27　TEL06-352-0091

財団法人大阪住宅センター　大阪市中央区南船場4-4-3 御堂筋アーバンライフビル4F　TEL06-253-0071

キョーワ株式会社　大阪市中央区南船場1-13-20　TEL06-262-5281

京都建築専門学校　京都市上京区下立売通堀川東入東橋詰町174　TEL075-441-1141

修成建設専門学校　大阪市西淀川区大和田5-19-30　TEL06-474-1644

新日本法規出版株式会社　大阪市中央区内平野町2-1-12　TEL06-942-5221

第一法規出版株式会社関西支社　大阪市西区新町2-15-24　TEL06-541-5921

財団法人日本建築総合試験所　吹田市藤白台5-8-1　TEL06-872-0391

日本電植株式会社　大阪市北区天満2-5-15　TEL06-352-7502

不二出版株式会社　東京都文京区向丘1-2-12　TEL03-3812-4433

有限会社柳々堂　大阪市西区京町堀1-12-3　TEL06-443-0167

その他（学校・出版・印刷・書店その他）

株式会社アテナ商会　門真市柳田町14-12　TEL06-908-6360



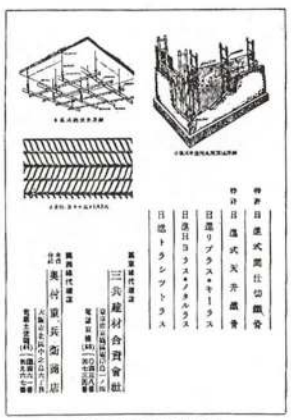
昭和15年７月号掲載



昭和15年８月号掲載



昭和15年９月号掲載


昭和15年９月号掲載

NTTファシリティーズは建物の設計から維持管理までトータル的にコーディネートします



Construction Management

コンストラクションマネジメント

NTTファシリティーズのCMは、建設プロジェクト発注者に代わって、専門のエンジニアリングと費用や工期・目的に沿った機能性を有しているか等、建設プロジェクトのあらゆるマネージメント活動を行い、依頼主を建設活動に起因する"見えざる損失"から守り、透明度の高い明快な運営を実施します。

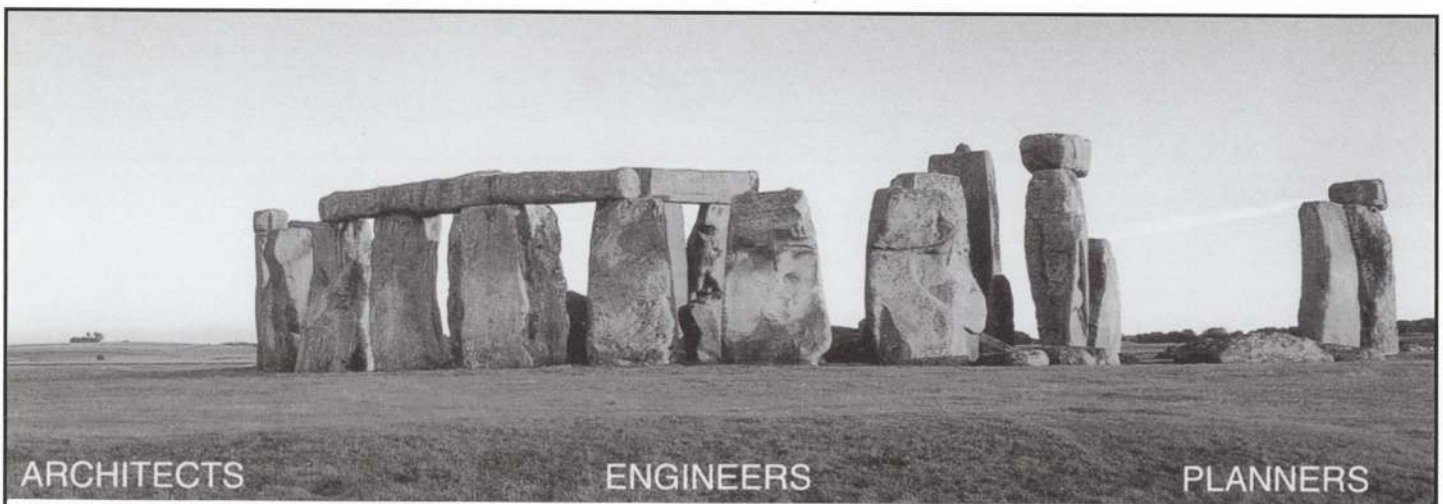
Facility Management

ファシリティマネジメント

NTTファシリティーズのFMは、企業の総資産の半分を占めるといわれるファシリティの機能と価値を有効に活かすことにより"見えざる損失"の回復と"将来的な利益"を約束します。施設に関するさまざまな事業ニーズを投げかけてください。FMのプロ集団として、ダイナミックにファシリティを活かします。

NTTファシリティーズ

株式会社 エヌ・ティ・ティ ファシリティーズ **関西支店**
TEL(06)267-7071　FAX(06)265-5161
〒541　大阪市中央区博労町2丁目1番13号



人に
「力」　人の気持ちを原点に、人の活力や笑顔を生み出す空間設計をめざして…。

都市に
「夢」　都市に住む人、都市で働く人、都市を訪れる人々が夢や感動を語れる理想の都市づくりに力を注いでいます。

環境に
「愛」　いつまでも美しい自然と地球への願を設計図に込めて…。

株式会社 髙橋上田設計事務所
TAKAHASHI UEDA ASSOCIATES CO., LTD.

●本　　社　〒550 大阪市西区新町1丁目4番21号(大幸ビル)　TEL06 (533)0972
●大阪事務所　〒550 大阪市西区新町1丁目4番21号(大幸ビル)　TEL06 (533)0971
●東京事務所　〒162 東京都新宿区揚場町1番21号(飯田橋升本ビル)　TEL03(5261)8081
●神戸事務所　●九州事務所　●京都事務所　●東播事務所　●マニラ事務所(海外)

株式会社 東畑建築事務所

取締役会長　東畑謙三
取締役社長　市川宏

本社大阪事務所　大阪市中央区伏見町4丁目4番10号　電話(06) 202-0391
東京事務所　東京都千代田区永田町2丁目4番3号(永田町ビル)　電話(03)3581-1251
名古屋事務所　名古屋市中区錦1丁目13番26号(三井生命伏見ビル)　電話(052)223-3931
九州事務所　福岡市博多区博多駅前2-2-1(福岡センタービル)　電話(092)472-8737

日建設計

代表取締役会長　薬袋公明
代表取締役社長　牧英二

大阪　541　大阪市中央区高麗橋4丁目6－2　電話 (06) 203-2361
東京　112　東京都文京区後楽2丁目1－3　電話 (03) 3813-3361
名古屋　460　名古屋市中区栄4丁目15－32　電話 (052) 261-6131
支所・その他　東北(仙台)・神奈川(横浜)・静岡・北陸(富山)・神戸・広島・九州(福岡)
シンガポール・ソウル・クアラルンプール

OBAYASHI

あしたのものがたり



出会いは、
人をゆたかに変えてくれます。
ひとりひとりの夢は、語られ、共有されて
あしたのたしかなかたちになっていきます。
たてものは、人と未来が
出会う場所なのです。

株式会社 大林組

東京本社／東京都千代田区神田司町2-3 〒101 ☎03-3292-1111　本店／大阪市中央区北浜東4-33 〒540 ☎06-946-4400[電話番号案内]



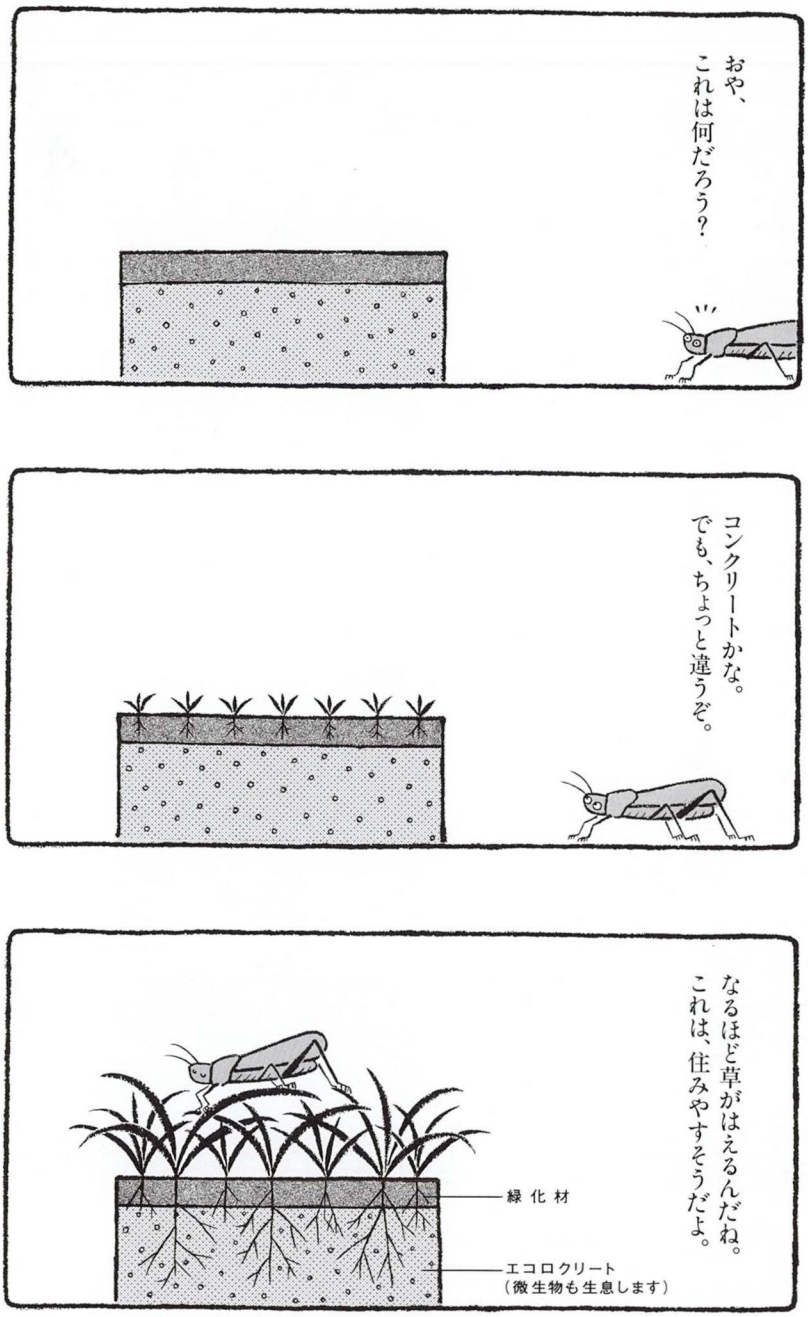
“安心”の上に暮らす。

我が家に帰ると、ほっとする。それは住まいが
雨、風、暑さ、寒さから私たちをまもってくれるばかりでなく、
そこが家族や愛着のあるモノに囲まれた安心できる空間だからこそ。
カジマの免震ハウジングは文字どおり地震の揺れを大幅に低減し、
家具の転倒などの二次災害にも効果を発揮。
地震から建物の安全はもちろんのこと、
住む人の暮らしをしっかりまもります。

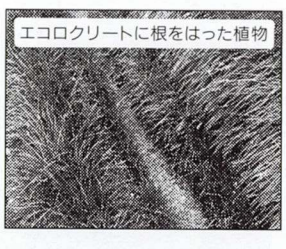
快適環境創造企業
鹿島
KAJIMA CORPORATION
本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7

SHIMZ

川辺のお話。



河川や湖の護岸や擁壁に、シミズからの提案です。エコロクリートは従来のコンクリート並みの強度（180kgf/cm²）を持った多孔質のコンクリート。植物の種子、土壌、肥料などが含まれた緑化材を吹きつけると、そこに緑がしっかりと根をはってくれます。山口県八代つるの里での施工実績をはじめ、さまざまな分野で活躍が期待されているエコロクリートは、安全と環境保全への考え方がひとつになった私たちの取り組みのひとつ。虫たちも、よろこんでくれるかな。


エコロクリートに根をはった植物

人がつくる、人の場所。
SHIMIZU CORPORATION
清水建設

※エコロクリートは、清水建設の登録商標です。

カモメの星

波の音が地球のリズムを刻む。
海辺の景色にカモメが溶け込んでゆく。
いつから、こんな光景が繰り返されてきたんだろう。
そんなことを考えると、あたりまえの光景が、
たまらなくいとおしく感じられます。
この星の上の、こんな時間が、
いつまでも、いつまでも、続きますように。
私たちは、道や、ビルや、街が生まれるそのそばで、
静かないのちが精一杯生きていることを
忘れずにいたいと思っています。
大成は建設を通じて人類の未来を創造しています。
けれど、様々な生き物たちの場所を借りながら、
この惑星で創造を続けているのだという事実を
しっかりと胸に刻んでおきたいと思っています。



TAISEI
大成建設



松の芽ばえ

地球と、育つ。

地球環境の再構築は、すでに切迫した課題です。地球が保有する資産を大切に活用しながら、新たな資産を発見・創出していかなければなりません。そのためには、私たち人間はあらゆる生物たちと対話し、その力を借りながら、共に成長していくことが大切です。竹中工務店は、早くから独自の「地球環境憲章」を制定し、地球環境の再構築をめざす新技術を育成してきました。その成果をふまえ、いま、技術のさらなる高度化を積極的に推進しています。

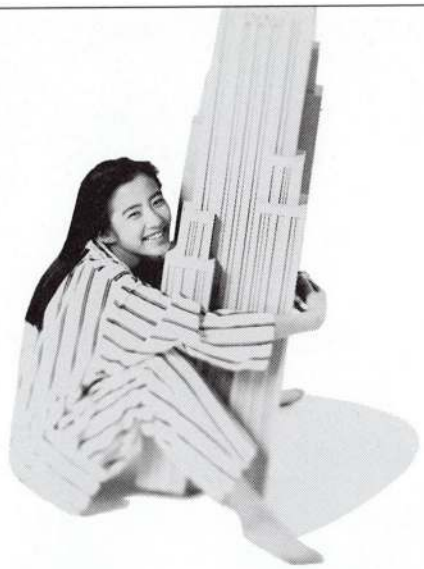
創業1610年

竹中工務店

お問い合わせは——総本店広報へ
〒541 大阪市中央区本町4丁目1-13 Tel.06(252)1201
〒104 東京都中央区銀座8丁目21-1 Tel.03(3542)7100
[WWW Home page]http://www.takenaka.co.jp/

株式会社 淺沼組
since1892

あなたが好きだから、
あなたの好きな街をつくりたい。

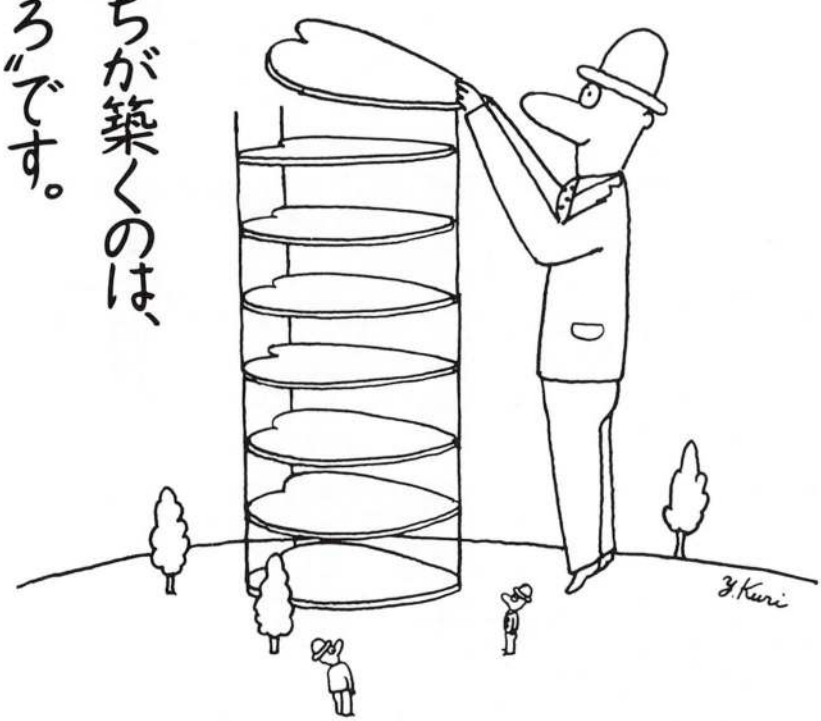


人・都市・自然のシンフォニー（まち）

Asanuma

本社・大阪本店　〒543 大阪市天王寺区東高津町12番6号　TEL. 06-768-5222(代表)　東京本店　〒160 東京都新宿区荒木町5番地　TEL. 03-5269-3111(代表)

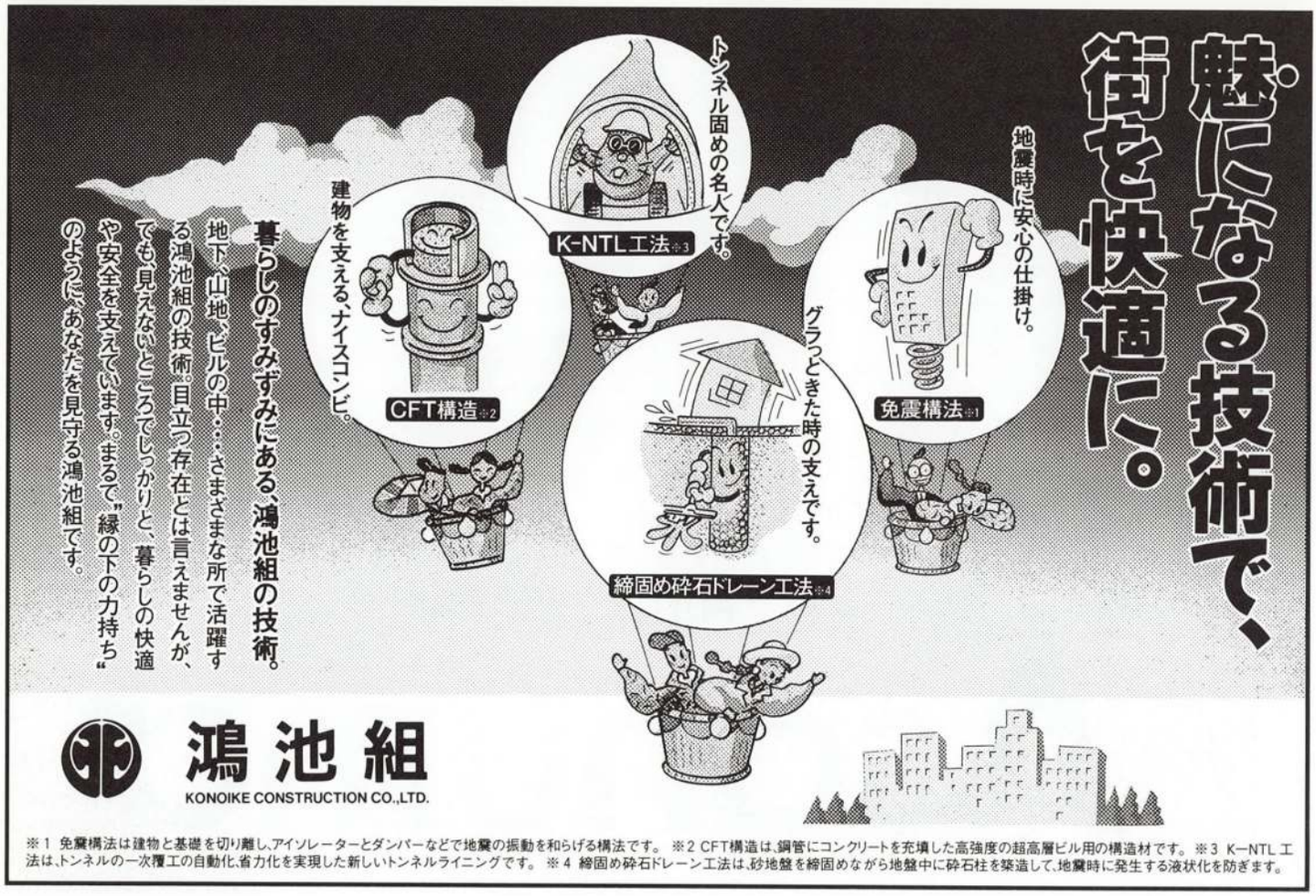
私たちが築くのは、
〝こころ〟です。



建築物は、機能性だけを考えた
単なる入れ物ではありません。
人と人とをより良い関係で結ぶ創造的空間
それが建築物です。
だから、人のこと、自然のこと、
もっと大きな地球のことを
抜きにしては語れない。
熊谷組は人と自然の結びつきを
大切にしながら
より快適な社会、住みやすい環境づくりを
めざしていきます。

KUMAGAI 熊谷組

本　　社 ● 〒162 東京都新宿区津久戸町2-1 ☎03-3260-2111
大阪支店 ● 〒534 大阪市都島区片町2-10-5 ☎ 06-352-1151



※1 免震構法は建物と基礎を切り離し、アイソレーターとダンパーなどで地震の振動を和らげる構法です。 ※2 CFT構造は、鋼管にコンクリートを充填した高強度の超高層ビル用の構造材です。※3 K—NTL工法は、トンネルの一次覆工の自動化、省力化を実現した新しいトンネルライニングです。 ※4 締固め砕石ドレーン工法は、砂地盤を締固めながら地盤中に砕石柱を築造して、地震時に発生する液状化を防ぎます。

大地への愛　人間への愛

錢高組

社長　錢高一善

本　　社　大阪市西区西本町2丁目2番11号
なにわ筋ツインズ ウエスト
大阪（06）531－6431

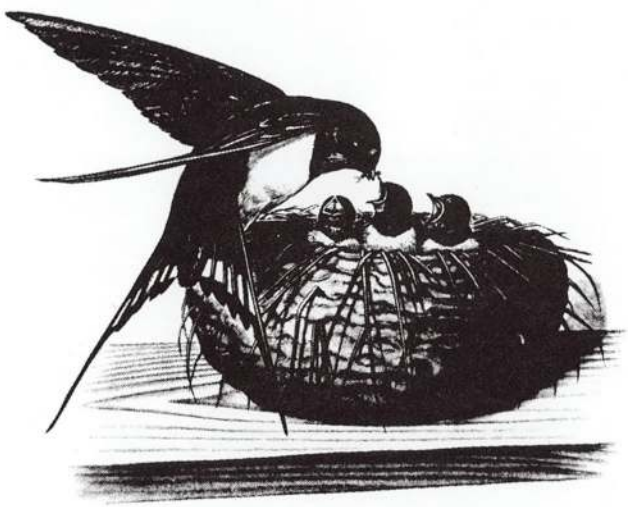
東京本社　東京都千代田区一番町31番地
東京（03）3265－4611

支社・支店　大阪・東京・北海道・東北・北関東・千葉
横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国
九州

海外事務所　ロサンゼルス・マニラ・クアラルンプール
香港・ジャカルタ・ハノイ



心が住むところ。



自然と話しています。
人を見つめています。

一日の仕事を終えて、我が家のある建物の前に立つ。それだけで、張りつめていた心がゆっくりとほぐれていく。きっとそれは、あなたを待つ人の心が、建物を通じて静かに伝わっているからなのでしょうね。自然と話す、人を見つめる。心が住むところに西松建設です。

毎日ふれあう技術
西松建設

〒105 東京都港区虎ノ門1丁目20番10号
電話 03(3502)0232

あしたを確信する技術。

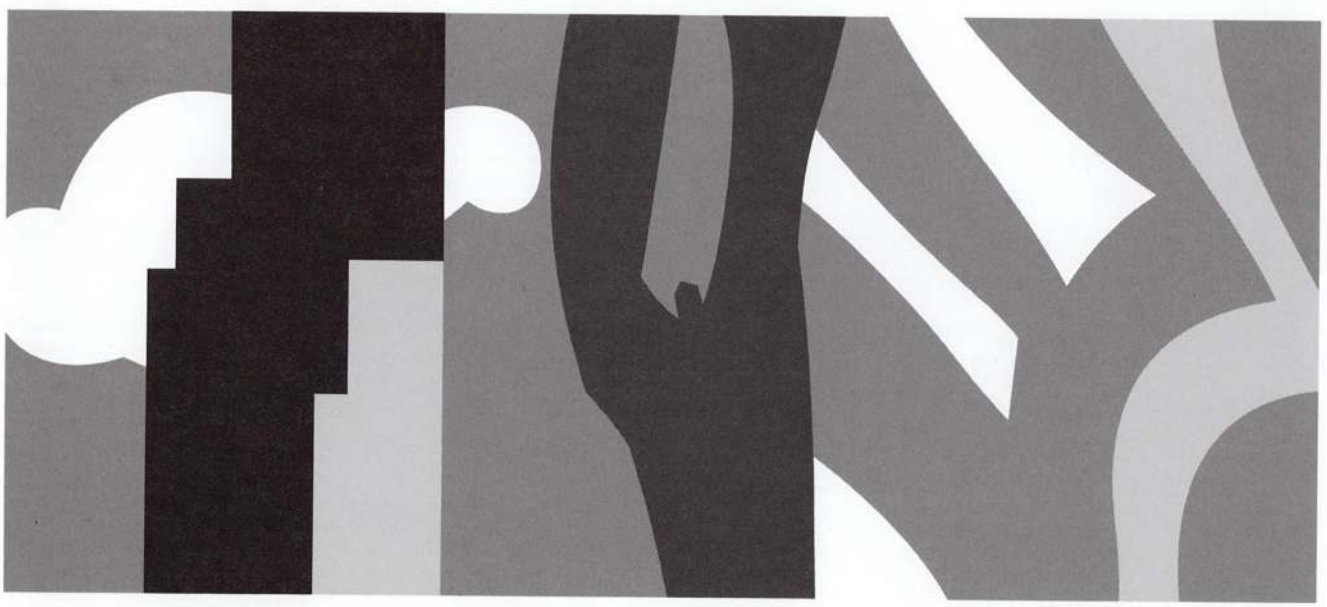
地球というかけがえのない自然。
活力とやさしさに満ちた社会。
ひとりひとりの個性あふれる生活。
それらをひとつに結びつけるために、
どのような発想や技術が必要なのだろうか。
ハザマは、さまざまな価値の
間に立って考えることから、
新しい価値を生みだしていきたいと思います。
そして、建設という仕事を通して、
それを着実にカタチにしていきたいと思います。



Hazama
〒107 東京都港区北青山2-5-8 TEL.03(3405)1111

創造という力、建設という知恵。

FUJITA



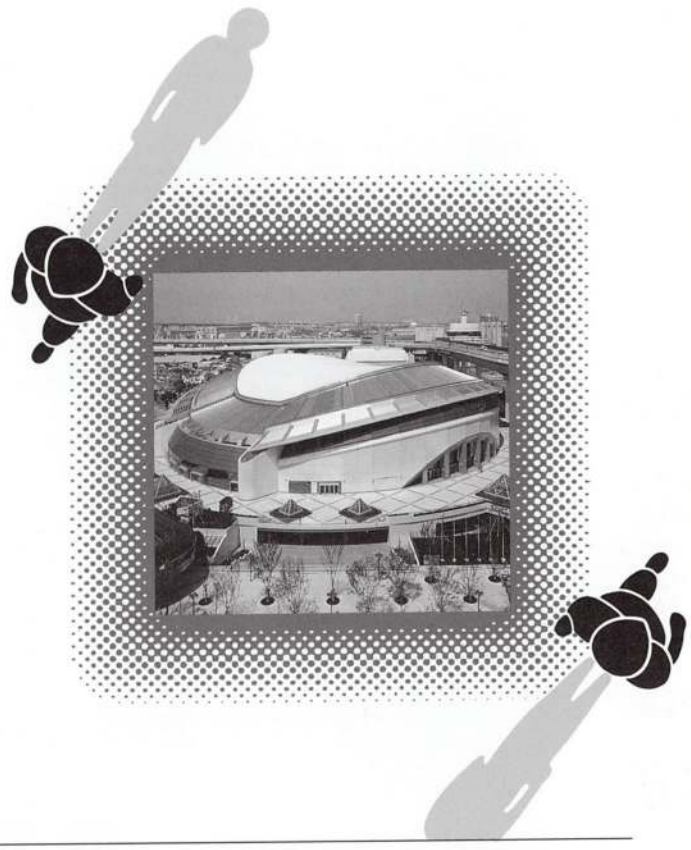
時代の先の先を見越した企画提案を。
フジタには先端技術を駆使しての建設を核に、
都市開発やエネルギー開発やレジャー事業など、
多岐にわたる実績と豊富なノウハウがあります。
すべての力を創造に向けて。

——"高"環境づくり——
フジタ

本　　社　〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-6-15tel(03)3402-1911
大阪支店　〒530 大阪市北区堂島２丁目１－16tel(06) 348-4510

NEXT!

次代に向かって、遠い未来に向かって、
挑戦することから生まれる何かがあります。
例えば、新鮮さを失わない発想と、信頼のテクノロジー。
私たちも、常に次の夢の具現化を考え続けています。



FUJIKI 藤木工務店

未来へ——安心を創る

本　社 〒550 大阪市西区新町 2-4-2　☎ 06－539-8301（代）
東京本社 〒160 東京都新宿区三栄町 23-1　☎ 03-3357-1600（代）
本支店 大阪・東京・倉敷・京都・四国・福岡・横浜
営業所 札幌・水戸・北関東・埼玉・多摩・府中・八王子・相模大野・静岡・名古屋・泉南・和歌山・西宮・神戸・岡山
広島・徳島・新居浜・松山・長崎



人・技術・品質。
キラリと光る星で
ありたい。

MAEDA

前田建設工業株式会社

本　社　東京都千代田区富士見2-10-26 電話(03)3265-5551
大阪支店　大阪市西区江戸堀1-3-15 電話 (06)446-9511

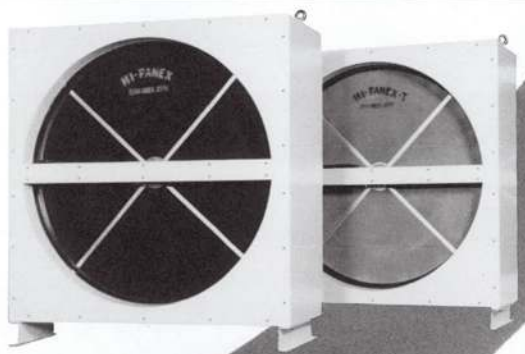
SEIBU GIKEN

（営業品目）
熱交換器・除湿機
有機溶剤回収装置・空気浄化エレメント

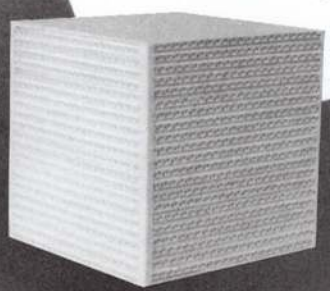
①臭気移行防止を実現

②アンモニアガス移行防止を実現

全熱・顕熱交換器ハイ・パネックス



エレメント素材
アルミ、セラミック
ポリエステル
塩化ビニール
ステンレス、難燃紙



すべてはここからはじまった

時代が要請するテーマと西部技研の研究テーマとが一致して、画期的な呼吸する構造体・全熱交換器・顕熱交換器が誕生した。この、小さな波状のコルゲーションの集合体の中に、大いなる可能性が秘められている。地球環境、エネルギー問題へ向けて、小さな波が、時代を動かす大きな波へと成長しようとしている。そして、そのすべてはここからはじまったのだ。

人とエネルギーと環境と

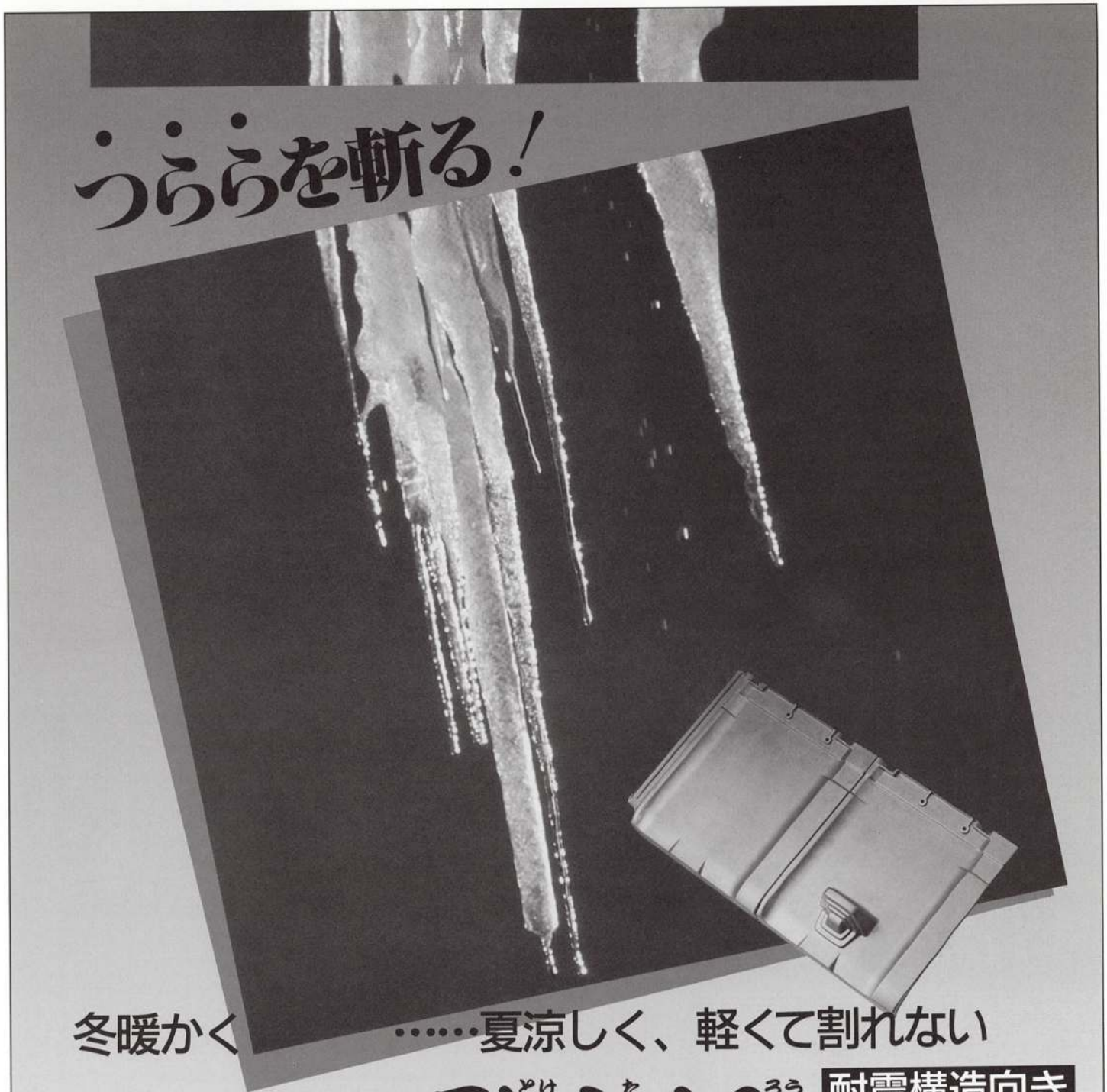
株式会社 西部技研

本社・古賀工場
福岡県粕屋郡古賀町大字青柳3108-3
PHONE：092-942-3511（代表）
092-942-5711（営業直通）
FAX：092-942-3761
092-944-6811（営業直通）

東京営業所
東京都新宿区西新宿3丁目3-11
杉本ビル2階
PHONE：03-3347-1341、1342
FAX：03-3347-1340
〒160

大阪営業所
大阪府大阪市淀川区西中島5-2-12
新大阪駅前サクセスビル6F
PHONE：06-305-9251
FAX：06-305-6824
〒532

東海事務所
愛知県岩倉市石仏町206-1
PHONE：0587-37-4559
FAX：0587-37-1121
〒482



つららを斬る！

冬暖かく……夏涼しく、軽くて割れない

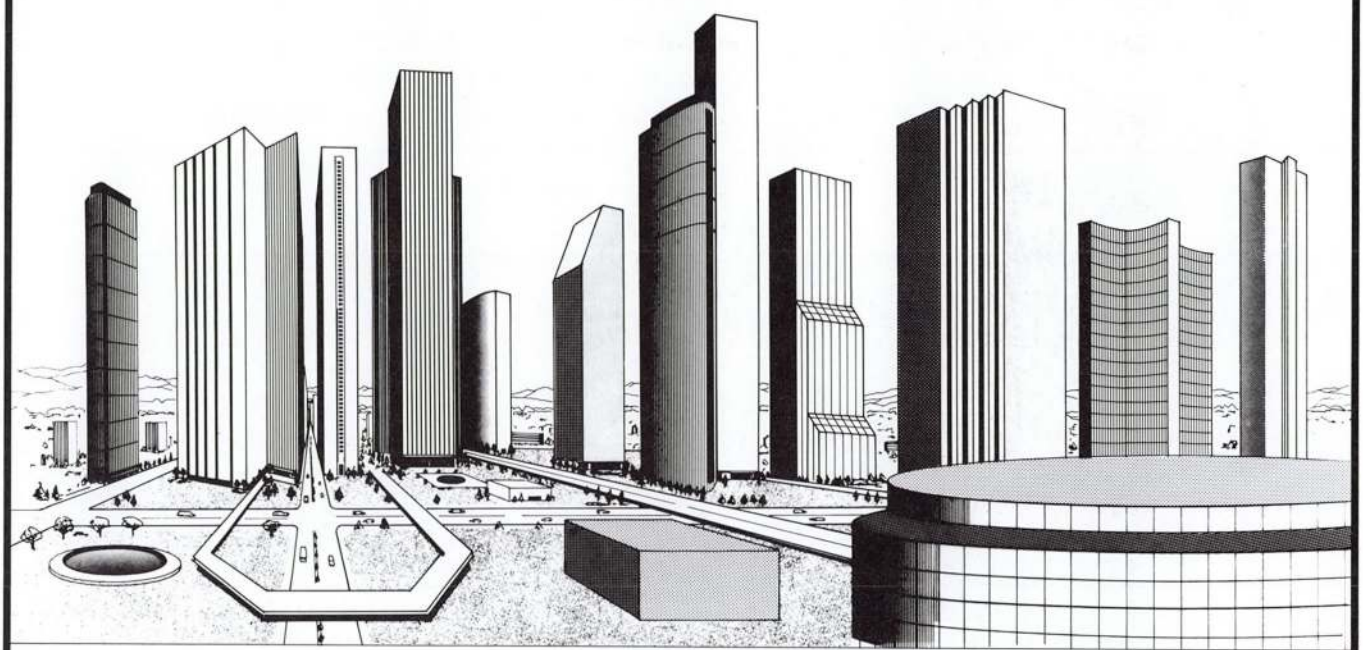
リョービの
アルミダイカスト瓦 融太郎（とけたろう） 耐震構造向き
RHD-40S-TS

●屋根の雪降しが不要です。
●危険なつららも防止します。
●雨音がグ〜ンと静かになります。
●和風瓦の$\frac{1}{3}$の軽さです。

リョービ融太郎システムサービスステーション
── 工期短縮の至上命令にお応えする ──
タイセイ商工株式会社

本　　社　〒332 埼玉県川口市弥平3-8-20　TEL.048(224)6811(代)　FAX.048(223)4880
大阪営業所　〒578 東大阪市川田3-9-21　TEL.0729(63)6355　FAX.0729(63)6356

サッシ、それは
建物と環境のインターフェイス。



窓は、人の暮らしと自然環境の接点。
そのインターフェイスに求められるあらゆるニーズ、
気密性、水密性、採光、換気、耐久性、美観、使い勝手……。
これらにお応えすべく、不二サッシは技術力を結集し、
製品をお届けしてまいりました。
私たちはまた、設計され、施工される皆様と、
多様なニーズをお持ちの施主の方々との接点として、
今後とも愛される製品づくりに努力してまいります。

不二のビル用サッシ

不二サッシ

東京本部　〒150 東京都渋谷区渋谷 3—26—18
☎(03)3797-1134(代表)
大阪支店　〒541 大阪市中央区本町 3—4—10(本町野村ビル)
☎(06)262-2541(代表)

多様なニーズにお応える、ビル用サッシのラインアップ。

- ●一般製品　FRS-70、ビル用出窓、ガラスルーバー
- ●防音製品　FRS-AT70、FB70-Ⅰ型・Ⅱ型、AEシリーズ、FDBシリーズ、高性能竪軸70-100
- ●省エネ製品　FRS-AT70P、AE-100PN、高性能竪軸70・100、FT-160、フーク70・100、断熱・防音二重窓、断熱竪軸、高性能竪軸サンエックス、横軸サンエックス
- ●多機能製品　ホールディングウィンドウ、リバーシブルウィンドウ、欧風窓シリーズ(FEドレーキップ、FEヘーベシーベ、FEシーベキップ)
- ●カーテンウォール　サンライズ、ニューサンライズ
- ●改装シリーズ　FRS-70、FB70-Ⅰ型、FR-60B、FR-70、カーテンウォール、上げ下げ窓
- ●エクステリア　手すり(スペースエコー、ニューエコーⅡ型、ニューエコーⅠ型、トップエコー)
- ●インテリア　学校型間仕切Ⅱ型、インテリア建具、アルミサウナ

超高層ビルから 一戸建てまで

愛される夢を育てる

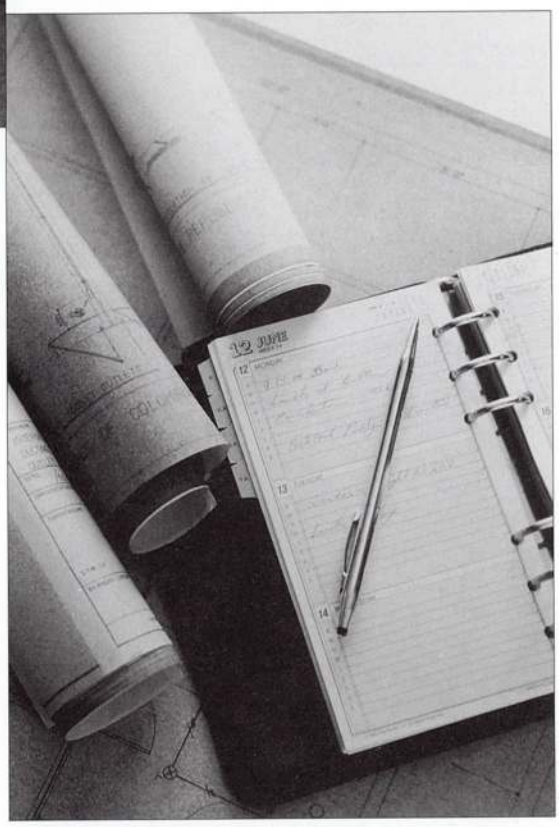


わたしは‥今‥考える

日立冷熱株式会社 代理店
- ◆冷暖房エアコン(住宅設備用各種タイプ)◆
- ◆空調・パッケージエアコン(店舗、オフィス&ビル用)◆
- ◆電気温水器(各種タイプ)◆

日立化成工業株式会社 代理店
- ◆バスルーム(ホテル・集合住宅)◆
- ◆システムバスルーム(戸建住宅用)◆
- ◆温水洗浄便座・洗面化粧台◆
- ◆キッチンユニット・流し台◆
- ◆ガス給湯付風呂釜・ガス追いだき給湯機◆

新明和工業株式会社 代理店
- ◆立体式・二段式モータープール◆



三協アルミニウム工業株代理店
立山アルミニウム工業株式会社代理店
- ◆アルミ・スチールサッシ(施工共)◆
- ◆フレクサラム・門扉・住宅建材◆
- ◆ユニットキッチン・流し台・家庭用品◆
- ◆カーテンウォール・外装アルミパネル◆

信越ユニット株式会社 代理店
- ◆代表的なトイレブース◆
- ◆車イス専用トイレブース◆
- ◆小児園児用オリジナルブース◆
- ◆シャワー専用ブース◆

BRIDGESTONE 代理店
- ◆FRP評準プール
- ◆WATER AMENITY PROGRAM
- ◆高減耐震ゴム構法

昭和ロック株式会社 代理店
- ◆ファッション玄関錠◆

GLOBEN
庭づくりのパイオニア
- ◆噴水システム◆
- ◆自動散水システム・スプレー式・ドリップ式・ポイント式

ムツミ産業株式会社

本　社　〒550 大阪市西区靱本町1丁目17番15号
TEL.06-441-0378 / FAX.06-445-1258

京都事務所　〒606 京都市左京区下鴨高木町46番305号
TEL.075-722-3169 / FAX.075-722-3169

出 張 所　東京・北九州

SINCE 1895

建　築　機　械　CAD

大阪工業技術専門学校

≪ 工業専門課程 ≫ —— 男女共学 ——

□ 建築総合学科
□ 建築学科
□ 建築設備科
□ 機械学科（設置申請中）（システム、メカトロ、デザイン）
□ ＣＡＤ製図科
□ 建築ＣＡＤ科

≪ 取得受験資格 ≫ （ ）内実務年数

１級建築士（４年）／２級建築士（０年）／インテリアプランナー（４年）
１級建築施工管理技士（５年）／２級建築施工管理技士（２年）他

生涯学習センター

□ 女子製図科　□ 機械製図科　□ トレース科

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY　☎0120—0910(オクト)—19(イク)

学校法人 福田学園 大阪工業技術専門学校

〒530　大阪市北区天満１—９—２７　（京阪・地下鉄天満橋駅下車北へ７分）（ＪＲ東西線大阪城北詰駅下車北西へ７分）

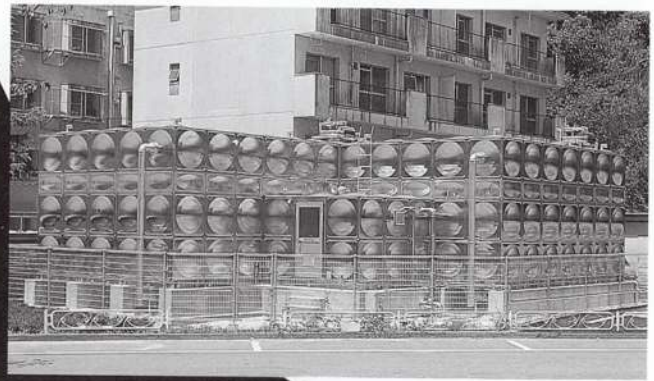
安全・真心・快適

人と環境に
潤いを与える技術



貯湯槽

ステンレスパネルタンク



営業品目

貯湯槽・熱交換器・地下オイルタンク・サービスタンク・
ステンレスパネルタンク・ヘッダー・膨張タンク・
一般高圧ガス・LPガス、同機器・溶接機材

OGASAWARA

第一種圧力容器製造認可工場
株式会社 小笠原工業所

本社・工場／松山市南斎院町347（空港通り3丁目）☎(0899)72-0043㈹
製造部／☎(0899)72-0043㈹ FAX(0899)73-5404
商事部／☎(0899)72-0700㈹

銅屋根

●オリジナルな要望に応え、ご希望を技に託して表情豊かな〔金属屋根〕の誕生に協力します。
●60年間の歴史で築いた豊富な施工実績から独自の施工技術とそのノウハウで素材の優れた個性を引き出し、新鮮な感性を高めます。



大阪城天守閣

新設・葺替 責任施工

株式会社 小野工業所

本　　社　東京都墨田区石原４丁目12番１号　〒130　☎ 03(3624)2261(大代表)
大阪営業所　大阪市淀川区西中島３丁目20番９号　〒532　☎ 06(304) 0654(代　表)
静岡営業所　静岡県静岡市豊田３丁目８番46号　〒422　☎054(286) 0105(代　表)

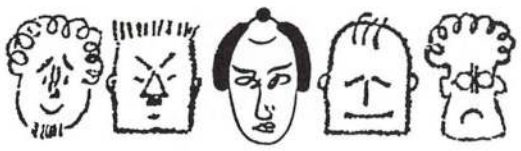
責任施工を旨に大正時代より70年余。

祝　㈳日本建築協会創立80年

工事なら伝統と信用の京都・神治屋に！

サッシ工事
　内外装金属パネル工事、アルキャスト工事
天井壁床　軽量・軽間下地仕上工事
　ALC、ラムダ工事
屋根工事　瓦・スレート・カラーベスト・シングル
　アルアピア・トタン長尺・折版工事　etc





株式会社 神治屋（かみじや）

取締役社長　神　谷　　治
京都市伏見区下島羽長田町70
TEL. 075 (601) 6301 代表
FAX. 075 (601) 6312 代表

Kawashima

MILLIKEN

Kawashima
MODULAR
CARPET
'96-'99

カワシマ モジュラーカーペット



デザイン美の追求
対環境性能に優れている
使用する人、施工する人への配慮
選び易い商品構成

"今"を彩る
デザイン提案。

川島織物
ktm
東日本営業本部 03-3506-0800
西日本営業本部 06-369-6000

SHOWROOM
●旭川 (0166) 26-8210 ●帯広 (0155) 22-6806 ●札幌 (011) 261-2131 ●仙台 (022) 235-5811 ●大宮 (048) 652-2051
●千葉 (043) 245-2022 ●東京 (03) 3355-0575 ●新宿 (03) 5322-6526 ●横浜 (045) 451-5531 ●名古屋 (052) 932-8681
●京都 (075) 621-0292 ●ライブ御 (075) 415-1280 ●大阪 (06) 369-6180 ●神戸 (078) 857-8108 ●広島 (082) 224-3051
●福岡 (092) 724-3000

新案本葺瓦
体型飛鳥野瓦
淡路及三河産

古代を受け継いだ平瓦、丸瓦を一体化した
新式で、姿形はそのままに伝統の在来型として
耐震強風軽量引掛桟工法の【飛鳥野瓦】



飛鳥野瓦は

堂宮建築の瓦葺きに81年の実績を誇る〈瓦寅工業〉が、瓦づくりの伝統技術に合理的な開発思想を吹き込み誕生しました。平瓦と素丸瓦を連結し、一枚瓦としています。そのため在来型本葺瓦と葺き継ぎができ、葺き上がり、外観ともに異なるところはありません。



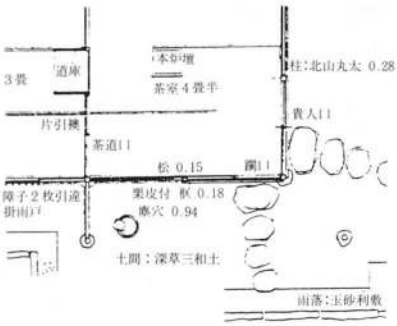
松井建設㈱　大阪市専念寺様

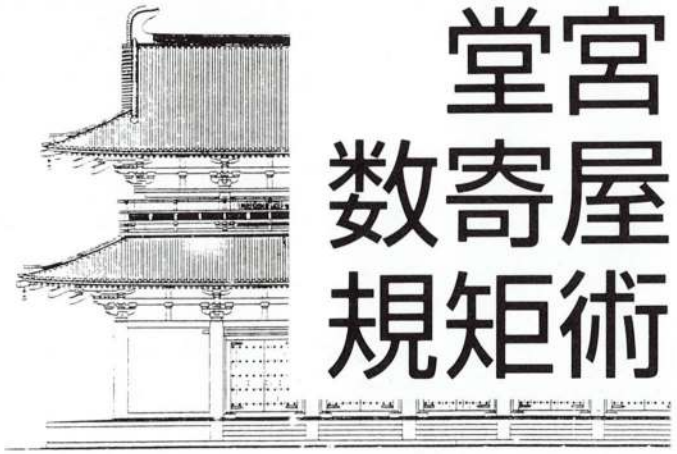
創業82年　飛鳥野瓦総発売元・綜合屋根材施工卸
㈱クボタ　松下電工㈱　日本モニエル㈱　積水化学工業㈱　特約代理店

瓦寅工業株式会社

大阪本社
大阪市生野区林寺１丁目５番14号
電話代表 06(715)0201～5
ＦＡＸ 06(715)0194・06(716)6539

伝統建築を学ぶ。





茶室 堂宮 数寄屋 規矩術

□入 学 資 格：専門学校、短大、大学等の建築関連学科卒または建築士有資格者
（1級・2級または木造）、その他履修能力があると思われる者。

京都建築専門学校伝統建築研究科

問い合せ先：〒602 京都市上京区下立売通堀川東入ル Tel(075)441-1141

YUME 夢 TRONICS

夢×技=∞

無限大

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。



何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。

私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。

創業1919 あなたの街でお会いしています
栗原工業株式会社

本社／〒530 大阪市北区角田町1−1(東阪急ビル) TEL.06(313)1101
東京本店／〒105 東京都港区芝大門1−4−8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

創立86年　　卒業生27,000名

〈設 置 学 科〉

- 総合建築学科　（3年・昼間・男女）
- 建築工学科　（2年・昼夜・男女）
- 土木工学科　（2年・昼夜・男女）
- 女子建築設計科（2年・昼間・女子）
- 緑の学科　（2年・昼間・男女）
  ―環境緑化デザイナー―

青垣研修センター
敷地面積…70,000㎡

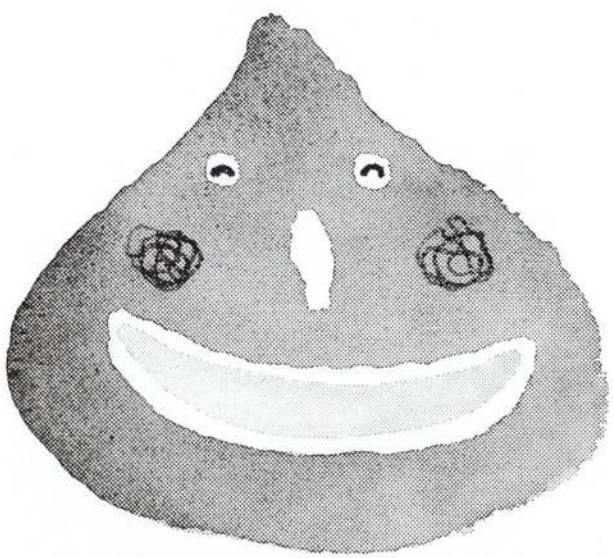
- 測量実習
- 材料実験
- 墨出し
- 木造建て方
- 鉄骨建て方
- 足場組み
- 溶接

その他実験・実習により実学の充実。

学校法人
修成学園 **修成建設専門学校**

〒555 大阪市西淀川区大和田5-19-30　☎06(474)1644

ほっと、ネット。



わはは、ハート。

オフィスビルを、もっと知的に、使いやすく。工場やプラント施設を、明るく、クリーンに、効率的に。すべての街を、そして、すべての人を、元気に、豊かに、イキイキと…。私たちは「電気」「水」「空気」「情報」を通じて、みんなに幸せを届ける総合設備事業のクリエイティブ・カンパニー。だれにも負けない大きな笑顔で、どこよりも快適な環境を創造します。

情報 水 SEM 空気 電気

いろんな快適、笑顔でつなぐ。

住友電設



あなたの、
いちばん心地良い場所はどこですか。
きっと、多くの方が、
大自然の中をイメージされることでしょう。
私たちは、そんな快適さを
あらゆる建物の内に
創造していきたいと考えています。
もっとナチュラルに、
いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

—光と空気と水を生かす—
ダイダン

くっきり、鮮やか。

———屋根はいま、新しい表情をもった



柔らかな質感、鮮やかなライン、深い色どり。美しい葺き味でフネンシングル・一文字は日本の屋根に確実に定着してきました。親しめる建物や環境づくりにあわせて選んだ、新色9色がそろって、さらに個性的、さらに魅力的になりました。

三星フネンシングル
一文字

お陰様で20周年

西日本三星シングル工事協同組合
田島ルーフィング株式会社

大 阪：〒550 大阪市西区京町堀1-10-5　TEL(06)443—0431
神 戸：〒650 神戸市中央区栄町通5-1-22　TEL(078)362—6121
広 島：〒730 広島市中区西平塚町8-13　TEL(082)246—8625
福 岡：〒810 福岡市中央区大名2-4-35　TEL(092)724—8111

バケツ4745杯



なぜ、TOTOの便器だけがこんなに節水できるのか。その答えは、高い技術力もさることながら、早くから"節水"に取り組んできたTOTOの姿勢にあります。もっと少ない水で便器がキレイに洗えれば、水という資源を守ることができる。より少ない水で便器がキレイに洗えれば、水道料金をグッと抑えることができる。この発想が便器の節水力に磨きをかけます。今回の「新節水便器シリーズ」では、洗浄水量（1回の洗浄に必要な水量、これが重要）を減らすことで節水力を大幅に向上させました。水のムダと家計の出費を抑えるなら、TOTOの節水便器。TOTOの節水便器が確実です。

TOTOの節水便器なら、年間にバケツ4745杯節水できます。（当社比※）

※バケツは、一杯を4Lとして計算しています。◎4人家族、1人1日に大1回小2回使用するとして計算→従来シリーズに対しNEW ZG・ZS NEW CSシリーズは、約33%、18,980L／年を節水できます。

TOTO 新節水便器シリーズ。
ネオレスト
NEW CSシリーズ
NEW ワンピース
NEW ZG・ZS

便器は節水力
TOTOの節水便器

◎商品についてのお問い合わせは、TOTOお客様相談室 フリーダイヤル 0120-03-1010まで。受付時間9:00～17:30（土、日、祝日を除く）

受け継がれる 夢 震災に強い街づくり



家族みんなの夢は、不意の災害に負けない街に住むこと。



YES. トーヨーは
ビルもマンションも、高速道路もトンネルも・・・全社を挙げて免震構造の普及に尽くしています。

TOYO
Mobility & Amenity

私たちは、夢が受け継がれる世界をつくります。

東洋ゴム工業株式会社
本　社 〒550-91 大阪市西区江戸堀1-17-18　06-441-8701　東京本社 〒171 東京都豊島区高田2-17-22　03-5955-1240

快適な明日を提案する
TOYO Shutter

ビルに居たまま、耐震補強と外装リニューアル。



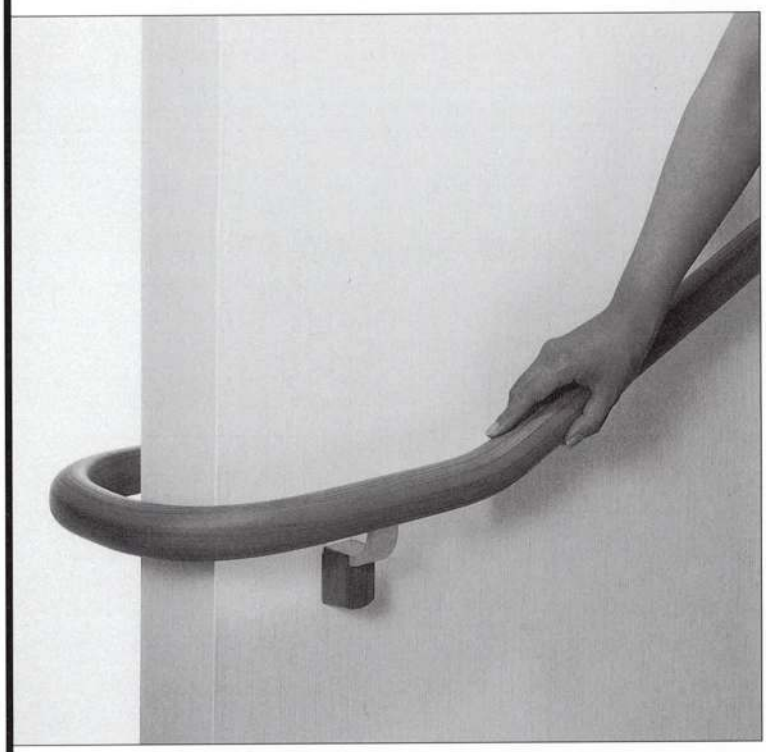
耐震補強・省エネ外装改修システム
BUILFINE®

日本のビルを生まれ変わらせる新工法『ビルファイン・マーク2』。

外装改修システム『ビルファイン』をさらに発展させて、既存建物の外側構面に補強ブレースやその他の装置を配置することで、耐震補強と外装リニューアルを同時に行う新工法『ビルファイン・マーク2』。工事中も、建物内部はそのまま使用できます。（鹿島建設株式会社との共同開発）

東洋シヤッター株式会社
本　社〒540 大阪市中央区南新町1-2-10 TSビル
☎06（943）6571
東京本社〒106 東京都港区六本木6-3-18 第一地所麻布ビル
☎03（3479）2911

やさしさをカタチにします。NAKA



木質系新素材手すり「ネオウッド」

NEOWOOD O-40M O-34M UB

半硬質特殊樹脂に超微粒子木粉（ウッドパウダー）を配合。曲げ加工が自由で建物に合った連続施工を実現できます。抗菌剤配合なので、半永久的にカビや菌をシャットアウトします。

快適な環境を創造する
ナカ工業
NAKA CORPORATION

お問い合わせは——大阪支店
06-886-8966
〒532 大阪市淀川区田川3-9-36

サービスネットワーク

札幌	011-662-7611	東北	022-296-1311	北関東	048-648-0871
東京	03-5211-0701	横浜	045-201-7751	名古屋	052-933-1288
大阪	06-886-8966	広島	082-246-9200	福岡	092-272-3511

水と空気の協奏曲。

——奏でるのは西原の技術です。——

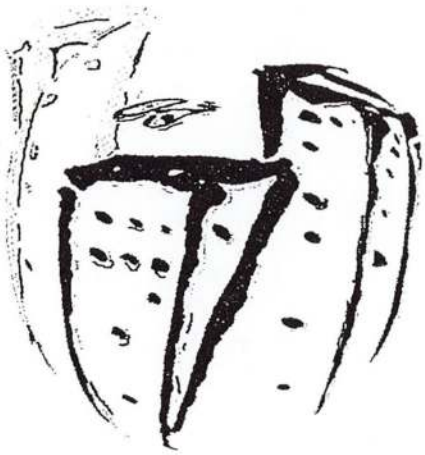


給排水衛生・空調・防災設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

〒531　大阪市北区中津6丁目8番4号　TEL　(06)458-3628

安全のための安心機構



建築物の質の向上と安全性の確保をめざして、
次のような試験・調査・研究を受託しています。

- 建築材料の品質と性能
- 構造物や構造部材の力学的性状
- 土の物性や力学的性状ならびに基礎・地盤の耐力
- 建築物や地域環境に関する空気力学的性状
- 建築材料および部材の耐火・防火性能
- 壁・床などの音響および熱に関する性状
- 窓の気密性・水密性
- 建築全般に関する調査・診断

財団法人 日本建築総合試験所
GENERAL BUILDING RESEARCH CORPORATION OF JAPAN

〒565　吹田市藤白台5－8－1
TEL 06-872-0391　FAX 06-872-0784

日本建築協会 創立七五周年記念出版！

復刻版 建築と社会 全87巻 別冊1

『建築と社会』は、関西を中心とする建築界の動向を伝えて七十五年を経過した。

「建築は社会とともに発展する」という観点にたち、建築技術のみならず、都市・住宅・防災等の諸問題を論じ、時代とともに変遷してきた本誌は、まさに、日本近代史の縮図である。

小社では、一九九二年三月三〇日をもって、創立七十五年をむかえる日本建築協会の記念事業として、本誌の創刊号から昭和三〇年までの全号を、五年度にわたって逐次復刻刊行するものである。

◉復刻版概要

大正6年9月～昭和30年12月までの全号復刻
A5・B5判／合本版／上製／総39、000頁
別冊＝解説・総目次・索引（最終回配本時に刊行）
解説＝山形政昭（大阪芸術大学助教授）
揃価＝1、522、000円（全87巻・別冊1）

◉誌名の変遷

『関西建築協会雑誌』【大正6年9月～大正7年12月】
←
『日本建築協会雑誌』【大正8年1月～大正8年12月】
←
『建築と社会』【大正9年1月～現在に至る】

◉推薦（順不同）

市川　宏（日本建築協会会長）
東畑謙三（東畑建築事務所会長）
塚本猛次（日建設計名誉顧問）
足立　孝（大阪大学名誉教授）
金多　潔（京都大学名誉教授）

■配本　収録巻数　配本年月

第1回　第1～5巻　'91年10月
第2回　第6～10巻　'92年4月
第3回　第11～16巻　〃　7月
第4回　第17～22巻　〃　10月
第5回　第23～27巻　'93年1月
第6回　第28～32巻　〃　4月
第7回　第33～37巻　〃　7月
第8回　第38～42巻　〃　10月
第9回　第43～47巻　'94年1月
第10回　第48～52巻　〃　4月
第11回　第53～57巻　〃　7月
第12回　第58～62巻　〃　10月
第13回　第63～67巻　'95年1月
第14回　第68～72巻　〃　4月
第15回　第73～77巻　〃　7月
第16回　第78～82巻　〃　10月
第17回　第83～87巻　'96年1月

全巻完結！

表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

不二出版
東京都文京区向丘1―2―12
電話03(3812)4433
内容見本呈

文化シヤッター

人と環境にやさしい自動閉鎖装置付引戸

カームスライダー

人と環境にやさしさが求められる時代にあって、使うほどに快適さが実感できる〈カームスライダー〉。病院、学校、福祉センター、オフィスなどで採用され、好評を博しています。





●小さな引出し力で軽く開き、手を離すと自動的に閉まる便利な扉です。
●上吊方式で床面にレールがないため、出入りの際につまずくようなことがありません。
●引戸には事故防止のため手詰防止ゴムを装着しています。
●寸法精度の高いアルミ押出形材の吊り戸専用レールと、耐久性に富んだ吊り戸車によって引戸開閉時もきわめて静かです。

文化シヤッター株式会社
関西営業推進部／TEL06(282)0945

魅力の秘密は「軽開感」。

それは、軽い引力（標準サイズで1kg以下）で開き、手を離すと静かに元に戻るからです。



岩盤破砕 パワーアップ!!

超大口径・超大深度**アースドリル工法**との
一貫施工に威力を発揮します。

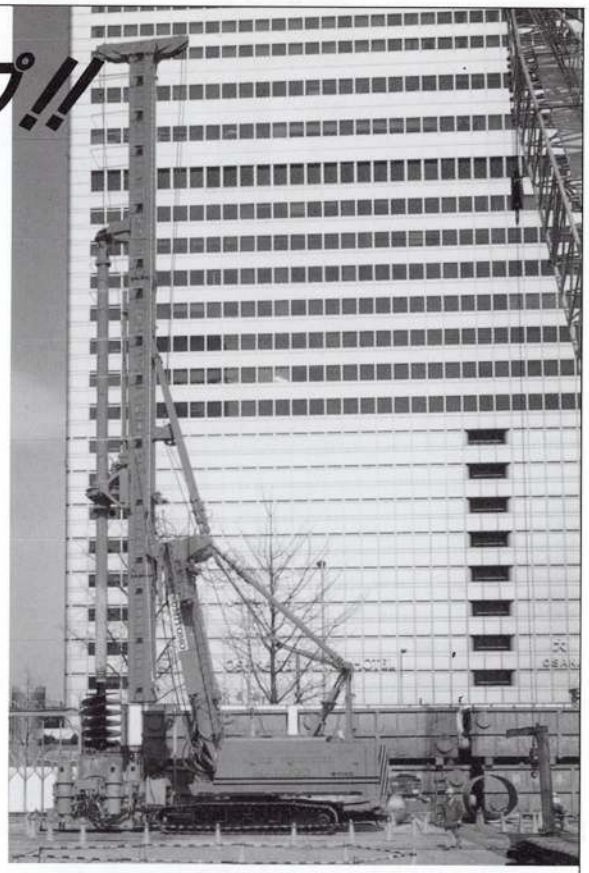
SSD 工法

新しい場所打ち拡底杭

NKTB・SKTB・KKTB・SMTB杭工法
（耐震場所打ち鋼管コンクリート杭）

OMR／A工法（リバース式拡底掘削）

OMR／B工法（バケット式拡底掘削）



㊄ 丸五基礎工業株式会社

本　社　大阪市北区東天満2-6-2（南森町中央ビル）〒530 ☎(06)358-3601㈹

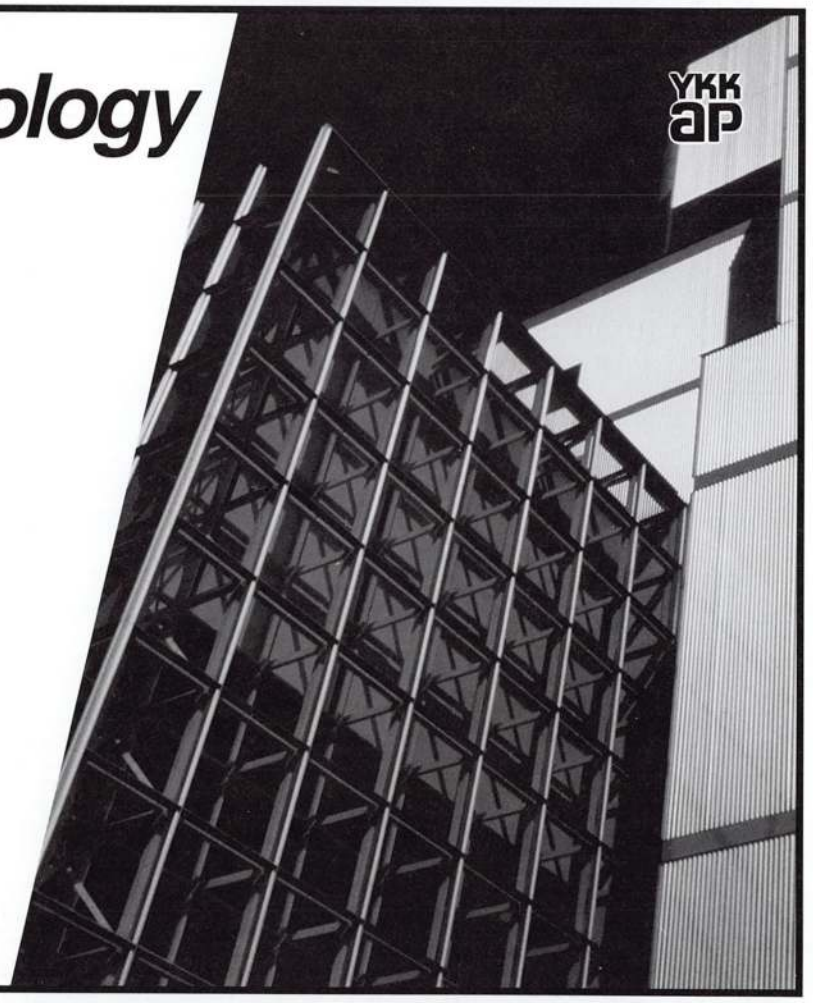
関西支店　大阪市北区東天満2-6-2（南森町中央ビル）〒530 ☎(06)358-3601㈹
東京支店　東京都江東区東陽６－３－30 〒135 ☎(03)3649-5131㈹
名古屋支店 ☎(052)222-6801㈹　福岡支店 ☎(092)472-4392㈹
広島支店 ☎(082)246-3211㈹　高松営業所 ☎(0878)81-2257

Design&Technology

デザイン&テクノロジー

YKK ap

YKK APは、建物の表情を構成する開口部の
アルミサッシやカーテンウォールなど、完成度の高い建築パーツを
トータルなシステムで建築に融合させること、
つまり、現代建築が求める時代のニーズに
デザイン&テクノロジーの設計対応で
お応えすることを企業テーマに掲げています。



YKKアーキテクチュラルプロダクツ株式会社

大阪支店／TEL.06-945-0414
本　社／TEL.03-3864-2261

WWW http://www.commerce.or.jp/YKKAP

室谷

内装不燃材

室谷商事株式会社

本社　神戸市中央区三宮町3−7−6(神戸フクトクビル5階)
電話　神戸(331) 0881〜3
支店　大阪市北区西天満2丁目6番8号(堂ビル5階)
電話　大阪(364) 2031〜4

OM

テトカッパー防水層

カッパー防水帯 ——— コーパータイト／オクロン防水帯

資料をご請求下さい。

奥山化工業株式会社

本　社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル　TEL.03(3571)2703㈹ FAX03(3571)0264
大阪事務所 TEL06(391)1081〜2 FAX 06(395)2109　名古屋出張所 TEL052(811)3660
横浜営業所 TEL045(320)4832　FAX045(320)4765　厚木出張所 TEL0462(21)1761 FAX0462(23)4341
埼玉営業所 TEL048(774)2845　茨城出張所 TEL0292(28)0878 FAX0292(28)2614

新しい時代の、新しい扉をひらきたい。

TOYO Shutter

東洋シヤッター株式会社

本　社　〒540 大阪市中央区南新町1−2−10(TSビル)
TEL(06)943−6571(代)
■東京/横浜/盛岡/仙台/水戸/静岡/岡崎/名古屋/富山/大津/京都/神戸/広島/高松/福岡/他全国主要都市

学校建築のトータルアドバイザー

二葉工業株式会社

黒　板・掲示板・家　具
電動黒板装置・サイン・スクリーン

〒547 大阪市平野区加美北3−4−−5
TEL 06(792)5858　FAX 06(792)2810

＊奉仕感謝の店

タイル及び規格石一式施工

㈱川岸窯業商店

本　社　大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06−532−0461(代表)
FAX.06−535−5181
天理営業所　天理市丹波市新町49

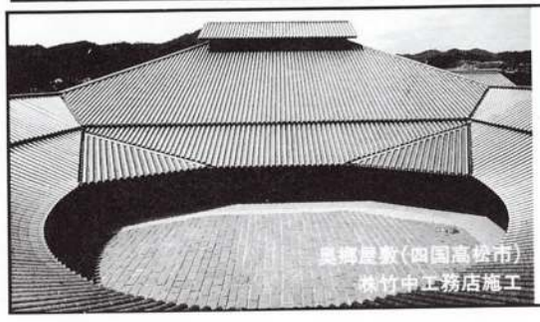
新鮮

情報処理／編集・企画／印刷・製本

ハード&ソフト…プリンティングの先端を拓きます。

ND
日本電植株式会社

〒530 大阪市北区天満2丁目5番15号　TEL.06(352)7502㈹
FAX.2F事務所 06(355)2714　3F制作 06(357)7250



奥鴻屋敷(四国高松市)
株竹中工務店施工

〒556 大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ 五六一〜七四一六
ファックス 五六一〜七四五四

ナニワ瓦株式会社

あらゆる屋根工事の相談は、

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03－3344－1851(大代)　大阪本社☎06－448－3603(代)
大阪支社 ☎06－448－5851(代)　名古屋支店 ☎052－211－1535(代)　中国支店 ☎082－247－5541
九州支店 ☎092－431－2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)441-8231
東京本社　〒102 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空気調和
給排水衛生
搬送機設備
設計施工

人に優しい環境づくり

第一工業株式会社

大阪支店　〒530 大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話　06－364－6661(代表)
本　　社　〒100 東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話　03－3211－8511(代表)

空気調和設備
給排水設備
電気設備
産業設備
水処理施設
環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役大阪支店長　琴浦　健

大阪支店　大阪市中央区北浜2－2－21　電話 06(202) 3071 (代表)
本社・東京本店　東京都千代田区有楽町1－4－1　電話 03(3502)6111 (大代)
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・横浜・東関東・北関東・神戸・四国

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号 電 06－466－2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9－3　電0720－49－2128

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話 (352) 1131代
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2－22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見2丁目1番61号ツイン21MIDタワー　電話 06-949-1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話 06-363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡
営業所　札幌・茨城・大宮・千葉・山梨・静岡・福井・滋賀・和歌山・松江・長崎・沖縄
出張所　青森・秋田・盛岡・川崎・富山・岐阜・三重・鳥取・岡山・高松・下関・大分・熊本・宮崎・鹿児島

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530
TEL(06)312-4131　FAX(06)312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・仙台・宮崎・京都

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
郵便番号542 電話 大阪 (06) 768－5031 代表
メンテナンス部　電　話　大阪（06）768－1651 代表
東京支店　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
郵便番号112　電話 (03) 5689－2351 代表

夢×技=∞ 無限大
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
K栗原工業株式会社
本社/〒530 大阪市北区角田町1-1（東阪急ビル）
TEL 06(313)1101
創業1919

Carrier 冷暖房はキャリア CARRIER

東洋キヤリア工業㈱デストビューター関西地区
日本冷熱工産株式会社
本社及大阪営業所 吹田市豊津町40番38号
電話 大阪（384）1201～7

電気工事設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長 上田正雄
本社 大阪市北区西天満2丁目6－8（堂ビル5階）
電話 06（361）3671（代）
支店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電話 03（3666）1478（代）
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

人と都市の快適な環境をつくります
営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電
住友電設株式会社
大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
三宝電機株式会社
SANPO
取締役社長 嘉納秀一
本社 〒530 大阪市北区西天満2-6-8（堂ビル） TEL 06(364)1471・FAX 06(364)5533
東京支社 〒105 東京都港区西新橋3-8-3ランディック新橋ビル TEL 03(5472)3311・FAX 03(5472)0085
名古屋支店 〒462 名古屋市北区金城3-12-14 TEL 052(991)5131・FAX 052(914)7535
神戸支店 〒657 神戸市灘区友田町3-6-11K・Tビル TEL 078(842)6411・FAX 078(842)6416
堺研究所 〒590 大阪府堺市三宝町七丁369 TEL 0722(27)8408・FAX 0722(27)1424

電気設備 設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本社 〒530 大阪市北区中之島三丁目2－4（朝日ビル）電話06（385）1361代
大阪営業所 〒564 吹田市垂水町3丁目34－6 電話06（385）1361代
京都営業所 〒615 京都市右京区西京極葛野町21 電話075（311）1185代
神戸営業所 〒650 神戸市中央区浪花町59（神戸朝日ビル）電話078（333）7756代

特殊壁装材製造販売 和室に最適
●聚楽壁紙●ホクシノン（無機質壁紙）
(株)ホクシンクロス
〒583 大阪府羽曳野市島泉8－173－1
TEL（0729）39－3610
工場 〒580 大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一 〒639-11奈良県大和郡山市小泉町2744
第二 〒597 大阪府貝塚市王子501

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
常務取締役支社長 馬田栄
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話大阪（202）0325～9番
本社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・中部・九州

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは，日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した，二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号（千代田ビル）

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産
本社：東京都港区六本木3－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23（信愛ビル）
TEL 06-202-3294
Master Builders Technologies

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.,
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-351-5428 Fax.06-351-5299

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）252−6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）877−1581

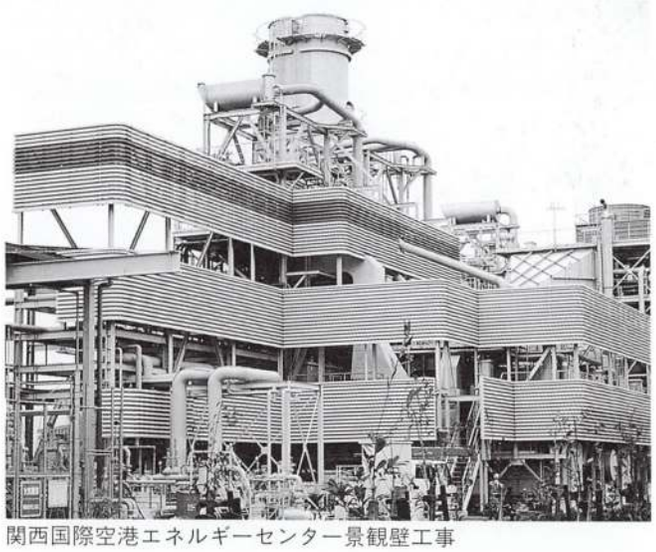
特　許・耐酸被覆鋼板
耐久建築屋根・外壁材料

オリエンタルメタル

半世紀の実績が誇る技術とアフターケア！

長尺物・色彩豊富・責任施工

品　種・オリエンタルエターノコア（ETC-F）
・オリエンタルスチールライト（STL）
・オリエンタルユニライト（UNL）


関西国際空港エネルギーセンター景観壁工事

波板規格　S小波・S大波・V波・ボックス波・Wジャンボ波・Vデッキ
SVジャンボ波・ボルトレスルーフBL・其の他

用　途　平板・波板・棟包・雨押類・谷樋・竪樋・軒樋
各種換気装置〔モニター・ベンチレーター・ムーバー・エキゾスター（強制）〕
ボーロイド（断熱材）D.G.　※カタログをご請求下さい。

オリエンタルメタル株式会社
本　社　〒335 埼玉県蕨市塚越5−12−2 TEL（048）442-3111
東日本支社　〒335 埼玉県蕨市塚越5−12−2 TEL（048）442-3115
西日本支社　〒660 兵庫県尼崎市長洲中通3−24−35 TEL（06）487-2121
支　店　関東、東北、大阪、名古屋、広島、九州
工　場　熊谷・東条・姫路

3M

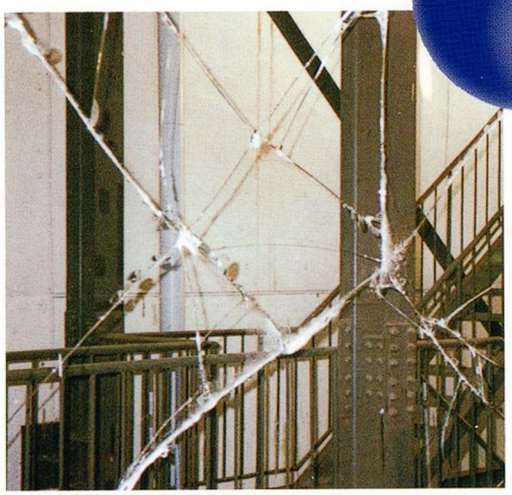
Scotchtint™

超飛散防止フィルム

〈超飛散防止フィルム〉は、従来の33倍もの引き裂き強度を実現。防災・防犯対策への効果が飛躍的に高まりました。極薄のポリエステルフィルムを多層に重ね合わせた構造で、金属バットの衝撃くらいでは、大きな開口部を即座にあけることはできません。地震時におけるガラスの飛散・落下防止にも多大な効果をあげることが実証されています。

震度5で60%以上の窓ガラスが飛散したビル(大阪)
《窓用フィルムの貼付をしていなかった》





▲千葉東方沖地震(昭和62年/震度5)で多数のガラスが破損。しかし、飛散防止フィルムがガラスをしっかりと保持して飛散・落下を防ぎました。
【新東京国際空港旅客ターミナル】

ガラス開口部を強力にガード。
防災・防犯に強い
超飛散防止フィルムです。



住友スリーエム株式会社
エネルギーコントロール製品販売部
本社 158 東京都世田谷区玉川台2-33-1 ☎03-3709-8321

人がいる。夢がある。 3M

床を創る TAJIMA

新しいマーブルは、深みがある。



NEW

パーマリューム マーブル

価格(工事費別)：厚さ2.0mm：2,350円／m² ● 厚さ2.5mm：2,600円／m²

- ●明度２段階・低彩度の構成で組み合わせ使用可能
- ●独特の流し模様と表面エンボスによる相乗効果（きわだつマーブル感）
- ●下地の不陸を目立ちにくくさせます
- ●マルチパーパスに使えます

規格　材質区分：ビニル床シート NC
寸法：2.0mm・2.5mm（厚さ）×1,820mm×9m（長さ）
色数：12色

用途　学校、病院、庁舎、会館、事務所ビルの一般室や廊下、階段、実験室、トイレなど

株式会社 タジマ
営業本部／〒101 東京都千代田区岩本町3-11-13 TEL.03-5821-7731 FAX.03-3862-5908
東京営業所／〒101 東京都千代田区岩本町3-11-13 TEL.03-5821-7741 FAX.03-3861-3615
大阪営業所／〒550 大阪市西区京町堀1-10-5 TEL.06-441-5951 FAX.06-444-2596

雑誌 03379-4

定価1,200円（本体1,143円＋送料共）正会員の購読料は会費に含めご徴収